

荒川漂着物読本 漂着モノログ

第1章 春 ～ 千と櫻のゴミ調べ

第2章 夏 ～ 想い

第3章 秋 ～ processes

第4章 冬 ～ ASSEMBLY

第5章 ふたたび、春 ～ 漂着

三月の巻～四月の巻

- 01. 河原桜と干潟と
- 02. キャッシュカード漂流記

四月の巻 おまけ

- 03. 返信

五月の巻

- 04. 青葉の季節
- 05. 捨てて、調べて、...
- 06. 雨降りランチタイム

五月の巻 おまけ

- 07. 薫風

第1章 春

六月の巻

- 08. 現場研究員
- 09. *Soar Away*

六月の巻 おまけ

- 10. 荒川の目線
- 11. 漂着静物画
- 12. 夏至の夜は長く

八月の巻

- 七月の巻
- 13. 優しいお姉さん達
- 14. お天気 夏モード
- 18. *C'est la vie.*
- 19. 八月病

八月の巻 おまけ

- 七月の巻 おまけ
- 15. セタデート
- 16. 学びの場
- 17. 届けたい・・・
- 20. 想い重なる立秋の週
- 21. 咲く・love
- 22. ある晩夏の日に
- 23. 非日常

第2章 夏

漂着モノログについて

舞台は荒川下流某所。漂流・漂着ゴミは川でも深刻。そのゴミをめぐる、様々なストーリーが．．．（社会派現代小説のつもりで書いていたら、コメディあり、青春要素あり、ロマンスいや純愛モノ？といった展開に。物語の漂着する先はいかに！）

期間設定は一年余り（2007～2008年に対応）。全字数は60万字超（四部作）。ドキュメンタリータッチ（または活動記録風）の歳時記小説でもあります。プロセスを追いながら、じっくりお読みいただければ幸いです。

クリーンアップ活動やNPO法人についての入門書、漂流漂着ゴミ問題の手引書としてもどうぞ。

注記

小説の舞台は、荒川下流の某所です。荒川の特性を概ねふまえる形で書いておりますが、事実と異なる記述もございます。ご了承ください。

ある程度、現実味を出すため、実際にある場所や施設を参考にしております。

登場人物および居住地等は架空のものです。人物の氏名は、荒川流域等の学校名（当て字）の他、旧地名、現存地名を織り交ぜて設定しております。（読みは実際と異なる場合があります。）

あわせてお楽しみください。

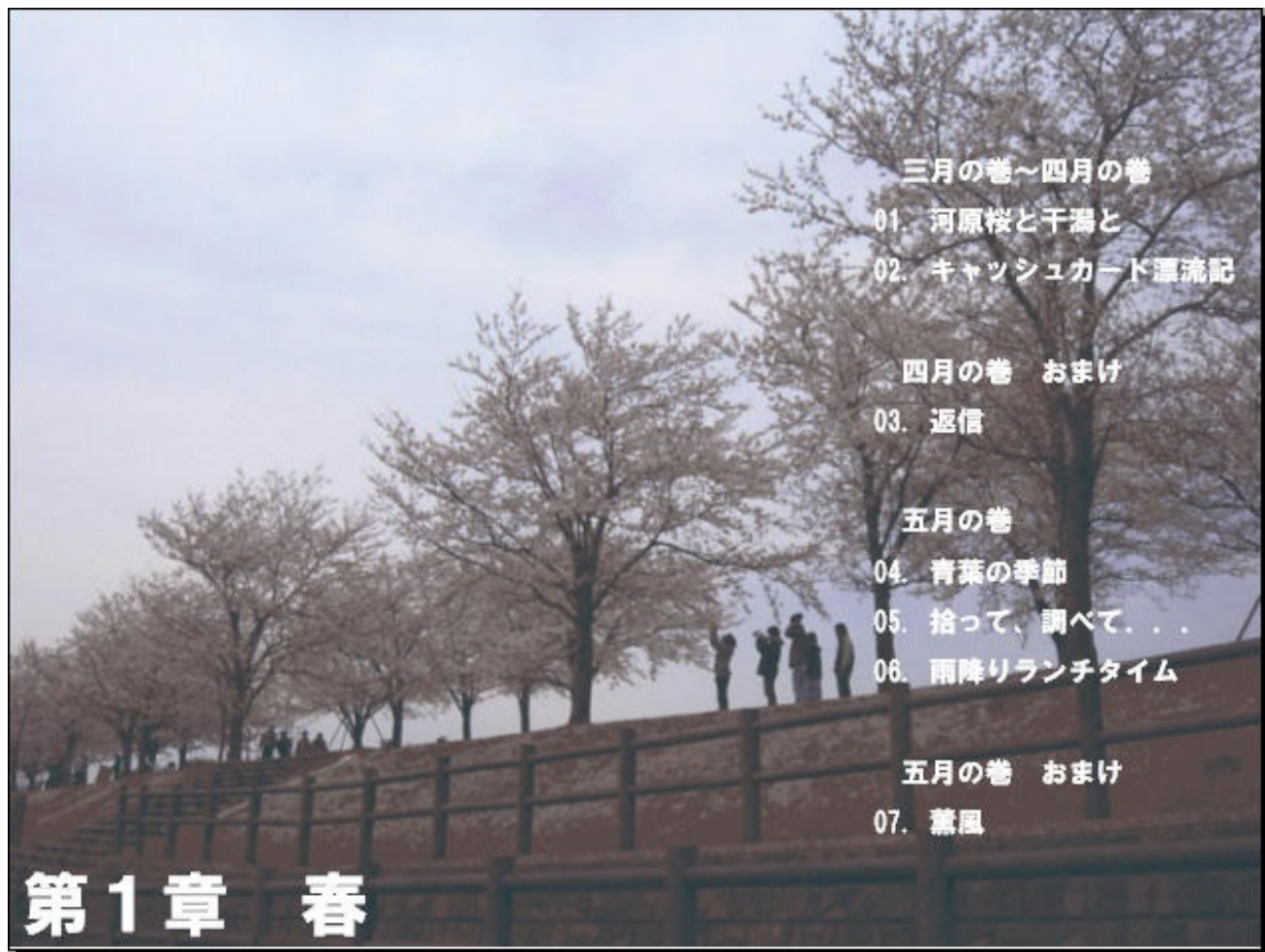
2007～2008年の同月同日の天候や潮位をある程度考慮していますが、多少誇張した表現になっている場合があります。

街、鉄道、アーティスト、イベントは実在のものです。漂着ゴミについても実際に近い描写としています。

*「～月の巻」と「～月の巻 おまけ」について

調査型クリーンアップを中心に繰り広げられる場面を本論とし、「巻」扱いにしています。巻＝巻物、と捉えることもできますが、果たしてその心は？（読み進んでいくとどこかで出てくると思います。）

主にクリーンアップや漂着物に関する話題は、「巻」。そこから派生する諸々のストーリーは、「おまけ」と一応分けていますが、あくまで便宜上の区分です。通してお読みいただくことで、読本としての楽しみが拡がると思います。



三月の巻 01. 河原桜と干潟と

暖冬とは言っても花粉は飛ぶ。花粉が飛べば出かけるのも億劫になる。だが、その暖かさ加減が奏功したか、スギ花粉のピークが早まったようで、三月も半ばを過ぎたあたりから、幾分楽になった観あり。加えて近所の河川敷の桜の便りもチラホラで、外出解禁と桜開花が重なれば、出かけない手はあるまい。時は三月の二十五日。千歳は春の晴天に誘われるようにいそいそと河川敷へと足を運んだ。

徒歩で十分も歩けば、その河原桜にお目にかかれるものの、今回のように条件がそろわないと足が向かない。花盛りの頃に、スギの粉が飄々と舞っては、花見どころではないからである。まだほころび出したばかりの木々もあるが、パッと見た限りでは、桜色が目映いまでになっている。すでに花見客の姿もあって、心持ち開放的な気分浸ってみる。用心のため、マスク越しではあるが、仄(ほの)かな桜の香りを楽しみつつ、旬の花色をしばし楽しんだ。わざわざ遠くに出かけなくても、ささやかながら近場で花見ができる、これもまたありがたいことである。

荒川にはこうした桜並木がいくつかあるが、この土手上の桜は本数も手頃で、見晴らしもいい。桜の季節でなくても、日頃から訪れる人が多いのは、堤防からの眺めの良さも手伝っているようだ。花粉の季節が去り、桜が新緑に変わる頃には、千歳も時折、散策に来たりする。川辺でくつろぐ人は見慣れてはいる訳だが、花見客に出くわすのは実に久しぶりのような気がする。

堤防から川の間土地はそれなりに広くて、野球グラウンドもある。少年野球チームが試合をし

ているので、何気なく観戦していたら、特大ファウルボールが荒川方向に飛んで行く。一塁手が球を追って行ったのだが、ヨシの間に紛れてしまったか、程なく引き返してきた。他の観客もあまり関心がないようで、そのまま試合が進む。マスク姿で怪しまれる可能性は否めないが、この季節に外出しても平気であることに気を良くしている分、気付いたら川の方へ歩いてきた。グラウンドを遠巻きにしながら、ヨシの間の細道を進む。すると他にも硬球やらテニスボールやら、. . . 遠くからだとわからないものだが、こうして足を踏み入れてみると思わぬ発見があるものである。果たして、先の大ファウルボールかどうかはいざ知らず、その辺に転がっている一球・二球を人知れず外野方向に放って知らん顔を決め込んでみる千歳であった。

ボールが出てきて驚いたのではなく、今度はホームランでも出たんだろう。俄かに歓声が上がるや、川の方では何らかの船がザーという音とともに通り過ぎて行く。程なく、これまた思いがけず、波が打ち寄せる音が、先のザーとはまた違う響きで届いてきた。川に波？と不思議に思った彼は細道をさらに分け入って、水際に逢着した。そこは確かに波打ち際に船尾からの波紋がまだ余韻を残し、チャプチャプ音を立てている。恰(あたか)も小さな浜辺のようになっている、砂と波だけを見ていると海辺を想起させるような場所。水辺はちょっとしたカーブを呈していて、その湾曲は入り江の如く、上流からの砂が堆積するに都合よい様である。河口のみならず、こんな遡った界限にも干潟ができるのだろうか。



これでヨシを背景に、白砂が広がるような具合ならちょっとした人気スポットになる可能性はあるが、そうはならない厳然たる理由があった。波よりも干潟よりも千歳を驚愕させたのは、押し寄せ散らばるゴミの数々。ちょうど水位も低めで、降りてみても大丈夫そうだったので、高さ一メートルほどだが、岸から干潟へそろりとそろりと歩を進め、着地。所在無さげな砂地の感触が足裏から伝わる。砂が凹んで足をとられることはどうやらなさそう。降りてみてヨシの群生を見上げると、その高さにまず驚かされる。だが、目線を戻し、ヨシの根元を見遣れば、根を蝕む勢いのプラスチック系包装などのゴミ。その多さ、その絡みつく執念にはさらなら驚嘆を覚える。ジャーナリスト志向はないけれど、今はちょっとした物書きとしての自覚は出てきた千歳にとって、この目の前に広がる事実は、少なからず心揺さぶるインパクトがあった。季節的にはまだ早いはずだが、最近の温暖さ加減に心躍らされたか、バーベキューに興じた一行がいた模様。まさかこの干潟地で展開することはないだろうから、ここよりも上流の水際などでワイワイやったのだろう。干潟を覆うのは、紙皿、紙コップ、串に割り箸、肉類のトレイ、卵のパック、野菜屑、調味料の空き瓶、使い捨て食器ばかりではなかったようで、何を洗ったのか詰め替え洗剤の袋、当然のことながら、ビール類の空き缶、そしてカセットコンロ用のガスボンベなどなど。こうした出たての投棄品に加え、これまでの漂着ゴミのいろいろが渾然となって、まるでゴミの見本市のような有様である。袋類がやたら目に付くが、「百均」系の日用品もチラホラ。

そんなマーケットの中に、有り得ない一品が紛れていた。掘り出し物が見つかるのはフリーマーケットでは常識的だが、ここのはまた趣が異なる正に「掘り出し」である。まさかキャッシュカードを拾得することになるろうとは！ ICチップ付きなので、決して古い代物ではあるまい。ただ、自慢のICチップも川の水に浸ってしまっては、もう用を為さないだろう。口座番号もわかるし、落とし主の名前も明瞭。これは届け出た方がいいだろう。裏面を見ると「拾得された方はお近くの窓口へ」云々とある。ゴミの件は、また次の週末にでも、と気持ちを切り替え、この一枚を手に引き揚げることにした。気付いたら、何となく水位も上がってきている。この水位の変化にもまた意表を衝かれたところはあるが、あまり気にしてられない。再び陸に上がり、細道を戻る。すでに野球は終わっていて、花見客も閑散となっていた。日脚が伸びたとは云え、午後四時を回ればこんなものだろう。心なしか気温も下がってきたようだ。歩を早めつつも、カードを見遣る。「センジュ サクラ」さん、て何とも風流なお名前です。 . . . 桜の季節だけに、奇遇、いや何かのお導きのようにすら感じる。

月曜日は定休日。朝から早速、その都市銀行の最寄りの支店に向かうことにした。気が急いたか、開店時間よりも前に着いてしまったが、そこは千歳君。通常の客とは立場が違うことから来る言い知れぬ余裕を愉しんでみるのであった。月末、いや年度末、しかも週明けと来れば、早めに来る客人も増える。シャッターが開くや、各人一斉にスタート、と相成った。番号カード発券機に並ぶ必要もなく、余裕綽々の彼は、係員に一言。「カードを拾得したのですが. . .」初老の係員は、印籠を示され平伏する衆人が如き低頭ぶりで、「どうぞこちらへ」と奥の窓口へご案内。ちょっとした優越感を得るも、それも束の間。肝心の窓口の行員は、開店したてで机上整理中。不機嫌そうだ。座りかけて、ちょっと腰が引けたところで、カード拾得者とわかるや、態度豹変。にこやかに席を勧められ、ひと息。端末で落とし主を照合し始めた。紛失届は出ていたようだが、緊迫感はあまりなく、落としてからしばらく時間が経っていたようだった。これが拾得物であるための証明というのは特になく、いくらでも疑われそうなものだが、それもなくて、淡々と拾得日時と場所などを話した程度で済んでしまった。もっともこの時点ではまだゴミ拾いをするには至っていないから、単に水辺を通りがかって、としか言えず、場所は非日常的ながら、きっかけとしては平凡な点が千歳としては物足りなさを覚えていた。「よければご連絡先を」というのでふと我に返る。個人情報はどうの、と野暮なことを言うつもりもないし、悪いことをしている訳ではないので、きちんと書き記すことにした。聞き書きだと面倒なので、自書する。待てよ。ここで名前と電話番号だけだと、先方から電話を頂戴するのはいいとして、こちらがそのサクラさんの連絡先を残す術がないではないか。疑う訳ではないが、個人情報を悪用されるのも嫌だから、Eメールアドレスを記すことにして、先方からはメールをいただくことにしよう。fromアドレスがわかればお互い様、情報公開の担保になるだろう、などと咄嗟に思いついたのである。「今、ケータイを替えるところでして. . .」番号ポータビリティを使えば、別に番号がわからなくなることはないのだが、携帯電話を所持するのを止めた千歳にとっては、苦し紛れの言い訳とともに、アドレスを託した。

キョトンとしていた行員は、何かを思い出したように「よければこちらを」と紙袋を差し出す。いわゆる粗品と呼ばれるものだが、小市民な千歳は嬉しそう。新しく口座開設する時よりもよほど豪華である。一礼して店を出て、袋の中味を一瞥。ポケットティッシュ、メモ帳が複数、加えて携帯ストラップ。ケータイを持ってても持ってなくても、自動的に進呈されてしまう訳か。苦笑しつつも、ちょっとした幸福感に浸る彼の足取りは軽く、商店街に出たついでに、いつもより少々贅沢な朝食でも、とプランを立てるのだった。

自称「ライター」、と云っても、それだけでは心許ないので、より実働的にwebデザインなども手がける千歳のPCには、仕事柄、いろいろなEメールが飛び込んでくる。自分でドメインを持っている都合上、迷惑メールをブロックするのもメールサーバ上でやってのける。それでもあまり過度にブロックしてしまうとオファーを逃すことにもなりかねないので、匙加減が悩ましい。という訳で程々に規制しているのだが、火曜日の夕方になって、件名「ありがとうございました」、差出人「千住 ●」（●はなぜか文字化け）さんからの一通が届く。「あっ！」

何らかの文字化けがあるとはじいたりするのだが、このメールはしかと届いた。本文の末尾には、確かに「千住 櫻」とある。キャッシュカードの落とし主さんからである。銀行から連絡が行って、こうしたメールが届くのに一日半。電話だったら、その日のうちだったかも知れないが、行き違いになるよりは確実だ。はやる気持ちを抑えつつ、本文に目を通す。銀行から連絡を受け、ひと安心したこと。拾得された方のメールアドレスを教えてもらったこと。アドレスはこれでよろしい？という念押し。そして、拾われた時の状況を聞きたい、といった内容で、末筆には御礼が遅くなったこと、「略儀ながら、Eメールにて取り急ぎの御礼まで」との一言。メール自体は簡潔ながら実に丁寧な一通を頂戴したものである。いやはや。

こんなしっかりしてそうな人が何でまたキャッシュカードを、しかも川に流してしまうような状態で紛失してしまったのか。．．．何かかき立てられるものを感じた彼は、気ぜわしくも言葉を選ぶように一文一文、書き並べていく。仕事が一段落したようなしていないような夕刻ではあったが、柄にもなくこの櫻さんへの返信を優先していたのである。

「ご丁寧なメール、こちらも恐縮」「実害は出ていないようで何より」といった感じでまずは切り出す。次に状況説明だが、よせばいいのに地図情報サイトのURLを引用しつつ、この十字あたりに「干潟」があって斯く斯く然々(しかじか)、と毎度のことながら長文に。物書きってのは長く書けばいい訳ではないのは重々承知しているはずなのだが、どうも気が収まらないらしい。落とした理由を尋ねたいのはヤマヤマだったが、ここはグッとこらえて、その代わりにちょっとした提案を試みた。この有様は放っておけないので、ひとまず試験的にゴミ拾いをしようと考えている旨、書き加え、「四月一日(日) 午前十時」に、と勢いで日時を設定してしまった。天候次第、ではあるが、まあ何かあればメールで連絡できるだろう、と深く考えないままにメールを返信。気付いたらすっかり暗くなっていた。

その後、櫻からの返事は特になく、「ちと書き過ぎ？」と自問する千歳だったが、かつて買ったためた炭酸カルシウム入りの四十五リットル袋を引っ張り出したり、ヨレヨレになっていた長靴を探し当てたりと余念がない。あとは軍手か、などと仕事の合間に淡々と準備を進めるのであった。収集したゴミは、マンションの集積所に出せば済むだろう、という計略。可燃と不燃に分ければ文句もあるまい。でもどうやって運ぶんだろう？

【参考情報】 [2007.3.20の漂着ゴミ](#)

四月の巻

01. 続・河原桜と干潟と

四月一日は、年度始めで緊張感高まる特別な日だが、ウソをついてもいい日、ということになっている。緊張感を和らげる配慮なのだろうか。よくできたものである。年度の初めも終わりも特にない生活になじんでしまうと、四月一日だからどうこう、というのではなく、単に何かを始めるには打ってつけ、という程度の心積もりだった。

スギ花粉はだいぶ収まったようで、マスクなしでもいけそう。ただゴミ拾いの最中に思わぬ異臭と遭遇する可能性もあるだろうから一応、小袋に入れて持って行く。「備えあれば何とやら」が信条の千歳だが、この日ばかりはあれもこれも、という訳にはいかないのは先週図らずも「下見」したことによってわかっているので、珍しく必要最低限で臨むことにした。貴重品は携行せず、四十五リットル袋一組（五枚入り）、軍手、タオル、マスク、それにデジカメ（仕事柄）、これらを何かの環境イベントでもらった肩掛けバッグに入れ込んで出発。長靴は見送った。時刻は九時四十五分。天候は晴れ。午前中の降水確率は十％。風速二メートル。まずまずである。

河原桜は満開を過ぎた頃で、水際の方にも花卉がチラホラ舞ってくる。風雅な午前十時、といきたいところだが、たどり着いたその先は、先週と相も変らぬゴミ箱干潟。心なしか量が増えていると感じるのは、花見系と思しき、すなわち、コンビニ弁当やら飲料用ペットボトルが加わっているためか。人工物に目をとられて、あまり意識していなかったが、枯れたヨシの枝も溜まるところには溜まっていて、さらに袋やら破片類と絡まって、見るからに收拾つかない。のっけから収集意欲が萎えてしまう彼だったが、まずは用意したゴミ袋の一つを取り出し、不燃と思われるゴミから手を付け始める。辺りを殺風景たらしめているのは、袋類が主因か。これが減ればパッと見は良くなるかも知れない。という訳で、一点集中で片端から袋を拾い始めるのであった。今日は野球の試合もないし、船が通る時間帯でもないようで、遠く鉄橋を渡る列車の通過音が耳に入る程度。別に気が散ると分別を間違えるとか、そんな心配は無用なのだが、この静けさはゴミ拾いには打ってつけかも知れない。大小、種類を問わず、黙々と袋を拾い集める。砂まじりのレジ袋をつまみ上げ、ヤレヤレと息をついたその時、「あわわ．．．」「!？」振り返ると、いかにもゴミ拾いスタイルの女性が段差を降りようとして、バランスを崩しかけていた。着地して一言、

「隅田さんですよ？」

「あ、もしや千住さん？」

「はい！」

桜とともに、ではなかったが、ともかく季節柄ピッタリの櫻さんが現れた。十時十分を回ったところだが、確約ではない話だけに、これは十分定刻レベルだろう。妙なところに感心する千歳。そして、何の違和感もなく当たり前のように当地にやって来た櫻。メールの印象では楚々とした感じを想像していたが、そんな要素に何となく茶目っ気が加わり、でもゴミ箱を前にして、動じることがない。櫻さんていったい？

02. キャッシュカード漂流記

「遅くなりました」

「本当に来て下さるとは」

「隅田さんがいてもいなくても、エイプリルフールで済むかな、と思って」
眼鏡越しに笑みがこぼれる。このセンス、なかなか強者と見た。

「カード、ありがとうございました」

「いえいえ」

動揺を隠せない彼は、照れながらも「確かこの辺でした」と拾得した場所を示す。

「うまく漂着したんですねえ」

「はあ」

「試しにATMに通したら、さすがにNGでした」

面白い人だなあ、とまたまた感心。「で、何でまたカードを？」 尋ねても気を悪くすることはないだろう、と読んだ千歳はさりげなく話を向ける。今度はインタビューアーク取り？

ここから少し上流に行くと、県を跨ぐ橋がある。その橋を急ぎ足で渡っていた櫻は、対岸のその銀行をめざしていた。その日は早番だったので早めに帰宅していたが、給料日前の週末に備え、手持ち現金を補っておく必要を悟り、あわてて十八時前に駆け込もうとしていたのである。手数料をとられまいとする心理はよくわかる。が、しかし、ICキャッシュカードに切り替えたばかり、というのが災いした。「そういえば、新しいキャッシュカードって持ったっけ？」 橋の途中でふと足を止め、カード入れを探る。財布とは別に保管しているあたりがまた彼女らしい。少々手こずったが、果たして真新しいそのカードは現れた。ゴールドのチップ部分を夕日に照らす櫻。対面から暴走気味の自転車が接近していることには残念ながら気付くに及ばなかった。それは一瞬の出来事。幸い接触こそしなかったが、通過時の風圧は櫻の手元を震わせるには十分だった。「あっ！」 欄干の隙間から、新しいカードは無情にもすり抜け、ヒラヒラと荒川へ着水。すぐに視認できなくなってしまった。訳あってケータイを持たない櫻は、行くか戻るか考えあぐねた末、そのまま先を急ぎ、ATM備え付けのインタホンまで来てから事情を説明。せつかく十八時になる前にたどり着いたのに、トホホなことに、この日は現金を下ろしそびれてしまった、という顛末だった。

身振り手振りを交え、「私の話を聞いて」状態。千歳とは初対面のはずだが、臆することなく訥々(とつとつ)と話してくれた。ドラマのような、コメディのような、言い知れぬストーリーである。

「それは難儀でしたね。でも、カードは返してもらえるものなんですか？」

「いえ、すぐに再発行の手続きを、と言われたんですが、もしかしたらまだ使えるかな、と思って。もったいないじゃないですか。ハハ」

彼女は今、主に環境に関する情報を集め、それを配信するといった情報サービス型の機関に勤めているという。早番だったり、遅番だったり、土曜も出勤するので、日曜日の今日は好都合だった、とのこと。「年度末は情報の棚卸をしないといけなくて、…」 返事ができなかった

のは、そのせいだったようだ。

環境情報に強い、というのは、そのいでたちもさることながら、持ち物からもわかった。軍手持参は言うまでもなく、ゴミ袋の代わりに、使い回しのレジ袋を何枚か、あとはなぜか小型のバケツ。「何回かクリーンアップイベントにも参加したことがあるので」なるほどねえ。でもバケツは？

「近くに水道があれば、そこの水を汲んで、手を洗えるし」理由はそれだけでなく、「ペットボトルなんかは、洗えばキレイになるでしょ。乾かして回収箱に持って行けばいいんですよ」いやはや、おそれいりました。

自発的なクリーンアップ初体験の千歳にとって、櫻の加勢は実に心強かった。

「とりあえず、袋だけを拾おうと思って」

「じゃ私は、ペットボトルと缶を拾います！」

枯れ枝と苦闘しつつ、袋を抜き取る彼を尻目に、櫻は手際よく飲料系容器を見つけては、ポイポイと一箇所に固まるように放っていく。「あれれ、これって業務用？」櫻が手にしたのは某ファストフード店のマーク入りのマスタードの大型容器。「従業員がこっそり持ち込んで、バーベキューに使ったか．．．」訝(いぶか)る千歳に櫻が返す。「これはスクープかも」と一言。すかさず「バーベキューだったら、やっぱりバーベキュー味を用意すべきよね？」あまりの機転に千歳も笑うしかなかった。



「他にスクープ系、ありました？」

「ああ、この縄跳びの取っ手なんてどうですか？」

「どこかで練習してたら、とれちゃって、『縄跳びなんてキライだあ』ってやったかどうか．．．」

負けずと千歳も「縄の方もどこかに漂着してたら、正にお縄頂戴ですねえ？」苦笑する櫻にホッとすることも、

「でも縄が動物に絡まったら？」

「そうか．．．」

思いがけず、問答形式になってしまった。

「私は見たことないけど、海辺ではカメや鳥がロープなんかに絡まって、死に至ることもあるそうです」

「川も例外ではない、ってことですね」

櫻は頷きつつも物憂げな面持ちで、またポイポイやり出した。千歳の方は、袋の中の袋がそろそろはみ出してきたところ。何かを容れるための袋がゴミになって、袋行き。何ともシャレにならない展開である。

「わぁ！」 今度は何事かと思ったら、「この絵筆、まだ使えるかも」と来た。

「千住さんて、絵描きさん？」

「フフ」

憂いある表情から一転して、不敵な微笑。「水汲んできます！」

降りてくる時とは対照的に、颯爽と陸地へ上がる彼女を見送りつつ、二枚目の袋を手にする彼。あっと言う間に、時は十時四十五分。水位が心なしか上がってきたような。気温も徐々に上昇中。いつしか汗が一つ二つ滴ってきた。「どうぞ！」 軍手をとって、手を洗え、ということらしい。これまたタイムリーな。バケツから注ぐ水が心地よい。その水を額に移して、タオルでひと拭き。

「千住さんは？」

「水道のところで洗いました。絵筆も」

確かに新品同様である。でも誰がいったい？ 「これはやはり気分一新、新しい筆でデッサンしようとしたら、単に気分が乗らなくなったか、漂流しているゴミを見て幻滅したか、でポイ、でしょうかね」 こうなると、ゴミ拾いというよりは、ちょっとした宝探しである。

「さぁ、続き続き！」

「あ、飲料系、袋に入れようと思ったんですけど」

「バケツの水で洗うのも大変でしょうから、洗ってもダメそうなものをまずは入れといて、あとでまとめて洗いますか」

なるほど、である。でも缶は砂が詰まっていたりして、洗いきれないかも。とりあえず、ペットボトルで再生不能そうなものを入れてたら、それで四十五リットルが満杯になってきた。「あとで洗う分は、レジ袋に入れますね」 それほど量はないと思っていたが、彼女が持ってきた袋もペットボトル、缶、ビン、それぞれでいっぱいになってしまった。残るは千歳が持って来た新品ゴミ袋三枚ということになる。

「水位も上がってきたし、そろそろ潮時でしょうか？」

「え、会っていきなり潮時ですか？」

「へ？」

「エイプリルフールですよ！」

先手をとったつもりが、まんまと一本とられてしまった。でも冗談キツイなあ。

「まあ、目に見えるゴミは片付いたんじゃないですか？」

「でもまだバーベキューの名残が．．．」

「じゃ、放っておくとまずそうなのをいけますか」

彼女の考えでは、動物に悪影響が出そうなゴミを指すらしい。言われてみると、梱包用のヒモやら、土嚢袋が破れて繊維状のものがヒラヒラなっているものやら、直接的に生き物に悪さをしそうなものがまだ散乱している。

「不燃でしょうかね」

「自治体のルールによってマチマチですから何とも」

向こう岸に住む彼女と千歳が暮らす此方では、微妙に違うようだ。

「帰って調べてから分けて出します」

「さすが！」

今度のは照れから来る汗。ごまかすようにデジカメを取り出し、

「スcoop写真、行きます！」

「あれ、デジカメなんですね」

「僕もケータイ持たないもので」

「へえー」

この日のスクープ系、というか、珍品ゴミとして見つかったのは、業務用マスタード、跳び縄の取っ手（対で発見）、湿布薬の袋、何かの映画のノベルティグッズ、折りたたみ傘の残骸、洗面器といったところ。さすがにこの日ばかりはキャッシュカードは落ちてなかった。拾う前と拾った後の写真もしっかり撮影。誰かに伝えずにはいられない。初心を思い返す千歳に、櫻が訊(たず)ねる。「次回はどうします？」

忘れた頃に、小型貨物船が通り過ぎ、二人がそこそこに片付けた干潟に波紋を届ける。干潟が息を吹き返すのに少しは貢献できただろうか。櫻がポイポイやっていた辺りには、すでに潮が来つつあった。午前十一時過ぎ。レジ袋で手一杯の櫻、大きな袋を三つ運び出す千歳。この構図は何と形容したらいいものか。空の四十五リットル袋は二つ。でも洗い終わった飲料容器を入れる必要から、一枚を残すのみとなる。

水道のある場所は、野球関係者がいると使いづらい位置合いだが、今日は躊躇なく使える。「何か水道水がもったいないような気もするけど．．．」 さっきの物憂げな表情を垣間見せる櫻に、ここぞとばかりに千歳が突っ込む。

「バケツに入れて濯ぐのはどう？」

「ほお」

合点が行ったか、せっせと漬け込み始め、またまたにこやかに。

「いい天気だから、すぐに乾きそうですね」

「今日この後、雨ですよ」

「ウソ？」

「エイプリルフールでした」

とりあえず、毎月第一日曜日に、などと打合せしつつ、濯ぎ作業を続ける。難を逃れ、回収箱行きが決まった容器類。それらを一つ一つ天日干しさせながら歓談する二人は、カードを届けた際に渡された銀行グッズの話で盛り上がる。ケータイストラップは二人とも使わないねえ、とか、そのグッズの分け前は落とし主にもあるのでは、とか。乾燥中のペットボトルには、桜花がひとひら。缶の方は陽射しですっかり温まってきた。ピンが少々こたえるが、この日は幸い重量物を拾わなかったので、彼一人で搬出できる見込みが立った。ゴミが足枷になって、この後、食事でも、と行かないのがこうした取り組みの泣き所か。櫻の方も名残惜しげな風に見えたが、十一時半、今日のところはこれでお開き、と相成った。自転車で来ていた櫻は軽く手を振り、「またメールします！」 川の上流側、桜並木に沿うように走って行った。桜の中の櫻さん、か。

明らかに可燃とわかる分はいいとして、素材が複合的になっているものや再資源化に向かなそうな錆び付いた缶の類が悩ましい。自治体ルールはあくまで事業系と家庭系が想定範囲のためか、こうした散乱ゴミの処分方法までは明確に示されてなかったりする。プラスチックゴミは、可燃に入れても差し支えない、というか、燃やせば火力がアップするだとか、燃やした熱を回収すればそれはエネルギーのリサイクルになるだとか、もっともらしいことが書いてあるが、どうもためらわれる。回収箱には比較的状态の良いペットボトル、空き缶、空きピンをそれぞれ投函。千歳の暮らすマンションは程々の戸数規模のため、ゴミステーションなるものがあるが、回収日をあまり気にせず出しに行けるのがポイント。でも外で拾ってきたものを混入させるのはまた想定外か。例の梱包用のヒモや、弁当容器などは、不燃と割り切ることにした。フニャフニャの袋類についても水分を含んでいることもあって、やはり不燃に。こうした包装ゴミは、日常的には

可燃で出していた千歳だったが、今回の一件で、「分別とは？」と自問する機会を得た恰好。他の自治体では、どんな扱いになっているのやら．．． まずは櫻さんに聞いてみるか？ とメールするのに好都合な材料を見つけた彼はそそくさとステーションを後にする。

記念すべき四月一日の成果．．． デジカメ画像を整理しつつ、どうまとめるか思案していたら、千住●さんから早速メールが到着。「はやっ！」 ねぎらいの言葉に始まり、「今日は楽しかったです」「分別方法わかりました？」といった文面が続く。文末には「次はいいものを持って行きます。お楽しみに。」そして、「p.s. このメール文の内容はエイプリルフールではありません。(^^)」と来た。簡潔ながらウィットの利いたメール。(しかも顔文字つき) はやる気持ちを抑えつつ、ブログ掲載の準備を進める彼。昼食そっちのけ、である。

自分で持っているドメインの中にブログページを設置するのも一手だったが、ここは一つメジャーなところに置いてみるか、と画策。コメントを書き込めるところを省略すれば、メンテも楽だろう、と青写真を描きつつ、プロバイダが提供しているブログページにまずはログイン。予めテンプレートがいろいろと用意されているのは結構だが、彼としてはあまり面白くない。

「ま、速報ベースで」ということで、サイトを取得し、記事と写真を仮アップ。収集前と後、そして、「何でもまたこんなものが！」系の警鐘代わりの文を画像に合わせて三つ四つ入れていく。確かにこれは載せやすい。感心していた彼にふと難題が。「ページのタイトルは？」 しばし考え、同名タイトルがないことを検索チェックして、こう決めた。「漂着モノログ！」(英文表記:wreckage-mono-log) 何でもモノにちなんだブログのことをモノログと呼ぶことは知っていたので、彼なりに流行感を意識してのネーミングにしてみた。あとは櫻さんの反応次第か。午後二時半。さすがに空腹になってきたが、お構いなし。返信方々メール開始！

「この度はありがとうございました」 何か儀礼的だなあ、と思いつつも、筆を進める。このように分別したが、貴所での分別ルールはどうなんでしょ？ おかげで見聞が深まりました 試しにブログを開設してみました 等々。他にもいろいろ書きたいところだったが、つつい長文になってしまうので、自制しながらしたためる。そしてこちらも末尾に一言。「p.s. 次回楽しみにしております。(^^)v」 櫻のマネして思わずVサインを入れてしまう千歳。署名の欄にモノログのアドレスを打って、送信。ホッとひと息つくも、同時にちょっとした昂揚感もあって複雑な心境。「あっ、お昼どうしょ？」

【参考情報】 [2007.4.10の漂着ゴミ](#)

四月の巻（おまけ） 03. 返信

四月某日。年度が改まったら改まったで、新年度以降の情報の受け皿作りなどがある都合上、落ち着かない日が続く。櫻は次回の干潟行きに備え、あるものを探していた。これがハッキリするまでは、千歳に対して下手に返事ができない、と決めていた彼女。早く返信したい気持ちと裏腹に日数が経っていくのが居たたまれなかった。仕事の一環で時間は割けるのだが、思うに任せない。櫻の同僚で、立場上センターのチーフである文花は、ちょっとした情報源人物でもある。尋ねてみることにした。

「文花さん、クリーンアップ団体でゴミの実数調査してるって、ありましたよね？」

「ええ、公園とか道路のクリーンアップではあまり聞かないけど、海と川では調べてる団体があるわね」

「調査用紙って、どんなのか知ってます？」

「ちょっと古いけど、確かここにあったような．．．」

棚卸後の資料の中、それらしき団体のフォルダを開けると国際的な統計に使われる調査用紙の見本が紛れていた。

「海と川で様式が違うようだけど、何とか集約してとりまとめてみたい」

「へえー」

環境ヲタクと言っではいけない。文花は実用型識者なのである。同僚ながら毎度感服させられる。「発生源別ねえ」 櫻は櫻でこの分野はまだまだ知らないことが多い。ともあれ約束の「いいもの」を手に入れたので、ひと安心。これで返事が書ける。

「棚卸からポタ餅！」

「相変わらずねえ。でも櫻さん、何に使うの？」

「今は内緒」

「棚卸もまんざらじゃないでしょ」

もっともな御説である。でももう数日遅れてたら、倉庫行きだったかも。「おありがとうございます！」

早番だった櫻は、帰宅後、早々にPCに向かう。日脚が伸び、まだ夕暮れ前。いい季節である。「お返事遅くなり、__|_|o」 今度は表題部に顔文字（人文字）登場。これは傑作とニンマリ。すかさず本文へ。自分で言っておきながら、お約束のいいものを探し出すのに苦労しまして．．． とまずはお詫びなど。「『漂着モノログ』拝見しました。webお強いんですね。スクープ性があると思います。」と一言二言。そして、当方では容器包装プラスチック系は、一部地域で資源ゴミとして回収されることになった旨、中押しで一筆。真面目な面も出さないかね。「p.s. ところで次回予定はあえて書かなかったんですか？」 コメント受付型でないブログ故、こうした問合せは本人に個別にメールしないといけない。一応、問合せを受け付けるフォームは用意されているようだが．．． ブログの文調とは逆に、この辺が奥ゆかしいと云うか、彼のシャイな一面がうかがえ、一人不敵な笑みを浮かべる櫻だった。

そんな姉を眺める妹君。

「櫻姉！」

「わあ！」

「ご飯だよ」

「もうそんな時間？」

「早番だったんでしょ。少しは仕度手伝ってよねえ」

「もうちょっとで行くから．．．」

ブログということは、いずれまた更新されるだろうから、時々チェックしてまたメールしよ、ということにして、今日はいったん追伸まで打って、ひとまず返信完了。日が暮れるに任せて、あれこれ思案しながら書き綴る、そんな時間を楽しんでいた櫻だったが、妹君に変に勘ぐられるのもマズイ。「蒼葉ったら、こういう日に限って仕度が早いんだから」 姉妹の共同生活、というのはこういうものである。

「お姉様、何か楽しそうですけど、いいことでも？」

「ん？ 別に」

ムム、早くも勘付いたか？

「そうそう、この間もらった絵筆、あれちょっとした上物だったよ。どうしたの？」

「ああ、気にしない気にしない」

「どこかで拾ったとか、だったりして」

「．．．」

蒼葉には隠し事はできないなあ、と苦笑いしながら、ポツリポツリ話す。

「四月一日、軍手が干してあったから。やっぱりねえ」

「ハハハ、でも私あの時、何て言って渡したっけ？」

「庭に生えてたとか。まんまとひっかかっちゃったわよ」

「いくら四月一日でも、それはないわね」

その後、結局次回予定まで聞き出されてしまい、トホホな櫻。

「連休最終日って、案外空いてたりするのよね」

「はいはい。しかと現場を見てくださいな」

会話が弾む姉妹の食卓。春野菜などをつつきながら、あとは連休の予定談議である。

出先から戻った千歳のもとに、櫻からのメールは無事届いていた。しかし、ほぼ同じ頃、差出人「Go Hey...」氏からの一通。「まさか！」 会社時代の同期で、ちょっとした発明家だったこのGo Hey氏。本名は本多業平（なりひらではなく「ごうへい」）である。その業平君からのメールがまず千歳の目に留まった。「よくこの差出人名で届いたな」と不思議がるも、同じプロバイダからなら、ブロックも緩くなる。読み進むと、業平もそのプロバイダでブログを持っていること、ある日新着ブログをチェックしたら「漂着モノログ」を見かけたこと、等々書いてあった。正直に実名で管理人の名前を出していたので、千歳の名を見つけて「これは！」と思ったようだ。（こうして特定のブログにアクセスすることを一説では「漂着」と云うそうなの。効果観面(てきめん)?) さすが一般的なサイトでブログを出すとは違うなあ、と感心するも、この調子だと結構アクセスされている？と焦る。とりあえず、場所は特定せず、予定も伏せておいて良かった。でも業平のヤツ「次はいつだ？」と来た。お互いに会社を辞めてから二年経つが、その久々の再会をあの干潟でってか？ 確かに、アドレスを変えてからちゃんと連絡してなかったよな．．． こっちはケータイ不携帯だから連絡のとりようがなかった、としたら申し訳ない。単に顔を合わせたいだけなのか、それとも何かいいビジネスでも思いついたか、いろいろ想いは巡るが、ともあれ「ブログが取り持つ何とやら」である。

Go Hey氏に返信したいのはヤマヤマだが、はてさて．．． 櫻さんに一応おことわりを入れておくか、いやサプライズゲストにするか、ちょっとした逡巡状態に陥る。櫻からのメールも読んでいるようなそうでないようなだったが、p.s.の一文で我に返る。「そうか、次回予定、ブログには書いてない訳だから．．．」 要するに、業平と会うのは別の日にしようと思えばできるのである。「でも、あの量だからなあ」 千歳は素直に櫻にお伺いを立てることにした。「旧友がモノログを見つけ、次回合流したいと申しとおりました」云々。よく考えるとお伺い、というのも変な話で、むしろ参加者を募る形でのオープンな催しにしてもいいくらい。だが、地元の水辺、という以上に、今はちょっと特別な場所と捉えている彼としては、こんな他愛ない問いかけにも実は意味がある。櫻の意向を確かめたかったのだ。

千歳がブログに次回予定を書かなかった理由はわからなくもない。だが、「いきなりオープンにするのもどうかと思い．．．」という無難な返答では面白くない。翌日、櫻はそんなシャイな彼からの返信にもどかしさを覚えつつ、ゲスト参加があることを知って、内心ホッとしていた。「これでおあいこ。蒼葉を連れてけば二対二？」 櫻にしては珍しくすかさず返信。「実はこちらから女性を一人お連れする予定でして．．．」 妹と書けばいいものを何とも思わせぶりである。次回、五月六日、どうなることやら？

【参考情報】 [クリーンアップ用データカード](#)

五月の巻 04. 青葉の季節

さすがに花粉に悩まされることもなくなった。連休も何も今はあまり関係ない千歳だが、五月六日の日曜日は、いかにも休日らしい清々しい朝を迎えることができた。午後から雨？と天候は怪しげだが、午前中は持ちそうだ。業平とは直接現地で落ち合うことにしたので、前回同様、川辺に直行する。河原桜はすっかり青々緑々となり、時折強く射す陽光を集めて輝く。微かな風に葉が呼応する様がまた心地よい。新緑をこんな感じで眺めることができるのは、彼の今の心持ち故だろう。お約束の十時まであと五分。少年野球は今回もオフのようだ。今日はバケツ持参の彼は水道で水をまず調達。すると不意に自転車のブレーキ音が。

「毎度っ！」

「これはこれは。また颯爽としたお出ましで」

「ハハハ。ところで隅田さん、ゲスト参加の方は？」

「現地合流にしたので、じき来るでしょう。櫻さんこそ、お連れの方は？」

「遅れて来る、と思います」

お互い、連れを紹介し合う必要性が先送りになり、妙に安堵する。本当は二人だけでもよかった？

覚悟はできていたが、連休最終日のこの日、干潟には再び袋類やらペットボトルやら．．．目に付くゴミは前回ある程度片付けたのに、ひと月でこの有様。「前よりも干いてますね。目立つのはそのせいかも」海同様、川辺でも満ち干きが起きることは前回知ったが、でもそのピークはどうやって調べればいいのか。図らずも「干潮」に当たった、ということだろうか。

「今度詳しい人に訊いてみますね」

「環境情報はお手の物ですもんね」

「情報源人物がいるんですよ。ここに来るとああだこうだと言われそうだけど」

足元を確かめながら、歩く干潟を歩く二人。そこへ「あわわわ！」前に聞いたのと同じような声。

「あの方がそうですか？」

「いえ、妹です」

「どうりで第一声が同じ訳だ」

女性っていうから、友人か某かと思ったら、妹さんとは。またしても一本とられてしまったが、ここはつとめて平静を装う。

「櫻姉！ 何ここ？」

「これが荒川の現実よ」

「本当に荒れてんだ．．． あっ、すみません。千住蒼葉って言います。姉がお世話に」

「やだ、お会いするの今日で二回目よ」

「二度目とは思えないんですけどお」

姉妹のやりとりが続く間、千歳は待ちぼうけ。いつもこんな調子なんだろうか。しかし、荒れた川というのは言い得て妙。そのあたりの切り返しは姉並みか。思い出したように櫻姉が取り次ぐ。

「隅田さんです」

「はじめまして。お世話になっております」

蒼葉も再度お辞儀して、したり顔。

「ハハ。ま、いっか。よろしくお願ひします」

それにしても青葉の季節に、今度は蒼葉さんとはね。この姉妹は登場の仕方が季節とシンクロし過ぎていると言うか。

櫻姉は、ジーンズにスニーカー、長袖シャツとクリーンアップ向きなのだが、蒼葉嬢は膝丈ほどの白スカートに半袖シャツ、靴は辛うじてウォーキングシューズといった体裁。場所の説明が足りなかったんだろうか。

「一緒に自転車で来てもよかったんですけど、午後から展覧会に行くとかいうもんだから．．．」

「バス便を調べて、何とか追いついたんだからいいでしょ」

「でも、すぐわかった？」

「お姉様に似て、地図は強いだよ。そうそう、河川敷を歩いてたらミミズがたくさん這ってたけど、何で？」

自転車で走っているとわからないものである。きっと土が暖まってきたから？と訝りながらも、姉は答える。

「ミミズで驚いた次は、このゴミだもんねえ」

「順番としては、ゴミ→ミミズ→でしょ」

「しりとりですかあ？　じゃあ」

程なく妹は嬉々として「ズック」　すると「ク、黒豆茶！」　よく見ると、確かに学校用のズック、そして黒豆茶の飲料缶が転がっている。おそろべし千住姉妹。

あ「ハイ、次は隅田さん」　問答無用である。

ち「や？　野球ボール」

さ「ル、ル．．．　ルアー」（何でまたルアーが放置されてるんだか）

あ「あ、あー、あれ何？」

青葉の「あ」とかやっても良さそうな場面だったが、そうはならず、あが付く当人によっていったんブレイク。指した先には何かの木片が砂に刺さった状態。軍手を付け、その柄を引っこ抜くと刃の折れた（折り畳み式）ノコギリ！

「これはまたスクープものですね」

「何でもアリね」

「事件性がなければいいけど」

千歳の何気ない一言で、さすがの姉妹も固まってしまった。「いや、その．．．」　蒼葉がフォローする。

「こっちにノコギリで切りかけた合板のかけらがあるよ」

「隅田さん、今日は四月一日じゃなくてよ」

「蒼葉、蒼白しちゃった」

「うまいっ！」

「？」

「蒼白の蒼なんですか？」

「姉にいつも脅かされてるんで、名前の通りになってしまいました」

「蒼葉っ！」

あ「じゃ、隅田さん、今度は『ば』ですって」（まだ続けるつもりか？）

ち「ちょっと待って。ヨシの根元に『バッテリー』発見！」（この干潟はしりとりには事欠かない）

さ「り、リボン．．． しまった！」

「櫻姉、アウト。干潟一周！」

「エーッ」

姉も姉なら、妹も妹だなあ。ここでひとまず収集前の状況を撮影。千住姉妹も記念に一枚、といきたかったが、今日は見送り。「頼まれたら撮ることにしよう」

十時十五分、ようやくクリーンアップに着手する三人。櫻はお約束の「いいもの」をいつ出すべきか思案するも、もう一人そろってからでいいか、ということにして水際へ進む。枯れたヨシの束が打ち上がって、そこにも細かいゴミが絡み付いてたりするが、そういうのは後回し。まずは大きくて目立つゴミから、だろう。先刻とは打って変わって、黙々とした時間が流れる。用途は不明だが、プラスチック系の袋が何枚か横たわっている。櫻がためらう傍らで、千歳がそいつを引き上げると、「わぁ」「えー」と姉妹が声をそろえる。賑やかになるのはその程度。そんな折り、陸の上から呼び声。

「おーい、千！」

拾って、調べて. . .

05. 拾って、調べて. . .

姉妹が顔を見合わせる。

「千？（苦笑）」

「あ、いや。そういう邦画、あったでしょ」

そこで姉、「ああ、『千と千尋の』某ね」

妹が続けて、「今日からお前は千じゃ！」 ああ業平のヤツ。

「いやあ、河川敷走るの久しぶりだったんで、つい道草食っちゃって」

「ああご自慢のMTBで来ましたか」

「まあ、今日のところはMTじゃなくてRSだけだね。相変わらず元気そうで」

「お互い無事で何よりってとこか」

一メートルの段差を挟んで、二年ぶりの再会を喜ぶ二人。業平は背が高い方なので、余計に見上げないといけなかったりする。

「頭がえらく高いぞ！」

「はいはい」

姉妹も近づいてくる。崖地をひと降りして一言。

「見目麗しいお二人さん！」

「千さん、この方は？」

蒼葉が訊ねる。

「会社にいた頃の同期で、本多. . .」

「業平橋の業平と書いてごうへいです」

本人が名乗り出る。ヤレヤレ。

「千住櫻さん、と妹の蒼葉さん」

「何か芸能人みたい。モデルさん？」

櫻は苦笑気味。蒼葉はそわそわした感じ。この展開っていったい？

「確かにこれはスクープもんだあね」

「起業ネタとか何とかで解決できないかねえ」

「そうさね」

男同士で会話が進み、今度は櫻が退屈そう。例の憂い顔になりかけていたが、千歳がそれを察知し、話を振る。

「櫻さん、いいものがあるって話、そろそろどうですか？」

「あ、そうそう. . . ジャーン！」

いつもの不敵な笑み？ いや「よくぞ聞いてくれました」とでも言いたげな満面の一笑である

。

段差のふもとに置いてあった櫻のマイバッグ。そこから出てきたのはクリップボード。と思いきやそれは、「データカード？」 一同、思わず発声。

さ「拾うだけじゃなくて、何がいくつあったかを調べようってことです」

ち「記録は大事。社会的意義もありそう」

さ「そう。データを集めて分析して、ゴミにならない、ゴミを減らす、そんな対策を立てるのに

「一役買うんだそうで．．．」

ご「メーカーにいた人間としては頭が痛いところ」

あ「世界共通なんだ」

さ「多少違和感あるかも知れないけど、世界的な取り組みとあらば、また違うでしょ？ ね、千歳さん」

眼鏡越しに視線が光ったような気がしたのは気のせいかな。対照的に裸眼の妹は目をパチクリさせている。この場所でクリーンアップすることを思いついた、つまり発起人は確かに千歳だが、主導権的には櫻に分がある。感服しつつも、一応号令をかける。「成る程。同じクリーンアップでも、これをする事で説得力が増す訳だ。やりましょう！」（モノログ的にも欠かせないしね。）

「じゃ、まずは除去！ ここに集めましょ。数えるのはそれから」 崖に近い平面にとにかくゴミを固めることにした。千歳が拾い上げていた大袋は、白黒そろっていたので、大まかに可燃・不燃で分けるのには好都合。時刻は十時半、干潟はさっきよりもさらに広がった感じ。櫻はまたポイポイやる構えだったが、妹のお出かけ着への配慮か、持参の大きめレジ袋に放り込むスタイルで歩き回っている。四人とも軍手着用&レジ袋片手。それぞれ思い思いに歩き、拾ってはレジ袋にポイ、そして集積場所でガサガサと出す。これの繰り返しである。単調なようだが、時に巣穴からグレー（泥一色）のカニが出てきて、

「わあ、櫻姉、今度はカニい！」

「カニ？ に、にしんの缶詰．．．」

「って、しりとりじゃなくて、本当にいるんだよう」

「あ、本当だ。可愛いじゃん」

てなことがあったり、

「なあ、千ちゃん。このテレカ、まだ使えんじゃない？」

「確かにゼロのところに穴開いてないね」

「ま、ケータイ持ってても、いざという時は公衆電話だったりするから．．．」

「あれ、そこに落ちてるのってケータイ？」

「これだもんね。一応届ける？」

「って言うか、販売店に持ってってレアメタル回収してもらわないと」

「さすが元電機メーカー、生産プロセスセクション！」

「どうでもいいけど、千ちゃんてのはやめて」

といった具合。決して単調という訳でもない。

退潮はまだ続く。上流の方も少しずつ干潟が出てきた。「ありゃ、ハンガーか？」 折れたヨシの茎に、針金式の黒ハンガーがいくつか引っかかっているのが見て取れる。「うまくかかったもんだ」 男二人、露わになったばかりの干潟をそろそろと歩いていく。すると、「カー」と鳴き声一喝。一羽のカラスが着地するや、巧みにハンガーを啜(くわ)え、すかさず飛び去って行った。下流側で眺めていた姉妹も啞然。

「今の見た？」

「そうか巣作りのシーズンか」

まだ数本残っていたが、カラスに襲撃されるのも不本意だ。浮かない顔で集積場所に引き返す二人に、櫻がニヤリ。

さ「カラスに横取りされちゃいましたね」

ご「ガックリです。データカードに何て記録しよう」

あ「カラスの基準では生活雑貨でしょうね」

ち「いや、単におもちゃだったりして。ま、有効に使ってもらえるなら、ハンガーも本望？」

四人そろったところでひと休み。パッと見は結構片付いた感じである。カラスを特訓すれば、ゴミの分別も可能(?)なんて話をしていたら、おもむろにタバコを取り出し、点火する一人の男。業平、禁煙したんじゃ？

千歳が声を上げるのと同調するように、姉妹も「アーッ！」 面食らった業平君は、最初の煙をひと吐きしたかしないかのうちに、啜えた一本をその場に落としてしまった。「いや、これは失敬」 垂直に落ちたタバコは干潟の水分によって消火され、プスとくすぶる。念のため、バケツの水もひとかけ。

「まだ吸ってたの？」

「いや拾っている中で吸殻を見つけたら、ついその」

「これは漂着じゃなくて、散乱ゴミね」

「あ、一応、携帯灰皿持ってるんで」 申し訳なさそうに落とした吸殻を拾い、灰皿に収める。まだ長さがあるので、無理やり突っ込む感じ。

「もったいなかったねえ」

「以後、気を付けます」

「本多さん、罰として、干潟一周！」

蒼葉の不意の一言に一同大笑い。カラスは去ったが、近くの水辺ではカモが騒々しく、こっちに合わせて嘲笑しているように聞こえる。姿は見えないが、結構な数がいるようだ。

「それにしても、皆さんそろってタバコとは無縁なんだねえ。肩身が狭い」

「そ。この場合の無縁は、煙がない方の無煙ね。煙とは縁がない方がよくてよ」

さすがは櫻姉。今日も冴えてる。

ち「街では分煙や路上禁煙が進んできたけど、こうした河川敷や干潟はまだまだ喫煙者優位な訳だから、逆に配慮が必要ってもんだ」

ご「トホホだねえ。でもごもつとも。恐縮です」

あ「では、ここでは原則禁煙ってことで」

気を取り直して、もうひと集め。十一時になった。いよいよデータ記録作業である。

「櫻さん、ここからの手順は？」

「燃える・燃えないでだいたい分かれているから、そこからさらに仲間分けしてみましようか」

「業平は吸殻見るとまた一服したくなるだろうから、不燃の方だな」

「そっか、吸殻って可燃でいいんだ」

「地元自治体のルールではね。でもデータカード上はそういう分類じゃないんですね」

「え？ あ、そうです。発生起源別ってことなんで。タバコは『陸』つまり日常生活系の欄にある『吸殻・フィルター』にチェックします」

「私、不燃！ お姉様は千様と」

「千住さんも千だと思っただけど．．．」

「いいからいいから。フフ」

妹のさりげない気遣い(?)が嬉しい櫻だった。

漂着ヨシに紛れた細かいゴミは見送ったが、フタやキャップの類、吸殻、発泡スチロール片など、拾えるものはできるだけ集めたため、分けるのも数えるのも、それなりに時間がかかりそうな予感。仲間分けが済んだところで、十一時十五分になろうとしていた。

「蒼葉、お友達との待ち合わせ時間、大丈夫？」

「あ、十一時には終わるって思ったから、つい」

「正午に渋谷でしょ。後はいいわよ」

姉と違い、妹君はケータイ所持者だった。折りよくそのお友達から着信があった模様。「あ、ちょっと失礼」 そそと上流側へ。さっきのカラスが舞い戻って来たが、今度は静かだ。女性には威嚇しないらしい。

あ「駅に着いたけど、なんか埼京線、遅れてるみたいだから、彼女も遅くなりそうだって。でもボチボチ行くね」

ち「どうもありがとう。気を付けてね」

あ「ハイ！」

軍手と袋を置いて、一礼。軽々と段差を上がっていく。姉よりも長身な彼女の後姿は、確かにモデルのように映る。走る必要がなくなったためか、悠然と歩いて行った。千歳も業平も何となく目で追っている。

さ「バタバタと失礼しました。まあ、いつもあんな感じです」

ち「調べ終わるところまでいらっしゃれなくて残念でしたね」

さ「放っておいても、また来ると思います。気に入ったみたいだし」

三人になったところで、お待ちかねのカウント作業へ。タバコの吸殻は思いがけず、五本程度だった。

「やっぱり皆吸わなくなったんだよ」

「いや、携帯灰皿が普及してポイ捨てしなくなったんだ」

「まあまあお二人さん、そういう議論は数え終わってからってことで」



この日の集計結果は、ワースト1：プラスチックの袋・破片／六十三、ワースト2：食品の包装・容器類／四十九、ワースト3：フタ・キャップ／四十四、ワースト4：農業用以外の袋類（レジ袋など）／三十六、といったところ。思いがけなかったのは、エアコンのホースと思しき配管被覆や、電線ケーブルのカバー類が散在していたこと。被覆としてまとめて数えると、実に三十三に上った。ワースト5にランクインである。

「業平、これどうよ？」

「これまた製造物責任が問われそうなの．．．」

「銅線が抜き取られてるのは、最近のドキュメンタリーで聞く話と同じってか？」

「ウン」

櫻が促す。

「ここはまた千さんにブログで知らしめてもらいましょ！」

「櫻さんまで、千さんて」

「電線だけに、線さんかなあって。あ、すみません。千歳さん」

業平が割って入る。「すみま千てか？」 一同失笑。櫻の影響力、大したものである。あとは、発泡スチロール片（サイコロ大以上）が二十九、ペットボトル（またはプラスチックボトル）が二十四．．．と続く。バーベキューの名残と言えるカセットボンベ、季節的には早い蚊取線香の金属フタ、川を見ながらスカッとしたかったのか髭剃りセット（シェービングフォームのスプレー缶とシェーバーのケース）ほか、傘の取っ手、スポンジ、靴下などなど。それぞれデジカメラで撮っていく。データカードが呼び水になり、前回以上により細かくゴミ事情が見えてきた。例の大袋の他に土嚢(どのお)袋も三枚、この手の大型ゴミの処理が悩ましいところだったが、とにかく畳んで四十五リットル袋に押し込んだ。広がっているから目に付くし、生態にも影響が出る訳だ。しっかり片付ければスッキリするものである。しりとり具となった品々、物議を醸したノコギリも分別して袋入り。洗って再資源化できそうな容器類は、拾った数の三分の一程度か。水道で洗いながら、業平が申し出てくれた。「大型スーパーが途中にあるから、帰りがけに出しとくよ。干潟一周よりも実用的でいいだろ？」 頼もしい限りである。そんなこんなで四十五リットル袋は、またしても五枚全てを消化。

「櫻さん、ゴミ袋って余ってたりします？」

「今日拾った大袋、また使いましょうか？」

「ああ、しまった」

「いえいえ、そこまでは。次回持って来ますよ」

「業平は？」

「ウン」 彼はよく唸る。何か考え事をしているようである。

「いや、カウントするのもっと手っ取り早い方法ないかなあって」

「早くも発明ネタ探しかね？」

「この範囲でこういう状態ってことは、他の大がかりなクリーンアップ会場だともっと数えるの大変な訳っしょ？」

二人のやりとりを聞きながら、櫻の目線は鈍く光るある物体を捉えた。販売店に持って行くからと、まだ袋入りしていなかった漂着ケータイが半乾きで寝そべっている。

「私、実現性はわからないけど、ケータイ画面でピピとかやって数を入れていけると面白いかなあ、って今．．．」

業平と千歳は虚を衝かれたようにお互いを見る。

「そうか。データカードの項目を入力画面にして、数字を打ち込めるようにすれば集計は楽になる、か」

「ケータイ不所持人間としては、何ともコメントしようがないけど、PCでも理屈は同じだから、モデルとしてはアリだね。特に一つの会場で複数班が手分けして調べる場合、ってことかな」

「蒼葉はさておき、今日会ってる友達が多分その辺、詳しいと思う」

「オレはどっちかって言うと実機派だから、バーチャルな仕掛けはどこまでできるかわからないけど、仕様は考えてみるよ。それをその人に見てもらえばいい訳だ」

思いがけず、話が大きくなってきた。入力した値がリアルタイムでブログに反映したり、なんてのも面白そうだ。

「そろそろ乾いてきたかしら？」

「じゃ、業平君。あとは頼むよ」

「今日は変な天気だけど、ちょうど日が照ってたんだ。こういう活動は天も味方してくれる訳？」

スーパーで回収可能と思しきペットボトル、食品トレイの類を四十五リットル袋に放り込んで、RSB（リバーサイドバイク？）に括り付ける業平。

「これでアルミ缶満載だと、また違う展開になるんだよな」

「どっちにしてもお似合いだよ」

「へへ、じゃまた！」

櫻がキャッシュカードを落とした橋からは、この干潟は目視可能。人がいればそれもわかる。日曜の朝の塾帰り、一人の女子中学生が三人の様子を眺めていた。「あの人たち、何してるんだろ？」 どうもゴミを拾っているだけではなさそうなことはわかったが、その意図がわからない。「水道で何か洗ってる。はあ？」 動作を目で追いつつも、ボンヤリ。いつしか十五分くらい経っていた。「あ、もうお昼だ！」 どこで誰が見ているかなんてのはわからないものである。

目撃者は立ち去り、時刻はすでに正午近くになっていた。ひととおりの作業を終えたところで、千歳は大事なことを思い出す。「片付け終わった後の写真！」 櫻も後を追う。「あ、千さん、待って」

少しずつ水位が戻りつつあった。

「間に合った」

「これで川の神様もお喜びね」と櫻がポツリ。一瞬何のことかと思っただが、そこは千さん。

「ああ、おクスレ様を助ける話。『佳き哉』ってなかなかの名セリフでした。姿は見えないけど、どこかにいらっしゃるんでしょう」

「今、飛んで行きましたよ」 櫻が指差す。

「あ！」

どこからともなく、ツバメが現れ、二人の前を横切り上昇していった。

「これでワハハハとか聞こえたら、間違いなく本物」

「フフ」

青葉、ツバメ、そして水ぬるむ匂い．．． 今日立夏である。

【参考情報】 [2007.5.6の漂着ゴミ](#)

06. 雨降りランチタイム

千歳は前回同様、四十五リットル袋を一人で四つ持ち運ぼうとしていた。が、例のノコギリで切りかけた合板は大した大きさではなかったが、ズシリと来る。可燃の袋が重くなるとは予想外。不燃の方も錆びた缶やらカセットボンベやらでそれなりの重量。もう一つの不燃用袋には例の大袋と土嚢袋の詰め合わせで嵩が張る。「隅田さん、何か忘れてませんか？」自分のことを指差しながら、ニヤリ。今日は呼び方がコロコロ変わる櫻。二人の時は、ウケ狙いする必要がないから通常モード？

「私、お供します。ご迷惑でなければ」

「あ、そりゃあもう」

あまり考えず応諾してしまったが、お供ということは即ち、千歳の居所を案内するのとイコールだ。大丈夫か？「じゃ、この重いのを前カゴに」自転車に積み出す櫻を見つつ、内心ではかなり焦ってきた千歳。

「こちらです。重くないですか？」

「積んでしまえば、こっちのものです。自転車はビックリでしょうけどね」

こういう状況での会話は正直不慣れである。這っていたミミズがさっきの日射で哀れな状態になっていて、しかも結構な数だったりするが、彼の眼中には入らない。櫻の方は河川敷の草地に点在するタンポポに目が行っているらしく、やはりミミズは気になっていない様子。そんな二人の目の前に忽然と現われたのは、まだ健在な大ミミズ。

「あ！」

「おっと、ブレーキ．．．」

ニョロニョロやっているが、キャーとかならないのが彼女らしい。冷静に観察する櫻を見て、思わず吹き出しそうになった。これで多少は緊張も解けたか。

河川敷を外れると、彼のマンションまではもうちょっと。今度は街並みが気になるらしく櫻はあっちこっちに視線を飛ばしている。すると、

「あ、雨？」

「急ぎましょう！」

確かに午前中は持ったが、昼過ぎてからいきなり降り出さなくても。幸い、小雨程度だったのでさして濡れずには済んだが、ゴミステーションの入口で足止め状態。「ひとまずゴミ袋はここに出せるんですが．．．」千歳としては傘を二人分持って来ることを提案したいのだが、その間、どこで雨宿りしてもらうか、部屋に通す訳にも行かないし、切り出しにくいなあなどと躊躇していた。さすがの櫻もここでいきなり「お部屋、どこですか」なんてのは口に出せない。雨が降ってきたばかりに、話がややこしくなってきた。

「傘．．．」二人同時に出た言葉が一致した。それぞれ続きは「傘があればしのげますね」「傘をお持ちしますね」だった。両者、そろって胸をなで下ろす。ホッとされたためか、急にお腹が減った心持ち。「ねえ隅田さん、この後、食事でもどうですか？」この機転、さすがである。

「何かお好みはありますか？」

「近所のオススメでしたら．．．」

そうと決まれば、ゴミ袋はさっさとポイ。缶とビンもとつと回収箱へ。「自転車はとりあえずこの底(ひさし)の下へ。エントランスでお待ちください」　ステーションと通用口は近接しているので、傘は無用。通用口からエントランスへ案内しつつ、千歳は上階へ。「千歳さんの住んでるマンション、ちょっとしたものねえ。会社員の頃ってどんなだったんだろ？」

雨は少々強めになってきた。

「降られる前でもよかったですね」

「川の神様のおかげでしょう」

「ワハハ、ハ？」

高笑いしかけた櫻の目線があるものを捉えた。「あ、噂をすれば」　ツバメが雨曇りの空を滑って行く。雨粒をサーと切る感じ。心地良さそうだ。時計は十二時半を指していた。

時は同じく十二時三十分。蒼葉は渋谷駅西口に到着。「ああ、この緑色の車両。弥生もよく知ってるわねえ」　こっちはまだ雨は降っていない。でも、いつ降り出してもおかしくない様相。



「あ、おばちゃん」

「人の名前、変な区切り方しないでよ。蒼葉よ蒼葉！」

「だって私より年上じゃないの」

会って早々、このやりとり。仲が好いんだかどうなんだか。

「それにしても、この車両なに？」

「ああ、『青ガエル』って言うんですって。弟が教えてくれたの」

「東急の初代電車ねえ．．．」

「蒼葉ちゃんに青ガエルで丁度いいかなって？」

「弥生っ！」

今日はいろいろな生き物にご縁がある日のようで。

駅とデパートを連絡する無料バスに乗り込むご兩人。まだ若いのに横着？　いや、渋谷の雑踏が苦手というのが理由らしい。

「で、午前中はどこにいたの？」

「荒川某所でちょっとね」

「ま、確かに靴汚れてるもんね」

「あ、いけない！」

モディリアーニを覗に来た二人だったが、蒼葉の靴がこれじゃちょっとねえ。と、バスを降りたところで、にわか雨。「ちょい失礼」　デパート入口の側溝を流れる雨水で干潟泥を落とそうという一策。服装とは裏腹なこの振る舞い。弥生が一言。

「でも、まず腹ごしらえでしょ？」

「そっか、早く言ってよ」

弥生が持って来ていた傘は大きめで助かった。ケータイクーポンが使える、お気に入りのパスタ店へと急ぐ。食事の途中だったが、現場での出来事を話し始める蒼葉。

「で、そのゴミを種類別に数える訳。これがなかなか大変そうで」

「ピピって感じでできれば良さそうだけど．．．」

「そうよ、弥生嬢、何かプログラム考えてよ」

「その場ですぐに使える機械となると、やっぱケータイかなあ」

弥生はワタリガニの何とかパスタをつついている。

「へへ、カニおいしい？」

「ちょっと食べにくいけどね」

「今日、実物見たよ」

「エッ？」

荒川の干潟で見つけた小カニのことを得意そうに話す蒼葉。

「あれも食べれるのかなあ？」

「人が食べてるのに、やめてよ」

「ま、しっかりお召し上がりくださいな」

「でも、荒川にカニとはねえ」

蒼葉はニシンとシソ(?)のシェフの気まぐれ系パスタを食べている。カニ→ニシン．．．でどこかで聞いたような。「櫻姉、今頃どうしてるかな？」

最寄駅のプチ商店街に、いわゆる「カフェめし」店ができた。コーヒーのお代わりが可能なのが千歳にとってはありがたく、何となく鼻屑にしている。「いいですね。決まり！」あわてて出てきた割には、しっかりオリジナルカップを持って来た彼だが、櫻の手前、自分だけ割引、というのも気がひけていた。自分でオーダーしてテーブルに持って行く訳だが、お手本を示す上で、彼が先に注文する。「あら、千歳さん、そのカップ」 さっさと見つかってしまった。

「ええ、時々来るので」

「リユースですね。じゃ私も」

他店のものだが、マイカップとして持ち歩いている、とのこと。この店はあまりうるさいことは言わない。サイズが同じ、ということであっさり割引が通ってしまった。櫻さん、やるなあ。

「お勘定は僕が」

「いえ、お誘いしたの私だし」

バイトの店員は女子高校生風。もともとにこやかな感じではないが、今日はなおのことご機嫌斜め？ テキパキしてるのはいいんだけど、もうちょっとなあ。何となく千歳の席の方を見遣っている。

「今日もいろいろとありがとうございました。助かりました」

「いえいえ。私自身も勉強になりましたし、何しろ愉しくて」

雨は降り続く。だが、夏を迎える上でこれは欠かせない。清涼剤のような爽やかな雨。今はスッキリしているはずの干潟にも、この雨は恵みになっているだろう。正に浄化である。そんな光景を思い浮かべながらのランチ。二人の会話も滑らかだ。

「今日のモノログ、まとめりそうですか？」

「写真があって、今回はさらに種類別の調査結果つきですからね。バッチリでしょう」

「でも時間がかかりそう．．．」

「いや、最近のブログは画像でも表でも、昔より掲載しやすくなってるんで、記録さえしっかりあれば、時間はかかりません」

「へえー」

ようやくウエットティッシュに手が伸びる。

「ただ、更新頻度が基本的に月に一度じゃ、いわゆる日記としてのブログとは程遠いんですけどね」 苦笑する千歳だが、櫻はフムフム。でもそう言えば、四月中は更新されなかったなあ。何か載ればまたメールしようとしていたのにできなかった櫻は、それを埋め合わせるように話を継いで行く。「私もモノログに．．．」と思わず言いかけて、ストップ。その話はまた別途。櫻は千歳の前職の方が気になる。

「いや、その隅田さんがWe b関係にお強いのもって、会社にいらした頃の仕事か何かで、ですか？」

「インターネットが広がり出した時期に、ちょっとした伝手でホームページの作り方を習ったのが始まりですね。当時は学生でしたが、そのおかげで就職にも多少有利だったようで」 記憶を辿るように、ポツリポツリと話す彼。

「でも会社に入ったら、もっと進んで、インターネットを使った業務処理というのが形になりつつありました。当時はWe bコンピューティングとか言ってましたね」

「はあ。隅田さんて理系ですか？」

「いやあ、それならまた別の道に進んでたでしょう。文系だったんで、いわゆるプログラミングはできなくて。でも、業務処理の流れや仕掛け、そのデータ入力用ホームページのデザインや設定は何とか。あと、処理結果をもとに分析するためのツールというか、データベースソフトの使い方も社内の研修などでマスターできたのが大きかったですね」

今の仕事との接点はまだ見えてこない。ただ、櫻の今の仕事には通じるものを何となく感じ取っていた。

「で、その後は？」

「モノづくりにおけるプロセスの見直し云々というプロジェクトの一員になりまして。例えばブロードバンド用の機器一つでも、ニーズを捉えるところから始まって、デザイン、設計、製造、在庫管理、最後にお客の手に届くまで、どのくらいの手間と日数がかかるのか、なんてことを現場に出向いて調べたり．．．」

「業務処理をインターネットで、てのはその調査の裏返しですか」

「さすが！ まあ、ここで人を介在させなくても、この情報がしっかりトレースできていれば、次の工程に流れるだろう、とか、ですね」

「今は確かにインターネットで注文すれば、すぐに届きますものね」

「B P R（業務プロセス改革）ありきでさらに、そのプロセスの管理がインターネットでできるようになって、確かに速くなったし、お客にとっても便利にはなりました。ただ、すぐ届くためには在庫があるのが前提。注文を受けてから作り始める商品はたまったものじゃありません。時間がかかるのにはそれなりに理由があるんですが、それを無理矢理縮めようとして、過当競争に陥ります。お客にいいものを、ではなく、他社を出し抜いて、競争に勝つのに躍起って感じ」

先刻までのポツリ調から徐々に熱弁調に変わっていく千歳。二人とも食事の手が止まっている。

「生産プロセスを効率よくする、というのは早い話、人を切っていく、ってことになるんです。現場で話を聞いていると、皆さんひたむきでいい人ばかりなのに、自分が工程を調べれば調べ

るほど、そのいい人達が犠牲になる可能性が出てくる。ジレンマでした」 プロセスを突き詰めていくと、重複する作業があったり、後戻りや二度手間があったり、情報が滞留してたり、仕組みの欠陥もあるが、人がネックになっていることも多い、これは櫻も共感するところ。リストラの嵐が吹き荒れた時期、名だたる企業でもこんな内情があったとは。

「で、同じ生産プロセスの効率化をやるんだったら、人につながる話ではなく、環境負荷という視点の方がまだ自分としては痛みが少ないかなあ、って。変な話ですけど、ムダをなくせば確かに環境にもやさしいって言ってしまうんですね。ま、もともとそんなモノづくりが要らない、って見方もありますが」

「フーン。それで何となく環境関係も」

「櫻さんには及びませんが、へへ」

ここでようやく箸が動き出す。余談だが、ここの箸は、使い捨てではなく、竹の箸。同じ食事でも、味わいが変わってくる。千歳はアイスコーヒーを少し含んでから、話を続ける。

「で、そのプロジェクトに対して、環境部署から声がかかって。報告書に載せるからどのくらいエネルギーが削減できたか調査せよ、とか」

「ああ、二酸化炭素排出量. . .」

「確かに温暖化抑止につながる取り組みと言えなくはないんですが、こじつけみたいで」

環境関係なら競争原理とは無縁だろうというのは早計で、逆に熾烈さを増していた。

「メーカーには聖域はないんですね。そのうち、やれCSRだとかが始まって、社会的責任を果たすのも競争の具になってきた」

「職場には各社のCSRレポートを閲覧できるコーナーがありますが、確かにどこも熱心ですよ。大変だなあ、って思っていましたけど」

「レポートが出来上がる時には担当者は皆、疲弊してしまって、『持続不可能』だったりします」

「そう言えば、サステナビリティレポートってのも見かけたような。何か矛盾してますね」

やっぱり櫻さん、冴えてるなあ、とまたまた感心。こういう話ができる女性はそうそういない。千歳は続けて、プロジェクトメンバーにも当然のように成果主義が適用され、裁量労働が基本になったこと、成果を上げるためには必然的にプロセス改革を断行しなければならず、同時に自らの生き残りを模索しないといけなくなったこと、そして、「要するに、社外との競争と社内での競争、二重の競争原理を突きつけられた訳です」 成果は誰がどう評価するのか、という点が曖昧な上に、仮に管理職を評価者とした時、制度のユーザーと言えるその評価者の声が反映されているのかどうかも模糊としている。ユーザーの意見を聞かずして見切り導入されたとするなら、そんな横暴な話はなく、明らかに制度欠陥だろう。「何とも痛々しい世界ですねえ」 これまでにない憂いを表情に浮かべる櫻。ちょっと熱くなり過ぎたか。

「結局、その効率化というのは、不毛な競争と隣り合わせだった、そんな気がします。人を切っただけで得た利益に、どれほどの意味や価値があるのか。特にグローバル化のただ中にある業界は、目の前の競争に心を奪われて、そのトリックに気付かない。せつかく苦勞して積み上げたものが、結局はある一国に収奪されるようにできている可能性は否定できないんです。成果主義は一見合理性がありそうだけど、見方を変えると実はトリックに乗せるための便法で、その一国のためにあるんじゃないかって、ね」と一気に話して、コーヒーを飲み干す。

「それで離職されたんですね」 職を転じた、という点では境遇が似ているが、自発的意思で辞める、というのはまた重みが違う。「折りよく、インターネット上で市民の手によるメディアを興そう、という動きがあるのを知って、成果主義の裏側とか、制度の犠牲になった人を追う

とか．．． ページデザインを手伝いながら、ちょっとした連載を思いついて、それで何となく今に至ります」 千歳がジャーナリストっぽいこと、web慣れしていること、そしてどことなく哀感を漂わせていることなど、今日の彼の話は勘のいい櫻にとって、その理由を知る上で余りあるものだった。まだまだ一端かも知れないが、大体の素性はわかったつもり。千歳はコーヒーのお代わりをもらいに席を立つ。櫻はようやくワンプレートに載ったサラダとスープを食べ終えたところ。メインのパンニーニがまだ残っている。

「そうそう、今日のデータカードって米国式ですか？」

「あ、それは聞き損ってました。そうかも知れません」

「まあ、良くも悪くも、ってことなんでしょうね。自省を込めてのクリーンアップ、か」

櫻はふと、彼のバッグに目を留める。

「そう言えば、そのバッグ、アースデイのですね。アースデイも米国発祥ですけど」

「何かの環境イベントだったなあ、くらいにしか覚えてなくて。あ、確かにそうですね。1997年に代々木公園でもらったような」

「私は1998年に、横浜のこどもの国で同じようなバッグを買いましたよ」

「へえー」

偶然、いや似たり寄ったりというか。年恰好もお互いにわかってきた？ 「私もお代わり、行って来ます」 箸でいただくエスニック丼とやらを千歳も今頃になって食べ始める。こういうノロノロもスローフードと言うのだろうか。怪訝な顔して櫻が戻って来た。「何かお代わりのコーヒー、量が少ないような、ブツブツ．．．」 若い店員の当てこすりかも。

すでに小一時間が経過。雨も上がってきたか。「私、競争社会って確かにどうかと思うけど、特に問題なのは競争好きな人が好きでない人を否応なく巻き込むことなんじゃないかってよく．．．」 ごもつともである。「競争しなくていい生き方も尊重されて、その人のペースやリズムが保てるっていうか」 今度はワークシェアリングや余暇についての話になってきた。千歳曰く「職場だけが全てじゃないですからね。その人がどれだけ、地域や家庭や諸処で有意義な時間を使えるか。人それぞれ、適した環境ってものがあるでしょうからね」 これには櫻も同感である。地域への関心、というのはいくら周りがお膳立てしても、そこに暮らす人に時間や自覚がなければ話にならない。役所が考える振興策では己ずと限界も出て来るだろう。

「まあ、そんなことを考えてる折り、河原の桜を見に行行って出くわしたのがあのゴミ箱干潟だったんですよ」

「自分さえ良ければ、の成れの果て．．．」

「人の心を投影しているのかなあって」

千歳の急造ブログ「漂着モノログ」にはすでにそんな一節が書かれてあったのを思い出した。二人とも二杯目のコーヒーを飲み終わっていた。時すでに午後二時半。

「今日はあんまりお話できないなあ、って思ってたけど、重たいゴミと雨降りのおかげ。フフ」 一瞬ドキっとする千歳だったが、言葉以上に眼鏡の奥の眼差しが気になる。眼鏡を外すとどんな感じなんだろう。「今度は櫻さんの話、聞かせてくださいね」 自分でもビックリするようなセリフが不意に口を突いて出た。櫻は飄々としたもので、「ええ、何時間でも」 楽しみはとっておくものである。本当は今日でもいいんだろうけど、そこはお互い弁えたもの。「雨、上がりましたね！」

拾ったケータイは、同じ会社の取扱店に持って行くべき(?)とか、メーカーが苦勞して作ってもポイ捨て(?)されてしまうなんて哀れ、とか話をしてるうち、自転車置場に着いてしまった。櫻はちょっと淋しそう。傘を返しつつ、

「じゃあ、次回は六月三日ですね」

「何かまたいいもの見つけたら教えてください」

「ハイ！」

蒼葉の帰り際と同じようないいお返事。姉妹というのは似るものだ。

橋を渡る途中、干潟が見える位置で一旦停止。「うん、ひとまず大物は片付いた」 雨で多少増水したように見受ける。でも濁流ではない。再び漕ぎ出そうとすると、立夏を告げる陽射しが川面に注ぎ始め、程なくその先の下流側では虹が半分現われた。「二時の虹、何ちゃって」いや、そろそろ三時なんですが。

データカードをチェックしつつ、提出用の一枚にひととおり転記する。ひと作業終わったところで、「さて、モノログは、と」 今日の結果が楽しみで仕方ない櫻。「千歳さん、早いわあ」

例の如く、開始前・終了後、スクープ系（ノコギリ、ケータイ、髭剃りセット、etc.）、今回はさらにしりとりゴミも部分的に出してある。「ズック、黒豆茶、野球ボール、ルアー、飴、綿棒．．．」 いつの間に撮ってたんだか。すると「Bon Soir ただいまー」 絵に影響されたか、フランスモードで蒼葉が帰って来た。「櫻お姉様、今日はその後、どうでした？」 妙に上機嫌で薄気味悪い。交わす姉君。

「ほら、しりとり出てるよ」

「さすが千さま。どれどれ？」

「う」で止まっているのを見て、

「そう言えば、ウーロン茶のペットボトルも転がってたね」

「また『や』になっちゃうから、こんなところでしょ」

「じゃ『梅酒』で投稿しよっかな」

「ハハハ。あのカップね」

今日の夕飯は、姉が当番。文花からもらった野菜の残りを使った献立が並ぶ。櫻曰く、自家製カフェめしだとか。

「あのさ、弥生ちゃんに話があるんだけど」

「ああ、データカードの話をしたら、ケータイでピピとか」

「え、その話、何で？」

「プログラム考えてみるから、設計書ちょうだいって」

「蒼葉が帰った後、こっちも同じこと話してたのよ」

「以心伝心ですかあ？」

食事中、千歳のことをなかなか話さない姉に業を煮やしつつも、二人だけの何とかかな？と、冷静に考え、今日のところはツッコミを控えることにした妹君。モディリアーニ夫妻の悲愴な宿命を知り、少なからぬショックを受けて帰って来た蒼葉だったが、時折見せる姉の笑顔に救われた気がした。表情を見ていれば聞かなくてもわかるのが妹というものである。

【参考情報】 [渋谷駅の青ガエル](#) / [ビジネスプロセス論](#) / [90年代のアースデイ・フェスティバル](#)

五月の巻（おまけ）

07. 薫風

薫風の季節とはよくいったもので、晴れ渡る空の下、流れる風は蒼々とした薫りを運んでくる。月一の漂着モノログに番外編を設け、少しでもネタを増やしてブログチックにしようと企てた千歳君は五月のとある日曜日、徒歩ではなく自転車を走らせ、河川敷の風を切っていた。この日、最高気温は二十五度。サイクリング日和である。

おなじみの干潟も気になるが、他の水際はどうなってるんだろう、ゴミが流れてくる様子は目で追えるんだろうか、というちょっとした疑問が徐々に沸いて来る。実地調査はお手のもの。前職のおかげで習慣化(?)しただけのことはあって、労は厭わない。ひとまず櫻が通る橋までやって来た。干潟のある下流側ではなく、まずは上流側へ。一望して目に付くのは、ヨシの群生。青々と丈を伸ばし、風に靡いている。時折強く吹く風が作る襞が川を揺らしている。流れは穏やかだが、その水量は実に巨獏。一度ゴミを呑み込んだらそのまま東京湾まで押し出してしまおう、そんな勢いを感じさせる。「漂着するゴミはほんのひと握りということか」空の青とは違う青が彼の心理を占める。いわゆるブルーな気分てヤツ。荒川もおクサレ様状態だとブルーなはずだが、空に負けない青を湛え、悠々としている。「ここで沈鬱になっても仕方ない。まずはできることから！」気持ちを切り替え、今度は下流側へ。片側二車線の道路橋は、反対側の歩道に回るのがいちいち橋の付け根まで行かないといけない。信号が変わるのも時間がかかる。「千住姉妹もここ通るのかな？」ちょっと軽やかに自転車を漕ぎ出す千歳。干潟が見える位置まで来て停止。野鳥観察するには時季的には違和感ないが、橋の中央で双眼鏡を構える男はそうはいない。人がすれ違う度に集中力が途切れる感じだが、スコープの視界はしっかりと川面を捉え、動じない。漂流する人工物...「あ、袋？」レジ袋らしきものをまず発見。今度は双眼鏡を外し、水面でキラと光るものを見つけると、それを覗いてみる。「ペットボトルか」ヨシの束も時々流れている。そして「ウキ？」双眼鏡はしっかりと、浮き沈みする細長い物体をキャッチした。そのまま追っていくと、いつものゴミ箱干潟が現われた。かくして、そのウキは砂地に漂着し、ひとまず海行きを免れた。「プロセス、見たり！」でも、デジカメで証拠を押さえた訳じゃないから、説得力に欠けるか。肉眼で干潟を眺めてみる。この眺めは千歳としては初めて。「すでに何となくゴミがたまりつつあるような...」水位は高めなので、それほど多くは見受けられないが、双眼鏡で確認すると、いろいろと転がっているのがわかる。またしてもブルーになりかけた千歳だが、干潟の上、陸地の方へふと目を転じて一驚。「え、草刈り？」業者風ではない。腰にタオルを巻いた一人の男性が草刈り機らしきもので、何かを刈っている。陸のヨシは上流側同様、結構な成長ぶりで、青く高くなっている。双眼鏡越しでその男性を追うも、ヨシに隠れてよくわからない。「ヨシを刈っている訳ではなさそうだ。行ってみるか」

世間では団塊と呼ぶ世代のこの方、名は掃部清澄（かもん・きよすみ）と云う。荒川流域では知る人ぞ知る存在。守護神と呼ばれることもあるが、本人は意に介さない。ただ単に幼少の頃からの当地の原風景を保つなり、再生したりしたいだけ、という。そんな掃部さんの今日の作業は、ネズミホソムギなどイネ科植物の退治である。「こいつは何度も出てくるからなあ」ご本人はイネ科花粉症ではないが、この外来植物、放っておくとさんざ花粉を飛ばして、河川敷利用者

などがとんだ受難に遭う。根絶やしにするのが一番だが、そこまでは手が回らない。行政関係者とも交渉した。だが、工事好きな割には、こういう地道な作業となると、下手に自然環境に手を出せないとかで煮え切らない。花粉が出てくる前に手を打つ必要から、自力でやってしまおう、と断行した訳である。「今日はこんなところか」 機械を止め、崖下を覗き込む。「何か前より片付いた気がするが」 干潟の再生も一大テーマで、ここも前から気になっていた掃部公。大潮がさらっていったか、程度に考え、帰り支度を始める。乗り入れ許可を受けてあるバイクの後ろには大きめの木箱が括り付けてあって、草刈り機も収納可。草刈り機の取っ手のところに「巡回中」と書いた布（タオル？）を結わえ、出発。頼まれて巡回している訳ではない。ボランティアに河川敷を廻り、監視・観察・感受しているのである。本人曰く「三カン」。これに環境の環、関心・関知・関係の関を加えて、「五カン」活動だそう。

五カンおじさんが去った後、程なく千歳が到着。「ありゃ、入れ違い．．．」 辺りにはイネらしきものを付けた長い草が根元から刈られて幾重にも横たわっている。「これはいったい？」 漂着物ではないが、スクープっぽいので、ひととおり撮影し、佇む。漂着ウキは、干潟のヨシの根元に絡まったようで、浮き沈みなく安住している。そんなウキのことはすっかり失念中の千歳君。まだ遠くには行っていないはず。謎の男性を探すか否か．．． 浮き足立っている。

水位がいよいよ高くなってきた。ウキも目に届かない。「今日は荒川の水面と、このイネを載せるとするか」 干潟ゴミは見送り、いったん引き返すことにした。自転車の速度でも十分に留まる薄赤紫の花々。タンポポに代わって、河川敷の斜面を満たすのはシロツメならぬアカツメクサである。「この花も載せますか」 紫がかっているが赤だが、桜色にも見える。誰かさんを思い浮かべる彼。心のブルーは乾いた薫風に乗って、空の青に溶けていった。

「文花さん、このイネみたいの何ですか？」 最新の漂着モノログを見ながら、チーフに問うてみる櫻。「河川敷を覆うイネ科植物ってのが問題になってるのは聞いたことあるけど．．．」

地場や旬の野菜は得意分野だが、この手の外来植物は明るくない。「外来種ですかね？ それなら駆除されても仕方ないんだろうけど、何か悪さしそうには見えないし」 呟く櫻を脇目に、文花はしっかりモノログの存在を確認。

「これはどの辺りの話？」

「対岸の駅に向かう橋から下流を見た辺りです」

「地域環境問題ネタになるかもね。私も調べてみる」

千歳の追加取材の甲斐あって、ちょっとした動きにつながった。「更新頻度は月二回ってことかな」 帰ったら激励(?)を兼ねて千歳に一筆書き送るとしよう。それにしても今日の空は青いなあ、と彼女は窓の外を眺める。でも、本当に青？ 「櫻さん、大変！ 空ちょっと黄色くない？」 文花が興奮気味に呼びかける。「ああ、眼鏡越しだとよくわからなくて。ただの青空じゃないなあ、とは思ったけど」 五月の空は澄んでいて、風も爽やか。だが、この季節、黄砂には要注意である。

「韓国じゃ、黄砂で休校になることもあるんですけどね」

「じゃ当センターも今日は休館？」

「あのねえ」

「あ、いらっしゃいませ」

時にセンターを訪れる客があると、接客は櫻が担当。公務員にしてはなかなかのセンスと文花は評価する。公的な施設は今、良かれ悪しかれ民の力を採り入れようとする風潮のさなか。お役所体質を露呈する訳にはいかない。本来の設置目的とは別に、そうでないところを示すための試

金石としてこうした施設はあるとさえ言える。サービス品質が問われる、利用者・来訪者を顧客と捉えることが第一歩. . . 役所側は過敏に指針を出してくるが、そもそも指針がないと云々という辺りがまだまだ体質改善していない証か。彼女にとっては自明の理であって、接客マニュアルなども無用。カウンター業務は今やお手のものである。櫻はもともと尽くすタイプ（蒼葉談）だが、前職でそのあたりの大切さを自分なりに会得したことも大きいようだ。引っ込み思案タイプの文花にとっても、櫻の存在は頼もしい。

「何かこの人見たことあるような. . .」 CSRレポート（直訳：企業の社会的責任報告書）の最新版を物色しに来た一人の男性。棚を案内した後、後姿を一瞥して気付いた。「でも、いつどこで？」 その男性が千歳に頼まれた用件でここに来たことは知る由もない櫻。こうした世界は広いようで案外狭かったりするるのである。

【参考情報】 [黄砂と五月晴れ](#)

[漂着モノログ 第一章 春] 終わり → [漂着モノログ 第二章 夏] 続く



六月の巻 08. 現場研究員

五月の回は、雲行きが怪しくなる展開だったが、今日、六月三日は怪しい雲がだんだん遠ざかって行く感じ。明け方はまだ雨が残っていたようで、河川敷の路面は心なしか湿気ている。グラウンドのコンディションも必ずしも万全ではなさそうだが、少年野球チームが元気に試合中。今日は過去二回と勝手が違ってきそう。定刻十時。潮は退き気味。干潟も雨のせいか黒く湿っていて、毎度の如く、見本市状態である。背景が黒っぽい分、余計に目立つ。今回は特に満潮時のラインにヨシ束が押し寄せ、そこに細々したゴミが絡まっているのが目に付く。そして、その束がガードになって、崖に向かって軽量ゴミが留まっているのが特徴。ペットボトルや弁当容器が潮にさらわれることなく、安住してしまっている。ヨシ束を取り除いた後、大潮が来ることがあれば、川へ逆戻りしてしまう、ということか。ムムムと自問する千歳。人が近寄ってきても気付かない程、悩んでいるご様子。「千ちゃん、おい！」 業平(ごうへい)が声をかけてやっと振り返る。

「おっと、失敬。よくぞお越しくくださった」

「ちっとも気付かないから、具合でも悪いのかって」

「まあ、見て頂戴よ」

「一カ月でこうか」

デジカメを取り出す千歳の傍らで、業平はケータイでピピとやっている。

「そう言えば、データ入力ケータイってその後どうよ？」

「似たような仕掛けがないか調べながら、仕様書は書き始めてるよ」

「次回にでも、デモができればいいんだけどね」

男二人で話す間を割って入るように自転車が突っ込んできた。

「おはようございます！」

「櫻姉さん、ご到着」

業平らしい返しである。

「蒼葉さんは？」

「六月病で、欠席です」

「へ、六月病？」

「いえ、急に撮影の仕事が入っちゃったとかで」

千歳の第一声が蒼葉だったのが気に入らなかったようで、少々冷ややかにはぐらかしてみる櫻。つい撮影なんて言ってしまったが、大丈夫なんだろうか。すかさず業平が反応。

「やっぱりモデルさんだったか」

「あ、通販のカタログとかですよ。ファッションモデルだったら、何か別のことやってますって」

妹に口止めされてたが、滑ってしまうものである。あわてて話題を変える。

「今日はサプライズゲスト、来ないんですか」

「予定日とか伏せてますからね。特に問合せメールも来ないし」

モノログ上でクリーンアップ参加者を広く呼びかけていいものかどうか、これは櫻との相談事と決めているのだが、まだ話を切り出せずにいる。プライベートビーチ感覚で取り組みたい、というのが正直なところだが。

「そうそう、私が来る前、何の話されてたんですか？」 今度は申し訳なさそうな口調。

「例のケータイシステム、調子はどうって」

「ああ、蒼葉の友達もピピッと来たらしくて、渋谷でランチ中にもうその話題になってたんですって」

「え、櫻さんが話す前ってこと？」

「そうなの。だから彼女なりにもう何か考えてるかも」

業平も乗り気。「じゃ、次回デモやれるかな」 プロセス管理ネタとなれば千歳の出番。「仕様書、お早めにね」

十時十分過ぎ。雲が少しずつ晴れてきた。試合は続いていて、時折歓声上がる。三人はようやく干潟に降り立った。

「ゴミ袋、持って来ましたよ。あと、データカードと、これ！」

「通行量調査とかで使うカウンタ？」

「センターの備品なんですけど、借りて来ちゃいました」

また「いいもの」を持って来たものである。「櫻さん、ご覧の通りなんですけど、今日の手筈はどうしましょう？」 一帯を見渡してしばらく考えてから「干潟が露出してるうちにできるだけ水際をやって、それからまた考えましょうか」 いつもながら、得心させられる。今日は今までになく遠浅に潟が拡がり、いつもは水没している辺りに護岸もどきの石が積んであることや、

水際に接する崖地にカニの巣穴と思しきものが無数にあることが新たにわかった。崖下ではヨシの若茎が垂直を競い、逞しく天を目指している。「じゃオレ上流側」 前回カラスにしてやられた方向へ、業平はそそくさと急ぐ。「あの石の辺りは危ないでしょうから、僕が」と千歳が一歩進もうとした時、干潟に着地する軽やかな足音。「オー、サプライズ」 ここでも接客担当は櫻？

「あのお、矢ノ倉さんから聞いたんですけど」

「え、文花さんが」

「今度、第一日曜日にこの辺に行くと発見があるかも、って」

膝丈のパンツに長袖のチュニック、濡れても良さそうなスニーカー、フィールドを弁えたスタイルで颯爽と現われた一人の女性。「文花さん、また気を回してくれちゃって」 櫻の心境は複雑。業平はすでに没頭モードでこちらには気付かない。

「漂着モノログの管理人、隅田さんって、貴女？」

「いえ。私は文花さんの同僚で千住 櫻と言います」

「ああ、お噂はかねがね。地域事情にお詳しいとか．．．」

「櫻さん、お知り合いですか」 遅れて千歳が間に入る。「あ、すみません。私、研究員をしている小松南実(みなみ)と申します」 名刺を手渡す。海洋環境関係がご専門らしい。名刺文化から遠ざかっている千歳だが、一応、オリジナル名刺は持っている。

「隅田千歳です」

「あ、私、名刺．．．」

バッグを取りに行く櫻。そう言えば千歳とは名刺交換してなかった。ちょっと焦る。

「モノログ、拝見しました。千歳さんててっきり女性だとばかり。ここがその現場だったんですね」

「日時も場所も載せていないのによくわかりましたね」

「ええ、その矢ノ倉さんて、ちょっとした情報通なので」

程なく「改めまして、千住です」 そしてやや冷めた感じで「千さんにも、ハイ」 面目なさそうに千歳も櫻に手渡す。業平はやっとこさ気が付いたようで、すでにペットボトル類であふれそうになっている自前のレジ袋を片手に三人のところに戻って来た。名刺交換会の最中とわかるや、彼もウエストポーチからガサゴソ出してきて「初めまして。本多業平です！」 南実に真っ先に渡している。千歳も櫻も業平の名刺は初見。名刺というのは誰かが出すと連鎖反応的に出てくるものだったりする。こういう場では必ずしも要らない気もするが、まあいいか。

ともあれ、お互いの名前と職業はわかった。自己紹介は後回し。今そこにあるゴミに気と目が向くばかりの四人。そういう点で一致していれば多くを語る必要はないだろう。潮はまだ退きつつある。

「今日は築地標準で十二時半過ぎ。海面よりちょっと高いくらいになります」

「小松さん、それって？」

「潮時表で調べてきました。この辺りだと時間はずれるでしょうけど、海は今干潮に向かっていて時間なので、まだ退いていくと思います」 三人「へえー！」

「千ちゃん、もしかしてその潮時表を調べてからクリーンアップする時間、決めた方がいいんじゃないの？」

「漂着ゴミをしっかりと片付けるってことならね」

「ねえ小松さん、次回七月一日ってどうですか？」

名刺を入れていた潮時手帳（芝浦標準）をパラパラ繰って、「あ、今日と同じくらいで良さそうですよ。でも今まではたまたま干潮だった、ってことですか？」 専門家には頭が上がらない。千歳は「いやあ、調べ方がわからなくて。まさか海と連動してるとは」と苦笑気味に答える。櫻も専門外なので、ただ相槌を打つばかり。なかなかゴミに手が回らない。すると次なるサプライズ。退潮のためか、魚が迷い込んできたのである。しかも図体がそれなり。

「コイ？」

「まさか」

櫻もわからない。

「詳しくはわからないけど、ソウギョだと思います。大陸魚、淡水魚ですね」

「何でまた荒川に？」

「中国が原産ですが、昔、蛋白源として活用するために川などに放流されたとか」

櫻が突っ込む。

「淡水魚ってことは海には出られない訳だから、海水が逆流して来るとどうなっちゃうの？」

「海水を避けて遡上して来るうちに、迷い込んで打ち上がったたり、てこともあるようです」

ソウギョは干潟に這い上がってきて、口をパクパクやっている。戻る気はないのだろうか？

「業平君、ちょっと」

「ハイハイ」

デジカメに収めてから、男衆二人は魚を押し戻し始めた。ちょっとした手応え。こういう体験は得難いものがある。女性二人は心配そうに見つめる。

「エサがほしかったのかな？」

「いや、話をしたかったんじゃないの」

千歳の切り返しも櫻並みになってきたか。無事水中に帰ったソウギョは、しばらく潜行した後、背鰭を見せつつ、バチャと音を立てて去って行った。魚なりに謝意を表したかったのだろう。

時刻は早くも十時半。ゴミは前回以上と見受けるため、同じ四人でもまた時間がかかりそうだ。南実は心得があるようで、ソウギョがいた辺りのプラスチック系容器包装類を集め始めた。業平は南実の方を気にしつつも再び上流側を当たる。櫻は干潟の内側、ヨシ束が集中している辺、そして千歳は下流側の積石周辺。一応、エリアごとに分かれた恰好にはなったが、果たしてこれらを持ち寄って、分類・カウントするとなると、... 少々気が遠くなりそう。どこかで見切りを付けた方がいいだろうか。

初めて足を伸ばす下流側の奥干潟。水分をたっぷり含んでいるためか、足元が少々覚束(おぼつか)ない。腐食した空き缶が埋没していたり、自転車のサドルが刺さっていたり、潮の満ち干に関係なく、ただじっと時を重ねていたゴミがそこにはあった。これもスクープ系と撮影に余念ない千歳だったが、いや待てよ、他にもいろいろ押さえておいた方がいい品々があるのでは、と思いつく。まずは櫻のところへ。

「ねえ櫻さん、スクープ系って拾っちゃいました？」

「いえ、袋類をどかすのに気を取られてて」

「先に皆で一巡しながら、ひととおり撮影してから拾うのもアリかなって、急に思いついて」

「本多さんはケータイで何かやってたし、小松さんも撮ってるみたい。私のところを押さえれば大丈夫でしょ」

櫻さんも記念に一枚どう？と言いつけてグッところえる。

「ありゃ、これって洗濯物干すやつじゃ？」

「川で洗濯って、ちょっと時代が違いますよね」

いつもの櫻節が聞いてホッとする千歳。

「何か見つけたら声かけてくださいね」

「じゃ今日は、千さんでお声かけします」

「いや、それはちょっと」

「スミマ千！にしますね。フフ」

サドルをひとまず置いて、配置に戻る。穴はあれど、カニは出ず。人の気配を察したか、ゴミに懲りたか。積石の間にも何やらひっかかっているものがチラホラ。土嚢(どのう)や肥料の袋片が絡んでいるかと思えば、傘の柄のようなものも。ふとハエが唸っている一角があったので、何事かと覗き込むと、先のソウギョと同じくらいの大きさの魚の白骨が。「ウヒャー」 思わず音を上げる千歳に、水際沿いに下流の方へ来ていた南実がひと声。

「どうしました？」

「これもソウギョでしょうか」

「ああ、どこかで腐乱してしまって、ここに流れ着いたんでしょうね」

櫻も動じない方だが、この南実さんも相当なものとお見受けした。

「海に出ると、鳥やカメの遺骸に遭遇しますからね」

「それはやっぱりゴミによる被害とか」

「そうですね。親鳥がヒナに口移しでエサを与える鳥の場合、海面に浮いているプラスチックの雑貨なんかをそのまま．．． ヒナの胃の中は大変なことになります」

十時四十五分。櫻が合図する。「スミマセン。皆さん、いったん集合！」

「千住さんがリーダーなんですね」

「ええ。タイムキーパーもお願いしてます」

二人そろって戻って来たのが引かかるが、そこは千歳君。開口一番「いやあ、白骨化ソウギョが見つかったもんで」 怪訝(げげん)そうな櫻に弁明する。

「塩水にやられちゃったってこと？」

「おそらく、この間の大雨で一時的に水質が悪くなって、窒息とか」

業平も帰って来た。

「あっちにも白骨あったよ。思わず合掌しちゃった」

「川の汚れ=窒息って？」

今日の櫻はいつになく突っ込みモード。南実曰く、水量が増して川底の汚濁が巻き上がると、有機物が放出される → するとそれを栄養源とするプランクトンが殖える → 水中の酸素が不足するので、魚に影響が出る、とそんな脈絡らしい。ソウギョは外来魚なので、いなくてもいいと言えなくはない。だが、ブラックバスやブルーギルとは訳が違う。この辺では川の主と言ってもいい。そんな風格ある魚が窒息死というのはいたたまれない気もする。「ブラックバスなんかは窒息しないんですかねえ」 外来魚について詳しい口ではないが、ふとした疑問が突いて出た。

「私のところでも地域ネタとして調べられそうだけど、ここはやはり小松さんかしら」

「あ、わかりました。荒川の外来魚の実態ってことで調べてみます」

いやはやまたしても話が拡がってきたような．．．



この時、対岸では巡回中の掃部(かもん)公が、得意の草刈り機でイネ科植物をバサバサやろうとしているところだった。ヨシが結構な高さになっているので、川岸まで来ないと対岸の様子はわからない。「間違えないようにやらないと」見極めながら一本一本刈り始める。この芝刈り音は何となく四人にも届き始めた。「何か音がするけど」櫻がまず気付く。「貨物船でもないし、ジェットスキーでもないか」千歳には思い当たるフシがあったが、姿が見えないことには言及しようがない。「では皆さんの収穫をひとまずここに」いつしか地ならしした一画ができていて、一メートルほどの板切れが防波堤の如く挿し込んである。櫻の現場力、なかなかである。「予想はしてたけど、これほどの量とは！」海の漂着物に慣れているはずの南実がこう言うんだから、これは尋常じゃないんだろう。「私、何となく分けてますんで、皆さん、引き続き収集の方、お願いします」眼鏡がキラと光ったのは気のせいだろうか。太陽が顔をのぞかせて来た。絶妙なタイミングで反射するものである。三人が持ち場に着いた頃、掃部氏は川岸に。「おや、ゴミしろ(拾)いつてか？」千歳が顔を上げた時、一瞬草刈りおじさんが目に入ったが、貨物船がゴーとやって来て、隠してしまった。すぐにヨシの蔭に分け入ってしまった掃部公。視認しそびれてしまったが、「いやきっとこの間の．．．」千歳は確信した。「キャー！」水際で南実が叫ぶ。今度は千歳が駆けつけるも、その理由はすぐにわかった。船が通り過ぎた後の波の襲来に立ち竦んでいたのである。

「ここは浜辺と同じなんですよ」

「でも、こんなに小刻みに押し寄せて来るなんて」

防水仕様だとは思いますが、スニーカーは何となく波をかぶり、膝下には干潟の泥が。バケツの水を用意していないことに今頃気付く千歳。「あ、ペットボトル水、持って来たので」膝下を軽く洗いながら、櫻と笑い合っている。こちらもつい頬が緩む。いい日和だ。

十一時になった。干潟面は何とか拾い集めた感じ。残るは湾奥のエリア。ヨシ束より奥にたまっていた軽量系は櫻がそこそこ集めたが、ヨシ束そのものの処理は彼女だけではどうしようもない。

「これを今やると收拾つかなくなるから、いったんここに集まった範囲で数えましょうか」

「千住さん、私、目立つ分だけでもやります。研究対象なので」

足元には吸殻が絡まったヨシ束が横たわっている。それをいくつか摘み上げて、慎重に別区画へ運び出す南実。彼女はスコップを持参していた。干潟を少し掘って、束をバサバサやって細かいゴミを落としていく。三人は顔を見合わせ、一様に「おお」と感嘆。

「じゃ、こっちやってるね」

「ハイ」

何かいい按配である。

南実はさらに標本収集用と思しきチャック付きの透明袋を何枚か持ち合わせていた。吸殻などはさっさと袋に詰めていく。傍らでは三人でああだこうだやっている。すると今度は「バケツ貸してください」ときた。ペットボトル水を注いで、軽く選り分けたプラスチック片だけを浮かべていく。珍しい光景なので、三人もやって来た。「こうやると小石とかは沈んでプラスチック素材だけ浮かぶんです」百均系のプラスチック芝の欠片(かけら)も目に付くが、カラフルな粒状のものも浮遊している。櫻が手にしているクリップボードを指差して、

「データカードにレジンペレットって項目ありますよね。それです」

「へえー、ペレットかあ」

櫻は妙に納得した様子。「これ、工業原料じゃん。何でまたこんなに」業平は不思議そう。南実「海にだけ漂着するんじゃないことが、これでハッキリしました！」と我が意得たりの態。千歳はただ畏(おそ)れ入るばかりである。「じゃこれも証拠写真でことで」と言うのがやっとな。「今日とりあえず持ち帰って、数えておきます」レンズ状の大粒ペレットは確かに魚の卵が何かに見える。櫻は「これ、生き物が間違えて食べちゃうってわかる気がする」と憂い顔。「あら、東にこんなものが」南実が手にしたそれは、細長いウキ。

「あ、それ双眼鏡で目撃したやつかも」

「え、双眼鏡？」

業平は事情がわからない。

「そう言えばこの間のモノログに橋から目撃どうこうって書いてましたね」

「ええ、このウキ、上流から流れて来たんですよ。干潟に着いたらしいことは見届けたんですけど」

「じゃ記念にどうぞ」

南実は本人肖像付きでの撮影を勧める。ウキ効果か、千歳はまた浮き足立っている。さすがにこのまま載せる訳にはいかないから、要トリミングかな。

南実がヨシ束から選別した吸殻やプラスチック包装破片類も足し合わせて、データをはじき出していく。櫻が持って来たカチカチカウンタが威力を発揮。多少の誤差はあるだろうけど、実態調査としては十分な数字が得られた。

ワースト1：食品の包装・容器類／百四十三、ワースト2：プラスチックの袋・破片／百二十七、ワースト3：タバコの吸殻・フィルター：七十四、ワースト4：フタ・キャップ／三十九、ワースト5：飲料用プラボトル(ペットボトル)／三十三、といったところ。発泡スチロール破片も多く三十前後。その次はプラスチックのストローか。ストローとセットになりそうな紙パック飲料は十ほど。必ずしもセットで捨てている訳ではない、ということか。そして前回同様、エアコンの配管被覆類がまた二十弱見つかった。



「さて、他に変わったゴミを見つけた方！」 櫻は要領よくまとめに入っていく。分別しきれなかった「その他ゴミ」コーナーがいつしか出来上がっていた。四人で見遣りながら、まずは千歳が拾った一品「バット」、次いで業平は「トラロープ」、櫻「プラスチックのカゴ」 しりとりが始まり始まり。

「ハイ、小松さん、ゴ」

「え、何でしりとり？」

「千ちゃんがモノログ書くのに使うんだって」

「ゴ、そうだ、ごま油！」

「え？」

意表を衝かれた三人。確かにごま油のビンが転がっている。いつの間に？

「隅田さん、ラ」

「そういや落花生の袋がどこかに」

すかさず業平「イ、色鉛筆」 櫻の番だが「ツ、ツ、続きはまた来月！」と、こんな感じで時は流れていく。他には、ビデオテープのケース、スリッパ、歯ブラシ、シャボン玉のストローなど。枕と布団のセットもあったが、さすがに搬出するのは断念した。

十一時半を回った。ここでまたサプライズ。満載の袋を陸揚げしようとした矢先、近くのヨシ原に硬球がドサッ。試合はいつしか終わっていたが、ホームラン競争でもやっていたようで、特大の一発が飛び込んできたのである。少年野球も侮れない。ヨシは時折風で擦れる音を立てていたが、それとは別にギョシギョシと不思議な音をさせていた。そこへこの一球。「おおコワ」男二人がビビっている脇で、そのギョシギョシの主が飛び立って行った。「あの鳥、何て言ったっけ？」 櫻は空を見上げる。南実はボールを探しに走る。ヨシをギシギシやってたかと思うとすぐに出てきてヒョイと返球。二塁ベース手前まで飛んで行った。結構強肩だったりする。二塁手選手と監督らしき人が帽子をとって頭を下げる。「あの四人、袋持って出てきたけど、クリーンアップボランティアかな？」 この監督さん、実は某河川事務所の職員だったりするが、四人には知るべくもない。監督さんもチームを連れて引き上げ始め、今日のところはここまで。頃合よく洗い場が空いたので、いつもの如く、再選別に入る。缶は十程度、ペットボトルは拾ったうちの三分の一くらいが再資源化可能レベルと見た。今回は食品トレイも数枚いけそうだ。朝方の湿っぽさは今はなく、グラウンド脇の草地も着座可能。スーパー行きの品々を乾かす間、四人でしばし座談会と相成った。櫻が切り出す。

「今日は小松さんのおかげで捗(はかど)ったし、勉強にもなったし」

「いえいえ、こちらこそ。ありがとうございました」

「それにしても文花さん、どうしてここがわかったのかしら」

「最初にデータカードのことを聞かれました。で、しばらくして漂着モノログの話が来て。調べてる人がいるから行ってみたら、って」

「あ、私、モノログ見ながら質問したからだ。でもちょっと垣間見ただけで、場所と日時まで見抜くとは！」

「いえ、今日皆さんとお会いできたのは偶然ですよ。だってここまで自転車で一時間かかるなんて思わなかったし」

南実はスポーツ派であり行動派、ということのを裏付ける話である。河口の方から自転車で「遡上」してきた訳だ。電動アシスト車とは云え、やはりただ者ではなさそう。

「矢ノ倉文花さんは、今は私と同じ職場ですが、小松さんにとっては元同僚ってことですかね？」 名刺を見てピンと来た櫻は、南実がやって来た経緯がいま一つ呑み込めていない男衆への説明を兼ね、フォローを入れる。

「違う部署でしたが、先輩に当たります。大先輩と言った方がいいかな」

「いずれ矢ノ倉さんにもおいで願いますか」

何の気なしに千歳が発した一言は、「いや、それは．．．」 女性二人にとっては芳しいものではなかったようだ。二人して同じ台詞とはいったい？ 業平がツッコミを入れそうでした。彼も何かを察したようで、黙っている。スーパー行きは放っておいて、その他のゴミを可燃・不燃に分ける作業に入る四人。

「え、隅田さんここに持って行くんですか？」

南実は面食らった様子。

「まあ、今日は多めでしたけど、持ち運べる量ですし、いつでも出せるので」

「そっか。それなら気軽にクリーンアップできますね。海ゴミだと、どこが運ぶ、どこが処分する、でモメ事になったりしますから」

燃える・燃えないの区分が、南実の地元とはまた違うようで、それも彼女を当惑させた。

「プラスチック、可燃なんですか？」

「『サーマルリサイクル』だとか、もっともらしいことが書いてありましたが、せっかく分別（再資源化）意識が高まってきたところでそれはないだろう、と思ってはいます。形を成していないプラは仕方ないので可燃、それ以外の容器包装関係なんかは不燃、て感じで、少しばかり抵抗してますけど」

「油に戻す取り組みを進めている自治体、増えてるのにねえ」 櫻が一言。業平は会話を聞きながら、また何かを考えているようだ。すると程なく「データカード上で、各自治体の分別ルールを反映させてみると何かわかるかも？」 珍しく口数が少ない業平がここへ来て呟えたことを言う。

「ここでの品目は、発生起源別ですからね。可燃・不燃は加味してないし、日本の生活実態とは違う面もあるし」

「自治体ルールをテンプレートにして、それをダウンロードした上でデータカード画面を開く。そこに入れた数字は元のデータカードに反映されるとか．．．」 業平の調子が上がってきた。南実は「？」状態。千歳が簡単に解説すると「それができたら、スゴイかも」と目を丸くしつつ、「荒川版のデータカードもあって、品目には日常性を持たせてあるし、再資源化を促すような分類になってるんですけど、各自治体の分別ルールには対応していない。自治体ごとの可燃・不燃のゴミ実態を知る上では、確かにまずテンプレートありき、ですね」

研究員ならではの説得力。櫻もすかさずひと押し。

「あとは、テンプレートに載っていないその他のゴミをどう数えるか．．．」

「なるほど、なるほど」

業平の頭の中で仕様ができ上がってきた模様。

「次回のデモは、当地の分別ルールに沿って、ってことでOK？」

「俄然やる気になってきた！」

太陽が完全に姿を現し、ちょうど天頂に来ている。スーパー行きの品々も乾いてきた。

「それにしても、今回は吸殻が多かったね」

「路上を追われた愛煙家が川岸でウサ晴らししてるんだろ」

業平は今のところ断煙中。吸わないと落ち着かないのか、カリカリし出した。袋にさっさと放り込んでみたが、スーパーに持ち込むには目立つ大きさになってしまった。その袋一つを担ぎ、いつものRSBを引っ張り出す。結構サマになってるから可笑的。南実は同じ方向なので、「本多さん、途中まで．．．」業平は表情一変、カリカリもどこへやら。「じゃ、お二人さん、また！」

【参考情報】 [2007.6.3の漂着ゴミ](#) / [川魚の窒息](#) / [プラスチック製容器包装](#)

09. Soar Away

「隅田さんと千住さんて、どういう関係なんですか？」 電動アシスト車をスロー運転でこぐ南実が並走する業平に問いかける。

「いやぁ、本人に聞かないとわかりません。仲間というか、知り合いというか。千歳君は会社去る時に別れちゃったきり、というのは知ってるけど、その後は．．． でも何でまた？」

「え、いや別に．．．」 タイミング的には良かったが、さすがの業平君も「そういう小松さん、彼氏は？」とは聞けなかった。だが南実の問いかけ、大いに気になる。スーパーは商業複合施設の中にあるので、ランチには事欠かない。「食事でも．．．」と言いかけたところで、「じゃ、この後も流域調査しますんで。ありがとうございます！」 あっさり交わされてしまった。「お気を付けて」と手を振って、姿が見えなくなったところで一服。片手にタバコ、もう片方の手にはふくらんだ四十五リットル袋。三十男の哀愁が漂う？

もう一方の三十男は、心なしかご機嫌斜めの女性とともに、河川敷を歩いていた。シチュエーションは違うが、こちらも哀愁モード？ ともあれよく拾い、よく動いたせいか、空腹感が増し、例のイネ科植物が、イネ→お米→ごはんとお節介な連想を高めてくれる。

「イネがお米に見てきました」

「お腹、空きましたね。今日もカフェめし、ってことで！」

少しにこやかになったかな。

「そうそう、このイネ、刈られてたんですよ」

「今日も刈っている人を対岸で見かけました。でもすぐ見えなくなってしまうって．．．」

「文花さんが言うには、『ネズミホソムギ』だろうって」

「ムギですか？」

「名前しか聞かなかったんで何とも言えませんが、花粉症のもとになるとか」

名前がわかれば、あとは調べるのみ。一応刈られていない群生も撮っておくとしよう。すると「千歳さん、私も撮って♪」 思いがけず櫻の写真を撮る機会を得て、ドギマギする千歳だったが、ファインダーを覗くと俄か写真家よろしく、被写体を冷静に捉えていることに気付く。イネと云っても絵にはなる。ネズミホソムギはあくまで背景の一部。証拠写真ではなく、ここはもう河川敷の櫻さん、でいいのである。「じゃ、ネズミって言いますから、後を続けてください」

「ギ」は「一足す一は二」の「に」に通じるものがあるので、一応、撮影時の口元を作る上では有効。「小僧って言いそうになっちゃった。ハハハ」 その笑顔もいつか撮りたい、そして眼鏡を外した櫻も、と千歳は思うのだった。

前回同様、ゴミステーションで袋を分ける。サドルやらプラスチックカゴやらを詰めた大物袋は不燃のカートにポイ。これで肩の荷が下りた感じ。ウキは細長くて尖(とが)っているので、そのまま捨てるには忍びない。いったん持って帰ることにした。

「すぐ戻ります。自転車置いて待っててください」 千歳の部屋にはまだ通してもらえない。櫻はちょっとアンニュイな面持ち。「眩しい！」 梅雨入りはまだまだ先になりそうだ。晩春の

陽射しが降り注ぐ。

十二時半をとうに回った。カフェめし店は結構な賑わいで、店員もフル稼働。いつものバイトのお姉さんは千歳と櫻に気付いているのかいないのか、今日はにこやかに接客中。千歳は週替り丼、櫻は週替りデニッシュのワンプレート。席に着いてから、交互に手を洗いに行く。なんだかんだで時すでに十三時。

「で、櫻さん、今の職場は長いんですっけ？」 千歳にしては単刀直入な切り出しである。

「いえ、元々は市の職員です。今はそのセンターに出向中というか．．． この先、どうなるかわからないんですけどね」

「でもセンターの運営は、いわゆる『NPO法人』が請けてるんですよね」

「文花さんが公募でやってきて、法人化に備えて事務局長みたいな感じで業務を切り盛りしてるんですけど、センターを運営するためにそのNPOを作ったみたいなのがあって、やりやすいんだかそうでないんだか。私にはその辺はよくわからなくて」

先月と同じく、食事の手が止まり出している二人。「どこかで聞いたことはあります。法人格を持っていないと運営業務を受託できないとか」

「委託先としての受け皿を役所が作った、ってことなんでしょうね。今はまだ事業委託って形になってますけど、来年度は指定管理者とか競争入札とか．．． 文花さんも時々困った顔してます」

高校生風お姉さんがやって来た。「お代わり、お持ちしましょうか？」 先刻から食事は進まないもののアイスコーヒーは飲み進んでいたご両人。今日は愛想もいいし、気が利くのはなぜ？

「ごゆっくりどうぞ」 なみなみと注がれたお代わりが来た。店員に会釈しつつ、櫻が続ける。「地域振興の部署にいたので、顔なじみの方が多いのはいいんですけど、その役員会ってのが悩ましいというか、知ってる人だけについハイハイってなってしまうって．．．」 言いよどむ櫻。法人格を取得するにあたっては、理事会となる。無茶を言う理事がいなければいいのだが。

「地域振興ですか。市職員としては花形ですよ。何か理由あってセンターへ？」

「そこそこ競争率が高い中、入庁できたのはよかったんですけど、いわゆる中堅職員が少ない折だったので、若手に結構しわ寄せが来てまして。私、つい頑張っちゃって、地域を駆けずり回ってたら、眩暈(めまい)がし出して。あ、食べないとまた眩暈が」

「大丈夫ですか？」

「ハハハ、六月病かな。いやクリーンアップデーは元気ですから、私」

どこまでが冗談なのかしら。聞き手役に慣れている千歳でもちょっと戸惑う場面だった。空腹だったのを思い出し、箸を進める。それはそうと、今日のカルパッチョ丼で何物なのやら。妙な一品である。ふとソウギョのことを思い出して、「ギョッ」とするも、我ながらシャレにならず、一人苦笑する千歳だった。

「どうかしました？」

「いえ、こっちも眩暈がしたもので、連鎖反応かなって」

櫻はブルスケッタを美味しそうに頬張っている。一段落したところで、心地よいBGMが耳に入ってきた。

「ピアノとストリングス、いい感じの曲ですね」

「ああ、この曲、機内チャンネルでかかっていたのと同じだ」

「へえ、機内？」

「確か『Soar Away』ってタイトルで、正に飛行機向きだなあ、って。印象的だったんで、あとでネットで調べてCD買いましたよ」

「千歳さんて、音楽お好きな方？」

「ええまあ．．． ギター弾いてた時期もありましたが、最近はカラオケで歌うくらい、へへ」

千歳としてはここで音楽談議に持ち込むのも悪くないと閃いたが、あくまで櫻の話聞くのが主題と思い直し、話の続きを振る。インタビューとしての力量やいかに？

「音楽の話はまたのお楽しみ、ってことで、よければさっきの話の続き、聞かせてもらえませんか？」

「上司が見かねて、センター勤務の話を持って来てくれました。千住さんなら適応力あるから、打ってつけだろうって」

「櫻さんの例は過剰適応の側面もあるでしょうけど、できる人に仕事が集中してしまうことの典型のようにも思えますね」

「過剰適応、ですか？」

「それだけ性に合っていた、そして周りもついつい櫻さんに頼ってしまった、とか」

櫻はひと呼吸おいて「そうですね。でも、頑張り過ぎたというよりも、地域を盛り上げるというのはどういうことなのか、わからなくなっていた、というのも大きかったかも知れません」

千歳がCSR (Corporate Social Responsibility) に疑問を覚えたのと符合しそうな話である。役所が進める地域振興も、公共性第一とはいえ、何かに駆り立てられる要素があったのだろう。

「ハコモノを作って、経済的に活性化させてどうの、という論調がどうにも納得できなくて。私は何かこう無形のもの、情動的なもの、そういう要素が地域にはまず欠かせないんじゃないかって、強く思うようになったんです」

さらに続けて「千歳さんのお話じゃないですけど、公務員にこそ成果主義という推進論と、それこそ成果優先にしたら、益々目に見える形や仕掛けばかりが先行してかえってコストアップになってしまうんじゃないかっていう慎重論と二面性があるなあって．．．」

櫻の考え、なかなか含蓄がある。インタビューは思わず固唾を呑む。BGMは相変わらず、穏やかな音色の佳品が流れているが、二人の耳にはあまり届いていない。コーヒを飲む手も止まったまま。

「幸い、文花さんはそのあたりの心得がある人で、ソフト面重視。どうすれば良質な情報提供ができるか、どうすれば地域の皆さんに喜んでもらえるかって。今は基本的には二人であっただうだってやっています。ただ．．．」

「法人運営の件ですか？」

「それもあつけど、データベースソフトを今ひとつ使いこなせてないのが、ちょっとねえ。千歳さん、お得意なんですよ？」

地球環境問題云々に強い文花と、地域情報通の櫻との間で、うまく情報の連携がとれるようにしないと、お客が求める情報に総合性が持たせられないのではないかという、ちょっと高度なお悩みだった。大人向けの総合的な学習をめざすということか。「単に地球が危ないというよりも、具体的に近所の某でこんな異変が、といった情報が全体的な話とつながれば説得力も増すし、

大手企業のCSR情報の他に、地元の会社でも同じような社会貢献事例があればそれもあわせて紹介することで社会的な機運も高まるとか。著名な団体が発信する情報と地元団体が発信する手書き情報なんかをデータベースで一体化させるのがまずは先決ですかね」

千歳はすっかり感服。こんなニーズがあったとは！

「千歳はすっかり感服。こんなニーズがあったとは！」

「千歳はすっかり感服。こんなニーズがあったとは！」

「千歳はすっかり感服。こんなニーズがあったとは！」

またしてもスローフードな二人。十四時を過ぎたところで、ようやく食べ終え、二杯目のコーヒーもやっと半分ほどに。お若い店員さんは十四時上がりで、二人の席をひと目見て店を出て行った。

「データベースについては何となくわかりました。あとはいかに生きた情報を早く伝えるか、ですね」

「はあ、するとwebで？」

「まずデータベースで情報基盤を作り込んでから、それをwebに移して、その後のメンテはホームページで、てのはどうですか？」

具体的なプランはまたの機会ということにして、

「遅番の日の方がいいですかね？」

「じゃメールで日程調整しますか？」

櫻の顔がぐっと晴れやかになった気がした。よかった、よかった。

五月三十日はゴミゼロの日だったけど、荒川のゴミゼロはいつになるやら、なんて他愛のない話をしつつ、戻る二人。明後日、六月五日は環境の日である。

「センターでは何か催しとかされるんですか？」

「環境負荷を減らすため、休館にします」

「またあ」

「フフ。ちょっとしたゲストをお迎えして、講座を開きます。千歳さん、いらっしゃいますか？」

「あいにく別件の会合があって．．． そうだ、ちょっとまた待っててもらっていいですか？」

千歳はあるCDを持って戻って来た。

「さっきの曲が入ったCDです。お貸しします」

「ありがとう！ ございます♪」

「『サロン・ド・カノン』、へえー」 ご丁寧に売られている時と同じプラ包装がかぶせてある。「千さんらしい、というか。音楽に対する思い入れがそれだけあるってことかな」 橋の途中でジャケットを眺める櫻。どうにも危なっかしいが、今回は無事だった。

千歳はウキを眺めつつ、仕様書をより手早く仕上げもらうべく、地元自治体の分別ルールとデータカード項目の対照表作りに入っていた。データカード全品に可燃・不燃の別などを加え、データカード以外の品目が分別ルールに載っていたら、それをさらに書き足してみる。発生源別というのが曖昧になってしまうが、家庭ゴミがどのくらい河川で散乱・漂着するものかを見るには、これでひとまず良さそうだ。小一時間ほどで表がまとまる。善は急げ、Go Hey!である。その後は引き続き、モノログの更新作業。と、その前に画像のチェックとトリミング．．． 千歳君の日曜日は盛り沢山。南実と櫻が写っている画像に目が留まる。「やっぱり櫻さんかな」 おやおや？

家事を済ませた後、櫻は品目ごとの数字と再度にらめっこ。「データカード、コピーとつとかないと」 残り少ないカードの一枚に今日の成果を一応清書する。途中、思い出したようにカノンのCDをかけてみるのだったが．．． 『Soar Away』が流れる頃、櫻は夢見心地の状態。頭の

中で、五月のツバメが滑空する。リラクゼーション効果が勝ったか、それともよく動き回ったためか、机に伏すようにうたた寝する姉君。妹君のご帰還はその後しばらくしてのことだった。

「返事がないと思ったら、寝てましたか。何かイイ曲かかっているし．．．」 優しい(?)妹は、目覚ましをセットして、姉のお目覚めを待つことにした。夏至に向かって日脚は伸びるばかり。櫻姉が食卓に現れた午後六時、まだ外は明るかった。

「あれ、蒼葉。いつ帰ってたの？」

「二時間前だけど」

「やだ、私、何時間寝てたんだろ」

「今日もめいっぱい、だったとか？」

「催眠効果があったみたいね、あのCD」

CDの話、ピアノを弾く夢の話、しばし盛り上がる姉妹。

「ところで蒼葉、もしかして灼けた？」

「晩夏のファッションという割には、半袖スタイルで屋外にいたから。急にあんなに晴れるなんてね」

とはいえ、撮影がタイトだったせいか、お土産にちょっとしたお弁当を持たされたようで「じゃ、今夜はこれで」 しっかり二箱置いてある。さすがは愛妹。

同じ頃、まだまだ元気な南実嬢は、暗くなる前にもう一箇所、干潟らしきところでの微細ゴミ調査を敢行しようとしていたが、潮も満ちている上、足元も手元も覚束なくなってきたので、やむなく退却することにした。「午前中に一箇所、午後は三箇所どまりか．．．」 二箇所目で運良くバケツを拾ったおかげで調査はスムーズにできた。反面、思いがけずいろいろなパターンの細々ゴミが浮かんで来るものだから、ジッパー袋が不足。五箇所目を調べる前に実はすでに袋は使い切っていたことに今気付いた。研究員としては不覚、と思いつつも、今日の収穫は何と言っても最初に集めたレジンペレット。これをまずはしっかり数えることが次につながる、と気持ちを引き締める南実研究員だった。ペダルの踏み込みにも力が入る。つい加速してしまい「キャ」。河川敷とは云え、ライトを点けるのはお忘れなく。

その気になればPP、PEなどの成分ごとに分けられるのだが、データカード上はあくまでレジンペレットでひと括り。芝の欠片を取り除きながら、純粹にペレットの粒のみを数えていく。サンプルとして、二つ三つのヨシ束に付着していたものとその周りに筋状に落ちていた分を持って来たのだが、その数、実に六十三。六月三日の数合わせか？

ケータイで撮影した画像をPCに移す。お三方の名刺に書いてあるアドレスを頼りに、早速メールを発信。儀礼的な文言はそこそこに、レジンペレットの報告、道中での調査の概況、添付画像の紹介など。このあたり、なかなか手際がいい。移動途中、昼食は適当に済ませていたが、夜はまだ。すでに八時を回っていたが、没頭するとそれどころではないようだ。漂着モノログをチェックしてみる。「隅田さん、早業だあ」 だが、撮ってもらった写真がトリミングされていて、ウキだけの大写しになっているのが面白くない。あとはブログ文面の末尾に、Thanks toで三人のイニシャルが出ている程度。コメント投稿しようにも、受付機能を持たせてないから、まどろっこしさが募る。「これでさっき送った写真が載らなかったら、直接メールしちゃお」 南実がそんな風にモノログを観ていることなど、当の千歳君は知らぬ存ぜぬ、である。

忘れちゃいけないのが業平君。南実にさっさと帰られてしまった居たたまれなさを引きずりながらの一人ランチは侘しいものがあった。千歳と櫻に付いてけばよかった、と思い返しつつも、そのやるせない思いを仕様書にぶつけること数時間。千歳からの対照表が届いてからは、益々熱が入り、こちらも夜の食事そっちのけ状態。ひと息ついて、メールをチェックしたのは深夜近く。南実からの同報メールが来ていてまずビックリ。そしてその添付画像の一つを見て「おお！」と感嘆符。そこには業平の勇姿(?)が写っていたのである。「これって隠し撮り？」 そわそわする業平。仕様書が一段落した後で良かったようで。

六月三日の夜は更けていく。梅雨前線はまだ足踏みしていて、荒川流域には届いていない。

【参考情報】 [ネズミホソムギ](#) / [Soar Away](#)

六月の巻（おまけ）

10. 荒川の目線

月曜日は休館日なので、櫻が南実からのメールを見たのは火曜日のことだった。櫻の名刺にはセンター用のアドレスのみで、自宅用は記していない。「そっか、小松さんには自宅用の教えてなかったんだ」メールの使い分けについて少々思案する櫻。南実は文花つながりでもあるので、基本的には職場からやりとりできればいいか、などと思いながら、添付画像を開いてみる。いつしか文花が傍に立っていて、

「あら、その粒々の写真、何？」

「あ、文花さん、日曜日はサプライズでしたよお。教えてくれればいいのに」

「え？」

「小松南実さん、来ましたよ。で、彼女の研究テーマの写真がこれ！」

「ハハ。まさか本当に行くとはねえ。でも少しは役に立ったでしょ？」

「ええ、おかげ様で」

選り分けられた粒々を見ながら、よく見分けがつくものだと感心しつつも、ちょっと浮かない櫻。文花は逆に楽しそう。「さあ、夜の準備しなきゃ」

情報通の文花は、どこで聞き付けたのか環境の日に因んで、件の五カンおじさんをゲストに迎える手筈を整えていた。今回の講座は、地域交流型の催しとして試行的に行うもの。そのため、公的な広報等にはあまり出さず、ネットを介した口コミベースで何となく発信した程度。しかも、ゲスト講師の氏名は当日のお楽しみ、という。櫻ですら誰が出てくるのか聞かされていないというから、ある意味、仰天企画である。純粋な公的機関ではこうした企画は通らないだろう。実験的アプローチを許されたセンターの特性を弁えた、ちょっとした工夫だが、文花としては賭けでもあった。日時と会場以外にハッキリしているのは、タイトルだけ。「荒川の目線で地球環境を考える」とな。

ワンフロアのセンターだが、講座を開くにはちょうど良い大きさのフリースペースがあって、三十人程度の席が設けられるようになっている。あえて事前申込制にはしなかったのも、開始時間まで参加人数はわからない。だが、文花の読みはズバリで、この夜、二十五人が集まった。

会社帰りにフラと立ち寄ってもらおうということで、開始は十九時。男女半々、年齢層もバラついた感じ。いい塩梅である。客席には初老の男性もチラホラいて、顔を見合わせたりはしているが、談笑するでもなくただ開講を待っている。定刻になり、文花が挨拶に立つ。この手のご挨拶はあまり得意としていないチーフだが、試験的な催しということで肩の力が抜けた感じで一言二言。受付で見守る櫻もひと安心。

「これはこれは蒼葉さん、ようこそお越しくございました」開始直後、妹君も駆けつけて来た。

「満員御礼ですかあ。関係者席とかないの？」

「あのねえ」

蒼葉はやはり目立つようで、男性客の視線を何となく集めながら奥の席に着いた。「それにしてもゲストスピーカーの方、まだいらっしゃらないようだけど．．．」その点がちょっと引っかかる。

「では、お待ちかね。今日の講師、掃部(かもん)清澄さんです」

「え？」 櫻の視線の先には、客席からひょここと立ち上がった、初老男性の姿。スケッチブックのようなフリップを携えながら、前方へ。足取りはどことなく蟹股(がにまた)。厳格そうな面持ちとは裏腹にちょっと滑稽な印象。「またしてもサプライズ、か」 櫻は苦笑するしかなかった。

「私、本名は掃部清と言いますが、欧米風に清・掃部とやりますと、清掃部になっちまうもんで、ペンネームを使うことにしまして．．．」 リングで綴じたフリップをパラパラやりながら、まずは名前の云われの紹介。客は一斉に大笑い。つかみを心得た人物である。「今日はあそこに突っ立っている役人さんに『酒呑んでるシマがあったら、こっち来て話聞かせろよ』とか言われたもので、仕方なく．．．」 またまた爆笑を誘う。櫻もすっかり引き込まれてしまった。しかし、突っ立っている役人さんて？ その方を見遣る。「あ、須崎課長！」 櫻の元上司、須崎辰巳がいつの間にか奥の方に立っていて、苦笑いしている。ヒの発音がうまくできない掃部公。生粋の江戸っ子である。「皆さん、酒呑んでるヒマですからね。シマじゃないですよ」辰巳のナイスフォローに一部から拍手が起こる。文花も思わず拍手。そして会場は一気に掃部ワールドへ。

フリップは写真帖でもあった。荒川流域の春から夏にかけての季節の草花などが次々と出てくる。「これはカントウタンポポ、次はご存じツクシ．．． うまく調理すれば結構いけます。荒川の恵みですな」 櫻にも見覚えがある植物の数々。荒川流域にもともとあった在来種をこれ以上減らさない、それと並行して、すでに減ってしまった、または絶滅してしまった在来種を戻していく、その両方が大事、といった話に続き、「今の季節は、このネズミホソムギが大敵でして」 外来種の話になった。これを駆除することが在来種を守ることにもつながるのだと言う。「それ、花粉症のもとなんですよね」 文花が思わずツッコミを入れる。トークショーのような感じになってきた。その時、一人の青年が遅れて受付に。

「いらっしゃいませ」

「すみません。まだ大丈夫ですか？」

「はい。こちらへお名前を」

宝木八広(たからぎ・やつひろ)と筆を走らせる。縁起のいい名前である。実は千歳から話を聞いて駆けつけたのだが、この時の櫻にはそんな経緯は知りよう筈がない。だが「この間、CSRレポートを見にいらした方ですよ」ということは記憶していた。

「あ、先日はどうも」

「奥の席へどうぞ」

青年の後姿を見ながら、まだ何かを思い出せずにいる櫻。この間、イネ科植物の話聞き漏らしてしまったが、文花が「皆さんもネズミホソムギを見つけたら根こそぎ刈りましょうね」なんて妙なまとめをしているのがふと耳に入り、「草を刈る、ってことは、もしかして」 櫻には思い当たるフシがあった。

ヨシの写真が出てきた。「そんな外来種と陣取り合戦をしているのがこのヨシ。悪しではなく『良し』と覚えてください」 ヨシには二酸化炭素の吸収、水質の浄化、生き物の棲家、といった機能があることに触れながら「ヨシを見かけたら『ヨシヨシ』と可愛がってやってくださ

いな」 またまた笑いに包まれる。櫻も客席に入り、蒼葉の隣へ。蒼葉は目を見開いて、写真を見つめている。

ヨシでは鳥の営巣も見られる。「このヨシゴイ 対 オオヨシキリは見ものでした」 ヨシゴイの方が大柄だが、鳴き声で分があるオオヨシキリがこの時は勝ったとか。縄張り争いの決着の瞬間を写真に収める力量、大したものである。「ちなみにオオヨシキリさんは、ギョシギョシと鳴きます。私はキヨシキヨシですが」 八広は櫻の近くの席にいた。遅れて来た彼は講師の本名は知らないはずだが、言い回しが面白いのか、大爆笑している。櫻はギョシギョシでハッとさせられた。ヨシから飛び立って行ったのは、オオヨシキリだったんだ！



「ところで皆さん、バイオエタノールてえのはどうなんでしょう？」 突如、燃料の話になる。トウモロコシなど食糧になるものを燃料にしてまで消費をせずにはいられない、人間の哀しき性癖はどうにも治らないといった嘆き節だった。「どうせなら、ヨシの枯れ枝を使えばよろしい」 現場でヨシ束を目の当たりにしている櫻にとっては、説得力のある話だった。使い道があるのなら、あの束の除去もビジネスモデルになるってこと？ 「まだ実用化メドはハッキリませんが、枯れても用途があるとなれば、万能ですな。だが、ヨシにとって大きな脅威があります。外来種の侵入以上に」 ヨシ原とその根元に押し寄せる人工物とゴミが大寫しになっている一枚を示す。「外来種もゴミですが、これは正真正銘のゴミ。これじゃヨシはしとたまりもありません」 ひとたまりがうまく言えないがここはご愛嬌。「干潟で見たのと同じね」 蒼葉がポツリ。成長したヨシがプラスチックシートを突き破って、そのまま茎にまとっている例も出てきた。「こことは別のし潟（干潟）で最近クリーンアップをしている連中を見かけまして．．．」

「姉さん、もしかして」

「ということは千歳さんが見かけたのってやっぱり」

思わず姉妹で目が合う。辰巳は「ひがた」とフォローしようとしたが、着席していたので、タイミングを逸してしまったようだ。

「掃部さん、クリーンアップチームって、若手数人の？」 櫻は何となく嫌な予感はしていたが、案の定、文花がチャチャを入れてくれたりする。

「いやぁ対岸からだったんで、よくわかんなかったけどさ、大橋の下流、数百メートルくらいかなあ」

「あ、わかりました。その話はまた」

ホッとする姉妹。ここで話を振られたら、たちまち公然のスポットになってしまう。本日の進行役は涼しい顔して櫻の方を一瞥してニヤリ。「ったく、文花さんたら」 講師は話を継ぐ。「

とにかく水際やヨシ原のゴミを片付けてくれる、というのはありがたいことです。川も悦ぶことでしょう」 こうしたゴミは社会の縮図、ゴミを通して社会の荒れ模様がわかる、再資源化できるものはゴミではないはずだが、人々の意識が資源をゴミ化させてしまっている等々、力説が続く。「なぜこんなゴミが、というちょっとした問いかけから全てが始まります。小さな一歩もやがては、大きな動きに。荒川も小さな水の集まりだけど、あのような流れになる訳で」 例の五つのカンがフリップに出てきた。「皆さんも、監・観・感・環・関を念頭に、地元の大自然、荒川へ行きましょう！」 大拍手とともに、掃部先生のお話はこれにて一旦終了。文花とのやりとりなどがあったせいか、予定時刻よりも押し気味。十九時四十分を回っていたが、盛会ならば申し分ないだろう。二十時には閉館しないといけませんが、ここはチーフの裁量の範囲内。委託・受託の関係上、辰巳がいる中での時間延長は気が引けなくもなかったが、大目に見てもらおうとしよう。「荒川を通した地球環境、いろいろと見えてきたと思います。ここで質疑応答、といきたいところですが、時間の都合上、ここでお開きとし、代わりに掃部さんを囲んで二十時までご自由に、というスタイルにします。どうも、ありがとうございました。もう一度、拍手を」 アドリブトークを織り交ぜられた余裕からか、文花にしては鮮やかなしめくりだった。櫻はそんなチーフに対して、心から拍手を送っていた。

八広は櫻の方を見て軽く会釈すると、そそくさと退席。櫻は思い出したように出口へ向かい「ありがとうございました」と声かけに回る。蒼葉は自発的に受付の片付けを始めた。半分ほど帰ったが、掃部先生の周りには、ちょっとした人垣ができていて、ガヤガヤやっている。

「須崎さん、多少延長してもOKですよ」

「ま、ここは矢ノ倉さんのご裁量でどうぞ。師匠を早々に追い立てる訳にもいかないし」

「お話、通していただいて助かりました。お噂を聞く限り、おっかなびっくりだったんですけど、あんなに面白い方だったなんて」

「昔はよく怒られましたよ。今はずいぶん円くなったかな」

「じゃ、お姉様、私は先に失礼しますわ」

「あ、ありがとね。またのお越しを」

こういう場だと妹に対してもつい律儀になってしまう。時刻は二十時。先生はまだ数人と談話中。櫻はイスを片付けながら、耳を立てる。

「この間、水際に立派な魚が打ち上がってて驚いちゃった．．．」 掃部氏と同年代と思しき女性が話しかける。写真帖を繰って、

「こんな魚？」

「ああ、そうそう」

「ソウソウ、ソウギョ」

それは正しくソウギョだった。櫻は笑いをこらえつつ手を止め、話を聞く。「利根川水系では自然繁殖してるんだけど、荒川だとあんまりねえ」 すかさず挙手する櫻。

「先生、何で打ち上がってしまうんですか？」

「おっと、お姉さん、ズバツと来たねえ。魚の都合だから、俺にはわかんないけど、水温の変化とか、水が濁ったとか。とにかくソウギョに訊かねえとな」

「海水が来るのを避けて、ってことですか」

掃部公の表情が変わる。

「確か汽水域でも平気だから、それはないだろうけど、さすがに海には出られないんだな」

「ありがとうございます！」

残った数人は「へえ」とか「ほお」とかまだやっている。文花は魚の写真を見て何となく固まっている様子。

「千住さん、元気そうだね」

「課長、受付通らないから、わかりませんでしたよ」

「いやあ、内輪みたいなもんだからね」

どことなくぎこちなげな二人。櫻にとって辰巳は、元上司というよりも身元保証人のようなところが今はあるので、相応の振る舞いをしないとイケない。辰巳はそのあたりを汲んで、余計な負荷をかけまいと、控えめに客席に紛れていたようだ。櫻へのちょっとした気遣いだが、本人にはどうもうまく伝わっていない模様。まあ元気でやってるならいいか。

ガヤガヤが済んで、清掃部おじさんと地域振興課長さんが一緒に出て行ったのは、二十時十五分。文花はまだ残るといふ。

「文花さん、今日は環境デーなんだから、省エネしなきゃ。あまり残っちゃダメですよ」

「ハイハイ。でも忘れないうちに今日のことメモっとかないとイケないから」

顔がわかる範囲で本日の参加者宛に速報メールを打つんだとか。頭が下がる。

市民メディア云々の編集会議が終わって、帰って来た千歳君。「八広君はちゃんとしてくれたかな」 ケータイからの早打ちで、取り急ぎの報告メールは届いていた。「講師は掃部清さん？ はあ、何か変わったお名前です」 そのメールにかぶさるように、南実からの一報が届いていた。講座の件は後回し。「画像の転載、おそれいります。でも、隅田さんが撮ってくれた写真の方はどうしてウキだけなんでしょ？」と来た。クレームのようなそうでないような不可思議な文面。「肖像権の問題とかあるしなあ」 お騒がせのウキは筆立てに収まっている。ブツブツやりながらも、早速返信。「クリーンアップの日程などを公開することになったら、いずれ関係者の写真を載せる機会も出てくるでしょう。それまでは非公開でことで、．．．」といった弁解モード。ちょっとトホホな気分である。「櫻さんと早く相談した方がいいかな」 トリミングしていない元の画像ファイルをやや小さめにリサイズして添付する。南実の反応やいかに？

仕様書がようやく仕上がったGo Hey君は、ようやくいつものノリが戻ったようで「千ちゃんに送るのが筋だけど、この際だからCCで女性二人にも入れちゃおう！」 渾身の一作だが、あとは千歳マネージャー次第。彼のチェックを経て、櫻→弥生と渡ることになる。

六月三日から五日まで、短期間ながら四人衆の間でメールのやりとりが活発になってきた。出遅れていた櫻だったが、六日に出勤すると早速三人に向け、同報でコメントを発信。南実には、写真の感想、文花との後日談、データカードにレジンペレットの数を加えて提出に備えていること、など。「ソウギョのことはまだいいかな。外来魚のことも調べてくれるって言ってたし」

掃部先生のことはひとまず伏せておく。業平には、仕様書の御礼方々、千歳と相談してからプログラマーに渡す旨など。そして千歳には「千さんが三日に目撃したと思われる人物と接触しました。詳細は今度いらした時に、．．．」 ちょっと思わせぶりな一筆で締めくくる。

たまたま出かける用件がなかった千歳は、櫻がメールを打っている時分、仕様書への赤入れ

を着々と進めていた。「ステップとしては、①サイトにアクセス、②自治体選択、③画面呼び出し、④必要事項&数値入力、⑤確認画面、⑥送信実行、で確かにいいんだろうけど、品目追加のところと、ずっと画面を開けとかないといけないってところが引かかるねえ．．．」赤入れの手が止まったところへ、櫻メールが到着。「相談してからプログラマーさんに渡すって．．．でもいつ？」とりあえずさっさとチェックして、櫻姉に送るとしよう。発砲（→泡）スチロールといったシャレにならない誤字は業平ならではか？ その辺の校正も入れつつ、午後早々には、To：櫻職場、Cc：業平、南実自宅、Bcc：櫻自宅、といった振り分けで、チェックを無事クリアした仕様書案が発信された。

午後は、ニュースレターの仕分けやらイベント情報の入力やら。六月はどうも情報量が増えるようだ。その合間にカウンター業務が入るものだから、ろくろくメールチェックできなかった櫻。早番だったので、明るいうちに帰宅できたのは幸いだった。「あ、仕様書の直し、もう届いてる」相談するまでもなかったか、と思いつつも、Toが櫻で、同じく自宅宛がBccという千歳の配慮が嬉しく感じられた。「一応皆さんの意見云々てなってるけど、ケータイの世界は私ダメだし、ここは小松さん次第かな」千歳からのメール末尾には「返信期限は八日までで良いですかね。櫻さん？」という一文が。一人で頷く櫻。優しい妹はいつもの調子で、

「櫻姉！」

「わあ！」

夕飯の時間なのであった。

「あとで、桑川さんのアドレス教えてね」

「お一つ千円です」

「たく、誰に似たんだか」

六月の夕べはまだまだ明るい。

千歳、業平、櫻、再び千歳の順で三人から届いたメールに目を通す南実。日付は七日に変わる頃合だった。環境月間だと言うのに、自身の職場環境はどうも対象外のように、残業続き。さすがの南実もおつかれモードだったが、櫻からのメール中、例の思わせぶりな一節を見て瞠目（どうもく）。「え、今度いらした時って？」千歳からの返信メールも思っていた程の反応がなかったこともあって、余計にピリピリして来た。業平君の快作も空しく、南実の心中は「気になるなあ」状態。アクティブな彼女のこと、きっと何か仕掛けてくるだろう。

【参考情報】 [枯れヨシの活用策](#)

11. 漂着静物画

梅雨入りしたはずが、低気圧が抜けるのが早かったとかで、梅雨明けのような晴天に見舞われた六月の日曜日。蒼葉にはこの間の掃部先生の大判写真が目に焼きついていて、ある衝動に駆られていた。「荒川の叫び、というか、何か描ければいいんだけど」こちらはフリップではなく、れっきとしたスケッチブック。今日のところは水彩で、ということは決めていたが、題材は未定。櫻姉には内緒で朝早く出てきた。橋から見下ろす川面は東からの陽光を吸収して、旺盛に輝いている。「これをそのまま描いたら写生だしなあ」とか言いつつも、しばし流れる川波と光を見送る蒼葉。より遠方には鉄道橋。上り寝台特急が走って行く。そしてその橋梁の下から小型貨物船が遡って来た。絵を描く上で、蒼葉の視力は十分過ぎる程である。それゆえ、目に映るものあれもこれもとなってしまうのが悩ましい。歩き出す蒼葉の横を高校生風のお嬢さんが自転車で通り過ぎた。「あ、ごめんなさい」その一言は柔らかく、蒼葉の印象に残った。

とにかく干潟の方へ行ってみることにした。三日に行き損なった分、思いはひとしお。「七月一日の下見も兼ねて、と」前はミミズに目を奪われてしまったが、今日は草花に目が行く。ネジバナの紅色、ミヤコグサの淡黄色が初夏を彩っている。野球の試合はお休み。辺りは静寂に包まれている。

デニムのハーフパンツにリボンシャツ、この恰好なら動きやすい。干潟へはひと降りである。「いやあ、またしても．．．」周囲が静かな分、物言わぬ漂着物はその存在感を増し、袋状のものさえ重量感を醸している。慄然とする蒼葉。「千歳さんも最初は衝撃を受けたんだろな」潮位が変化する前に、アウトラインだけでも描き止めようと、鉛筆を走らせる。向かって右側、ヨシ原に目が留まる。干潟に根を下ろすヨシの群れは、足元のゴミにはお構いなし。少しずつ高度を増す太陽に向かって競うように背筋を伸ばし、威勢がいい。

「取り除けばもっと元気になるのかな」流されてきたらしい一本の枝を手に、そろそろと下流側のヨシ群へ。あまりの数のカニの巣穴に恐々としながらも、プラスチック製の包装類やペットボトルなんかを根元からどかしていく。レジ袋を一つ除けると、新しい茎がいくつか顔をのぞかせた。「なーるほど」ヨシヨシと心の中で呟きながら、再び配置に付く。干潟の奥地は、毎度の如くヨシの束で覆われているが、うまく平らにすれば砂地に置くよりはいい。折り畳み式のミニベンチをそこにセットして、本腰を入れる蒼葉。鳥の啼き声もヨシの擦過音も耳に入らない。時折、寄せてくる波の音にハッとさせる程度。広めの干潟と大きめのヨシ、水際には漂着物が誇張気味に配されていく。そして、別の一枚には習作らしき線画がいくつか描かれていく。

印象派志向の蒼葉嬢だが、印象派画家で水彩作品があるのは「シニャックか、デュフィか」なんだそうで、手本が限られている分ちょっと描きにくそう。「あ、水．．．」水彩用絵具と筆は持って来たが、うっかり水溶きの用具を忘れてしまった。すでに太陽は真上近くまで来ている。干潮はピークに。「あ、そうだ」何を思ったか、近くにあった食品トレイを拾うと、退潮してしまっただけに駆け寄り、トレイを濯ぎ始めた。そしてそのまま川の水を掬う。「川を描くんだから、やっぱり同じ成分を使わなきゃ」この辺りの機転は姉と似ている？ 筆はと言えば、櫻曰く「庭に生えてた」例の一本。太めなので、まず大まかなところの彩色に使ってみる。筆はすでに川の水に馴染んでいた訳だから、違和感ないだろう。川の青はよく見ると悲痛な色を湛(た)えている。要するにブルーなのである。

空の青と対照を成す川の青。ヨシと干潟を力強く描くことで、その愁いあるブルーを少しでも清らかに見せようとするが、漂着物の現実がそれを妨げる。缶の銘柄などが目に入ると、つい筆が止まってしまふ。そして小さく溜息。それでも上物の筆は、青、緑、グレーと穂先の色を変えながら、忠実に蒼葉の想いを紙に映していく。あくまでラフスケッチのつもりだったが、小筆に持ち替えると細部にも力が入っていく。現実には現実と受け止める。それは悲嘆にも通じるが、逆に幾許(いくばく)かの希望をも浮かび上がらせる。果たして、川の水を使った効果か否か、何かが乗り移ったようにその「水彩」は展開され、どこことなく荒川の匂いを含む一枚が仕上がった。陰翳を伴っているが、印象派風の光を髣髴(ほうふつ)とさせている。ふと時計を見る。十三時半を回っていた。

軽々と陸に上がり、今日は人気ない洗い場でトレイをひと漱(すす)ぎ。画面いっぱいの水彩画は日光浴。ミニベンチを置いて、ピクニックスタイルの昼食を一人でとる蒼葉。離れていても目立つお嬢さんは、河川敷道路を自転車で通過中の青年の目に止まった。「この間、センターで見かけた人かなあ？」今日はゆっくりめに走っている。彼は例の縁起のいい名前の持ち主。掃部先生の一言に触発されたか、地元の大自然にやって来たようだ。このあたり実に素直である。「も一回、橋から下流側を見てみっか」話に出ていた干潟を探しているらしい。小休止後、青年は上流側へ去って行った。

蒼葉は再び干潟へ下りる。習作のつもりで描いた線画にも、この際着色してみようと思ったようだ。潮が反復して来ていて、川の水は手近だった。またトレイでひと掬(すく)いしようとしたその時、見慣れない小型の透明チューブに出くわした。「あら、何か青い液体が. . .」おそろおそろ手にとって、チューブの一端を見てみるとCOD(D)と打ってある。「何かの試薬かなあ」時間が経っているので、正しい標本色ではないのだが、その深い青は彼女を大いに惹き付けた。現場経験が一度でもあれば抵抗感がなくなるようで、その辺に落ちていた空の小型ペットボトルにその青チューブを収容する。櫻姉経由で矢ノ倉チーフに聞けばわかるだろう、という手筈である。

青の衝動とでも言おうか、その後の習作はいずれも青が基調になった。漂着物の数々も青をなぞってから、モノトーンをかぶせるような描き方。四人でわいわいと拾ったり数えたりした物体が、今は正に自然にとっての脅威のように重々しく映る。我ながらその切迫感に息を呑む。筆も震えた。動力船が通過する。程なく、海でのそれとは異なる間隔の細かい波が干潟に押し寄せてきた。そろそろ潮時のようだ。十五時近く、太陽は上流側の橋に架かる位置まで傾いている。波は規則的に続き、しばらくしてから平面に戻った。だが、蒼葉の心にはいつまでも波が残っているようだった。

本来の仕事を終えた筆は、川の水から離れ、今は水道水を浴びている。筆の水を切る時、その突端に字が彫ってあることに気付いた蒼葉。「ン？ K.K.だって。持ち主のイニシャルかも」習作第二部が乾くの待って、帰途に着く。画家の日曜日はこうして過ぎていく。

「蒼葉ったら、ケータイも持たないでどこ行っちゃんだか. . .」と妹を案じつつも、姉は姉で一人の時間を閉ざされた空間で過ごしていた。姉妹の日常は平屋の戸建が舞台だが、庭には別棟(はなれ)があって、時には出番が回って来る。主用途はアトリエだが、アップライトのピアノも置いてある。画業に集中するために防音構造になっているが、それは音楽家にとっても好都合だったようで、ピアノも気兼ねなく弾けるという特典つき。ピアノに向かうこともなくなっていた櫻だったが、妹がいないのも手伝って、今日はここで缶詰になっている。例の機内チャンネルの一曲を耳で憶え、ピアノ部分をアレンジしながら、一音一音確かめるように弾く。器用な

ものだ。

空の想念を音で描く櫻、川の現実を水彩で描く蒼葉。青い広がりを持つものを「描く」という点で同じだが、アプローチは異なる。食事中的表情も対照的な姉妹。習作第一部とともに、大まかな状況報告を受け、ウンウンと頷く姉君だったが、波が収まらない妹君は、

「私、隅田さんにメールする！」と、いつになく衝動的に一言。そして、「弥生のアドレスと交換でことで、いいでしょ。櫻姉さん」

「ま、今のところ、モノログに新ネタ載ってないみたいだから、蒼葉からスクープが届けば、喜ぶとは思うけど」

「何かこう、他の人にも広く知ってもらいたいな、ていうのがあって．．．」

「でも、現場で写真撮ってないでしょ。ケータイ置いてっちゃうし」

「これ、載せてくれないかなあ」

習作第二部を繰る。彩色した漂着物の数々は、蒼葉にしてはトーンが暗めなので、櫻も驚く。感想を述べるには及ばない。習作という域を超え、そのメッセージは鮮烈に伝わった。

「ケータイで写せる？」

「姉さんの職場まで持ってってスキャンする程じゃないものね。試してみる」

かくして、更新ネタを取材し損ねていた千歳君に、思わぬ投稿が舞い込んでくることになった。

。「なんと写実的で重厚な．．．」 櫻が加わるようになってからというもの、千歳にとってのゴミ箱干潟は、むしろ明るく朗々としたイメージに彩られていた。だが、蒼葉が描き留めた「漂着静物画」は物言わぬ故の重く響くメッセージを伴い、彼の心をも波立たせた。三月のあの衝撃、初心を想起させて止まなかったのである。「そう、だからブログで発信しようって」 蒼葉の思い、届いたようである。

「それにしても、こうなるとゴミじゃなくてアートだね」 川の水で溶いた隠れた青。それが哀感を滲ませる。缶、ライター、カップめんの容器、さらにはゲームソフトのケースまで．．．

低解像度ながら、千歳の手によってweb上で再現されていくモノの表情。漂着モノログの新展開、と言ったら大げさだろうか。

静物画に目を奪われて、見落とししかけた一節がある。蒼葉からのメールの末尾には、「p.s. 六月二十二日は、ローソクを持ってセンターへお越しく下さい、とのことですよ」 「え、ローソクって？」 職場訪問の日程調整は済んでいたものの、特に持ち物などについては指示がなかったので、余計に不思議に思う千歳だった。

蒼葉とはケータイが繋がらなかったこともあり、時間を持て余し気味だった弥生嬢。設計仕様書が櫻から届いたのは一週間前だったが、ある程度構想は練ってあったため、比較的スピーディにプログラムは組んでいた。今日は時間を埋め合わせるようにその追い込みに入っている。「二十二日、多分間に合うと思うけど、データをどこにストックしてもらおうか、詰めないとね」 彼女は専門学校でこの手のプログラミングをマスターした後、そのスキルをより実社会的に応用させるための接点を求め、社会科学系の大学に中途編入した人物。舌鋒鋭い点も含め、気鋭の人（蒼葉談）である。かくいう蒼葉は、絵描き修行のためフランス留学した後、己の画業を模索する中で、通俗的でありながら批評性（いや風刺か）を備えた表現を深めることを思い立ち、弥生と同じ社会学科を選んだ次第。学業がどの程度、絵画に活かされようとしているのかは、未知数である。だが、一つのきっかけは掴(つか)めた、と言っているだろう。

【参考情報】 [パケットテストでCODを測る](#)

12. 夏至の夜は長く

「それにしても、この青色、不思議ねえ」 蒼葉が拾ってきたチューブは、櫻から文花の手に渡ったが、ひと調べするのに多少時間がかかったようで、金曜日になってようやくこの一言。

「と、言いますと？」

「これ、低濃度CODを測るパックテストなんだけど、緑がかった青にはなっても、こんな群青色みたいにはならないんだとかって」

「化学的酸素要求量でしたっけ。化け学だけに、中で突然変異が起こったとか？」

「パックテストを使った一斉調査が三日にあったから、その関係だとは思うけど、それでもそんなに日数経ってないしねえ」

時間経過で変色する可能性はある。それにしても腑に落ちない、ということのようだ。だが、櫻としてはその標本色の真贋の程よりも、「せっかくの調査も、調査用品がゴミになってしまっただけではないですね」という思いの方が強かった。

「ちょっと取扱が難しいから、うっかり落としちゃうこともあるんでしょ。このチューブの素材を生分解性にすれば、そういううっかりも少しは救われるかも知れないけど」

何はともあれ、女性画家さんの作品に力を与えるきっかけにはなったんだから、良しとしたいところである。文花は証拠写真を撮ってから、パックテストの穴を塞ぐ。「じゃ、可燃ゴミに出しとくね」と席を立つ。そこへ現われた一人の男性客。「あ、いらっしやいませ！」

アシスタント(?)の八(やつ)広(ひろ)君には足を運ばせておいて、自身は今日が初来場。約束の午後六時にはちょっと早かったが、隅田千歳君、センターにお出ましである。

ヒラヒラが目立つボリュームワンピースに透かし柄のニットという、フェミニンな着こなしのチーフにまず目が行き、櫻への挨拶がひと呼吸遅れる。「こんにちは、というか今晚は、というか、とにかく来ました。よろしく願います」 早々に舞い上がっている。データベース作業、大丈夫なんだろうか。

「隅田さんですね。矢ノ倉文花です。今日はわざわざすみません」 濃青のチューブを持ったまま、名刺を差し出す。千歳もマイバッグをガサゴソやって、一枚取り出し、

「初めまして。櫻さんからいろいろ聞いてます。情報源チーフだって」

「あら、そんな...」 櫻はカウンターで立ったまま、ちょっと拍子抜け。「じゃ、隅田様、こちらへ」 えらく慇懃(いんぎん)な口調で案内する。

文花に会釈してから、開架式の棚のある方へ。情報閲覧用のノートPCを置いた円卓にはイスが複数あって、簡単な打合せができるようになっている。「櫻さん、挨拶し損なっちゃって、すみません。見違えちゃったもので」 文花の格好にもドキリとしたが、それ以上に櫻の服装の方がインパクト大だったのは言うまでもない。クリーンアップ向きのジーンズ+長袖シャツではなく、濃紺のカットソーに白のロングスカート。髪を部分的に束ねているのがこれまで見慣れている櫻だが、今日は束ねることなく、肩までかかるシャギー風。

「え、私、普段はこうなんですよ」 毎度の如く、表情が急変する櫻嬢。すっかりにこやかになった。千歳君もその辺のご機嫌加減がわかってきたのか、本心が出やすくなったのか、照れ笑いは相変わらずだが、セリフ回しが上手くなったのは確かである。櫻の普段着は実はもうちょっとラフ。千歳が来るのに備え、蒼葉のアドバイスを受けつつ、グレードを上げていたのだが、

「今日はおめかししました」とはあえて言わなかった。セリフ回しに関してはまだまだ櫻の方が上手らしい。

文花は、自家製野菜を洗い場でひと洗いして、マイ包丁でザクザクやっている。その間、円卓の二人は、PC画面を見ながら早速打合せ中。

「なるほど、確かにテーブルはできてますね。でも．．．」 データベースソフトを開いて、関係団体の名簿に当たる基礎情報をチェックする。元になるデータはあるものの、住所の表記がマチマチだったり、団体名に法人格の名称が入っていたりいかなかったり、このままではソフトの機能を使いこなせないことを彼はまず見抜く。

「団体情報が出ているホームページから引っ張ってきたり、表計算ソフトで入れ込んでたものを無理やりインポートしたもので」

「じゃ、バックアップとってから加工してみますね」

櫻が目をパチクリさせている間、千歳は適度に解説を交えつつ、ソフト特有の機能を使って混在しているデータを切り分けていく。

「これで住所部分は、都道府県とそれ以外に分かれました」

次の十分程で、財団・社団・NPO法人などの法人格の部分进行分離。基礎情報の形は整った。ニンジンとキュウリをスティック状にして、冷蔵庫に入れ終えた文花がここで同席。

「基礎情報はこのテーブルでメンテします。あとは、その団体がどんな情報を持っているかのテーブルを別に作ります」

「そっか、一つのテーブルに全てを入れる必要はないんだ」

文花という名前の割には何故か理系のチーフは、早くも構造的に理解したようで、テーブルとテーブルをリンクさせれば済むことを悟る。こうなると話は早い。

各団体がどんな情報媒体を持っていて、どんなトピックや催事情報を載せているか、これをメンテするためのフォームを作り出す千歳。櫻も食い入るように画面を見つめつつ、時に「この項目はプルダウンで選べるとうれしいかも」と注文を入れるようになっていた。機転が利くという彼女の本分もあるが、これはやはり具体的に「こうしたい」というのがハッキリしている故だろう。団体名がうまく表示できるようになったので、「で、この名前をプルダウン項目として引用すれば、団体名を選んでから入力できるようになります。一から団体名を入れなくて済むから、それだけでも速くなるでしょう」 データ入力画面の団体名の枠の▼をクリックすると、基礎情報の中でメンテしておいた各団体の名称が一覧表示で出るようになった。

「データベースソフトって、こういう使い方ができたのね」 文花はこれで十分といった口調で感心中。だが、櫻はなおも追加コマンドを申し入れる。「じゃ、あとは検索ボタンと印刷ボタンをお願いします」 デザイン画面を二人で指差しながら、マンツーマン状態のご両人。チーフは微笑ましいやら、羨ましいやらの心境で、帰り支度を始める。

「データの入力がひと区切りついたら、団体の基礎情報とそのトピック情報なんかを連結させて、一つの表なりデータシートにすればいい訳です」 千歳君の実践講座、小一時間で終了。即効性のあるものをその場で作り込んでしまう技量、大したものである。

「それじゃあとはその連結させたものをエクスポートして、webに？」

「そうですね。しばらくはそれで試してみて、いずれは逆にメンテはwebで、ってのもいいかも知れませんが。その辺りのプログラミングは僕にはできませんが」

「とにかく今回はこれでメドが立ちました。ありがとうございましたっ」

そこへ「櫻さん！」 チーフが呼んでいる。

「じゃ、この野菜スティックと、あと会議費でピザでもとって」

「あ、それはどうも。じゃ、ちょっと」

円卓に戻る櫻。

「千歳さん、苦手な食べ物ってありますか？」

「いえ、特に。餡がダメなくらいです」

「餡ですか？ まあいいや、では！」

「ねえ文花さん、得意のケータイで注文してくださいよ。ケータリング専用ケータイでしょ？」

「まあ私の場合、通話用よりも情報操作用だからね。で、隅田さん、大丈夫って？」

「この半分ずつ組み合わせられるのがいいかも」

「はいはい」

意外とちゃっかりしている櫻。割と気前のいい文花。この二人の組み合わせもなかなかである。文花はキャンペーンとやらでおまけで付いてくるアイスもしっかりオーダーに組み入れていた。こういうお節介(?)は大歓迎である。

「それにしても、イイ人見つけたわねえ、櫻さん」

「エッ？ いやそんな、ハハハ」

ここで下手に、まだちゃんと交際している訳じゃないとか言おうものなら、何をしてくれるかわからないので、言葉を濁して交わす櫻。うまくごまかせたかどうか。

「じゃ隅田さん、ごゆっくり。またよろしくお願いします」と目配せして去っていくチーフ。午後七時過ぎ。変則シフトでのご帰宅である。夏至とは云え、さすがに暗くなってきた。窓の外、夜の帳(とぼり)の色合いが櫻の濃紺に重なる。

二人になったところで、いつになくドギマギする千歳君。「今日まだお時間ありますか？」という櫻の一言で、益々緊張が高まる。声が震えがち。

「え、ええ、ローソクの謎も知りたいし」

「フフ。そうなんですよ、ローソク．．． まあ今日はキャンドルですね」

千歳はまだ当惑気味。そんな千歳を見て、悦に入る櫻。めかしこんでいる分、余計に小悪魔みたいに映る。「そうだ、コーヒー淹(い)れますね」 席を立ったその時、千歳にとってはサプライズなゲストが登場。学生さん？ ボレロ、チュニック、デニムパンツ、若くてチャーミングな感じの女性が駆け込むようになってきた。

「あ、弥生ちゃん、いらっしやいませ！」

「只今参上！ ちょっと遅くなっちゃったけど」

ドギマギが収まらないうちにこのサプライズ。千歳はノートPCの前で固まっている。

「千さんですよ。初めまして！」

「ハハ。よくご存じで。あなたはもしかして．．．」

「桑川弥生です。設計仕様書、ありがとうございました」

「五月六日に話が進んでたっていうのを聞いて、ビックリしましたよ。何かビビッと来たとか」

「アンテナ高いもんで。キャッチし過ぎて困ることもありますが」

才気煥発というか、お若くも頼もしい人人材が現われたものである。不意に漂着モノログがツッコミを受ける展開になり、今度はタジタジな千歳君。ブログにしては更新頻度が少ない、コメントスパム防止策をとって投稿を受け付けるようにすべき、などなど。内心冷や汗状況のところ

へ小悪魔さんがコーヒーポットを持って戻って来た。

「弥生ちゃん、千歳さんまで口撃対象にしちゃって」

「だって、こういう話できる人、少ないんだもん」

ひとまずツッコミはここで収まった。櫻が救いの女神に見える千歳だった。

「で、桑川さんには、例のケータイ画面の件でお越しいただきました」

まだ開館時間中とはいえ、お客が来るでもないだろうから、このまま二人でどう過ごしたらいいものか、と思案していた彼は、ホッとするやら、肩透かしにあったような、の態。心中察するに余りある。だが、このタイミングで一席セットするあたり、さすがは櫻である。マネージャーは気を取り直して一言、

「次回、デモができればと思ってるんですけど」

「ええ、今日はデモに備えて、データをストックする先のwebサーバの設定を、と思って」千歳が持っているドメインの中に、ディレクトリを分けて、弥生が入れるようにFTP設定することにした。

「通常のCGIは動きますから」

「了解。あとはサイトのアドレスですね。例の/wreckage/にしますか？」

「テスト用だったら、多少ヘンテコなのでもいいと思うけど」

櫻は先を見越したようで、

「ま、国際的なデータカードを画面化したってことなら、英語名の方がいいかもね」

コーヒーを啜る。カフェめし店のと似ているがより深みがある感じ。フェアトレード系のコーヒー豆をブレンドしたものだそう。

「文花さんのオススメです。淹れ方もいろいろ指導を受けまして」 飲み方も一言あるようで、ブラックで飲むのがベストだとか。だが、三人そろって何も入れない派だったので、先刻からしっかりベストな状態を堪能している。

「ブラックと言え、今日はブラックイルミネーションデーとかって？」

「そうそう、東京タワーも単に消灯するだけなのに、逆説的な言い回しして」

千歳は薄々とキャンドルの意味がわかってきた気がした。夏至に消灯って、聞いたことがある。

「消灯じゃないけど、今日は架線事故で午前中電車停まっちゃって、とんだ災難でしたよ」

「架線？ 河川？」 千歳はとぼけたようなことを聞く。

「さいたま新都心あたりで、架線が溶けて切れちゃって、停電ですって。埼京線も煽りを受けて、遅れる遅れる。講義に遅刻しちゃいました」

「そんなに大停電だったんだ」 櫻は驚いた様子。弥生は飄々と「夜になってからの事故だったら、今日はキャンドルナイトってことで済んだかもね」 何ともシュールなジョークである。笑いごとではないが、一理ある。

「ブラックジョーク、か」 千歳がポツリ。櫻と弥生は笑いをこらえている。「千さん、1,000点！」 弥生は自分が発した一言がまた可笑しかったようで、しばらくククとやっている。

「笑ったらお腹空いちゃったあ」

十九時四十五分、宅配ピザが到着。「え、アイスも？」 ミニカップはちゃんと三つある。さすがチーフである。Mサイズながら、三人で食べるにはちょうどいい大きさの半々ピザが届いた。

「シーフード系とこっちは野菜たっぷりversionね」

「わあ、美味しそう。ラッキー！」

「千歳さんには本当は謝金をお渡ししなきゃいけないんですけど、今日はこれでいいですか？」

「あ、そんな謝金だなんて。逆にこんなご馳走してもらっちゃって」
何とも低姿勢な千歳君。弥生は謝金が引っかかっている様子。

「千さん、何かお仕事されたんですか？」

データベースソフトで加工した連結データをwebに載せる話、その後はwebでデータ入力・加工して、そのまま掲載する仕掛けにしたいこと、などを説明。

「そうか桑川さんなら、プログラム作れるんだ」

「規模が大きくなるかも知れませんね。まあ、謝金次第ですが．．． 何ちゃって」

櫻はセンターのドアを閉め、「キャンドルナイト実施中(20:00～)」という簡素な表札を貼り出しに行った。コーヒーの残りを注いで、円卓の中央に細長いキャンドルを一つ立てる。センターの非常用の備品のようなのだが、まあ使い切る訳ではないので、OKなんだろう。

「千歳さん、キャンドルは？」

「こんなので良かった？」 それは蜜蝋でできたキャンドルだった。二千年問題に備えて、非常用として買ったものだが、どこかの環境イベントの出店で見つけた一品、というのが彼らしい。めでたく点灯デビューである。

「あと、そうだ。暗くする前に．．．」 ノートPCのディスクトレイを開ける櫻。「これ、かけますね」

多少冷めても味わいのあるコーヒーと、熱々のピザ、それに歯ごたえのある棒状の野菜。長さの違う二本のキャンドルの灯りを囲んで、三人で静かに語らう。「このスティックも美味しい」「自家製有機農法だそうだから」「へえ、文花さんがねえ」卓上ではピアノとストリングスを中心にした心地良い楽曲が流れ、キャンドルの炎を揺らす。何とも趣深い夏至の夜である。ピザというのは概して手元や口元がペタペタになるので、明るい中で食すると品行が露わになってしまい、特に出逢って間もない男女がシェアするには不向きなメニューとされていたりする。だが、今日は暗い中なので関係なし。強いて苦言を呈するなら、オニオンとイカが同じように白光大りにして得体が知れないことくらいか。自分で何を食べているのかが近づけてみないとわからないところがキャンドルナイトの楽しみの一つとも言える。

「ところで私、二人の間にいるんですけど、いいんですか？」 ピザをいち早く食べ終えた弥生は二人をからかうように質問する。

「大人をからかうんじゃないの」 櫻は妹をたしなめるような調子で一言呟いて、アイスを取りに行った。

「え、千さん、櫻さんて彼女でしょ？」

思わず吹き出しかけて、キャンドルライトを消しそうになった。何でそういう話に？ 「蒼葉ちゃんがそんなようなこと言うから」 炎を前にしながら、冷や汗が出てくる千歳君。

「ま、蒼葉さんには今度ちゃんと言っておくから、また彼女に聞いてみて」

「はあ」

櫻は呆れたような、でもどこことなく愉快そうな顔をして、ミニカップを並べていく。

「お好きなのどーぞ！」

「レディファーストでお二人から」

「弥生ちゃんは罰として、苦いやつね」 眼鏡に炎が反射して、ちとコワイ。でも、今夜の櫻はいつもと感じが違う。つい見とれる千歳。

弥生には抹茶、櫻はアズキ、千歳には、

「千歳さん、これでいいですか？」　ハッとする彼、見つめる彼女。カスタードだった。「やったあ」　どうやら彼の好物だったらしい。櫻は嬉しそう。弥生は抹茶味を舌に塗り込めながら「やっぱりこの二人、そういう関係じゃん」と思うしかなかった。大人の味とはこういうものか。

CDはランダムでかけていて、三十分経ったところで、櫻が暗譜した曲になった。弥生はおとなしく耳を傾けている。「では、本日のキャンドルナイトはこれにて終了」

「Soar Away」を聴き終えたところで、お開きとなった。

蛍光灯が眩しい。スイッチを入れて戻って来た櫻だったが、小娘さんがすかさず、

「櫻さん、口紅はみ出てる！」　ここでの口紅とはつまり、ピザソースのことである。

「え、ヤダ」　洗い場に走って行く。滑稽ではあるが、エレガントな櫻嬢。弥生も親しみを込めてツッコミを入れているのがわかる。

引き際を弁えている弥生嬢はひと足先に帰途に。今度は本当に照明を落として、施錠する櫻。千歳は先に下りて、建物入口で待っている。センターは二階、一階は図書館。図書館も閉館時間になったようで、一部を残して灯りは消えている。

今回は二人とも自転車。帰る方向は真逆なので、建物を出るとすぐに手を振らないといけない。

「じゃ、千歳さん、これお返しします。いろいろとありがとうございました」

「いえいえ、楽しい時間を過ごさせてもらいました。こちらこそ感謝×2です」

櫻は何か言い足りなさそうだったが、「じゃまた！」とさっさとペダルを踏んで街灯の列の向こうに消えてしまった。彼は「ま、次は七月一日。一週間ちょっとか」とサバサバした面持ちで、橋の方向へゆっくりこぎ出す。CDはご丁寧に小さな袋に入れられている。ちょっとしたメッセージと一緒に。

六月三日に撮らせてもらった櫻の写真は、しっかりプリントアウトしてあって、今日渡すつもりだったのだが、舞い上がっていたせいか、失念してしまった。ま、またメールする時にでも、備忘を兼ねて一筆入れておくとするか、と思い直し、袋からCDを取り出す。名刺サイズのメッセージカードが一片、滑ってきた。「おお！」

「またいらしてくださいね。スタッフ一同(?)　心よりお待ち申し上げます。ところで、七月七日は七夕ですが、川の日でもあります。千歳さん、当日のご予定は？　さくら」との走り書き。千歳が外で待っている間に書いたのだろうか、筆跡が生々しい感じ。前半は櫻流の社交辞令だが、後半は？　櫻の想いの一端を感じずにはいられない千歳だった。何となく紅潮しているのが自分でもわかる。まだキャンドルに照らされているかのようなのである。「七日、何時にどこにしたものか．．．」　いつしか心の中では笹の葉が想起され、音を立て始めた。想いがサラサラと移ろっていく。



「櫻姉、遅いじゃん！」 一人キャンドルナイトを実践中だった蒼葉は、退屈しきった声で姉の帰り端に一言浴びせた。濃いめの茶髪がキャンドルに灯されて金色に見える。妹ながら、つい溜息が出てしまう。「へへ、ちょっとね。あ、このキャンドルも使う？」 千歳に要否を確認しそびれてしまった一本を差し出す。姉妹で銘々ローソクを立て、見張り番をすることにした。終了予定の二十二時まであと二十分。

「蒼葉はいつからキャンドルとにらめっこしてたの？」

「九時からだけど。本当は真っ暗にしておいて、姉さんが帰ってきたら灯して驚かそうと思ったんだけどね」

キャンドルナイトの違う楽しみ方を知っている妹君。でもそれじゃ、夏を涼むためのどこかのアトラクションである。苦笑いしつつも、言葉少なな姉君。「そう言えば、千さんに掃部先生の話、しそびれちゃったなあ。でもきっとメールが来るだろうから、その時でいいか」 そんなことを心で呟いて、また薄笑い。

「櫻姉？ 大丈夫？」 今日の出来事を聞きたくて仕方ない蒼葉だったが、ノ口けられてもフォローできないから、控えることにした。「まあ、いずれ自分から話してくれるでしょ」 よく出来た妹である。

「隅田さんのこと気になるのわかる気がする。私が聞いてもいいけど、南実ちゃんだったら自分で聞けるでしょ？」 ケータリング注文用ケータイで、珍しくメール機能を使っている矢ノ倉さん。帰りの電車内での一コマである。南実にしては仕掛けが遅い観もあるが、遠回しながら確実な線を狙って、情報屋の先輩に探りを入れてもらった、という訳である。文花は千歳と面会してから返信するつもりだったので、夏至当夜になってようやくの一報。二十二日に向けて日は伸びていったが、人の気も長くなるかということ、そうでもない。南実はきっとシビレを切らしていただろう。その辺を見越した上で、あえて短文メールを打ってはぐらかす。後輩思い(?)でもあるチーフである。

【参考情報】 [キャンドルナイト](#)

七月の巻 13. 優しいお姉さん達

梅雨に入ったらしいが、ジメジメした印象が少ないまま七月を迎えた。前回の南実の潮時情報が合っていれば、七月一日の十時はクリーンアップには丁度いい頃合い。今日は梅雨の晴れ間だとかで、天気も申し分ない。ひと足先に現場に到着した櫻は、足元のゴミ箱には目を向けないことにして、晴天に両手を伸ばしてひと呼吸。「千歳さん、早く来ないかな」いつものクリーンアップルックに加え、日射対策も万全な櫻嬢。広めのつばが付いたハットを被り干潟に佇む。季節が季節ゆえ、川を通るのはプレジャーボート。水位は今のところ低めなので、多少波が来ても大丈夫そうだが、波のテンポがいつもと違って小刻み。だが、ボートが行き来する音、波が立つ音以外は、野球がお休みということもあって、総じて平穏ではある。ふと干潟に目を落とすと、相変わらずの散らかり具合に暗然とならざるを得ない。静かな分、ゴミの眩しきというか、声にならない声のようなものを感じる。「蒼葉の絵があんな風になるのももっともね. . .」 集合時刻の十時まであと五分。

水を汲んで、千歳が降りて来た。彼も誰かさんに早くお目にかかりたい一心(?)かどうかはいざ知らず、やや早めのご到着。どれがヨシだかわからないくらい伸び盛りの草々の狭間(はざま)に辛うじて干潟へ通じる小径が残る。水をこぼしそうになったが、何とか着地。「あれ、櫻さん？」

デニム地のシーズに、Tシャツ+長袖カーディガン、そこまではわかるが、まるで貴婦人のような白ハット。そして肩にかかる黒髪。先だって職場訪問した際は大いに見違えたが、今日もいつもと違う装い。躊躇はあったが、その後姿に声をかけてみた。

「あら、千さん」 些(いささ)かブルーが入っている櫻が振り向く。「どうかしましたか？ 何かいつもと様子が. . .」

「え、何か私、変ですか？」 つばに手を当ててキョトンとしている。

「いつもの元気な櫻さんとちょっと違うかなって」

「いや、蒼葉の素描を思い出してたんです。やっぱり一人でここに立っていると憂鬱になっちゃいそうで」

確かに今回もゴミが強烈なメッセージを発している。特に大型の袋類、ペットボトル、紙パック類、それに大小様々な容器包装の数々。片付け甲斐、数え甲斐がありそうだ。

「まあ、今日もまたこんな感じで、ね」 訪問時に渡しそびれていた櫻の写真の入った小袋を取り出し、そのまま手渡す。「わざわざ、プリントしていただいて」 ちょっと言葉に詰まる櫻だが、表情は明るくなってきた。「あれ、袋の中にメッセージとか入ってないんですかあ？

DearとかSincerelyとか、何ちゃって」 さすがの櫻もテレ気味。千歳はむしろ冷静なもので、

「袋に¥0で書いておきましたよ」

「エッ？」

「ウソウソ、どうぞご笑納ください」

「ありがとうございます！」

いつもの笑みが戻った櫻。データカードを入れておく用のクリアケースに写真袋をしまう。そして、

「そうそう、対岸で草刈ってたおじさんの話、してなかったですよね」

「あ、そうでした。著名な方だったとか」

「掃除の掃に、部分の部て書いて．．．」 と、その時、

「やあやあ、お二人さん！」 定刻きっかり、業平君の登場である。

「ずいぶんと草伸びたねえ」

「根元の邪魔物が減ったから、余計に元気になったんじゃないかな」

「業平さんが、Go Hey! ってやるともっと伸びるかも」

この三人にかかると、当地はゴミ箱ではなくなる。和やかな空間に一変するのである。

「それにしても、あの矢ノ倉さんてえのは人を動かすのが上手というか、それともこっちが乗りやすいだけなのか」 ブツブツやりながら、「巡回中」の先生はバイクで干潟方面を目指していた。本日のサプライズゲスト第一号である。一応、河川事務所お墨付きのステッカーがあるので、減速していればバイク走行は可能。試合がないのをいいことに、グランド脇をそのままタタとやっている。（チョイ悪オヤジ気取り？） すると、河川敷に居るには少々似つかわしくない格好をした少女がウロウロしているのが目に留まった。シャーリングパンツにキャミソール風。スタイルはイマ風だが、おとなしそうな娘さんである。五月の第一日曜日は塾帰りだったが、今回は塾へ行く前に橋を通過。五月以来、日曜日に橋を通る度に干潟を見遣っては、動静を気にしていた彼女。この日、授業は午後からだったが、自分で現地を確かめたくなくて、早くに家を出てきた。幸い、遠目に櫻の姿を見かけたので、思い切って足を運んできたものの、

「お嬢さん、何か探し物かい？」

「あ、あの、この辺に砂浜があるはずなんですけど」

「砂浜？ ああ、し潟ね」

「しがたって何ですか？」

「だから、し、ひ．．． いいや、ついておいで」

女子中学生は、干潟の場所を探していたのも確かだが、グランド外野を我が物顔で跋扈(ばっこ)している十数羽のカラスに行く手を阻まれていた、というのが正直なところだった。ここはチョイ悪オヤジの出番。多少加速して、カラスを蹴散らすように走って行った。少女は小走りでバイクを追いかける。暑さでグッタリしているシロツメクサを除けながら。

十時十分過ぎ。要領を得た三人はすでに大物の除去を終え、今回は上流側に千歳、中央を櫻、下流側を業平、という配置で分担する段取りに入ろうとしていた。

「そう言えば、今日は小松さん、来ないのかな」 業平がポツリ。

「あ、海洋漂着ゴミの全国会議とかで来られないって連絡受けてました。失礼」 南実から櫻に連絡が行っていたとは。男性二人は虚を衝かれた様子。「例の外来魚の件はよくわからなかったみたい。ただ、多少汚れていても平気だから、窒息することもないんじゃないかって」 談議中の三人のところへ、ガサゴソと物音が近づく。

「あ、掃部先生！」

「やあ、あの時のお姉さん。ええと千住．．．」

「櫻です。講演ではお世話様でした。でもまた．．．」 言葉を継ごうとした矢先、

「おっと、お嬢さん、大丈夫かい？」

草を分けつつ、少女が現われた。第二号ゲストである。

「皆に会いに来たんだって」

「オー、今回もサプライズ！」 業平が一声。

「初めまして。い、石島、小梅と言います」

「小梅さん、ようこそ！ でも、どうして先生と？ お孫さん？」

「いやいや、こんな立派な孫がいる年じゃないよ。ま、俺に子どもがいたら、君達くらいだろうな」

千歳と業平は何が何だか状態。だが、千歳はすぐに気が付いて、

「櫻さん、もしかして掃除の掃に、部分の部で、って、この方？」

「掃部清澄さん、でいいですよ？」

「へえ、それで『かもん』で読むんですか。カッコいいですね」 Go Heyよりも、Come Onの方が一枚上手かも？

てな訳で、それぞれの自己紹介が始まる。掃部公は三人を労うように一言二言。そして、矢ノ倉チーフに「唆(そそのか)されて」来たようなことを笑いながら仰る。「ああ、またしても文花さんにしてやられた」 櫻はハットをとって正に脱帽状態で頷く。先生は自分の話はそこそこにして、小梅に話を振った。少女は何でここに来るに至ったか、ポツポツ話す。うつむき加減だが、表情は真剣。四人の大人は彼女の話に耳を傾け、胸が空くような、打たれるような、そんな感慨を受けていた。データカードの裏が白紙になっている一枚が紛れていたので、「じゃ、ここにそれぞれお名前を大きくお書きください。まず、小梅さん、どうぞ」 お互いにフルネームがわからないと話がしにくいもの。この辺の心得も櫻ならでは、である。

小梅は、自分の名前をさん付けで呼んでくれることにちょっぴり感激していた。クリップボードを持って、マーカーでゆっくり綴っていく。なかなか上手な字である。

「じゃ、若い順でことで。次は私かな？」と櫻が持ち替えた時、「弥生、早く早く」 草蔭から声がする。

「今日は何だかゲストが大勢になりそうだな．．．」 千歳は苦笑気味。蒼葉に続き、今回は弥生も連れられて来た。二人ともハーフパンツにプルオーバー。弥生は麦藁帽のようなものを目深に被っている。

「なあんだ。私より若いのが来ちゃった。ハイ、ここにご署名ください」

「櫻さん、女性では最年長じゃない。フフ．．．」 弥生がマーカーを走らせる。

「桑川弥生です」 掃部先生とは初対面だが、業平とも初めて。二人に対して何か一言あっても良さそうだったが、小梅のような少女が参加していることが思いがけなかったようで、「何年生？」 いつもの舌鋒ぶりが信じられないような優しい口ぶり。

「中学二年です」

「じゃ、弟と二つ違いだ。今度連れてくるから、よろしくね。変わり者だけど」

「エ、弟さんて高校一年？」

「そんな。小六よ。私じゃ年が離れてて話にならないんだって。だから」

幾分緊張気味だった小梅さんは、これで打ち解けたようで、笑顔になって来た。

次は「千住蒼葉と言います。櫻の妹です。あ、先生、この間はいいお話、聞かせていただいて．．．」

「いやあ、こんな美人にほめてもらえるなんて、俺もまだまだ棄てたもんじゃないな」

早くも掃部節全開か。「おっと失礼。櫻さんも弥生さんも小梅ちゃんも、別嬪さんだよ。もちろん」 女性からの支持が厚い(?)理由はこの辺りにありそうだ。ツボを心得ている。千歳と業平は立つ瀬なし。

やっとかさ櫻が記名して、お次の番。「ええと、どちらがご年長？」

「同期入社だけどオレはひと浪かぶってるから、千ちゃんが先」

画数が多いので、やや時間がかかる。「隅田千歳です。皆さん、よろしくお願いします」

「この干潟の片付け発起人です。よね？」 さりげなく櫻が立てる。

「ああ、干潟ですか」 小梅はやっと納得が行った様子。

「俺が発音すると『しがた』になっちゃうんだよ。しがたないねえ」 一同が爆笑したことは言うに及ばず。この手の機転トークは櫻も得意ではあるが、先生にはどうやら敵わない。千歳はマーカーを落としそうになったが、何とか業平にパス。

「本多業平です。Go Heyと覚えてください」 漢字の隣にしっかりアルファベットを書いて、六人に見せている。蒼葉は何かツッコミを入れようと画策していたが、弥生に先を越されてしまった。

「質問！ 何で『なりひら』じゃないんですか？」

「ええと、それは. . .」

「成金みたいじゃマズイからだろ。な、Go Hey君。読み方は兎も角、業平って名前そのものは縁起いいんだから、胸張りな。業平橋じゃ今度、新しいタワーも建つらしいし」

「ハハ。どうもおそれいます」

「で、小生は、清掃部、と」 余白を使い切るように、三文字綴る。

「せ、清掃部さんですか？」 事情がわからない弥生は、先手をとられてしまった無念さを滲ませつつ、こう呟くのが精一杯。

「本名は掃部清さん。欧米風に並べ替えるとこうなるんですよね」 蒼葉がフォローする。

「まあ、ここでは清澄じゃなくて、清さんでいいよ。先生っていうのもこっぴどかしいし」 時すでに十時半。

櫻リーダーによるコーディネートが始まった。「では、皆さん、班分けしましょう。下流側は業平さんと弥生ちゃん、中央部は蒼葉と小梅さん、上流部は私と. . .」 千歳に向かって目配せする櫻。「ハイ、了解」 今日ドギマギしている余裕はない？

「清さんは、アドバイザーということでしょうか？」

「清さんてか、ドキッとするねえ。いい考えがあるんだ。一人で動くよ、了解了解」

「小梅さん、道具ある？」

「あ、私、何にも。すみません」

櫻は予備の軍手とレジ袋を取り出して、

「あとは優しい蒼葉お姉さんが教えてくれるから」

「アハハ。そりゃどうも。行こう！」

晴れてはいるが、干潟が乾くまで照っている訳ではない。時に靴がのめり込む感じに、

「わぁ」と驚きつつも楽しそうな小梅。

「気を付けてね」と姉気取りの蒼葉。下流奥の積石一帯は業平と弥生がさっさと行ってしまったので、その手前のカニの巣穴付近からゴミを集めることにした。細々した袋類が散らばっていて、なかなか拾いにくい。長身の蒼葉には不利だが、小梅は小回りが利く分、要領を得てからはペースが上がってきた。程よい感じでレジ袋に放り込んで行く。優しいお姉さんは手を休め、

「ねえ、小梅ちゃんて、きょうだい？」

「姉がいます」

「じゃ、妹っていう立場じゃ同じだね」

「でも、蒼葉さんがうらやましいです。櫻さんみたいなお姉さんだったらなあ」

「え？」

「今日は優しいお姉さんばかりだから、何か変な感じ」

蟹股で陸地へ上がる掃部公。バイクに目を向けると、チョイ悪カラスが澄ました顔して後部木箱に鎮座している。「こらぁ！」一喝するもなお動じない。カラスは逆襲するかのように、チョイ悪おやじの目前を掠(かす)めるように発って行った。この一連の様子は、草々に遮られて干潟の六人の目には入らなかった。だが、「今、先生怒鳴ってた？」櫻の耳には届いていた。「あ、カラス」千歳はチョイ悪の一羽を目で追って、「アイツが何かしたんでしょ」

「そうだ千さん、写真は？」

「いけない、片付け前とスクープ系と．．．」

「行ってらっしゃい！」

上流側から中央部に戻る途中、まず蒼葉と小梅を含む一枚を撮影。ペットボトルをポイポイやり出している。臨場感たっぷりの記録写真になりそう。あとはまだ彼女達が手を付けていない辺りと、目立つゴミを何枚か撮るとしよう。そこへ毎度お馴染み充電式草刈り機を携えておじさん登場。「おじいさんは川へ草刈りに、と来たもんだ」

「清さん、いったい何を。ネズミホソムギですか？」

「いやいや、こいつの根元にも手が届くように、と思っただけさ」

折角伸びてきたヨシだったが、それをバリバリと刈り出したのにはタマげた。ヨシも間伐が必要ってこと？よく見ると若々しいのは避け、変色している方をやっている。

「刈ってもまた別のがすぐ生えて来るから。新陳代謝だぁね」

ヨシ群に間隙ができ、堆積していた袋やボトルに手が届くようになった。今度は蒼葉の方に分がある。「これでまた、ヨシヨシってできますね」

「そうそう、その調子。小梅ちゃんも茎の切り口に気を付けてな」

草刈りおじさんはさらに下流側へ。その時、腰のポケットから小筆がポトリ。「あ、先生、筆！」蒼葉が声をかけるも、機械の音で聞こえないようだ。「あれれ、この筆もK.K.って」千歳は一旦上流側へ引き返す。



「お、この板、イイねえ」叢(くさむら)の根元に横たわっていたスノコの断片のような板を引っ張り出して、悦に入る清。何に使うつもりやら？その脇で今度は、

「あ、お、ばさん．．．こ、これ」

「ヤダなぁ、小梅ちゃんまで、おばさん呼ばわりして」

「な、何でカニが」

「あぁ、この巣穴に棲んでるらしいのよ。ね、先生？」

先生はめざとく、その小さな亡骸を見つけ、「ああ、クロベンケイガニだね。どれどれ」 ヒョイトつまんで、腰のポケットに手をやる。「あれ、筆が」

「あ、どうぞ」 何の筆かと思ったら、生物調査用だったか？ 泥を落として、しげしげ眺めている。「ホラ、動かないから」 小梅はおそろおそろ手にとって、こ「標本みたいですね」

き「いや、本物だってばよ」

あ「荒川にカニがいるなんて」

き「他にも、モクズ、チゴ、コメツキとか、いろいろいるよ」

この日はあいにく動いているカニにはお目にかからなかったが、何か閃くものがあったようで、小梅の目がキラキラし出したのは、周りの大人が見てもわかる程だった。カニの遺骸は元あった場所にそっと置いて合掌。清は小さく首をタテに振る。

弥生と業平は、クリーンアップをしに来たはずなのだが、どうも先刻から様子がおかしい。例のカウント画面の件で議論が白熱しているようだった。石の隙間を細長い枯れ枝でほじくりながら、

「業平さん、何か設計書、赤線とか赤字ばかりだったんですけど」

「いや、千ちゃんが直してくれたのに加えて、小松さんがまたいろいろ書き足すもんだから」

「要するに、最初の仕様が甘かった、ってことでしょ？ データの保存先とか、保存したのを読み込む方法とか、詰めが足りなかったですよ」 議論というよりは、弥生に押され通しの業平君。でも、まんざらでもないようで、「弥生さんの力量を頼ってのこと。今日、間に合ったんですよ。大したもんだよ」 決して悪い気にはなっていない。ズバズバ言ってもらった方が相手しやすい、ということらしい。

「それにしても、何でライターが挟まってるんでしょう？」

「ライターは空気が密閉されてるから、水に浮くんだよ。漂流・漂着しやすいってことらしい」 ライターにはお世話になっていただけに詳しいようで。

「あとは何かホースみたいのが引っかかっているし」

「それは多分、業務用エアコンのだね」

「ホースって項目、作ってないですよ」

「じゃ、その他の欄に追加ってことで」

この二人、結構イイ感じ？

さて、上流側は熱心なご両人が黙々とやっているはずだが、

「じゃ、千歳さん、七日は複合商業施設の環境配慮調査ってことで、ご同行、よろしく願いします」

「あとで、業平君にも聞いてみますかね」

「七日のことは内緒で、ね」

何の約束だかこれではよくわからないが、櫻が走り書きした件、ちゃんと話は進んでいるようだ。

「あれ？ 清先生の姿が見えないけど」

「ヨシを刈ったと思ったら、今度は何でしょね。また何か道具を取りに行ったようだけど」 当人は干潟を見下ろす場所で、ジョイント式の竿を組み合わせているところだった。

ヨシの枯れ枝は減ったものの、それ以上に袋類の猛威は凄まじかった。大物は三人で退けておいたものの、まだまだ土嚢系や肥料袋なんかもあって手間取った。さらにはどこで忘れ去られたのか、ジャンパーやパーカーのようなものが正に「濡れ衣」状態で重なっていて、動かすのにひと苦労。その後には待っていたのは、とにかく大量のプラスチック包装類。見かねた清先生も、竿をひとまず置いて、回収作業に加勢して下さった。上流側のスクープネタとしては、業務用ホイップクリーム（水際でケーキ？）、カード入れ、下駄状のサンダル、といったところ。哀れ、ぬいぐるみも一体、叢から掘り出された。中央部では、テニスボールが五つ、ミニサッカーボールとソフトボールが一球ずつと球技関係がなぜか多く見付き、ボールつながりか、「これは石鹼カスが固まったヤツかな」（先生談）と白いボツボツした微妙な球体も出てきた。「弥生ちゃん、本多さん」 中央部にゴミを寄せ集めたところで、櫻が下流側に声をかける。



「今、行きまーす」 今日がクリーンアップ初参加のはずだが、すっかり順応したような感じで威勢がいい弥生の応答。業平は四十五リットルいっぱい、木片やらペットボトルやらホースを詰めてノロノロ戻って来た。弥生は、テレビの筐体のようなものを抱えている。

「それって、テレビの枠？」 蒼葉が訝（いぶか）がる。

「不法投棄にしちゃ、枠だけってのもねえ」 軽々と持ち上げて見せる。

「プラスチック再生工場に持ってくか」 さすがは清掃部おじさん。でもそれって冗談じゃ？

「知り合いのところに持ってってみるよ。あと、さっきの濡れ衣も」 これで重量系が多少減りそうだ。頼もしい限りである。

人数が多かった分、量の割には作業時間の短縮に成功。作業開始から三十分ほど、つまり十一時過ぎには干潟上のゴミは概ね片付き、大まかな分類も終わりつつあった。さすがにヨシの根元のゴミは除去しきれていないが、刈ったところはスッキリできて一歩前進。全体的には上々である。

【参考情報】 [クロベンケイガニ](#) / [テレビの筐体、濡れ衣、ゴム長...](#)

14. お天気 夏モード

前回活躍したカウンターがリーダーのバッグから出てきた。「小梅さん、これ使ったことある？」 櫻流のコーディネートが光る。「わあ、意外と重いんですね」

「では、男性諸氏は大物を仕分けてくださいな。お姉さんチームは細かいのを分類しますから」そして少女に一言。「分け終わったのを数えてね」 小梅は嬉しそう。清は休み休み、調査を手伝う。

「誰だ、こんなところに雑誌の束、捨てて」

「回収業者が投棄したんでしょうか．．．」

「業者って言えば、このレンタルビデオのケースもそうかな。廃業してポイ？」

男性諸氏はこんな調子。清曰く、「昔のゴミは自然素材のものが中心だったからなあ」

ワースト1：食品の包装・容器類／百五、ワースト2：飲料用プラボトル（ペットボトル）／五十九、ワースト3：フタ・キャップ／五十二、ワースト4：プラスチックの袋・破片／三十三、ワースト5：硬質プラスチック破片と紙パック飲料がほぼ同数で二十三前後、という結果が得られた。大袋の他に、ゴミの入ったレジ袋もいくつかあって、要するにかさばるものが目立っていただけで、品目ごとに数えてみれば前回よりは減っていたことがわかる。一同、特に三人はその成果（減少傾向）に安堵を覚えるのであった。

「さあ、本日の『いいもの』を紹介します。弥生さんどうぞ！」

「エ、いきなりそんなあ」

「お立会い！ タネも仕掛けもないこのケータイ．．．」 弥生のケータイを指差し、促す櫻。絶、いや舌好調である。

「いいぞ！」 おじさんが竿を振って盛り上げる。

「ええと、まずURL打って、隅田さんに用意してもらったサイトにアクセスします」 小梅は弥生の手元を覗き込んでいる。

「次はIDとパスワードを入れて、と」

「ほお、ここでIDかあ」 業平も感心。清は首を傾げつつもこやかに見守る。

「某区のテンプレートを選択して読み込むと．．．」 ちょっと時間はかかったが、データカード画面のケータイ版が出てきた。

「おお、感激！」 千歳も実機で見るのは初めてだったので、感無量のご様子。

「まだデモですからね。一応、上からお願いします」

スクロールに少々手こずるものの、当区における可燃・不燃の別に応じた品目と数量の入力はうまく行った。この間、約五分。これは実用ベースだろう。

「あ、れれ！」 その他の品目の名称と数量を追加で入れようとした時、アクシデントは起こった。「データ保存ボタン押したら、エラーになっちゃった。へへ」 だがエラーコードが返っただけで、入力したデータは保持されている。さすが弥生嬢。

「保存後はもう一回そのデータを呼び出して、続きができるように、って設計したんですけど、今日はこの状態で一旦送信して、追加分をまた別便で、ってことにしますね。データメールは同報で、隅田さんと櫻さんのところに、すみません、二つ届くと思います」

「いやあ、そこまでできてれば上等だよ。特許とれるんじゃない？」

「バッテリー切れる前に早く送信！」 蒼葉が急かす。

送信ボタンの方はエラーにならず、無事送れたようだった。

「これで清書しなくて済む訳ね。あ、あと追加情報は？」

「さっきのその他品目を入力したら、こっちの画面に切り替えます。その前にもう一度、ログインしますね」 ケータイ初心者の櫻も興味津々で画面をチェックしている。蒼葉も違う機種でトライし始めた。

「じゃ俺はあっちにいるから」 千歳は傍観していたが、他の若者はケータイに夢中。清は、ゴミを数値化する調査型クリーンアップの手法に十分驚いていたので、それをさらにケータイで、となった時点で驚きの許容範囲を超えてしまっていた、ということらしい。（これを「驚容」というかどうかは本人も知らない） 草刈り改め、釣竿おじさんに千歳が声をかける。

「清さん、すみません。何か内輪の話になっちゃって」

「いやあ、この年になってまだビックリさせられることがあるってのは幸せなことだよ。あれでゴミが減らせるなら、大いに結構。荒天決行、ハハハ」 キープしておいたスノコもどきを持って、積石方向へ蟹股で歩いていく。長靴なので、水際もそのまま進行。エサを仕込んで、針に付け、竿をヒョイ。石に渡した板に座り込んで、引きを待っている。

一連のデータ送信を終えたところで、若者衆がゾロゾロと先生のもとにやって来た。

「おっ！ 来た来た」

若者一同「?!」 「マハゼですな。江戸前と言やあ聞こえもいいけど、俺に釣られるようじゃ雑魚だね」 大笑いしたいところをこらえている諸兄が約二名。

「清さん、さわってもいい？」 小梅が手を伸ばす。

「手乗りハゼだ」

「何かカワイイ」

「これ、から揚げにして食べられるって本当ですか？」 櫻が思い出したように呟く。

「ちゃんと捌いて、サッと揚げればね。美味しいよ」

今は弥生の手の上にいる。捌かれる話を聞いて驚いたか、ハゼ公が体をくねらせるものだから「ヒーッ」となる。隣で蒼葉は目をパチクリ。少女も同様に目を見開きながら、

「えー、食べちゃうの？」

「お嬢さん、それは自然の恵みって言ってね、悪いことじゃあない。し潟が今日みたいに元気になれば、もっと増えるから大丈夫！」

「しがたなくないって、さ」

「業平さん、また干潟一周したいの？」

こんな感じで過ごしていると時が経つのは早いもの。十一時四十分を回っていた。だがご一同は正午までの心積もりで来ているので、まだその場に残っている。業平は一人やや距離を置いて、積石の隙間を覗き込んだりしている。

さ「ハゼの他には何が？」

「ボラとかスズキとかかな。網を使えば大漁ってこともある。でもね．．．」 ハゼを川に放ちながら、「本来は荒川にいないような魚が獲れることもある。この間のソウギョもそうだけど、サケとかかな」

あ「サケって、鮭？」

「俺は酒なら何でもいいけど、荒川にとっちゃ鮭は迷惑な話さ。放流イベントってのは絵になるから、ついやっちゃうんだらうけど、困ったもんだよ」 ちょっとした講義になってきた。

「イワナって知ってるかい？ 源流ならどこでもいそうだけど、水系によって種類が違うんだ。荒川なら荒川に合ったイワナじゃないとダメなんだな」

「放流問題って、聞いたことがあります。外来魚ってバスとかだけじゃなくて、そういう一般的な魚も川によっては外来になるんですね」 千歳が切り込む。

「まあ、外様っていうか。よそ者はよそ者だあな」

「生き物の世界は多様性尊重とはいけど、何か違うんですね」 櫻も続く。

「人間が余計なことをして多様性を壊してるってことだ。放流するなら、自然に迷惑をかけないやり方で、な」 再び竿をヒョイ。

「ねえ、櫻さん、私、自由研究でここに来てもいいですか？」 小梅が目をキラキラさせて尋ねる。

「そりゃ、もちろん。清さん、ここって別に許可制じゃないですよね」

「河川事務所が文句言ったら、俺がし、ひ、一言言ってやるさ」

「自由研究かあ。夏休みの宿題？」 弥生がすっかり優しいお姉さんになっている。

「生き物とゴミのこと、調べようかなって」

「一人で平気？」

「お姉さん達と一緒にいいなあ」

「ハハ。お兄さんとおじさんは？」

「あ、そうか、ゴメンナサイ」

かくして、七月の第四日曜日が候補日として挙がった。「私、もしかすると撮影、あ、いけない」 額に手を当てる蒼葉。

「男性お二人はすでにご存じよ」

「なあんだ、櫻姉のおしゃべり。干潟三周！」

なんだかんだで正午近くになってきた。梅雨の晴れ間ながら、陽射しは十分、夏モード。男衆は日焼け気味？ こういう時、半袖ってのは一長はなくて一短なのである。

「櫻さん、そのハットいいですね」

「もっと大きいと日傘ハットって言うんですって。これは小振りだけど、一応熱中症対策」

「熱中って、何に？」 千歳の方を眺める弥生。櫻は涼しい顔をしている。

髪を束ねなかったのは、首筋が灼けるのを防ぐためだったようだ。弥生は着帽しているからいいとして、蒼葉は大丈夫だったのだろうか。

「仕事柄、より強力な日焼け止め塗ってますから」 さすがである。

引き続き、ハゼ釣りに興じる掃部公。「ああ、さっきの大袋、木箱に載せといてな」 引き揚げる一行に片手を振ってご伝令。

「じゃ、清先生、三週間後、いらしてくださいね」

「どっかのママさんみたいだな。ハイヨ」

ハゼのヌルヌルと干潟の泥で手に違和感が残る小梅と弥生。千歳が持って来ていたバケツの水がここへ来て役に立つ。

こ「何か生ぬるいし」

や「お日様のせいね」

「ハイ、タオル」 櫻のバッグは玉手箱のようにいろいろと入っている。「あと、軍手はこれにでも入れて、また持って来てね」 業平がようやく戻って来た。

「こんなものが挟まっててさ」 見ると何かのボルトと破断された管の一部が数点。

「これも業務用エアコンか何かの、かな？」

「管はコンプレッサの先っぽみたいだけどね」

「ま、写真撮って載せて、問いかけてみるか」

「ねえ、千歳さん、片付け後の写真まだでしょ？」

小梅を中央に配して、右に弥生、左に蒼葉、櫻と並ぶ。

あ「記念撮影？」

さ「どう？ 四姉妹ってことで」

こ「エヘヘ」

や「じゃ、千さん、お願いします！」

ここは一つ機転を利かして、「じゃ、皆さんこれでいきますよ」 袋から取り出したるは、

「ハイ、ホース！」

業平はボルトを紙片にくるみながら、ククとかやっている。「千ちゃん、それじゃ口元がニツてならないよ」

「ハイ、ポーズ、のつもりだったんだけどなあ」

四姉妹はどんな顔で写ってようがお構いなし。何故か結構ウケている。「千さんて、そういうキャラ？」 「櫻姉のせいだよ」

小梅はお兄さん達に近寄って、「今度は隅田さんと本多さん」

千歳のデジカメは櫻が預かり、「千歳さん、掛け声はこれでなくちゃ」 ビールの空き缶をかざす。

「ハイ、ビール！」 おそれいりました。蒼葉と弥生はケータイでパシャパシャやっている。

「ウケるー」 って、いったい？

正午を回る。木片はさすがに搬出するのを断念。加工されている以上、人工物だが、プラスチックよりは害は少ないだろう、という判断らしい。干潟の奥の方に固めて置く。四十五リットル袋は、清に預けた分を除き、まるまる四つが満杯。あとは、いつものように資源ゴミの洗い出しをすれば完了である。カラスどももお昼なのか、今は不在。広々とした外野に水がほとぼしる音が拡散する。

「ああ、これをやってたんですね」 五月の目撃証言を語る小梅。

「橋からこのシーンが見られていたとはねえ」 業平は感心したらいいのか驚嘆したらいいのかわからないような口ぶりである。

空の袋にペットボトルが二十ほどまず入り、白いトレイが数枚加わる。半乾きの状態だが、業平は気に留めない。千歳のところに出す分として缶とビンが別口で集められる。状態のいい缶を選別しながらひと洗い。今回は「ボトル缶」が十ほど。フタを開けると時々プシュとかなって、呑み残しが出てくることもある。想定範囲内だが、ちょっといただけない。

「あ、あの私、そろそろ」 小梅はお昼をとる時間を逆算して、ソワソワし始めた。

「じゃ、何かあったら、ここに連絡してくださいな」 櫻は名刺を差し出す。そして、「今日はありがとね」

「ありがとうございましたっ」とお辞儀するや、小走りで少女は去って行く。後を追うように、弥生と蒼葉も「それじゃ、私達もこの辺で」と来た。櫻との関係について、蒼葉に一言申し添えておかないといけない千歳だったが、まんまと機会逸失。

「今日はどちらへ？」

「アキバかな」 彼女達の場合、娯楽を兼ねつつもトレンドウォッチ（学業？）のためのお出かけだったりする。

「いいなあ」 業平も行ったそうだったが、「いや、この後は三人でランチ。たまにはいいっしょ？」 再資源化ゴミはスーパー直行ではなく、千歳マンションに仮置きして、そこで乾かしてから持って行くという。

「それじゃ、いつものパターンで参りますか」 櫻は何の臆面もなく自転車を動かし始める。千歳はやや浮かない表情。業平はRSB(リバーサイドバイク)にまたがり、超スロー運転で二人に随行する。

小梅が急いでいた先も、三人が向かうのと同じ場所だった。「お姉ちゃん、クイックメニュー一つ」

「小梅、どしたの急に」 えらく元気な上に目をパッチリさせている妹が飛び込んで来たもんだから、驚くのもムリはない。受験を控えて益々ツンケン気味な姉に恐々としていた小梅だったが、この日は違う。干潟での体験や実姉以外の姉達との交流が彼女を後押しして止まなかったのである。

「あとでお小遣いから払うから、お願い！」

「ハァ、かしこまりました」 釈然としない姉君。高校三年生である。ツンケンの理由は多々あるが、一つは受験、一つは両親、そしてもう一つは「今日はお天気だから、ま、いっか」という言葉の通り、単にお天気屋さんである、ということ。雨の日だと、客にもどことなく冷淡になってしまうことがある。本人はあまり自覚していないところがまた怖い。小梅は空模様や雲行きを見ながら姉の顔色を窺うことになる。今日会ったばかりだったが、三人のお姉さんに強い親しみを抱くのももっともな話。蒼葉を羨んだのはそうした事情ゆえである。

ホットサンドとサラダを頬張りながら、アイ스티ーをゴクゴクやっている。お腹も空いていたようだ。スローフードとは言えないが、中学生の時分、これくらいの勢いはあって然るべき。妹のそんな姿をカウンターから見つめつつ、「昔はあの子、元気だったもんな」と高校生らしからぬ述懐口調で独り言。十二時半を回る。

「ごちそう様、塾行って来ます！」 姉は声をかけるのを逸する。妹は素早く外へ。すると、「おっと、お嬢さん」と業平、「小梅さん！」と櫻。千歳はひと足遅れで三人の鉢合わせ現場に到着。

「ああ、皆さん、どうして？」

「クリーンアップした後は、ここが定番なのよ。バイトの店員さん、クールだけど」

「え、店員て、もしかして...」

何気なく外を見ていた店員と目が合う四人。「私の姉です。石島(いしじま)初音(はつね)、受験生」

「エーッ！」 何という巡り合わせ、である。櫻は何かまだ聞くつもりだったが、やはり声をかけ損なってしまった。ハットを手にしばし呆然。

「こんにちは、初音さん」

「あの一、皆さん、小梅のお知り合いですか？」

「ええ、まあ。今日は大活躍でした」

「？」

女性どうしで会話が続く。今日は比較的空いているので、そのままレジ脇でOK。「私達、荒川の干潟をクリーンアップしてるんですけど、今日小梅さんにも飛び入り参加してもらって」

見覚えのある客二人に、長身の男性客が新たに一人。「あ、これがあったんだ」 櫻はA4の参加者名簿を引っ張り出して、自分からまず名乗る。「千住 櫻です。今日で三回目ね」 続いて、男性二人の名前を指差しながら、自己紹介を促す。

「隅田さん、毎度ご来店、ありがとうございます。本多さん、初めまして」 お行儀がいいのは妹と同じか。

「小梅、ご迷惑じゃなかったですか？」

「期待のニューフェイスですよ、ね？」 今度は千歳が櫻に目配せ。リーダーはコクリと頷く。

「今日の日替わり丼は夏野菜と合鴨丼、パンはホットサンドです。千住さん、どうされますか？」 好天だと愛嬌がいいというのは三人にはまだ知られていない。だが、それ以上に素性がわかったことと、小梅が元気だったのはこの人達のおかげ、というのが知れば接客態度も自ずと変わって来る、というもの。

「あ、二人ともマイカップ！」

「お二人に免じて、本多さんのアイスコーヒーも割引します」 初音はいつになくにこやかである。

大盛りサービスの丼をつつく男性二名。ホットサンドをゆっくり召し上がる櫻嬢。三人寄れば何とやら。食事の手が止まったまま、ということはなく、誰かが話せば誰かが箸を動かし、誰かが相槌を打つ、といった図になる。

「前回も同席させてもらえばよかった」

「エ、小松さんと一緒じゃなかったの？」

「あっさり、交わされてしまいました。へへ。スーパー併設のフードコートで一人ランチさ」 話はその複合商業施設に移る。「ちゃんと、回収した後どうなるかとか解説があってね。他にも環境云々の説明書きが掲示してあるよ。オレはバーコード集中読み取りレジ(?)に感心しきりだったけど」

櫻と千歳は顔を見合わせ、したり顔。取材する価値がありそうだ。業平はコーヒーを飲み干す。そこへ初音がタイミング良くやって来た。「コーヒーのお代わり、お持ちしますね。お二人はまだいいですか？」

「いいお姉さんだね。櫻さんも蒼葉さんにとってはいいお姉さんなんだろうけど」 業平らしいというか、イヤミがないのが彼らしい。「そうねえ。時々どっちが姉で妹かわからなくなる時もあるけど」 言っていることがわからなくもない千歳であった。

程なく、お代わりを持って店員さんが現われる。業平君のアイスコーヒー、なみなみと注がれている。「どうぞ、ごゆっくり」と言いつつも、動作が間延びしていて、何か話をしたような素振り。櫻が察知して、声をかける。

「ねえ初音さん、七月第四日曜日って空いてる？ バイト、入ってるかな」

「三週間後ですよ。調整できますけど、でも何か？」

「河川敷と干潟、来てみない？」

「え、いいんですか？」

日時、場所、持ち物なんかを走り書きして、「妹さんには内緒、の方がいいかな？ ま、都合が付けばぜひ！」 櫻さんやるなあ、と千歳君は毎度の如く感服。業平は禁煙生活に慣れたか、

今日はここまで一服もしない。平静を保ちつつ、女性どうしの会話に耳立てている。

三人ともコーヒー二杯目になったところで、話題が多岐になってきた。会社生活のあれこれ、通販カタログ、この付近の地域事情、掃部(かもん)先生の講座などなど。話がふと途切れたところで、今日はまたちょっと趣の異なるリラクゼーションミュージックが微かに流れていることに気付くお三方。音楽談議が始まった。

「そうだ、千歳さんてギター弾くんじゃ？」

「入社したての頃は、お互い曲を持ち寄って、打ち込みとかやったりした訳さ。千ちゃんのはコード進行用のギターね」

「エ、じゃあPCで作曲を？」

「オレは画面上で音符を並べる派なんだけど、鍵盤を使った方が早いんだよね。それも千ちゃん担当」

「あ、でも楽譜は読めないから、弾いた後で楽譜を出力して唸ったりして．．．」

「要するにメロディーライン主体の曲は彼で、リズムやベースだけでも何とかなる曲はオレって感じ、かな。二人あわせて、シンガーソングエンジニア」

「へえ」

「櫻さんは？ 何か楽器．．．」

「今はヒミツ。フフ」

十四時になり、初音はお帰りの時間。「では、今日はこれで。ご来店、ありがとうございました！」

「帰る店員さんにお礼言われるのって、何か変」

「礼儀正しくていいんじゃないくて。ねえ、千歳さん？」

「そうそう。こちらこそ、ありがとうございました。小梅さんにもよろしく、だね」

「ハイ、よくできました」

こんな調子で笑いが絶えない三人。初音ももらい笑いしそうになったが、あくまで店員としての振る舞いを通し、再度会釈して退出。外に出てから一笑し、天を振り仰ぐ。「あちゃ、西の空、ビミョーだし」 梅雨の晴れ間は今日限りか？

【参考情報】 [名物マハゼ](#)

七月の巻（おまけ） 15. 七夕デート

蒼葉から衣装を貸してもらうこともしばしば。お下がりならぬ「お上がり」である。夏至の日とは逆で今日は紺のシフォンスカートに、白地のロング丈Tシャツという装い。長めのカーディガンを羽織っているのは、「櫻姉、天女のつもり？」と妹にからかわれた通り、七夕を意識したコーディネートということらしい。千歳に設定してもらったデータベース画面への入力作業はひと区切りつき、あとはデータの連結とwebへの転載をいつお願いするか、という段階に来ていた。眼鏡を外し、冴えない空をぼんやり眺めながら小休止。文花は息を呑む。「櫻さん、眼鏡は？」 妹がモデルなら、姉は女優といったところか。あまり見かけない櫻の素顔にチーフは驚きを隠せない。

文花のそんな驚いた顔も、近視の櫻にはわからない。眼鏡をかけると、「じゃ、文花さん、私そろそろ調査に行って来ますんで」 時刻は十四時四十五分。

「今日は九時から来てたんでしょ。自己早番だったんだから、勤務時間繰上げにしたら？無理に仕事にしなくても」

「いいネタが見つければ、情報誌の記事の足しに、って程度です。期待しないで待ってください。じゃ！」

チーフに真相を話すと、どこにどう伝わるか予断を許さないのので、聞き出されないうちにそそくさと退席。「七夕デート、だったりして．．．」 文花は眼鏡をかけて、ひと仕事。

センターの最寄駅から、業平行きつけの商業施設までは、無料の送迎バスが出ている。橋を渡り、途中、千歳の住所の最寄駅（カフェめし店、キャッシュカードの一件があった銀行も同じ駅近在）を経由する。定員四十人のマイクロバスは、空席が多少残るくらいの客を乗せ、十五時ちょうどに出発。櫻はガサゴソと、色紙の見本のようなものを取り出す。「お店に着いたら、どこかで切らせてもらお」 バスは橋を渡り出した。干潟を探す櫻。信号待ちらしく、川の本流を過ぎた辺りで停車。「私達を見たって、嘘じゃなかったんだ」 小梅の視力に感心しつつも、こういう眺望の一つの要素としてクリーンアップする人々が映る（格好の良し悪しは別として？）、ということ客観的に認識するのであった。さすがはリーダーである。

降車はできず、乗車のみ。停留所で待つ乗客の列の先の方に、調査同行者はいた。某リテール系ながら、いつものジーンズではなくスラックス姿の千歳君。マイバッグも普段通りだが、さすがに今日は軽めに見える。

「千歳さん、こっちこっち！」 隣に確保しておいた空席へ誘導する櫻。ここからはせいぜい五分程で目的地に着く訳だが、その短時間が結構重要だったりする。「こんにちは。今日もまたイイ感じですね」 今日は、ではなく、今日も、とちゃんと言えている。数ヶ月前のシャイな彼は何処へ、というくらいの進歩である。

向かい合って話し込むことはあっても、こうして隣り合って座るのは実は今回が初めての二人。心なしか、ぎこちない感じもあるが、「漂着モノログ、反響とか問合せとか、どうですか？」 「桑川さんから、ツッコミメールが来たくらいかな」 てな感じで無難に過ごしている。座席はほぼ満席、立ち客もチラホラ。大声で会話できるような車内環境ではないが、ご兩人、ちょっと硬め。アラウンドサーティーの男女というのはこういうものなんだろうか。

「わぁ、大きい！」 建物を見上げての櫻嬢のご感想第一声である。壁面緑化も目を引く。屋上や大窓の一部にはソーラーパネルも設置してあるらしく、その発電量が入口に電光掲示されている。が、この薄曇りじゃせっかくの電光数字も「パッとしませんねえ」。ごもつとも、である。

インフォメーションで、フロアガイドの他に、環境配慮に関するリーフレットを入手。帰りのバスの時間もチェックして、「まずは作戦会議、しましょ」 今日もリーダーは櫻である。自然食のバイキングがあるかと思えば、ケーキバイキングの店もある。フードコートでも良かったが、ちょっと落ち着かない。

「ここ、デザートが二つ選べて、ドリンク付き。千歳さん、甘いもの平気？ あ、飴ダメでしたね」

「いえ、甘党だからOKですよ」

「変なの．．． ま、いっか。全面禁煙だし」

さすがにマイカップは使えないものの、ドリンクのカップは実証試験とやらで、しっかり回収・リサイクルする仕掛けになっている。早くも取材ネタである。

ミルクレープをつつきながら、アイスティーに口をつける櫻。焼プリンを掬いながら、アイスカフェオレをかき混ぜる千歳。この図だけ見ていると、確かにデート中のように見えるが、

「やはり本多さんがお世話になっている回収スポットが先でしょうか」

「その後、屋上へ行って見学できる設備を見てから、一階ずつ降りて来ますかね」

「スーパー以外で買い物する時もマイバッグ使えばポイントって付くのかなあ」

といった具合で、巷の男女とは会話の中味が違ってたりする。調査は調査ということか。

「その生クリーム、美味しそう」

「あ」

「いただきます」

千歳のシフォンケーキに盛られたクリームは、ケーキの一部ともども櫻のフォークによって運ばれ、瞬く間に彼女の口中へ。「へへ。すみま千でした。よければこれどうぞ」 モンブランを勧める。「ミルクレープは崩れちゃうからダメね。本当はシェアしたかったけど」 千歳君は何を食べてるんだかわからない状態になってきた。甘くて黄色い糸状の物体．．． 頭の中がモンブラン、である。「卵が違うような気がします」とか辛うじて感想を言ってみるが、うわの空。櫻は「ああ、契約農家の地卵使用とか、出てますね。じゃ、プリンも絶品？」 今度はスプーンが伸びてきた。今日も小悪魔さんな櫻である。

カップの回収筒を見ながら、

「今日は私もデジカメ持って来たんですけど、ちょっと旧式なので、千歳さんにフォローしてもらっていいですか」

「じゃ、こっそりね。こういう店内って撮影禁止だったりしますから」

「へへ。私も共犯？」



平面駐車場につながる大きめの出入口に、一大回収スポットはあった。ペットボトルはかなり大きめの函が用意され、食品トレイ、牛乳パックが並ぶ。おまけに「え、自社ブランド（PB）の衣類もOK？」と彼女を唸らせる内容の貼り紙も。店内カウンターへお持ちください、とある

。

「こういう回収ルートがあるなら、この間みたいに衣類が漂着することはないと思うけど」

「いや、きっと川で洗濯したら流されちゃった、て」

「千さん、マイナス1,000点！」

笑いをこらえているようにも見えるが、咳払い一つ、「紙パックとかペットボトルの再生方法は何となくわかるけど、食品トレイがプラスチック素材に戻せるってのは知らなかったなあ。トレイはトレイで循環させるだけだと思ってた．．．」業平の言う通り、再生後の用途がしっかり掲出してある。荒川漂着ゴミもほんの一部ではあるが、ここに届けられ、再製品化されていることがわかりホッとする。が、しかし、である。そもそも捨てられないよう、漂流させないようにするには、の方が先だろう。先刻とは違う理由で固まっている千歳。櫻はそれを知ってか知らずか、

「ねえ千歳さん、お店の人にも荒川の現場、見てもらうと何か変わるんじゃない？」さすがは櫻さん、である。場所を問わず、機転が利く。だが、より説得力を持たせるには、その店が売った商品、またはPB商品であることがハッキリしている必要がある。売り放しではなく、循環させるところまで面倒を見てこそ、社会的責任も果たせるというもの。自店を起源とするゴミであることがわかれば、そうそう放ってはおけまい。最低限のCSRである。

そんなような話をしつつ、エレベーターで屋上へ直行。少し薄日が射ってきて、パネルが鈍く反射している。緑化と呼ぶには物足りない観もあるが、テラス式庭園も展開してあって、憩えるようになっている。

「光と緑の広場ですって。掃部先生が見たら、何て言うかしら？」

「多分、ひかりとひろばって発音できないから、違う世界になりそう」

「しかり、になっちゃう。お叱り？ ハハハ」

まだ笑いが収まらないご様子の櫻を引き連れるようにして、今度は階段で降りていく。三階の文具売場には、「エコ文具コーナー」が併設されていて、ペットボトル再生系その他、食品トレイ（PS(ポリスチレン)）を再生した筆記具の数々が並んでいた。「要するにプラスチックを使う部分には、再生プラを適用できるってことでしょ」なあーんだ、とでも言いたげな口ぶりだったが、「あ、ハサミ」取っ手というか、指穴を包む部位に再生材を使っているため、一応エコ文具である。再生材の感触を確かめるのかと思いきや、何色か見本紙を取り出し、ザクザクやり始めた。細長い紙切れを作っている。

「櫻さん、それって？」

「あ、切れ具合を試しているだけですから。フフ」

眼鏡が光れば、ハサミも光る。これ以上は詮索しない千さんだった。

メモリカードを入れると、プリントアウトできるセルフプリント機が二人の足を止めた。

「この間の集合写真、出しましょう」

「へえ、これでねえ．．．」

四姉妹の写真なので、四枚でいいのだが、「私と蒼葉の分は一枚あればいいの。この一枚は千歳さん持ってて。で．．．」 操作を覚えた櫻は、自分で硬貨を追加して、中二少女+三十男の写真を四枚プリントアウト。「この一枚、頂戴」と来た。面白半分か、それとも．．． 「何なら店内で」とポートレートをその場で撮って渡すこともできなくはないが、店内撮影禁止というのが引かかることもあってパス。ま、自分のはいいとして、今日の櫻さんはどこかで撮っておきたい、そんな想いに駆られる千歳。心の中で、笹の葉がサラサラ音を立て始めた。

期せずして、楽器店が現れた。試奏コーナーらしき仕切られた空間をめざとく見つけた櫻は、同行者を誘いつつ、アップライトの電子ピアノに着席。音を確かめつつ、「CDとか写真のお礼を兼ねて、一曲披露させていただきます」

先だっけの音楽談議の際、秘密にしていた件は、つまりピアノ奏者だった、ということらしい。奏でるは千歳が貸したCDの一曲、ストリングスとピアノの例の佳品である。ストリングの部分もアレンジしてピアノ一つで巧みにまとめている。耳で憶えてここまで弾きこなしてしまうとは．．． 六分近くの曲だが、多少はしょって五分程度。だが、その五分は何事にも代え難い、優雅な時間となった。時を紡ぐ音楽というのはこういうのを指すのだろう。

弾き終えて、会釈する櫻。言葉を失いかけた同行者は、我に返ったように「素晴らしい演奏でした。よくそこまで」と言うのがやっと（内心は大拍手）。櫻はちょっと照れた面持ち。これってシャッターチャンス？

「今度、千歳さんの曲も聴かせてくださいね」 こう不意を衝かれてしまっけは、ポートレートを撮るところではなかつたりする。

二階は衣料品中心。自社ブランド服の売場では、確かに古着回収コーナーが設けられている。

「流れ着いた服でも、ここの商品だつてわかれば引き取ってくれるのかなあ」

「普通に洗濯しないとダメでしょうね」

「千さんは川でセンチク．．．」

だいぶ慣れてきた千歳だつたが、ここまで来るともう笑うしかない。今度は櫻が千歳を引っ張るようにして、一階へ。イベント広場にやって来た。

「今日は七夕ですものね」 この手の商業施設では当たり前、とでも言おうか、大きな七夕飾りが施してあって、竹枝には短冊が吊るせるようになっている。その場で思い思い願い事を書き綴る家族客。そこに二人も紛れるが、「千歳さん、これ使つて」 渡された短冊はエコハサミで試し切りしていた一枚だつた。

「これって？ 何か特殊な感じだけど」

「水溶性なんですつて。ある紙メーカーから見本でもらったんです。とにかく、書いてみて」 勧められるまま、ペンで願い事を書いてみる。このペンも軸やキャップが再生プラのようだ。なかなかの徹底ぶり。「じゃ、短冊持って、荒川に行きましょ」

業平がRSB(リバーサイドバイク)でさつと乗りつける位置合いにあるこの施設。荒川河川敷に

もすぐに出られるのが特徴。曇ってはいてもまだまだ明るい。今、正に七日の夕べ。いつもと勝手は違うものの川辺を歩くのは馴れた風の足取りで、二人は水際へ通じる細道を悠々と進んでいた。ゴミ箱干潟のある場所と同様、ヨシが屹立(きつりつ)し、微風にそよいでいる。川を覗き込むと、そこは僅かばかりの砂地が顔を出している程度。それでも何となく似たようなゴミ景色が散見される。「ああ、ここでも．．．」 呟く千歳。彼の肩をたたく櫻。「今日は川の日だけど、七夕よ。ゴミは目をつぶりましょう」 川の日だからここに来た訳か、と今になって合点が行くも、じゃ短冊は．．． そっか！ 「ここに付けるのがやっとな。千歳さんも付けて」 ソーイングセットから引っ張り出した糸を使って結わえている。笹の代わりにヨシというのが風流である。

こうして、二人の願い事は荒川の畔でサラサラと揺られることとなった。「荒川がキレイになりますように」に対し、「川・街・人が元気になりますように」とは櫻の一枚。水溶性の紙を使ったのは、一応、環境配慮を考えてのことだが、「何かその方がロマンチックかなあって」とのこと。「あ、そうだこれも．．．」 櫻はもう一枚、付け足しに戻った。

「なあんだ、櫻さん、ズルいなあ」

「いいからいいから」

何て書いてあるのか気になる彼だったが、逆方向に背中を押されては仕方ない。代わりと言っては何だけど、ここで一枚、写真を撮らせてもらうことにした。題して「ヨシと織姫」。フラッシュなしでも上手く撮れるのがありがたい。櫻は俄かカメラマンに気を留めることもなく、真剣に括っている。「あ、もう五時過ぎ。戻らなきゃ」 彼女が残した一枚には、何やら相合傘らしき絵が描かれていた。川の神様、聞き入れてくれるだろうか。

川沿いにこのまま歩いて帰ることも可能なのだが、天気も不安定だし、実は肝心のスーパーの調査をしてなかったため、再び店に戻るご両人。「蒼葉に怪しまれるから、今日はここで弁当買って帰りますね」というのも理由の一つ。つまり、七夕デートにしては、映画館にも行かず、ディナーもなし、なのである。弁えというか、抑制の効いた距離感がわかるというもの。さすがはアラウンドサーティー？

平面駐車場はよく見ると、廃タイヤなどから再生したゴムチップが路面舗装に混ぜられていたり、車止めがさりげなく再生プラだったり、でネタが尽きない。店外なら撮影自由(?)ということで、ちょっと暗めながら何枚か記録する。この調子だとスーパー店内もネタに事欠かないだろう。撮影できないのが惜しい。

タイムサービスが始まった直後ということもあって、弁当・惣菜コーナーはちょっとした人だかり。「廃プラ回収があるから、まあ許されますよね」 櫻は二人分の弁当類を手にする。干潟ではおなじみの容器類。使い捨てを助長する側面はあるが、ゴミにするかしないかは、買った人の意識に委ねられてもいる。

「いわゆる容器包装って、事業者責任がどうこうって言うけど、購入者責任てのもありますよね」

「売場とは逆の発想で、商品の『戻し場』なんてのを作ったら、ゴミは随分減るでしょうね。用済みの袋とか容器とかを家から持って来て、同じ商品か、類似した商品の棚に返すって。現実的じゃないかも知れないけど」

「循環型、ってそういうのを言うんでしょね。あとは、量に応じてキャッシュバックされるとか」

容器の一部に実験的にバイオプラスチックを採り入れ始めたことが紹介されている。漂流・漂

着することがあっても、いつかは自然分解し得る、となればクリーンアップする側としては手間が減る訳だが、「やっぱりリサイクルに回すのが筋ですよ」 生分解性プラスチック（BDP）、バイオマスプラスチック（BMP）の別を問わず、リサイクル適性はある。櫻がどこまで知っているかは不明だが、現場経験を少なからず積んだことで、そういう循環志向然としたものが自ずと身に付いたようだ。

発明家が感心していたバーコード一括読み取り機があるセルフレジへ行き、クレジットカードを通す。

「櫻さん、そのカードって再発行した例の？」

「へへ、そうです。お恥ずかしい限り」

でも、そのカードの一件があったから、今こうしてここに二人が居るのである。随分と昔のことのように思い返す千歳。カード様様というのは大げさか。櫻はマイバッグに詰めると、スタンプを押してもらいにサービスカウンターへ。その間、千歳は通常のレジで会計（電子マネー利用）し、その場でスタンプをもらう。調査を兼ねてのお買い物。こういう客が来ると、店側も張り合いが出るだろう。

最終の送迎バスは、十八時発。混雑を予想して十分前に乗り込み、座席を確保する。そんな計画的なお二人さんは、次のクリーンアップのプランニングにも余念がない。

「今度の自由研究向けクリーンアップは参加者限定でいいんでしょうけど、定期的なクリーンアップの方は、今後どうしますかね？」

「そうですね。私は今のままだもいいと思いますけど、もしオープンにするなら、いろいろと注意事項とか実施手順とか考えないといけませんよね。ボランティア保険の対応とかもあるし」

「そうか。受付とか、見張りとか．．．」

「流域で一斉に取り組む時だけオープンにするとか、ね。ま、ゆっくり考えましょ」

櫻は思うところがあるようで、一人コクリと頷き、ニコニコしている。いわゆる会場運営について、櫻とは同意見であることがわかり、千歳もホッとひと息つく。

二人を乗せたバスは、無情にも順調に走行し、五分と経たぬ間に最初の停留所に着く。今日はこちらまで憂い顔をしなかつた櫻嬢だったが、ここへ来て急遽顔が曇った。「じゃ、櫻さん、また」と千歳が手を振って降車しかけると、あわてて席を立ち、

「あーあ、降りちゃった」

「櫻さん、たら．．．」

何人かの客とともに二人を降ろし、バスは右折。橋の方向へ去って行った。

「淑女が一人で橋を渡って帰ろうとしています。千さんなら、どうします？」

「拙宅経由、でいいですか？」

「ドキ」

「いや、荷物を置きつつ、自転車を、と思って」

「あ、そうですね。ハハハ」

櫻は自分でもよくわからない感情に押されている。ただ、わからないとは云っても、そういう状況にあることが彼に少なからず伝わっている、という点は察知していた。だが、根本的にシャイな千歳君は、残念ながら鈍さが先に立つ。心の中は二人して、笹の葉状態？ いや、サラサラというよりはフワフワか。

自転車のカギは持っている。買った弁当類を郵便受けに入れて来るだけ。女性心理への反応は

鈍足だが、それに反比例するように、この行って戻っては実にスピーディーだった。

「あれ、もういいんですか？」

「暗くなっちゃうといけないから」

河川敷に出たからは、いつもなら干潟方面に向かう千歳だが、今夕は左折して橋へ。自転車をかなりゆっくり押しながら進むも、櫻の歩速はそれ以上にノロノロ。自転車を押す人物は違えども、状況は似通っている。五月の回の緊張感が甦ってきた。しかし、

「今日の調査結果はまとめりそうですか？」 二ヶ月という期間、そしてその間の場数というものが彼を多少は進化させていて、ごく自然に緊張感を解いてみせた。櫻はキョトンとしつつも

「私もブログ始めればいいのかなあ」

「センターのホームページの中に『櫻さんコーナー』作ったら？」

「情報誌の方が優先だから、手が回るかどうか」

「ブログに記事を書きためておいて、余力があれば紙面に編集し直せばいいんですよ」

「そうかあ。千さんに1,000点！」

てな訳で、またセンターに顔を出すことが決まりそうな予感。「そうそう、データベースの進捗状況も見てもらいたいし」 櫻の晴れ晴れした表情が空模様にも乗り移ったか、西の方が明るくなってきた。オレンジの光が微かに川面に跳ね返っている。干潟が望める場所に来て、ちょっと立ち止まってみる二人。

「かくして、織姫と彦星は離れ離れ．．．」

「え？」

「千歳さん、名残惜しいけど、また一年後、ね」

「今日、エイプリルフールでしたっけ？」

「フフ。またデー．．． いや調査にご一緒してくださいね」

「あ、ハイ」と千歳が言葉を継ぐところ、すかさず「じゃ、織姫はここで失礼します。ありがとうございましたっ！」 やや早歩きで先を急ぐ一人の淑女。長めのカーディガンは、その広い袖とともに、ヒラヒラと舞っている。織姫、いや天女？ 千歳は幻を見ているような錯覚とともに櫻の後姿をしばし眺めていた。潮は満ち、干潟は大方隠れている。水位が増す程、織姫と彦星の距離は遠くなる。川は男女をつないだり隔てたり、不思議なものである。やがて櫻姫の姿は見えなくなった。川を漂うオレンジの紋様が哀愁を誘う。彦星は家路に向け、ゆっくりと自転車を漕ぎ出した。雲の切れ間は閉じたり開いたりを繰り返している。天空の川は現われるだろうか。

【参考情報】 [飲料容器の店頭回収](#) / [回収スポットの例](#) / [バイオプラスチックって？](#)

16. 学びの場

夏休み最初の日曜日に向け、櫻リーダーは当日の段取りなどを思い描いていた。「蒼葉は来ないけど、弥生ちゃんと十代姉妹と先生と千．．．」千歳さんと言いかけたところで、息が上がり、ハッとする。説明しにくい感覚である。「少人数だから、終わったらその場でお弁当、かな。多めに用意すればいいんだし」次回打合せの日程調整の件に加え、弁当の提案を盛り込んで、千歳と弥生に同報メールを打つ櫻。「そう言えば、業平(ごうへい)さんて来るんだっけ？」 p.s.でその旨の確認も入れて発信。

弥生からはツッコミ系、櫻からはこんな感じの業務連絡系、そしてこの二人ほどではないが、文花や南実からも時にメールが来るようになっていた。名刺交換した甲斐があったと言うものだが、こっちのお二人からのメールは、内容的には漂着モノログに関するあれやこれやで一読する限りは当たり障りがない一方、どこか探りというか思惑めいたものが行間から感じられるのが特徴。こういう探りの入れ方は即ち研究機関関係者ならではの業なのか。仕事のメールはそこそこ捌(さば)けるものの、こうしたメールの処し方には正直窮する千歳君であった。七日を過ぎて以降、文花からは「七夕は何かいいことありました？」とか、南実からは「櫻さんにもよろしくお伝え何々」とか。で、共通していたのは「何か面白い話があれば教えて」系の一文。櫻から弁当提案の話もあったことなので、研究機関の先輩・後輩それぞれに夏休み最初の日曜の臨時イベントの予定を書いて、サラリと返信。フッと息をつく彼だが、この件、リーダーにお伺いを立てなくてよかったのかな？ 梅雨が本格化し始め、この日も雨。自由研究デー当日の空模様、そして人間模様が気がかりである。

朝方まで雨が残っていたものの、日頃の行いが善いせいか、今は何とか曇り空。屋外のイベントでは、天候の如何によって決行とか中止とか、連絡を回し合うものだが、千歳も櫻もケータイ不所持なものだから、出たとこ勝負になっているのが実状。参加予定者が限定的なのでメールで連絡がつく人には同報で流してもいいのだが、ブログの中に一筆載せてカバーしてみる。天候不順、足元不安定ながら、一応決行の旨、モノログの一角に掲載。集合時刻の一時間前のことである。

櫻の方は天気のことなどお構いなし。着々と弁当の準備を進めている。「蒼葉あ、レジャーシート、持って来て」 備品の方も万全を期す。「まるでピクニックね。あ、一つ頂戴」

切ったばかりの粒々パンに、櫻風デリの一つを乗せて早々と口に運ぶ。

「蒼葉ったらあ」

「毒見ですよ。誰かさんに食べてもらうんでしょ」

「．．．」

何かマズイこと言ったかな、と口に手を当てつつ、妹は先に家を出る。「あ、私もそろそろ出なきゃ」 時計は九時半を指していた。

「あれ、千歳さん？」 橋を折れて河川敷道路をしばらく走っていたら、いつもなら徒歩の彼が前を自転車で走行中。ノロノロ運転（河川敷ランナーの方が速い）なので、ちょっと加速すれ

ば追いつきそうなものだが、あえて距離を保ちながら尾行するように走る櫻。「PC系は速いけど、普段はスローなのかな。ハハ」 湿気を含んだ蒸し暑い風が時折吹いてくる。風速二から三メートル、といったところか。自転車を飛ばせば吹っ切れる気もするが、かえってジメジメ感がまとわりつきそうな気も。千歳としても風が絡みつく感じは受けていたが、それ以上に「何か後ろに気配というか．．．」 干潟方面に下りる坂道の手前でふと停車。櫻はあわててブレーキをかける。「あ」

「なーんだ、櫻さんじゃあないですか」

「ハハ、バレちゃった」

「声かけてくれればいいのに」

「淑女は奥ゆかしくなくちゃ。あ、でもどうして自転車なんですか？」

「資源ゴミ担当の業平君がお休みなので、代わりに、と思って。上旬はいいんだけど、月末が近くなると立て込んでくるみたいで」

蒸し暑さもあるだろうけど、どうも必要以上に顔が紅潮しているようだ。櫻は帽子に手を当てるフリをしつつ、頬を確かめてみる。今はちょうど水の準備中。顔にちょっと水を浸してみる。

「わあ、生ぬるいい」

当地での自転車デビューは、この少女も同じ。小梅は時にぬかるんだ土にタイヤをとられながら、グラウンドの脇をクネクネ走っていた。前方にはアラウンドサーティーのご両人。そしてその妹を追うように、直線的にRSB(リバーサイドバイク)を走らせるは姉の初音嬢。姉妹そろって来るかと思いきや、姉は妹に内緒で先発。カフェめし店を経由してのご来場である。

「お、おはようございますう」

「あら、小梅さん、あと、フフフ」

少女がこわばったような不可思議そうな顔をしているので、千歳が手でちょいと指し示す。

「あっ、お姉ちゃん！」

「来てやったぞ。隅田さん、千住さん、今日はよろしくお願いします」

妹は複雑な表情ながらもどこか嬉しそう。そんな妹を見て姉も微かに笑みを浮かべる。それにしてもさすがはティーンのお姉さんは、ハーフじゃなくてショートofデニムに、パーカ+キャミと来た。カフェ勤務中の落ち着いた服装に見慣れているだけに、この変貌ぶりにはビックリ。ヘソ出しまではいかないが、目の遣り場がちょっと．．． そんな三十男であった。「千さん、水こぼれてる」「あ、いけね」 水は大切にね。

定刻に現地にいるのは今のところこの四人。あとは弥生と掃部(かもん)先生が来れば、前回のお約束の範囲でメンバーがそろろう。その弥生は、自身同様アンテナは高いが、なぜか変わり者と評する弟君、六月(むつき)君を連れて、バスで橋を渡っているところだった。

「今日は本物の青ガエルが出てくるかもよ」

「東急のあの車両がいいの。オイラ、本物は苦手だし」

「あ、降りなきゃ」

あまり下車する人がいる停留所ではないのだが、この姉弟の他に、一人の女性も降り立った。長めのワンピースにニットを羽織り、「日傘ハット」を目深に被っている。薄色だがサングラスをかけているので、どこの誰かはこれではわからない。

「姉ちゃん、あの人、付いてくるよ」

「しかもクシャミしながらってのがまた気になるわあ。急ご」

何とも場違いな格好をしたこの女性。しかもサンダル履きだったりするものだから、歩くのに

は不利。若い姉弟にすっかり先を越されてしまった。「あの二人も干潟？」

こっちは濃い目のサングラスに麦藁帽。先生のバイクが徐行しながら近づいてきた。サングラスだけなら、チョイ悪オヤジが往く、といった態だが、麦藁がその演出を帳消しにしている。後姿だけを見れば、少年オヤジである。女性の方は何となく気付いたが、先生はわからない。「ありゃ海辺スタイルだな」この時、前方からは久々にあの人が向かってきていた。ただでさえ速さが出る電動アシスト車だが、力いっぱいペダルを踏んですっ飛ばして接近してくる。先生はただの自転車とっていたようだが、読みが違った。速い速い。

「キャ」

「ととと」

曲がる手前で速度を落としていたとは云え、ブレーキを制御し損ねた。右折する側が一時停止するのが筋だが、ところどころ濡れた路面がスリップを誘ったのである。直進すると思ったバイクが急に左折、というのもアクシデントの一因。後輪に危うく衝突しかけたが、運動能力が幸いしてか辛うじて回避。掃部公の方も先に曲がり切れると読んでいたので、右折車とわかっていながらブレーキをかけなかった。危ない危ない。

「危ないなあ、オヤジっ！」

「何だあ、そっちがスピード出すからだろっ」

アクシデントの現場を目撃していた女性が立ち止まる。

「先生、どうなされたの？」

お互いサングラスをちょっと上げて顔を見合わせる。

「おや、これは矢ノ倉女史。いや、このお嬢さんがさあ．．．」

「あ、先輩？」

「何だい、知り合いかよ」

「南実ちゃん、今のはあなたの一時停止違反。悪態ついちゃダメ」

「だって、急に曲がるんだもん」

「ね、掃部センセ」

「エッ、カモン．．． 掃部清澄さん、ですか？」

十時十五分になっていた。退潮が始まっていたが、まだ水位が高めなので陸から干潟を眺める四人＋姉弟がいる。リーダーは今回、受付用紙をちゃんと作ってきた。クリップボードにそれを挟んで名前を書きながら回覧する。初音と六月は干潟初登場だが、初対面が多い分、六月にはより負荷がかかりそうな場面。だが、姉から事前にレクチャーを受けていたようで、顔と名前をすぐに一致させると、「小梅さんて、先輩？」小学校が同じことをつきとめたりしている。変わり者というよりは、強者(つわもの)である。物怖じしない、人見知りしない、千歳としては見習うべきところ大である。初音嬢は「このゴミ、マジっすか？」とか言っちゃって、店内での言葉遣いと大違い。またしても面食らう千歳に対し、櫻は「マジなんすよ。ね、小梅さん？」てな感じで飄々とやっている。小梅は得意げに姉に解説を始めた。橋の近くではプレジャーボートが行ったり来たり。その波が寄せては返す。「先生来ないけど、そろそろ始めますか？」

細道は前よりも広めになった。六人は悠々と干潟へ下りて行く。すると、ヨシ群の後方から何やら問答調の会話が聞こえてきた。「あれ、またお客さん？」櫻は引き返して様子を見に行く。千歳は「いやあ、おそろいで来ちゃったよ」と内心焦りつつ、そそくさと干潟に着地。今のところ最年長の隅田氏は現場責任者の如く、「皆さん、潮が引いた直後はまだ凹みますから、足元

には気を付けてください。あと、刺さると危険なゴミもいろいろ落ちてますから、手にする時は十分注意して．．．」 陸から見下ろすのとはまた違う光景、そして漂着する物体のその異様さ・多様さ、初干潟の初音はしばし啞然としている。「前はもっと多かったんだよ」 妹が一言。今日は姉に対して遠慮は要らない。話しかけて怒られても、きっと弥生と櫻がかばってくれる、そんな安心感があった。だが、それは杞憂というもの。今日の実姉は昔のような優しさを垣間見せる。

「小梅、自由研究ってここ？」

「ゴミがね、生き物を困らせてるって聞いたんだー」

「手伝えること、ある？」

小梅は小振りの画板に画用紙を付けて、

「マップを描くの。で、カニとかハゼが見つかったら、その場所に描いて、近くにゴミがあったら、それも書き足して、って感じ。お姉ちゃんはあとでチェックして」

「カニ？ ハゼ？」

「ハゼはね、あのオジサンが釣ってくれるんだ」

蟹股のハゼ釣りおじさんが「ワハハ」とかやりながら下りて来た。南実がひと降り、続いて櫻が文花の手をとりつつ何とか着地。道が拡がったのに加え、ここの段差もこの数ヶ月間で人の行き来ができたせいか、他の釣り人が手入れしたか、上り下りしやすいような勾配になっているのだが、サンダル履きでは難がある。しかも大きめのカゴ状のバッグを提げていては仕方ない。

「あれ、さっきのクシャミさんだ」 咄嗟(とっさ)のツッコミは六月君。すかさず「クシュン、ハァ」 千歳は笑いを堪えるように、「文花さん、何だかお忍びの芸能人みたいですね」

「ハ、そう？ クシュン」

「ハハ、俺が刈った後でまた出てきたか。だから根絶やしにしねえとダメなんだ」

「まさか私がイネ科花粉症だったなんて、ハ．．．」 (クシュン)

可笑しそうな表情を見せながらも、怪訝顔の櫻。「矢ノ倉さんと小松さん、です。えーと、元先輩と後輩のご関係、でいいですか？」 ボードを取り出し、記名を勧める。

「欄が手狭だけど、先生は別格だから．．．」

「ああ、俺はこれがあるからさ」と言いつつ、「清掃部」と書かれた大きめの名札を着用。「清掃部のかもん・きよし先生です。へへ」 小梅が紹介する。

「ありがとさん。それにしても、今日もまた美人さんばかりだなあ、ヨシヨシ」

かくして人数が増えることを見越したように水位が下がった干潟には、総勢九名の男女がそろった。六月は早速、名前を確認しつつ、呼びかける。

「墨田区に文(ぶん)花(か)ってとこありますけど、『ふみか』さんなんですよ」

「文花なんて、よく知ってるわねえ。雨水の調査で一回行ったことあるけど、六月君、何かご縁でもあるの？ ハ、ハァ」 (クシャミ中断)

「東武亀戸線の駅めぐりしたんです」

実姉は年が離れて話にならないとか言っている割には、さらにお年(この日の女性最年長)の文花にはこの調子。姉のラフな格好に見飽きているせいか、エレガントなこの海辺スタイルがお気に召した、ともとれる。

十時半を回った。改めてリーダーの出番である。「じゃ、小梅さんと六月君はさっき眺めてもらってプランができたと思うから、その自分で考えたプランに沿ってまずは調べてみてね。で、二人のお姉さんはサポート役、でいいかしら？」 手を挙げる弥生と初音。「じゃ俺はまたウロウロしてればいいかな」 先生はすぐにでも釣りに興じたいところだったが、どうも干潟の様

子がいつもと違うことを察したようで、その点検を兼ねての志願だった。五人は何となく動き出した。

次に櫻は千歳の方をチラと見てから、

「チーフはクシャミが止まらないみたいだから、被害が少ないところを探して、って言いたいところだけど、干潟を見下ろせる場所で見張り役ってのはいかがですか？」

「でも、折角下りて来た訳だし、ちょっと散歩してから、じゃダメ？」

南実首を振っているが、現場経験が少ない文花としては、一遇のチャンスである。「何が出てきても知りませんよお」クシャミしながら、ソロソロと歩くチーフ。どうも危なっかしい。

「私、この束突っついてますね。何か出てきたら、あの子たちにも」

「ゴミ相談室ね。了解です。そうそう、千歳さん、ちょっと」

陸に上がる二人を見送りつつ、南実は「やっぱり？」と訝る。ヨシ束の周りには飲みかけでフタをしたペットボトルが転がっていて、その甘味をキャッチしたか、小アリが行列を作っている。「ホレホレ」アリの枝で散らす南実。ちょっと荒れ気味のお嬢さんであった。

「千さんたら、ヤダなあ。二人が来ること知ってたら、段取りアレンジしたのに」生乾きの草地にレジャーシートを二人で展(ひろ)げつつも、いつになくご機嫌斜めの櫻がブツブツ口調。千歳はあわてて、

「いえ、お二人から何かネタがあれば知らせるように頼まれてたんで、こういうのがあるよって。本当にいらっしゃるとは、て感じです」

「フーン」

言葉少なリーダーは、細道に戻る。手持ちぶさたの千歳は、デジカメを取り出して、バッグを置く。面々の手荷物は、干潟中央になぎ倒されていた枝葉の上に暫定的に置いてもらっていた。櫻は一人でこれらを引き上げてきて、シートの上に並べ始める。「あ、気が付かなくて」

ちょっとした沈黙。そこへ息を切らせて弥生が駆け上がってきた。

「櫻さん、データカードってあります？」

「あれ、ケータイ使うんじゃ？」

「あの子ったら、何を思ったか数だけじゃなくて銘柄を調べようなんて言い出すから、メモできなくて」

「じゃ、ボードごとどうぞ！」

「あれ、千さんここにいたんですか」

「千さんはいいの。行ってらっしゃい！」

「喧嘩しちゃダメですよお」

弥生にちょっと救われた。「じゃ櫻さん、僕は撮影係してますね」

「はいはい」手を振りつつもまだ曇った顔をしている。「そんなに怒らなくてもなあ」スクープネタへの反応は速いが、女性心理についてはそうはいかないようである。こういう局面の打開方法を会得していない千歳君。いや、打開というよりも心情理解がまず必要なようだ。

文花が来るまで、ここで会場監視することにした櫻。心模様とは裏腹に空模様は好転してきた。プレジャーボートが下流へ向かってきた。やがて小刻みな波が干潟を洗い始める。誰かが騒ぎ出しそうだったが、思いがけず静かなまま。櫻の胸中にも波、波。すると今度はペレットを洗い出すのに使う容器を探しに南実が上がって来た。何とも言えないタイミングである。

「ヨシを洗うのに丁度いいのがなくて。どこかに落ちてないですかね」

「ああ、細道の脇のヨシの間にいる絡まってたけど、バケツじゃないとダメよね」

ちょっとキョロキョロやっていた南実だったが、深呼吸すると、直球勝負に出た。

「櫻さん、隅田さんて彼氏、ですか？」

「え、いや、あの．．．」

雲が切れ始め、光が注ぎ出す。「今日はね、陽射しが出てきたら大変よ。今も二十七度くらいあるけど、もっと暑くなるから」 観天望気をしながら、初音がにこやかに予報する。小梅は画板を姉に預け、汗を拭う。マップのアウトラインは描き上がりつつあった。

温度上昇を受け、周囲の草々から蒸気が上がって来るのがわかる。櫻と南実を煽るような自然熱。櫻の心の波が高まってきた。

「櫻さんにその気がないだったら．．．」 南実がそう言いかけた時、「キャー!!」 文花の大声が響いた。チーフを、先輩を、放ってはおけない。「南実さん」「ハイ！」 二人はその理由が十分にわかっていた。あるものに遭遇してしまったのである。

女性六人中、上から二番目と三番目が駆けつけてきた。最年長さんは上流側で固まっている。先生がすでにフォローしたようだったが、

「いやあ、枝でつついたら、余計に怖がっちゃって」

「ほら、文花さん、もう姿見えませんから」

「しょうがないなあ、先輩は」

文花が現場に出て来られない確たる理由はこれ。「魚嫌い」である。形ある状態（つまり動いている）ならまだいい。「キャ」程度で済んだはず。今回はよりによってコイの白骨骨格を見てしまったものだから万事休す。「ハ、ハハ」 クシャミを止める程の衝撃を受けた模様。櫻と南実に引きずられるようにして、その場から退却。シートに腰を下ろすと安心したか、水筒をゴクゴクやり出した。

さ「じゃあ、しばらく休んでくださいね」

み「これでまた現場に足が向かなくなりそう」

さ「虫はてんで平気なのにね。言わんこっちゃないワ」

先刻の蒸気は収まったようだ。南実はまだ心中が蒸す感じが残っていたが、先輩から「南実ちゃん」なんて呼び止められたもんだから、すっかり拍子抜け。ヨシの蔭から何やらプラスチック製のトレイのようなものを見つけ出してから、「今、行きますから！」

櫻はようやく干潟に降り立った。「南実さんて、手強いわあ」 眼鏡が鈍く反射する。千歳は遠くから恐々と櫻を見ている。「櫻さんて、コワイ人？」 何だかんだで、時すでに十一時近く。船が届ける波はよく見ると泥交じりで茶褐色。雨の後は水が濁るってこれのことか？ 一連の波の動きがわかるように連写する撮影係であった。

点検を終えた掃部公は、釣竿キットを持ち出し、下流側へ。干潟の奥にたまっていた飲料容器の銘柄調査をざっと済ませた姉弟は、通りがかりの先生をつかまえる。

「先生、この間はこんな感じじゃなかったですよ？」 カニの巣穴の上方はヨシで覆われていた。その崖土が削り取られ、ヨシの根っこが露わになっているのである。

「ご明答。この間、台風来たる。あれで荒川も増水したみたいなんだな。その証拠がこのヨシの根っこ、そこのゴミさ」

「あ、気付かなんだ」 弥生も見上げないとわからない高さ。干潟面から五十糎ほどの高さから生えている背高なヨシの真ん中あたりだから、三人の足元からだと二メートルほどになるだろうか。トレイやらカップめんがヨシに絡んで留まっている。六月の目線からはさらに上に見えることだろう。こんな位置まで水面が？ 俄かには信じ難い弥生だったが、土が浚(さら)われるくらいなんだから、ウソではなさそう。

少年の目前には、ヒョロヒョロした根が錯綜している。おそろおそろ根元を引っ張ってみる六月君。先生が「あっ」と声を上げた時はすでに遅し。ヨシ群の一部が崩落してきた。気鋭の姉もさすがに「ヒエー」となる。

幸いその三メートル近いヨシ束は彼等を直撃することはなく、葉の重みに任せて逆方向に倒れてくれた。

「この子はもう」

「面目ない」

「いいさいいさ。何事も経験。おかげでゴミが出てきたさ」

ペットボトルがコロコロと出てきた。これでまた銘柄が増える。一つはミネラルウォーター。もう一つはスポーツ飲料である。養分補給？ ヨシにとってはありがた迷惑な話である。

「あれ、何だこのフィギュア？」 軍手で泥を払うも、うまくいかない。水際でバシャバシャやり出した。「初代モビルスーツ？」 弥生がチェックする。これって結構なお宝では？

ヨシの崩落事件で、一女・三女を除く、四人（本日の定刻集合組）が集まってきた。少女はめざとく生き物を見つける。「あ、カニが出てきた」 人が近づくと穴に引っ込むものだが、このカニは今日の少年のように物怖じしない。おそらく巣穴内部でも変化があって飛び出して来たのだろう。「クロベンケイって言うんだよ。ね、先生」 六月は眼鏡を外して、覗き込む。似たもの同士の対面、といきたかったが、実は内弁慶カニだった。身を翻して穴へ。その後はずっと引きこもって出てこない。やんちゃ系だとヨシで穴を突っついたりしそうなところだが、少年はじっと待つ。「そっとしておいてやるもんだよ、ね」 これには千歳をはじめ、一同感服。この感性が変わり者たる所以(ゆえん)なんだろうか。

気が付くと、千歳の隣に櫻が立っていて、変にニコニコしている。

「千歳さん、さっきはゴメンナサイ。何かツンツンしちゃって。エヘヘ」

「いやあ、リーダーにちゃんと話をしなかったんだから、悪うございました。干潟何周？」

「じゃ一緒に一周」

弥生はそんな二人を微笑ましく見送る。六月はめでたくカニと対面中。

「さーて、釣りの時間だよお」 いつしか組み立て終わった竿を担いで、先生が動き始めた。十代姉妹が続く。妹は何を思ったか、崩落ヨシの近所から特盛サイズのカップめん容器を拾い上げて持ち出す。水位がさらに下がり、積石も歩きやすくなっていた。程なく、干潟マップにはハゼが加わることになる。だが、描くだけでは物足りなかった少女は、数匹のハゼをカップに泳がせて、他のお姉さん達に見せに戻った。

途中、四女は「へえ泳ぐんだあ」、二女に見せると「あら小梅さんたら。お昼に食べちゃう？」てな具合。小梅はその反応が可笑しくて仕方ない。本日初対面の残り二人のお姉さん方はどうだろう？

先輩の横で微細ゴミ調査をしていた南実だが、成果が乏しいようで退屈気味。そこへ六女が現れた。「こ、小松さん、これ。清さんが釣ったんだよ」 荒れがちだった南実だったが、これにはさすがに表情が緩む。

「あ、アベハゼ？」

「マハゼじゃなくて？」

「夏のマハゼもこのくらいだけど、これはもともと小っちゃいの。泥が多いところに出てくる

んだって」

南実がちょっと目を離した際に、止せばいいのに一女のところにも見せに行ってしまった。

「あ、小梅ちゃん、ダメ」

「えーと、矢ノ倉さん？」 干潟を一望しつつもまだ放心状態の文花は、ハゼを見たくらいでは動じなくなっていた。「まあ、カワイイわね」 異名「ダボハゼ」は、カワイイてのが気に入らなかったか、ひと跳ねしてみせた。「キャ！」 我に返ったか。だが、「も一回、見せて」 一女なりに努力はしているようである。クシャミはさっきから止まったまま。

カップをその場に置いて、六女と三女は干潟へ。五女はマップのチェック中である。生き物への影響という点では、袋ゴミは見逃せない。マップには袋の絵がチラホラ描かれていたが、何の袋かがハッキリしない。

「お姉ちゃん、その袋拵げてみて」 初音はおっかなびっくりだったが、肥料袋の一つを持ち上げる。すると、パラパラと粒状のブツが落ちてきた。

「あー、こんなところに！」 南実は嬉々として、「石島姉妹、でかした」 姉妹はキョトン。南実のレジンペレット講座が始まった。盛り沢山の自由研究である。

そんな様子を垣間見ていたチーフは、自問自答モード。「環境教育って、レクチャー式になりがちだけど、それだと時々『どうだ』とか『スゴイだろ』とか、講師の自賛、いや自己表現にすり変わっちゃうのよね。ここは子どもが自分でテーマを見つけて、自力で学んでく感じ。大人はそれをサポートするだけ. . .」 一匹のダボがまた跳ねる。文花はもう驚かない。

十一時半を回る。自由研究用のゴミ調査が一段落したのを確認して、櫻はクリーンアップ開始の合図をする。見張り番は掃部先生に交代。多少免疫のついたチーフが干潟に下りて来た。

「とは言っても、実は今日、袋が足りなくて. . . 放っておくとマズそうなのだけ拾って数えましょう。続きは次回、八月五日に」

「櫻さん、この袋、使えないの？」

小梅がハキハキと問うている。実姉は吃驚(びっくり)せずにはいられない。

「こりゃ失礼。使えそうなのあった？」

「この大袋なんて、どうでしょう？」

初音が拵げておいた一枚は、四十五リットルの倍ほどの大きさの透明なもの。多少穴が開いているようだが、軽くて大きめのゴミなら何とか使えそうだ。

という訳で、四月の回同様、ターゲット限定型で収集が始まる。増水で流されてしまったのか、食品の包装類やら発泡スチロール片など軽めのゴミが目立たないのが今回の特徴。全体的に量が少なく見受けるが、ヨシがキャッチした分を忘れてはいけない。崩落を招かない程度にそれらを引っ張り出すとどうなるか、である。ヨシに隠れたものも含め、特に多かったのはペットボトルだが、これは弥生・六月チームが銘柄を調べつつポイポイやってあったので、集めるのに時間はかからなかった。ただ、ありがたかるもの、泥まみれのもの、再資源化可能レベルと、銘柄とは異なる分別が必要になるので、その時間は加算しなければいけない。あまり身動きのとれないサンダルの方は、集まってきたボトルの飲み残し処理をやっている。

初音嬢は、チェックを終えた袋を丸めながら、支給された四十五リットルに放り込んでいた。

「奉仕活動って、半強制的な感じがするけど、今日のはこう『何とかしなきゃ』って自分で思うから張り合いがあるっていうか. . .」 ボランティア、奉仕、社会活動、それらの違いって何だろう？とか真面目に考える十代の女性がそこにいた。千歳は片付けながらもスクープ探し。あまり真新しいものはなかったが、しゃもじと果物カゴと「はい、千さんこれも」 弥生が差し出

したのは例の機動戦士である。「ネットオークション、かけてみる?」「いえ、記念にとっときます」

六月と小梅は、カニの巣穴に詰まりかけていた小袋や、ヨシに引っかかっていたヒモ状のものを取り払っている。ゴミと生き物の因果性を改めて認識できたようだ。

マップに描き止めた袋の数は、とにかく大きめのものが五、概ね三十糶前後の中レベルが十五、容器包装系など十糶以下の小物が三十余り。これらとは別にレジ袋が八つ、肥料袋が三つ、土嚢(どのう)袋が二つ、さらにはクルマのカバーと思しき特大のシート片も見つかった。梱包用ヒモが数片、ヒモ状のものもいくつか。それに南実先生が洗い出したペレットが「今日はこんなところでしょ」と言いつつも、二十ほど。短時間ながら社会の縮図のようなマップ(下書き)が描出された。

ここでケータイを取り出す弥生。「じゃ、データ入力するよ」袋の破片、食品の包装・容器、袋類(二タイプ)、と読み替えが必要だが、新たにデータ保留機能が付いたので、多少間違えても修正が利く。ここへ来て、弥生の正体を知った一女と三女は声をそろえるように、「あ、そうか、桑川さんてプログラマーの...」とかやっている。

「そうですよ。小松さんの後付け仕様には参りましたが」

「先月は私と桑川さん、行き違いだったみたいで。話は櫻さんからいろいろと」

弥生株は急上昇。普段はあまり相手にしない弟君も見直したようである。

「じゃ、六月君。缶、ビン、ペットボトル、申告して」

「あ、ハイ」素直でイイお返事である。

複数タイプのコーヒー、メジャーどころの炭酸飲料、アロエやオレンジなどの果汁系、各種アルコール類、ココア、トマトジュース、スープもある。缶類はボトル缶も含めて二十余り。ビンは十ほど。半分はラベルが剥がれていて銘柄不明。判別できたのは、栄養剤がいくつかと何かの錠剤の薬瓶といったところ。そして、主役のペットボトルはと言えば、ドラッグストア級のラインアップである。複数タイプはコーヒーの他に、緑茶やウーロン茶も。紅茶にソーダに梅酒に、ヨシにはいい迷惑と思われるスポーツ飲料&ミネラルウォーター。大小様々、メーカー各社揃い踏み状態で合計実に三十有数。サラダオイルの空ボトルや焼酎の大ボトルも転がっていた。ヨシの蔭にはまだまだ隠れてそうだが、これだけ数え上げれば上等だろう。

「それにしてもよく調べたねえ。銘柄とメーカーがわかると、より具体的な対策とか立てられそう」千歳が賛辞を送ると、「次回はフタを調べてみます」頼もしい返事が返ってきた。

南実と文花はカウント画面の操作を教わっている。「私のケータイ... あ、お店だ」初音は仕方なく、お姉さん達の画面を見せてもらっている。その傍らでは、数え終わった自由研究ゴミを袋に入れ直す仲良し二人。小さい方の仲良し二人は、干潟を何周かしつつ、実地見聞を続けている。お騒がせボートはいつしか撤退していた。波が来ない静かな干潟は憩いの場として最適。だが今日は憩い以上に、「学びの場」というのが大きかった。時には黙考の場だったり、創作の場だったり、生態系がそうであるように、実に多様である。太陽が真上から降り注ぎ出した。そろそろ正午になろうとしている。

先生はダボハゼが弱ってきたのを見逃さなかった。器を持って下りて来ると、

「じゃ俺はまたひと釣りしてくらあ」

「あら、センセ。お昼は?」

「俺の食事はウナギ。釣るまでは戻って来ねえから」

「ウナギ?」一同騒然。

「へへ、土用の丑も近いしさ。ま、稚魚だけどな」

本当は網で掬(すく)うところなのだが、この辺は掃部流のジョークである。南実はウナギの真相を確かめるつもりか、興味津々で先生を追う。彼女にとっては伝説的存在とも云える掃部先生。直伝を受ける絶好の機会を易々と逃す訳にはいかない。仲良しご兩人と一緒に昼を共にするのが居たたまれない、というのも動機ではあったが。「じゃ、皆さんまたあとで」 サンバイザーを着け、駆け出した。

【参考情報】 [墨田区文花](#) / [ウナギの稚魚](#)

届けたい・・・

17. 届けたい・・・

様々な銘柄の飲料容器をひと洗いしつつ、手を洗う七人。スーパー行きは毎度の如く日光浴。四十五リットル一つに収まりそうだ。九十リットル級の大袋には、再資源化に向かなそうなペットボトルや軽めの不燃系がいくつか。あとは、小梅の自由研究ネタの袋類が入ったのが一つ。レジンペレットなど微細系は南実が回収済み。臨時イベントなので、こんな按配である。

ペットボトルの類は思う存分、陽光を浴びてもらった方がいい。逆にそうは言ってはいられないのが夏の河川敷利用者である。若い姉妹と男二人は帽子を被っていない。見るからに暑そうである。一・二・四の女性三人はしっかり着帽していて、無帽の四人を気にかけてつつも涼しげな顔をしている。「いやあ、こんなに日が照ってくるとは予想できませんでした」 初音は気象予報士のようなことを言いながら、RSB(リバーサイドバイク)の前カゴをそのまま取り外して、一同のもとへ持って来た。

「え、初音さん、そのバスケット・・・」

「店長が気前いいもので。今朝作って持って来ました」

「お姉ちゃん、スゴイ！」

日替わりデニッシュを一週間分まとめたような豪華ランチパックが出てきた。櫻もデリやら白物でないパン類を多めに持ち込んでいたので、この時点で相当量に。さらに最年長女性がここぞとばかりにお荷物を広げる。「この間の大雨でどうなるかと思ったけど、ホラこの通り」

ご自慢の自家製野菜が顔を出す。弥生にもおなじみのニンジンとキュウリのスティックの他、そのまま食べて全く差し支えなさそうなトマトとトウモロコシ。旬の地場モノである。ある程度スッキリした干潟、幾分透明度が回復した川の流れ。心地良い風景とこの健康的な昼の膳。正にピクニックである。弥生と六月はバスに乗る前にバタバタと調達したおにぎりが数個。「本当は何か用意しようと思ったんだけどお、へへ」 ちょっと株が下がった姉を横目に、弟は早速トウモロコシにかぶりつく。「そう言えば千さん、お弁当は？」 弥生のツッコミが飛んで来た。

「櫻さんにお任せしちゃってて、その・・・」

「まあ、妬けるといふか灼けるといふか」

櫻は蒸し暑いんだか、照れてるんだか、とにかく赤らんだ顔で、話を逸らそうとする。

「今日はこの出番、なかったわ」

「あ、櫻さん、そのカウンタ・・・」

「私、カウンター係ですから」

いつもセンターで繰り広げられている掛け合いが始まった。

「収穫前のトマトを数えるのに使おうと思ったら、見つからないんだもん」

「なあんだ、チーフだって私用じゃないですか」

「カウンタとしては、ゴミの傍でカチカチやられるの不本意なんじゃないのお」

「トマトくらい自分で数えろって、言ってますよ」

若い姉妹はそのトマトを齧(かじ)りながらククク。千歳も笑いを止めるのにひと苦労。

「そうそう、先生と研究員の分、とっとかないと。初音さん、櫻さん、この辺のいいかしら？」 用意のいいチーフはラップを取り出すと、まだ手付かずの分を適当にくるんでキープ。こうして、多めと思われたランチ一式は消化されていった。サスティナブルな会食である。ちょっと

落ち着いたところで、千歳は思い出したようにバッグをガサゴソやり出す。

「はい、これは桑川さんの分。石島さんは二枚」

こ「あ、ありがとうございます」

や「千さん、ポイント稼ぐのうまいなあ。今、何点？」

妹は姉に、姉は弟にそれぞれ今日来られなかった人物について話をしつつ、ケラケラやっている。文花も「この人が噂のGo Hey氏？」と首を突っ込んでみたり。櫻は優しいお兄さんにウインク。今度は千歳が紅くなっている。

「小梅さん、さっきのマップ、も一回見せて」

「まだ下書きなんだけど」

「字も上手いけど、絵はもっと上手なのねえ」

実姉は複雑な心持ちだったが、妹が目を輝かせる瞬間を目の当たりにして、気持ちが変わった。話術というか呼吸というか、そういうものを少しは見習おう、と。櫻はいいお手本だった。

さて、ちっとも戻ってこない釣り人と俄か助手はと言えば、

「先生、あの自然再生の本でどのくらい浸透したんでしょうか」

「さあね。お役人が少しでも読んでくれれば御の字なんだけどな」

「私、先生が止めさせた造成地（再生事業地）とか実際に行ってみて、『人が余計なことをしなくても自然は還ってくる』て本当だなあ、ってつくづく．．．」

いい読者がいてくれたものである。加えて言うなら「自然には自然の都合がある。それを人の都合で恣意的に変えてしまっていていいようはずがない」という一節。自分で言葉を継いでいた掃部先生は感極まったか、手元が狂い、餌のアオイソメを落としてしまった。「あっ、いけね」 暫時沈黙が流れる。が、マハゼが跳ねるのに呼応するように、助手は沈黙を破る。

「あ、それと一時停止違反、すみませんでした。私、あせってて」

「いやいや。あれくらい元気がなくちゃあ、な。俺も目測誤っちまったからいけねえんだ。

いいってことよ」

傍から見ていると親子のようなワンシーンである。なかなか戻ってこない訳だ。

塾も今日は夏休み。余裕綽々(しゃくしゃく)の妹に対し、姉の方はパタパタ支度を始めるや否や、「私、そろそろお店戻りますね」と一言。挨拶もままならない状態で、RSBひとつ走り。「気を付けてねえ！」 櫻の声、届いたんだか？

「初音さんて、いつもあんな感じ？」

「ムラっ気はありますね。お天気屋さんかも。しょっちゅう顔色見てますよ」

「ハハ、私も気を付けないと」

「櫻さんは大丈夫ですよお」

「私の場合は浮き沈みが、ね」

十三時近くになった。ランチタイムは一旦お開き。袋の片付け分担は、スーパー行きが櫻、その他の大小一つずつを千歳、ということに決定。

「四人でもうちょっと待機してるから、お二人はひとまず行ってらっしゃい」

「ハイ、じゃ後ほどセンターで」

自転車の二人は、櫻が左、千歳が右、それぞれに走って行った。「あの二人、何か絵になるわねえ」 一女は何かを確信したようだった。

干潟の下流側の突端を回り込んでさらに進むと、別の上陸ルートに出る。清澄と南実は、プチ探検をしながら一同のもとに引き返しつつあった。道中、赤黄色の花々の小群生に遭遇。「夕方になると開花すると思う。ヨイグサの一種で．．．」南実を一瞥し、「その名は『コマツヨイグサ』。小松さん、だったよな」

「聞いたことはありますが、ここで出逢えるとは」

「お導きだあな。可愛がってあげなさい」

「先生、またいらっしゃいますよね？」

「美人に囲まれるの悪くないから、な。あとは風に訊(き)いとくれ」

野球の試合は午後から。その準備が進んでいた。ピクニックが催されていた場所の隣地グラウンドでは、河川事務所にお勤めの監督さん率いるチームがキャッチボール中。監督は外野の乾き具合を確認しがてらブラブラしていた。

「おう、石島じゃねえか」

「あちゃあ、掃部(かもん)先生。またご巡回ですか？」

「今日は自由研究さ。ああ、そのし潟の崖地、ちょっと崩れちゃったけど、手え出さなくていいからな」

監督さんは一礼すると、そそくさとベンチ方向へ去ってしまった。

「清さん、あの方、石島さんて」

「河川事務所の課長さ。最近ちっとは話がわかるようになってきたが、所長が変わるとそいつの意向に合わせちゃうから、油断ならなくてよ」

「いえ、今日の若手姉妹と苗字が同じだから、もしかしてって」

「あいつにあんな愛らしい娘さんがいたら、ハゼもウナギも腰抜かすだろよ」腰ってあったっけ？

当の娘さんはボール探しに興じていた。父親が程近くにいようがそっちのけ。硬球だけかと思ったら、テニスボールがいくつかとミニサッカーボールまで出てきた。人目に付きそうな所に転がしておく。「あら、別ルートから帰って来たわ」弥生と六月は二人を捜しに行っていたが、見つからないもんだからスゴスゴ引き返して来たところ。学者と研究者がそろって探検するからには、その足取りが簡単に掌握されては名が廃る。姉と弟は胸をなでおろしつつも「やられたあ」となる。

試合予定がない方のグラウンドのベンチで、遅いランチにありつく男女。何とも不思議な構図である。「こっちの二人は、さながら先生と助手ね」文花は手を振りつつ、グラウンドを後にする。弥生、六月を連れ、その後方に自転車を押す小梅が続く。「三姉妹と末っ子って感じだな、ありゃ」(清談) レジャーシートに覆われていた草地からはユラユラと蒸気が上がっていた。気温は上昇一途。三十度、超えるだろうか。

夏休みに入り、ちょっと息抜きモードの女性教諭。別件で某駅に来たが、例の無料送迎バスを見つけてしまったからには乗らない手はない。その複合商業施設に向かう途中のことである。

「あれれ、六月君だ。と、石島さんかしら？ 大きくなったわあ。で、あの女性(ひと)、もしかして矢ノ倉？」

橋半ば、バスはスロー走行なので、通行人をこのようにしかと認識できたりする。別に噂している訳ではないのだが、文花は再び「クシュン!」。しばらく止まっていた分、反応も過剰?

「ぶんかさん、大丈夫ですか？」

「だから、ぶんかじゃなくてえ、ハ、ハア」

「そうそう、六月君。堀之内先生ってまだいる？」

「担任だったりする」

「へえ、そうなんだあ。元気？」

「喜怒哀楽激しいけど、一応元気かな」

今度はバス車内でクシャミをする女性一名。「あー、行っちゃった。ま、いっか」 何となく窓を叩いたりしてみたが、三姉妹と末っ子チームは誰一人気付かなかった。十三時半過ぎの出来事である。

空のペットボトルをカラカラやり終えた櫻は、スーパーをとっくに後にしていたのだが、荒川沿いを走ることなく、送迎バスが通る道を進んでいた。明らかに遠回りなのだが、手強い誰かさんに捕まるとまた返事に窮する質問をされそうだったので、避けていたのである。「ハッキリさせておいた方がいいのかなあ。そういうの苦手だな. . .」 ボンヤリ走っていたら、橋の方向へ右折するのを失念。「ハハ、私としたことが」 こんな調子だったので、先を歩く四人に追いつくことはなかった。

「あれ千さん、一人？」

センターの入口に佇む三十男。バリバリのイケメンではないが、三枚目でもない。韓流俳優で似たようなのがいたような、といったところ。日焼けしようなんて意識はなかったんだろうけど、干潟がビーチ代わりになっていたようで、陽射しを浴びるに任せてたら、期せずして夏男のような様になってしまった、という訳。海ではなく川で灼いちゃうあたりは三枚目(?)である。

「櫻さんと待ち合わせして来なかったの？ やあねえ」 チーフまでそんなこと. . .

「途中で会わなかったんですか？ 遅いからてっきり皆と一緒にかと」 千歳の弁明空しく、

「きっとどこかで待ってるんだよ。あーあ」 少年にまでこう言われちゃ立つ瀬なし。やっぱり三枚目な千さんであった。

「お待たせっ！ 皆、どしたの？」

「さ、櫻さん、ハハ」

千歳は全身から力が抜けるようだった。「隅田さん大丈夫、ですか？」 今、救いはこの少女のみ？

「文花さん、空調早く」

「はいはい。ただし、二十八度よ」

「それじゃ外の気温と変わんないじゃないすか。除湿でいいから」

「除湿？ いっそのこと打ち水でもしようと思ったのに」

「ったく。小梅さん、ああいう大人になっちゃダメよ」

「へへへ。櫻さんも文花さんもおもしろーい」

とまあ、臨時開館となった環境情報センターは、乗っけから賑やかなのであった。

打合せネタはいくつかあるが、今日のところは、①発行物や当面のイベントなど、櫻が入力を続けていた各団体の個別情報と連絡先などの基礎情報との連結、②その連結した結果をセンター

のホームページにどう掲載するか、③データベースソフトとホームページを連動させるプログラムをどう作るか、④時間があれば、櫻の取材成果などを載せるコーナー（ブログもどき？）の設定、という感じ。議題をホワイトボードに書き出すチーフ。こうした仕切りはミーティング慣れしていないとできない。研究機関ご出身というだけのことはある。

「ところで、あの若いお二人さんはあそこで平気かしら？」

小梅はマップの清書を始め、六月はノートに罫線を引き、種類別の整理を試みようとしている。

「あのくらいの年の子だと、ゲーム機とか持ち歩いて、放っておくとピコピコやったりすると思うんだけど、違うのねえ」 そんなことを気かけながら、チーフは麦茶を用意しに行ってしまった。という訳で、まずは三人で①の議題。データベースソフトでのこの手の操作は、千歳にとってはお手の物。ただし、団体の名称が微妙に違っていたりするので、簡単には連結結果が表示されない。一つの団体の中に複数のグループが含まれていて、そのグループ名で月刊誌が発行されていたりするものだから、一筋縄ではいかないのである。円卓上のノートPCは熱を帯びてきた。十四時ともなれば外気温もピークを迎える。これでは空調も効かない？

麦茶効果か、一口啜(すす)ったところで妙案が閃いた。「櫻さん、団体連絡先の電話番号（末尾四桁）って全部違いますか？」

「ええ多分」

「じゃ、これでIDをとみましょう」

弥生は千歳独特の実用的アプローチに感心したようで、ツッコミ封印中。しばらくして、団体の基礎情報の中に四桁のIDが割り振られ、今度は個別情報の中にIDを入れる用意ができた。幸い個別情報の方は、基礎情報ほどの件数にはなっていないので、ちょっとした小細工を使い、ある程度一括してIDを入れ込むことができた。櫻のチェックも含め、ここまで十五分ほど。チーフは少女少年の様子を見たり、PC画面を覗いたり、落ち着かない様子だったが、①の件が早々と見通しが立ったとわかるや、窓際の席でゆったりと麦茶をカラコロやり始めた。日傘ハットは被っていないが、サングラスはそのまま。やはりお忍びさん気取り？ その間、IDをキーに基礎と個別がつながった。次はこの情報をいかに広く発信するか、である。議題は②に移る。

ホームページは役所の仕掛けと部分的に連動していて、ブラウザ上で記事の書き込みやコーナーの改廃ができるようにはなっている。容量上限は不明だが、PDFファイルの添付も一応可能。やや変則的だが、団体のよみ（あ行～わ行）に応じていくつかブロックに分け、一覧表形式のページを用意。そこに基礎+個別のPDF情報を並べ、クリックして見てもらう。そんな感じで当面はしのぐことにした。大人にとっても夏休みの宿題が与えられた格好である。記事載せるのと手法は同じ。あとは櫻が時間を見つけてPDFを作ってアップして、という話でまとまった。個別情報の追加、基礎情報との連結、そこまでは確認済み。連結したデータはブラウザで閲覧しやすいサイズでPDF化できればいいので、今日はその調整に時間をかける。

チーフは再び若い二人と話をしている。二人ともメドが立ったようで、余裕のコメント。

「夏休みの宿題はさっさと片付けて、八月に思い切り遊ぶノダ」

「今年みたいに梅雨が長引きそうだと、宿題するにはちょうどいいっていうか。へへ」

弥生の思惑(?)通り、すっかり意気投合した観のあるご兩人。さすがのチーフも脱帽（いや脱サングラス）である。大人の方の宿題はいかに？

「じゃ、ごほうびに三時のおやつにしますか」 六人は手を休め、水羊羹にありつく。七月で異動になった須崎課長が挨拶で持って来た一品だとか。

「エ、地域振興から環境の部署に？」

「事業委託主になるってことかしらね」

「何かやりやすいような、その逆のような．．．」

おやつ後も打合せは続く。小梅と六月は、自由研究のブラッシュアップを兼ね、一階の図書館に下りて行った。宿題をするには打ってつけの環境である。

「ところで弥生ちゃん。プログラム作ってもらおうとしたら、どのくらいお支払いすればいいの？」

「卒論のテーマにさせてもらえるなら、別に無償で構いませんよ」

「じゃ、インターンってのはどう？好きな時に来てもらえば、その時間分はバイト代も出せるし」

「なーるほど！」

「ねえ、チーフ？」

ホワイトボードに何やらメモをしつつ、議事を進めていた文花。ふと手が止まる。

「桑川さん、週に何時間くらい来られそう？」

「夏休みの間はそれなりに来れると思いますけど」

「そうね。学生インターン．．．ひとまず期間限定ってことでよければ。OK」

チーフなりに先を見据えての暫定的な承諾ということのようだった。インターンはインターンである。夏休みが明けたらまた考える、いやいっそ新たに人材を増やすというプランもなくはない。ある人物をすでに想定しているようにも窺える。

③の件は、弥生が来るようになれば随時対応可能ということで落着。試験用のwebサーバは、カウント画面の設定と同じく、千歳が持っている領域を使うことにした。残るは④、櫻さんコーナーの新設である。

「センターのホームページの中って、ちょっと違和感あるかも．．．」センターのホームページの記事投稿形式では、複数の画像を貼り付けるのが困難という事情もある。

ふ「それじゃあ、隅田さんのドメインを間借りしたら？」

ち「『漂着モノログ』はメジャー系ですけど、マイナー系でよければいくらでも」

や「誰かさんみたいに月に二回とかじゃなくて、日記調でマメに、ね」

ち「そもそもブログってのは、ジャーナリスティックなものなんだ。日々のよしなし事どうこう、じゃなくたって．．．」

あとは、櫻本人の意向次第だろう。ここで進行係が切り出す。

「まずはタイトルでしょう。ボードに書いてくから、言ってみて」

「櫻が往く」は弥生発案。さくらでいいならと、千歳は「心はいつもさくら色」。

「何それ？千さんやっぱし」「エ、いや何となく」櫻は俯いたまま。

チーフは、何を思ったか「サクサク、ランラン」とか書いて「どう？ブログっぽいでしょ」と自賛している始末。こういう議論はえてして本人そっちのけで盛り上がるものである。しばらく考え込んでいたご当人は、

「届けたい．．．かな」

勝手にさくら路線で話を進めていた三人は不意打ちに遭うと同時に、心を打たれていた。簡潔ながら広がりを感じさせるタイトル。即決である。弥生は内心「さすが櫻姉」と拍手を送る。チーフと千歳は「おそれいりました」と声をそろえつつ、低頭モード。

「じゃ改めて、記事とか画像とか載せ方を書いたものをメールしますね」

「ハイ！ でも、千歳さんにはお世話になり放しで．．． スミマ千」（一礼）

「何を仰いますやら」

午後四時になろうとしている。二人だけの時間、ではないが、一日のうちで一緒に過ごしている時間としては最長を更新中である。午前中は途中から長く感じたが、午後、センターに来てからはとにかく早い気がする。櫻にとっては物憂げな夏の昼下がり。

議事が済み、時間にゆとりができたので、今日はこの場でワイワイやりながら、モノログを更新することになった。図書館はまだ閉館時間ではなかったが、下の二人も戻って来た。宿題の成果を見せてもらいながら、「自発的環境教育」を引き続き模索しようと、文花は二人に面談を申し込む。円卓ではPCを操作する千歳と彼を囲む二人の女性。両手に花とは羨ましい。デジカメからメモリを取り出し、PCのスロットに入れる。午前中の記録が鮮やかに展開されていく。スクープ系のみならず、さりげなく人物も配されている写真の数々。肖像権を気にしてか、人物写真は控え気味にしていたのだが、最近はそうでもない模様。あるがままの記録を重視するようになっていた。

「あれ？ この最初の写真は」と弥生がツッコミを入れたところで、ベースの重低音がガツンと来る着メロとともに、彼女のケータイが鳴った。「あ、おばちゃんだ」

「ちょっと千歳さん、この写真．．．」

「織姫様です。よく撮れてるでしょ」

「いつの間に？ 弥生ちゃんに知れたら大変。危なかったあ」

千歳君はお気に入りの一枚をメモリ上にもそのまま残しておいた訳である。七夕（同行調査）時の他の画像は、彼のPC本体に移動させるとともに、櫻には某サイトのフォトアルバム機能を使ってコピーを渡してあった。そこまでは良かったのだが．．． 確かにヒヤヒヤものである。

櫻には呆れられるか、咎(とが)められるか、と首をすぼめていた彼だったが、思いがけずにこやかだったので、小さくひと息。今は髪を下ろしている櫻。七夕は過ぎれど、またサラサラだか、ザワザワが始まった。あわてて視線を画面に戻す。

「失礼しました。画像は選び終えましたか？」

「蒼葉、何だって？」

「仕事終わったから、寄れたらここに来るって」

千歳は傍らでパタパタとやっている。いつもの早業かと思いきや、行事が変則的だった分、手こずっている？ いや、

「何か、定例のモノログよりも充実してない？」 弥生ご指摘の通りである。つまり、

「今日は過去最多九人だったから、いろいろな視点が出てきた、ってことだと思う」

文花との小面談を終えた二人から、櫻がネタを持って来た。「じゃ、これとこれも、ね」

立派に仕上がったマップと一覧表。図書館で調べた成果として、用語解説のようなものもしっかり付されている。スキャンしてもよかったが、バッチリ載せる訳にもいかないので、デジカメで軽めに撮影して転載。これで七月二本目のモノログは概ね完了。作品がブログに載ったというのもさることながら、文花と話をする中でさらにモチベーションが高まっていたらしく、夏休み中は、自由研究をまだ続けるようなことを若い二人はのたまう。これは本人の資質なのか、それとも現場での実体験（現場力）の為せる業か、はたまた周りの大人達のサポート故か．．． どれも当てはまりそうである。

「今朝は雨混じりだったから、行くかどうか迷ってたんです。でも、モノログ見たら『決行』

って出てたから」 弥生にしては珍しく(?)モノログを評価するご発言。ブログの掲示板としての機能の有効性が少なからず立証されたことになる。

「おかげで自由研究、バッチリさ」

「ところで、桑川さんはブログとかやってそうだけど、どうなの？」

「内緒、内緒」

「それはないっし. . . 」と言いかけた弟の口を塞ぐ姉。実の姉弟ならでは、のやりとりである。おあとがよろしいようで、ひと足先に帰途につく。

「あれ、蒼葉と会わなくていいの？」

「いえ、六月がお気に入りなもんで、合わせるとまた『萌えー』とかやり出すから。小梅ちゃんにも悪いし」

六月君は年の近いお姉さんと談笑中。微笑ましい光景である。

午後五時。二女がマップを見せてもらっていると、

「あ、おばさん」

「またあ、お姉さんて言ってよね」

マップ上では、水生関係の生き物のみならず、アリやチョウも描かれている。あいにく青ガエル(?)にはお目にかからなかったが、青が付く人がここに来て現れた。

「へえ、これ小梅ちゃんが描いたんだ」

画家の目にどう映ったかはいざ知らず。だが、櫻の方はまたしても「いいもの」を思いついたようである。

マップに載せてくれと言わんばかりにセミの声が届き始めた。セミが鳴り止むと少女は、「また来てもいいですか？」 照れながらもハッキリと一言。「もちろん！」 三人のお姉さんに見送られてのご帰宅である。

「そうそう隅田さん、今日の手当は？」

「時給じゃ申し訳ないし」

「櫻嬢とのデート権ってどう？」

「もう、お節介！」

「七夕デート、楽しかった？」

「だからあれは調査ですから！」

「ほら、引っかかった。やっぱり一人じゃなかったんだ」

「あ. . . 」

千歳は満更でもなさそうだったが、確かに余計なお世話ではある。苦笑いしつつ、話を戻す。

「実質的な入力作業は櫻さん担当ですから、僕は別に」

「ま、櫻さんから連絡してもらおうわ。ね？」

干潟では冴えないチーフだったが、ここへ来て絶好調である。

後片付けをしながら、片手間にケータイメールを打つ先輩。送信先の後輩は、帰りがけ、定点調査スポットでペレットを捜索中。暑さも何のその。いつしか太陽の高度が下がっていた、という集中ぶり。当然、メール着信にも気付かない。

橋の方向へ走り去って行く千歳を見送る姉妹。妹は姉をからかうように、

「隅田川の花火を隅田さんと、とかいいの？」

「ハハハ。今日は何か気疲れしちゃって．．． それどこじゃないわね」
今夕は辛うじて晴れているが、梅雨はまだ続くんだそう。櫻の胸中も梅雨の如く湿気ている。
いつ明けるのか、これは愛妹にも誰にも予想できない。

【参考情報】 [打ち水の効能](#)

八月の巻 18. C'est la vie.

月が変わって、梅雨も明け、東京は連日の猛暑に見舞われている。クリーンアップ予定日の五日も高気圧の勢いそのままに、朝から強烈な日射が燦々。荒川は水をたっぷり擁しているのて涼し気に見えるが、こうも高温だと湯水になっているのではあるまいか。上流からは低温の水が流れてくるはずだが、流すうちに茹(ゆだ)ってしまうんじゃ「たまらない」。さっさと海へ流したい、というのが川の本音だろう。南実からは今回見送りの連絡とともに、いつものように定刻の十時だと潮がまだ高いかも、との一報を事前に受けていたので、モノログ上にも臨時掲示板情報として、今日の開始は十時半と打っておいた。石島姉妹は家族で旅行中との報を桑川姉弟から聞いていたし、業平には別件でメール連絡しておいたので、この日はあわてて出かける必要もなかったのだが、そこは素直な千歳君。早めに現地で待っていれば、リーダーも早々に現われるだろう、という読みでそそくさと宅を出る。温水(ぬるみず)を流したい一心なのかどうかは不明だが、どうも流れが速い感じの荒川。その流速に比例するように、今日はノロノロではなく、軽快にペダルを漕ぐ千歳だった。

時同じくして、千住姉妹はと言うと、どうもいつもと様子が違う。

「櫻姉、ほんとは行かないつもり？」

「バテちゃったみたい。千さんには八月病だって、言っといて。うう．．．」

「はいはい。お大事に」

確かに暑さ厳しい折り、わからなくもないのだが、夏風邪なのか、夏バテなのか、はたまた「何が八月病よ。恋わずらいでしょ」と姉想いの妹はあっさり分析してみるも、特に心配する風でもなく、小気味良さげなのであった。姉の自転車を借り、颯爽と風を切る。橋に入ってから速度を落とし、干潟を一望する。まだ誰の影も見当たらない。千歳は伸び盛りの草陰にいて、彼女の視野には入らなくて当然である。徐行気味に走る蒼葉。その後を追うように路線バスが近づいてきた。車窓から干潟方向を眺めていた一人の少年は、ここで憧れのお姉さんを見つけて大慌て。「あ、蒼葉姉ちゃんだ！」 誰かさんみたいにおばさん呼ばわりしたりはしないが、姉ちゃんてのも考え物。ちょっと馴れ馴れしい気がしなくもない。

自転車とバスは抜きつ抜かれつで並走していたが、六月が停留所を降り立った時には、お姉さんの自転車は彼方を走っていた。「どこ行くんだろ？ 干潟に用があるとも思えないしい」 実姉と一緒にケータイ一発で確認できるころ、その姉を振り切るように飛び出してきた手前、ちょっといたたまれない六月君なのであった。「一緒に来りゃよかったかなあ。でも、プログラミングがどうかでいそがしそうだったし．．．」 今日のクリーンアップはどうやら少人数になりそうである。

干潟へ通じる細道の周辺は、掃部(かもん)先生が人知れず刈ってくれたらしくスッキリしていて、その切り口からは熱に煽られてか夏草の薫りが漂っている。そこへ新緑というか青葉というか、また違った色香を秘めた女性が乗り付けてきた。人には雰囲気というものがあるが、蒼葉の場合、それは人一倍強いようで、鈍いというかスローなあの人もすぐに気付いた。

「あ、蒼葉さん！」 自転車は徐々に近づいてくる。「どーもっ！」

時は十時十五分。ようやく潮が後退局面に入ってきた感じ。干潟から去ろうとする水の流れはやはり熱を帯びたようにまどろんでいる。もっと早く退いてくれてもいいのだが、本流の勢いとは裏腹にこの辺はどうもバテ気味のようである。

「あれ、お姉さんは？」

「もし本人が今日来なかったら、あとで事情をお話しします」

「どこか具合でも？」

「八月病．．． あ、いえ何でも、アハハ」

退潮の動き同様、何ともまどろっこしい話し振りである。

リーダーが来るのか来ないのかハッキリしない中ではあったが、ひとまず道具類の点検などを始める千歳。払底していたと思われた四十五リットル袋は、ベランダの収納庫に眠っていた分が発掘され、今回はバッチリ。小型バケツに二リットルの空ペットボトルにマイカップにデジカメ．．． 水筒代わりに使っている別のペットボトルには発泡性のミネラルウォーターを入れて来た。持って来ていないのは、クリップボード、受付台帳、太ペン、カウンタといったところ。蒼葉の方は、持ち主がわかった例のK.K.絵筆の他、鉛筆画に必要な道具類と簡単な画用紙、それと軍手、ケタイ。二人の持ち物を寄せ集めれば何とかかなりそうな気はするが、道具以上に重要なのはコーディネート役、だろう。一抹の不安がなくもないが、「今日は参加人数も少ないし、十時半開始予定なので、今ある程度準備しておけば大丈夫かなって」 発起人は気楽に構えている。

見慣れない三十男が向こうからやって来て、左に折れた。今日はサングラスをしていて、チョイ悪な印象。RSB(リバーサイドバイク)ライダーのあの人である。小六男子はちょっとビビったが、そのライダーの後にできた轍を追うようにグランド脇を歩いていく。外野ではカラスの小集団が羽を休めているが、熱吸収の良い己の黒さが恨めしいようで、どの個体も羽をジロジロ見るばかりで鳴き声ひとつ上げない。こういう光景も不気味ではある。開始時刻まではあと十分ほど。

図らずも同じような格好をしている二人の男女を見て、業平君が後ろから声をかける。

「あれ？ いつもと違うご兩人。ペアルックてか？」

「あ、業平さん．．． ですよ？ この間の掃部先生みたい。ハハ」

サングラスをかけてる点が先生と共通っただけで、風貌は全然違うのだが、こう言われちゃ笑うしかない。いつもながら漂着ゴミが押し寄せになっているのだが、まだ全容は掴みきれていない。先の自由研究クリーンアップで大袋などは回収しておいたので、幾分減ったような気はするものの現実は現実。ただそれを真に受けて沈鬱になっても仕方ない。そう、笑う門には何とやら、である。だが、蒼葉に言わせるとズバリ「C'est la vie」なんだそう。そこまで達観しなくても良さそうだが、「そういうものなのよ」と屈託ない。

水も汲んできたし、ひとまず見通しも立ったことなので、三人で干潟へソロリソロリ。そこへ小六の彼が駆け下りてきた。

「お、六月選手、来たね。一人？」

「へへ、自由研究の続き、と思って．．． あ、蒼葉さんだあ」（萌えモード？）

「元気してた？ でも、夏休みなのに鉄道旅行しなくていいの？」

少年はすっかりのぼせたようになってしまって、言葉が出ない。前回の威勢の良さは影を潜め、俯き加減。千歳は「まあ、そういうもんだ」（これもセラヴィの発想？）と自分を見ているように傍観している。業平はちょっかいを出すのかと思いきや、「少年、どーした？ お姉さん、

コワイかい？」と来た。助け舟を出しているようなそうでないような。

「あれ、もしかして、Mr. Go Heyさんですか？」

サングラスを額にずらしていたので、写真で見た人物とやっと一致した模様。先刻はビビったが、今は内心「なぁんだ、あの三枚目さんか」となる。少し正気に戻ったようだ。

「一応、自己紹介しますか」 千歳は蒼葉から画用紙を一枚失敬して、太目の鉛筆で名前を走らせていく。千歳→蒼葉→六月→業平の順だったが、蒼葉から六月というところがポイント。鉛筆を受け取る時もドギマギ状態の少年は、「じゅ、18きっぷの旅はお盆が終わってから、ですね」というのがやっとこさだった。「そっか、あの桑川女史の弟さんかあ。今日はお姉さん来ないの？」と業平は何の気なく尋ねていたが、蒼葉はちょっと不服なご様子。「弥生ちゃん来ると、業平さんタジタジでしょ！」 今日の間模様も目が離せない。



十時半を回った。水位が下がるのに引きずられるように、干潟を這う水の流れが目にも留まる。流れを辿ると何たることか、崖地から滲(にじ)み出す細い水脈に行き当たった。晴天続きながら時に激しい雨が降ることが多かった八月。グランドなどに浸み込んだ雨水が出口を求めて、この干潟に注ぎ出してきた、ということらしい。ちょっとした湧水が幾重もあり、支流の態を成している。支流はやがて本流へと束になり、本物の荒川へと注ぐ。その紋様、そのうねりは小細工ながら実に精巧で、「生き物としての川」というのを認識させてくれる。四人はしばし細流(せせらぎ)を追っていた。そして、千歳はデジカメ、蒼葉はケータイでその模型を撮ろうとした時、毎回恒例のサプライズは起こったのである。

「ああ、ここだここだ」

「八 (ba) クン、待ってえ」

蒼葉よりも小柄だが、背丈はそろって同じくらいの男女が現れた。男の方は千歳がよく知る人物。女性の方もどこかで見たような見ないような...

「隅田さん、やっと見つけましたよ。どうして教えてくれなかったんスか？」

「手当出ないし、日曜くらいはゆっくり休んでもらおうかな、って」

八クンと呼ばれていた彼、そう、あの宝木八広君である。いわゆる就職難の煽りで、正規の就職が叶わず、職業を聞かれれば今はフリーターと答えるしかない二十代中盤のこの青年。幸い、その多彩な職業経験が買われ、遍歴なんかを手記にしつつ、千歳が関わる市民メディアの小会社で編集の手伝いなどを行っている。最近千歳の記事のサポートに回ることが多く、独特のネットワークを活かして、自転車で走り回ったり、おなじみのセンターに顔を出したり、という日々。短髪、眼鏡、無精ヒゲ、が特徴である。そんな八広君の傍にいる時はデレデレ観のある彼女の方は、四人と顔を合わせるや否や、心なしか無愛想な相貌に。ここにやって来た面々の中では初

めてとも言えるツンツン系キャラである。タンクトップにフリルブラウス、長めのティアードスカート、そして鋏入りのサンダル。これまでの女性達と違い、首、腕、腰などにチャラチャラと装飾品が多めなのがまた異色。弥生も初音もネイルアートは少しばかりしていたが、このお方は足の方もしっかりアートしていて、要するにちょっと突飛な印象な訳である。

「こちら、奥宮舞恵（おくみや・まえ）さん。一応、彼女です」

「一応って何よお。あ、皆さんヨロシク．．．」

異色キャラにどう対処していいか、戸惑う三人十少年。接客係の櫻がない分、負担が大きい。だが、千歳つながりではあるし、最地元でもあるので、

「じゃ、受付名簿にお名前をどうぞ。名前が書いてあるのが今ここにいる四人です」

と千歳が仕切り役を買って出て、場の空気を作る。新たに登場した強面(こわおもて)のお姉さんに面食らった六月だったが、彼氏の方には親近感を持ったようで、

「宝木さんて、下の名前は何て読むんですか？ 京成線のやひろと同じ？」

「やつひろ、ってんだ。でも、八広なんてよく知ってんね」

「この間、花火大会の時に久しぶりに乗って荒川を渡ったら、水際とかゴミだらけでした。ちなみに昔は八広駅じゃなくて『荒川』駅だったんですよ」

てな感じで臆せずやっている。顔と名前を一致させる時、こんなエピソードを交えてだったら、よりしっかり覚えられるというもの。それにしても、八広が荒川だったとはねえ。

「何かおめでたい名前ですね。お宝に八で末広がり．．．」 蒼葉としては初対面かも知れないが、

「あの、蒼葉さんて、六月五日、センターにいらっしやいましたよね？」

「え、あの日いらしてたんですか。こりゃ失礼しました」

背丈の都合で、八広は蒼葉をちょっと見上げる感じになるが、その目線はどこかデレとしていて、正の彼女はそれをすかさず察知すると、

「こら、八！」と、ハチ公呼ばわりで小突いたりしている。ま、仲のいい証拠だろう。

「でも、この日この場所での、何でわかったん？」

「センターのページ見てたら、何やら『届けたい．．．』で新コーナーが出てて、その中をさらに見たら『漂着モノログ』のリンクが張ってあって．．． その掃部さんの講座に行って干潟の話聞いてたんで、ヒマを見つけては場所を探してたんスよ。で、モノログの写真見てピンと来て、あと今日十時半から、て載ってたから。それにしても、ヨシだか何だかが背高なもんだから、行き着くのにも苦労しましたよ」

「いつもの自転車じゃなかったんだ」

「ルフロンと一緒にバスで」

櫻のブログが動き出したのはわかっていたが、まさかセンターのホームページから辿れるようになっていたとは！ 本人がそこまでやるとは思えないから、おそらくはお節介なあの女性(ひと)の仕業だろう。二人のやりとりが目に浮かぶようで、ニヤリとする千歳だったが、今日はあいにくそのブロガーご本人は不在。本当のところはわからない。

「『届けたい．．．咲く・ラヴ・log』とか出てましたけど、あれってどなたのブログなんスか？」 レポートをまとめるのも相応レベルだが、それ以上に、コピーライティングのセンスを自負する八広としては、その秀逸なタイトルがまず印象深かったようだ。

「ま、そのうちわかるよ。今日も本当は来るはずだったんだけどね」

それにしても「咲く、ラヴ」って櫻さん、どうしちゃったんだろう？と不可解に思う千歳であ

った。開設したての時は出てなかったから、ここ数日の間に書き加えた、ということか。今日のお休みと何か関係があるのかどうなのか。 . . .

お互いの紹介が済んだようなそうでないようなハッキリしないままだったが、画用紙に書いた名前はそれぞれ認識できたようなので、今は思い思いにバラつき気味。クリーンアップ開始前のウォーミングアップといったところか。少年はサングラスの三十男を連れて、前回の自由研究時の様子などを解説している。

「銘柄調査とはよく考えたね」

「でも、ラベルが剥がれてたりでメーカーがハッキリしないのも多くてさ。バーコードのところは結構無事なんだけど」

「バーコードかあ。ウーン」

とまた何かを思いついそうな業平君である。この二人、どこか似ている気もする。

蒼葉は鉛筆を片手に構図を練っているような素振り。三人とは付かず離れずの位置にいる。不意に八広のケータイが着信音とともに振動する。ドラムソコの着メロってのも珍しい。が、千歳には一本のストラップの方に気が向いた。確か某銀行のでは？

「あのストラップ、銀行で配っている一品ですよ」

「ええ、私から彼に」

これで千歳の疑問は解けた。同時にルフロンさんも何かを思い出したような顔つきになった。

「隅田千歳さんでしたか？」

「ええ、三月に窓口で。いろいろいただいて、ありがとうございました」

「ああ、やっぱりあの時の. . .」

窓口の時と同様、無愛想だった彼女だったが、これで少し表情が出てきた。世間は狭いというか、妙味で満ちているというか、とにかく仰天である。つい粗品についての礼を述べてしまったが、この行員さんにはもっと違った意味で御礼を言わなきゃいけないところだろう。櫻が今ここにいたら、サプライズを喜びそうな予感はあるが、話がややこしくなる可能性もある。今日不在なのは何かの思し召しということか。

「間違い電話だった。人騒がせな」 その場を外していた八広が戻って来た。思いがけず舞恵が薄笑いしているので、珍しいこともあるもんだと訝ってみる。

「そうそう、奥宮さんて何でルフロンなんですか？」

「名前が『まえ』なんで. . .」

「隅田さん、フランス語でね. . .」と八広が割って入ると、そこへフランス在住歴のある絵描きさんがさらに首を突っ込んで、画用紙にサラサラと綴り出す。

「le front. . . 男性名詞なんでle これでルフロン、ね？」

楚々清々とした蒼葉に対し、その装飾品の様から錚々(そうそう)とした感じの舞恵。対照的な二人だが、実は同い年。にこやかに問いかけたものの、所作が気に入らなかったらしく、

「東海道線の某駅の前にあるのと同じ」と軽く交わし、また無表情に。

「ま、宝木君は別として、ここでは奥宮さんでいいですよ」 千歳は冷や汗。ああ櫻さんがいてくれたら。

何だかんだで十時四十五分になった。コーディネートというのは憚られるも、プロセス管理と言い換えれば、千歳の得意とするところ。要は流れというか段取りを組み立てて、その進行を円滑にすればいい、ということである。

「では、皆さんそろったところで分担を決めましょう。六月君は自由研究の続きを兼ねて、飲料容器とフタ専門でいいかな。あとは男女一班で上流側と下流側ってことでお願いします。足りない道具はないですか？」

軍手と袋の予備を新参のお二人に渡しつつ、

「宝木氏、こういうの初めて？」

「街頭ではやったことありますけど、川とか海は初めてス」

「ぬかるみと波と、あと釣り針が落ちてることあるから、そういうのに気を付ければ大丈夫。奥宮さんもムリしないでね」 サンドルがちと気になる千歳。

「あ、ハイ」 同じく足元を見遣る舞恵。彼女の立ち位置はさっきまで水が浸かっていた。そのまま佇んでいると、段々と凹んできたりする。その感触を楽しんでいるようだ。まあいいか。

千歳は初参加の二人を何となくフォローしつつ、記録係に徹することにした。いつものバッグは肩に担いだまま移動する。少年は、憧れのお姉さんとご一緒したかったが、干潟の奥に溜まっている各種容器に目を奪われ足が止まる。パッと見たところ、フタはあまり転がっていない感じだったが、前回のさばっていた巨大な草がなぎ倒されていて、あらゆる漂着物に手が届きやすくなっている。ここは小回りが利く男子の出番である。早々とポイポイやり始めた。千歳は現場の証拠写真を押さえる。

期せずして同じ組になった蒼葉と業平。気乗りしている時は二人とも饒舌な口だが、なぜか今は黙々と除去作業に集中している。下流側は、まだ水位があって積石の方までは足が伸ばせない。カニの巣穴を覆っている大きめの袋ゴミを除けたり、埋没している腐食缶を引っこ抜いたり、淡々とこなしている。石の隙間が露出してきたのを見計らって、業平はさらに先へ。漂着物に対する嗅覚とでも言おうか、その勘は大したもの。早速、異物を発見した。

「蒼葉さーん、これ見て」

あわてて出てきたため、日焼け止め対策が十分でなかったモデルさんは、ヨシ群生の日影でゆっくり作業していたかったが、ちょっと気になるお兄さんにこう呼びかけられては行かない訳にはいかない。

「え？ 燈籠、ですか？」

台座の方はすでに溶けかけていたが、蝋燭を囲む紙の筒はまだふやけている程度で、それが紙製の灯籠であることはひと目でわかる。蝋燭は溶けきったのか、それとも台座の一部とともに流れてしまったか？

「荒川でも灯籠流しするんですね。流れきれずに漂着して、こうして原形をとどめてる、って。これは灯籠として本意なのかどうなのか」

記録係がノソノソやって来た。「あ、紙燈籠？」

「千ちゃん、これ知ってるの？」

「今は灯籠流して、すぐに回収するように指導されてんだってね。無粋かも知れないけど、できるだけ人目につかないところでボート出して網とかで掬うんだと。でも、これ見ると必ずしも掬いきれてない、ってことだね。ハハ」

「救われない？ フフ」 姉と同じような反応をする妹君。すかさず「そのまま溶かしちゃうと川が汚れるとか？ CODでしたっけ」

「へえ、お二人ともよくご存じで」 業平は感心するばかり。

「矢ノ倉さんに前に聞いたことがあって。でも、これ本当に溶けきるんでしょうかね？」

「持って帰って、いずれ先生に聞いてみますか」

当の掃部先生は、正にその灯籠の件で真相を確認中。ここより上流の某所で平和を祈念する音楽会と併催で灯籠流し行事が行われたはいいが、その回収が十分でなかった、というのを先生独自の地域ニュース網で聞きつけ、現物を捜し回っていたのである。彼等がいる干潟まではまだ到着しそうにない。

「そうか、掃部先生も今日はいらっしゃいませんねえ。来れば話早いのに」

「K.K.」イニシャルの絵筆を手に、蒼葉は溜息。千歳は漂着時の様子を克明にデジカメに収め、それが終わると発泡水を呑み出した。業平はさらに下流側へ向かっている。

「水、私にも」 それなら、とマイカップを渡そうとするが、すでに口をつけて飲んでいる。姉の上に行く小悪魔蒼葉。肘袖の白Tシャツにクロプトのデニム。すでに結構日焼けしていて、夏女風である。この大胆な感じは姉とはちょっと違う。フランス帰りゆえ、なのか。

七夕の時はサラサラ程度で済んでいたが、今はザワザワする感じ。心理面もそうだが、実際にヨシ群が熱風を受けて音を立てているんだから仕方ない。まんまと効果音に躍らされてしまった。しかしこの風、何と表現したらいいのか、暑苦しいという以上にちょっとした不気味さを含んでいる。午前十一時。まだ遠方だが、入道雲が出てきた。着実に高さを増している。

六月もヨシのザワザワを嫌って、下流ではなく上流側に歩を進める。水嵩の脅威はこの日も感じられ、崖地途中から生えるヨシには、根元ではなく中腹くらいにゴミが絡んでいる。少年の目線からはちょっと上に当たるが、その絡んだ一塊の中に何かの魚の白骨骨格が飛び込んできた。

「わあ！」

容器包装系ゴミをガサガサやっていた無愛想姉さんは、集めた袋を彼氏に預けると、六月のもとに近寄ってきた。彼にとっては二重の恐怖か？

「どったの、眼鏡君？」 六月は無言で指さす。さすがのルフロンも目が点。

「ハクン！ HELP」

デレデレならぬベタベタで彼氏にくっついている。ここのヨシ集落も三人を嘲笑(あざわら)うようにサワサワ、いやセラセラか。

「モノログで見た通り。いろんなもんがあるんねえ」 年長の方の眼鏡君はケロっとしている。こわばった顔をしていたルフロンさんだったが、少年に悟られないように表情を戻す。そのヨシの根元には百円ライターが一つ。まだ見えそうな一品である。

「あ、ルフロン、ダメだよ」

チャラチャラな上にスモーカーな舞恵嬢は、トートバッグの脇から舶来タバコを取り出すと、その漂着ライターを点火。見事、着火させ一服やり出した。

「火が点かなかったら吸わなかったワ」 これでサングラスでもかけさせたら、チョイ悪姉さんてどこか。「暴発しなかったからよかったものの．．．」 彼氏は気が気でない。

啞(くわ)えタバコの姉さんは、大風のせいで無残な姿になって棄てられてしまった傘の柄を拾い上げると、六月がポイポイ放り出して集まった空き缶の類をカンカン叩き始めた。泥砂の入り具合で音程が変わることがわかると、振ってみたり、並び替えてみたり、試行錯誤している。程なくカウベルのような響きを持った音階ができ、ちょっとした演奏が始まった。

「へへん、眼鏡君、どうよ？」

蒼葉に対しては「萌えー」な六月君だが、舞恵さんに対してはどうだろう。(まえー、じゃ芸が無いし) タバコの煙を見ていると正に「燃えー」な訳だが、何とも名状し難い。そのリズム感、テンポの良さには、鉄道の疾走感に通じるものを感じられ、ただ心地良い、そんなところだった。が、この時、同じ憧憬でもまた違った感情があることを知ったのは確か。小学生最後

の夏休み。多感な少年はこうして大きくなっていくのである。

タバコはさっきの紋様模型（消火用の湧き水ではないのだが）のところでもみ消され、付き人が差し出したケータイ灰皿で処理された。忠実な彼が時に「ハチ」と言われる所以である。

【参考情報】 [湧水は干潟を通り川へ](#) / [荒川駅](#) / [水溶性紙燈籠](#)

19. 八月病

千歳マネージャーはタイムキープに関してはあまり得意ではないらしく、ダラダラと撮影記録を続けている。もともとスローな彼だが、折からの暑さがダラダラを助長しているようだ。発泡水に手が行くも、フタを開けようとする手と手が止まる、その繰り返し。こういう状態をアタフタとはよく言ったものである。「フタ．．． あら、結構出てきた？」 六月の自由研究の見通しが明るそうなのが救いである。

十一時十五分。ようやく号令がかかり、各班が集めたゴミの品評&計数が始まる。研究員がいないので詳しいことは言えないが、ヨシ束をバサバサやる要領だけは心得ている千歳。微細ゴミは別枠だが、ひとまずバケツに漬けてみる。思わずプカプカ出てきたので焦る焦る。「ハハハ。この手のプラスチック片は後で数えますね」 再び冷や汗の千歳君。

この手の束をはじめ、細かい漂着物が干潟の奥で鬩(せめ)いでいた訳だが、これは例の不詳背高草が倒れていたおかげ。大きくなり過ぎて、身が持たず倒伏してしまったとすると、実に自虐的。だが、倒れてなお、防波・防潮に身を捧げたとするなら、ご立派の一言に尽きる。

「この前はこんなに大きくなかったよね。千さん？」 少年にまで千さん呼ばわりされてしまった。だが、悪い気はしない。「千さんてか、じゃ君は六さんだね」 もう一人、名前に数字がつく人物がいるが、後回し。だが、その八さんは「この流木もインパクトありますね。防波堤みたいだ」と口を挟んできた。確かに背高草と関係するように身を固定し、発泡スチロール片やミニ納豆の容器やら、水位が増せばあっさり流れ出てしまいそうなゴミ達を巧みにブロックしている。防流堤とでも名付けて敬意を表するとするか。

そんな流出を免れたプラスチック類を再分類しながら、品目別に各自カウントを開始。職業柄なのかどうかはいざ知らず、ルフロンは目算、いや目計算が速かった。カウンタ要らず、である。そんなこんなで少人数ではあったが、それに見合うような集計結果がまとまった。とりあえず画用紙にメモする。



ワースト1：プラスチックの袋・破片／三十六、ワースト2：食品の包装・容器類／三十一、ワースト3：フタ・キャップ／二十三、ワースト4：飲料用プラボトル（ペットボトル）／二十一、ワースト5：袋類・袋片（農業用以外）／十九といった具合。七月一日には多々見つかった硬質プラスチック破片と紙パック飲料が数個程度に激減したのには千歳も業平もビックリだ

った。いったい何が原因なんだろう？ 代わりと言っては何だが、今回は新たにガラス片や陶器片が二つ三つ見つかった。漂着物の変化に何らかの因果関係があるのかどうなのか、これは中長期で統計をとればわかること？ ムムム。臨時リーダーは思いを新たにしているのだが、それも束の間、頭が重いネタがあったことを思い出した。微細プラスチック（レジンペレットなど）である。これをしっかり数えると、おそらくワースト1になるところだが、今はひとまず置いて、数え終わった分をデータ送信するとしよう。しかし次なる試練が。「あ、ケータイ画面、どうしょ」 櫻、南実、弥生．．． 三人の存在の大きさを痛感する千歳であった。

「はいはい、千さん。私、やりますよ」 どうやら操作をマスターしたらしい蒼葉が手を挙げてくれた。設計者の業平は傍で同じように操作して再確認している。八広も業平とああだこうだやりながらカチカチやっていたが、「あれ？ バッテリー切れ？」 振動着信とか間違い電話がいけなかったようで、中断せざるを得なくなってしまった。ガックリ。

「ま、八くん、いつもあんな調子なので、ケータイで連絡とるの止めました。ついでにケータイそのものもいっか、て感じで」 ここにもケータイやめた？ 派がいた。意外な感じもするが、「メール打てば、すぐ返事くれるし、すぐ駆けつけてくれるし、フフ」 巷に聞くツンデレさんとはこういう人のことを言うのか、と千歳は妙なところに感心する。

蒼葉はうっかり保留機能を使わず、主だった品目の数を入れたところで送信してしまった。

「アハハ。じゃ続きは業平さん、お願い」

「蒼葉さん、干潟二周」

「ハイ」

本当に干潟を回り出したから、五人は啞然。少年はここぞとばかりに付いていく。

生活雑貨の詳細をまだ打っていなかった。極太マジックペン、キーホルダー、舞恵が手にしていた傘の柄とその他のパーツ、そのあたりはまだわかる。だが、歯ブラシ、ワンパックの使い切り洗剤、電気シェーバー、さらには使い捨てコンタクトレンズの容器、なんてのまで出てきたもんだから、「こりゃ社会の縮図だわ。金融業としても何か考えないと」と企業人らしい一面を大いに触発することになる。業平は、その他品目の入力に移っている。この際だから、具体的な名前を打ち込もうということらしく、「ねりからし」とか「玉ネギ」とか親指で器用にやっているから可笑的。「それにしても、そういう食べ物関係が見つかるってことは、やっぱり．．．」

橋よりも上流側にバーベキューができる公園があることを最近突き止めた千歳は、次の一手を画策し出した。ゴールをどう設定するかは模索中だが、プロセスマネジメントを応用しつつあるのは明らか。単なるゴミ拾いで終わらせないための何かが動き始めている。

雑貨の数々からずっと撮影を続けていた千歳だったが、恒例のスcoop写真の段になると、目の色が変わった。鉄筋あり、砂利袋あり、工事でもする気か！とツッコミを入れたくなる品々が出てきたのである。気合十分のカメラマンに対し、肩の力を抜けとばかりに少年が近寄ってきた。「千さん、これも」 見れば美少女キャラのフィギュアである。この間のモバイルスーツといい、どうしてこんな．．． 肩の力どころか腰砕けになってしまった千さんであった。

「可燃じゃないし、不燃てのもね。どっちにしてもゴミにするにはしのびないねえ」

「へへ、これはね『萌えるゴミ』なのさ」 フィギュアを見ながら、一人で「萌えー」とか呟いている。これには一同大笑い。八広も大いに煥発されたらしく、コピーだか散文詩だか、ブツブツ唱え出した。「萌える春、燃える夏、季節もゴミも移り行く．．．」

スcoop系の最たるものは「紙燈籠」だろう。だが、原形を保持するにはレジ袋ではちょっと

心許(もと)ない。プラスチック製のカゴなどでも良さそうだが、網状なのでイマーつ。そんな折り、ジェットスキーが通過し、その勢いで出来た断続的な中波がどこからか発泡スチロール製の箱状容器を運んで来た。偶然ではあるが、彼等にとってこれは必然。

「上流の影に隠れてたのかな？」

「要するにこれを使え、ってことだね」 傘の柄で手繰り寄せる。ちょうどいい大きさである。フタつき。中は空っぽ。これなら原状そのままに先生にお見せできそう。

「前は布団と枕がのさばってたんだけど、見なかった？」

「誰かが再利用してるんじゃないスカ？」

それはさておき、七月の回で湾奥に追いやっていた木片が露わになっていて、無言の圧力をかけてくるのが気になる。業平と八広は、鉄筋を運んで来るや、先の防流堤を強化するように押し付け、さらに木片を杭状に打ち込み始めた。汗が光ってサマになっている。廃材を使った土木作業、こういう工法を環境配慮型と言いたい。

そんな作業員を横目に、ルフロンがポツリ。

「隅田さん、ここで千住さんのカード拾ったんスカ？」

「そうなんスよ。信じてもらえましたか？」

「いやあ、これなら有り得ますね。今日はカバンも落ちてたし」

拾得物として届けるのは気が引けるので、とりあえずそのままにしておいた通勤用と思しきカバンが実は見つかったのである。何かのトラブルに巻き込まれた果てだとしたら、... 漂着物ではなく、遺失物。モノログ対象外なのだが、放置しておいていいものか。ちょっとした葛藤が生じる。

「ところで、落とし主さんはどんな感じでした？」

千歳は櫻のことをまるで知らない人のように聞く。釈然としない舞恵だったが、

「ああ、何か気優しいような、でもちょっとドジっぽい方でしたねえ。あと『拾われた方ってどんな感じでした？』って熱心に聞いてました」

「え？ そうだったんだ」

「三十くらいの好人物でしたよ、ってお伝えしておきました。その後、千住さんから連絡あったんですよ？」

「そうなんだ」ではなく「そうだったんだ」という千歳の言い回しから、ピンと来ていた行員は、

「隅田さんたらヤダなあ。千住さんとはもうお知り合いなんじゃないですかあ？」

つい本心というのが出てしまうものである。自分でネタ明かししてしまった以上、隠し通せる筈はない。結局、話は進んで、

「ちなみに、その櫻さんの妹さんが蒼葉さん」

「そうか彼女も千住さんだった」

となる。

二周どころか、その後も六月と楽しそうに何周もしている蒼葉嬢。そんなもう一人の千住さんを見つめる舞恵の表情からはいつしかツンツンはとれていった。余計なものを取り除いた干潟は、水の浄化然り、人の心のトゲや粗目も除去してくれるようである。

収集数が少なかった割には、総じてスローペースだったため、すでに正午近くになっている。冗長ながら集計と記録を終え、袋詰めも済んだ。スーパー行きの品々はペットボトルが少数程度の見込み。あとはそれを洗いながらフタの調査をするばかり。レジンペレットの類が悩ましいが

、取り急ぎバケツごと運び出す。ワイワイやりながら一斉に上陸する六人であった。干潟のヨシは心地良さに風にそよいでいる。だが、この清々しい感じがかえって気味悪い。太陽が時々隠れるくらいに入道雲が肥大化してきた。西の雲は灰色の濃度を強くしている。今度は空模様が心配だ。

そんな雲のことなどそっちのけ。新たに取り外した分を含め、ひととおり洗い終わったフタを両手いっぱいを持って来て広げて見せる六月。三十有数はある。ペットボトル付属のプラスチックフタは、天然果汁たっぷりのオレンジジュース、コーヒー飲料、乳酸菌飲料、スポーツドリンク、緑茶系などに加え、特定不能な無印のものがチラホラ。一方、ボトル缶付属の金属フタは、そば茶にスポーツドリンクに何かのアルコール飲料といった程度。メーカー名のみのもものが多く、残念ながら銘柄の特定には至らなかった。いつ、どんな状況でポイ捨てされたのかは兎も角、少なからず河川敷利用者によって、こうした飲料が嗜好されている、ということはわかった。とりあえずノートに付けていく。あとは現物をそのまま提出すれば済む話ではあるが、

「あ、証拠写真、撮ったっけ？」

「大丈夫、ホラ」

「ダイジョブ、グッジョブ！」

千歳はこの大事な記録写真を弥生宛に送る旨、約束し、少年の肩を叩く。いい光景である。蒼葉は鉛筆をとり、そんな人物を描写すべく試みたが、どうにも空模様が気になっていけない。そんな女性画家を見て、八広は記憶を辿る。六月のある日曜日、正にこの辺りで見かけた女性、そして、モノログに載っていたあの印象深い漂着静物画。．．

「蒼葉さんて、あの絵を描いた人スか？ 隅田さんのモノログに出てた、その．．．」

「ああ、あの時は私、衝動に駆られてて。今見ると自分でもおどろおどろしくて」

こんなにこやかな人があんな素描を、というのが俄かには信じ難い八広だった。内に秘める何か強烈なものがあるに相違ない、と察してみる。そして、今日受けた数々の刺戟を何らかの形で書き表したい、とやはり衝動を覚えるのであった。

「あれは傑作ですよ。自分も何か載せてもらおっかな」

八広はすっかりその気である。だが、千歳が彼にモノログや干潟のことを知らせなかったのは他でもない。筆の立つ八広のこと、きっといろいろ書いてよこすに違いない、それがわかっていたから、だったのである。漂着モノログのモノはあくまで「物」のつもりだが、千歳的には独りを意味する「mono」も兼ねていた。だが、こうなってくると、マルチログとかにした方がいいかも知れない。

さて、フタの品評会の最中、業平は毎度の如く唸っていた。六月とちょっとした談議になったバーコードの一件が頭の中を駆け巡る。今日もこの後おじゃまする予定なので、再度チェックしようと思い立つ。そう、スーパー新鋭のバーコード一括読み取りレジのことである。問題は読み取った結果をどこに飛ばすか。「まずはPCにバーコードスキャナをくっつけるところからやってみっか」 何ともマニアックな話ではあるが、銘柄調査がそれで叶うなら御の字か。

ペットボトルも乾いたし、そろそろお腹も空いて来たし、「では皆さん、今日はこれにて解散します。ありがとうございました！」 終わりよければ何とやら。千歳にしては上出来だろう。業平は袋を担いでそそくさとRSB(リバーサイドバイク)に跨って走り去る。空が暗くなってきたので、急いだに越したことはない。ア라운드25のカップルは少年を連れて、干潟の方に戻って行く。舞恵のケータイ（今は撮影専用）で記念写真を撮ったりして、楽しそうにしている。が、しかし、

「私ね、雨女なんだワ。早く帰らないとズブ濡れになっちゃうよ」

「あ、本当だ。雨？」

あわてて引き揚げる三人。方向は違えども、バスの停留所までは一緒である。自転車にゴミ袋を積む二人に軽く手を振りつつ走って行った。

「六月君て、実のお姉さんより年上の人が好きみたいね。確かに変わり者だわ」
解放されてホッとしていると見受けるも、淋しそうでもある。業平もとっとと帰っちゃうし．．．

「今日は結局、櫻リーダー来ませんでしたね」

「千さん、しっかり代役果たしてましたよ。姉さんがいなくても大丈夫でしょ？」

「いや、櫻さんがいないと．．．」

「フーン」

徐行気味に走っていたが、徐々に雨脚が強くなってきたのでペダルを急ぐ。十二時半なのに早くも夕立とは！ ゴミステーション行きは諦め、橋の下で雨宿りすることにした。

「濡れちゃいましたね」

「画用紙とか大丈夫ですか」

白のTシャツがところどころ水気を含み、何とも艶(なまめ)かしい状態になっている。空が暗い上、場所が場所だけに暗め。ハッキリ見えない分、余計にドギマギする。一方の蒼葉は平然としたもので、せいぜい濡れた髪に手を当てる程度。やはり小悪魔である。

「ねえ千さん、櫻姉のこと、どう思います？」

「どう、ってそりゃあ。クリーンアップ中は相棒だと思ってますけど」

「相棒？ それだけ？」

「そうだ、蒼葉さんに言っておこうと思ってたんだ。桑川さんに二人はカップルだとか、言ったでしょ」

「え、違うんですか？ 当たらずも遠からず、でしょ」

千歳にしてはハキハキやっている方だが、雨脚に呼応するように、さらに調子が強くなってきた。

「そういう話は二人でゆっくり、と思ってたんだよ。周りがワイワイやり出すと櫻さんも迷惑だろうし」

「そっか。千さんの前だと張り切っちゃうから知らないんだ。四月以降、何かポーっとしてること多いんですよ。見ていてわかるんです。ありゃ一目惚れに近いな、って」

蒼葉も負けじと強めに応じる。姉のこととなると“C'est la vie”では済まないようだ。そのままピッチは上がり、姉君の近況などが次々と語られる。

「以前の櫻姉なら、もっと熱を上げてると思います。失恋事件があって男性不信になっちゃって、億劫ていうか臆病になってるだけ」 とか、

「でもね。千さんと会ってから、少しずつだけど元に戻って来みたいなの。事件以降、パタリ弾かなくなったピアノも弾き出したし．．． でも、もどかしくて」 だそうな。

固唾を呑んでいた千歳だったが、水があるのを思い出し、発泡水をゴクリ。気が張っている彼だったが、水の方は気が抜けてる感じ。先のアタフタの一件はすっかり忘れてる。

「私、行けなかったからわからないけど、自由研究の日、何かあったんでしょ？ 気疲れどうこうとか言ってたし。最初は夏風邪かと思ったけど、違った意味で熱中症とか。いや、恋わずらいかもね」

「梅雨が明けてから、暑い日が続いたから、そのせいじゃ？」

「千さん、鈍いのよ。姉さんの想い、少しは届いてるでしょ？」

七夕のお誘いと当日の出来事、これまでの櫻の言動の数々．．．「咲く・ラヴ」の意味も何となくわかってきたような。だが、彼にも相応の事情がある。自分で背中には押せないのである。

「このゴミを片付けたらお見舞いに伺う、ってんじゃダメでしょか？」

彼としてはこれが精一杯。だが、その想いは妹には十分伝わった。

「いや、そんな。泣き出しちゃうかも知れないから。アハハ」

雨は小康状態になってきた。怨めしい雨ではあったが、おかげで思いがけない展開になってきた。クリーンアップに関しては課題解決型アプローチでプロセスが見えてきたところだが、それとはまた別のプロセスがここにあることに今更ながら気付く。よりデリケートで、機微・機転が求められる、そんなプロセス。

「あ、そうそう、これまで眼鏡を外して見せたことがあります？」

「いえ、でもそれが何か？」

「眼鏡っ娘、キライじゃないですよ。．．．ふつつか者ですが、姉をよろしくお願いします」

意味深ではあるが、事件とピアノと眼鏡といろいろリンクしているらしいことはわかった。それにしても、気疲れってのはいったい？

「とにかくメールします。櫻さんによろしく！」

「ハイ」

雨上がりの橋をスイスイと走っていく蒼葉。千歳も某少年同様、萌え一状態になりかけている。しばらく見送っていたが、手渡された燃える系のゴミ袋がやおらズシリと来て、目が覚める。「濡れた新聞紙、か」これでも一応可燃である。全体量は少なかったもので、四十五リットル袋二つに収まったが、ぎっしりと詰め込んである不燃ゴミに対し、可燃ゴミはその半分程と差がついた。プラスチックの容器類を不燃でなく再資源化扱いにして、隣市で処理してもらうことを思いついたのはこの時である。あとは燈籠を入れたスチロール箱、プラスチック粒を入れたレジ袋。一人で何とか持って行けそう。猛暑日一歩手前まで気温は上昇。雨で少し冷めたとは言え、なお三十度は超えている。荒川は雨で増水したせいもあるが、相変わらず勢いがいい。だが、温水(ぬるみず)と漂流ゴミを押し流すのは大仕事である。

そんな流れを見ながら、一人黙考する千歳。気疲れで思い当たるのは、過剰適応と眩暈(めまい)の話．．．「櫻さん、まさかクリーンアップも気付かないうちに頑張り過ぎて、それで？」

コーディネーターというリーダー役を今回やってみて、その大変さを実感した千歳は、恋わずらいというのは割り引くとして、彼女に何らかの負荷がかかっていたことを認識するに至った。こうなると居ても立ってもいられない。善は、いや「千は急げ！」である。

今日は初音が不在ということもあるが、カフェめしはもとより、とにかく昼食そっちのけでPCに向かう。モノログにレポートを載せてからメールしてもいいのだが、お見舞いの一筆を送らないことにはどうにも落ち着かない。奥宮さんとのやりとりについては伏せておこう。出だしは、暑中お見舞いの一節、そして蒼葉から話は聞いたこと、今日は僭越ながらリーダー役を務めたが、その大変さがわかったこと、「これまで櫻さんに甘えてしまっていたようで」斯々(かくかく)、
「もしかして、ご無理がたたっておつかれに」然々(しかじか)、ここまで一気にしたためて、ふと思いつく。参加or不参加とか、段取りとか、皆で連絡をとりやすくすればあれこれ気を回さなくても済むようになるんじゃ．．．本文の結びは、「メーリングリストを作ろうと思うんですけど、どうでしょう？」いよいよ末尾に来た。ひと想いに綴る。「p.s. 八月十九日は

、旧七夕だそうです。櫻さん、当日のご予定は？ 織姫様にお目にかかりたい彦星より」 なかなか小洒落た想いの託し方である。手書きじゃないのが惜しいが、「届けたい・・・」その一心が大事。彼女にきっと届くだろう。

「櫻姉、ただいまぁ」

まだ髪が潤っている妹を見て「どしたの、川にでも落ちた？」と寝ぼけたようなことを姉は云う。

「短時間大雨に遭っちゃって。こっちも降ったんでしょ？ そうそう、千さんにはちゃんと申し伝えましたから、ご安心を」

「ああ、ありがと」

一人分の即席カフェめしをつつきながら、気のないお返事。ふと思い出したように、

「今日の面々は？」

「はい、この通り」

蒼葉は画用紙を差し出す。

「この奥宮さんて？」

「宝木さんの彼女ですって。馴れ初めとかは聞かなかったけど」

講座の受付で記名した時のことをハッキリ覚えていたので、宝木の方はすぐに思い出した。「奥宮」というのも思い当たるフシがあるようで、

「気難しそうだけど、テキパキした感じ、とか？」

「さぁ。千さんとはいろいろ話してみたい」

手強いあの人が今日は来なかったことがわかり、「なあんだ」と気抜けしていた櫻だったが、今度はその一節が引っかかって憂い顔。

「ま、早くメールチェックした方がいいと思うよ」

「え、メール？」

箸を置くや否や、自室に駆け込む姉君。十四時前、ちょうど千歳が送信を終えたところ。以心伝心、グッドタイミングである。

「千歳、さん．．． うう」

夏真っ盛りなのだが、暦の上ではあと三日で立秋。櫻の心には早くも感傷的な風が吹いていた。メーリングリスト、旧七夕．．． どう返事をしたものか。物思う夏、心昂(たか)ぶる夏、蝉が囃し立てるように鳴いている。

八月の定期モノログはまだ着手できていない。次は弥生宛に自由研究ネタの画像を送りつつ一筆打つ。勿論メーリングリストの提案も添える。例のカウント画面からのデータ送信先はその後テストを繰り返し、今は千歳、櫻、弥生、業平の四人にしてあるが、メーリングリストを設定した暁には、データ送信先をメーリングリスト宛にしようという一計が浮かんでいた千歳は、その辺について開発者にお伺いを立てることを忘れなかった。

さて、今日のデータは二回に分けてではあったが、蒼葉のケータイから確かに届いていた。いつもなら、このデータを確認した上でモノログの更新作業に入るところだが、今日は先送り。今度はメーリングリスト参加可否のメールの準備に勤しんでいる。お互いの連絡を円滑に、そして何より、自由研究の日のように不意の参加者の登場で櫻を困惑させないためにも、メーリングリストの開設が急がれる。こういうことに関しては器用な彼は、テンプレートで共通の文面をさっさと作ると、そこに個別に表示したい項目（本文冒頭の宛名表示、メーリングリスト登録予定ア

ドレス、通信欄の三箇所)が自動挿入される機能を使って、BCCで同報メール(ちなみに標題は暑中見舞い)を送るのであった。受取人は恰も自分宛に届いたような形になるのがポイント。DMと同じである。送り先は、女性三人に男性二人。少人数なので、別にこんな凝った送り方をしなくても良さそうではあったが、発信時刻に時間差が生じると、特に先輩後輩のお二人さんが「私の方が先だった」とか思わぬ情報交換をする気がしたので、安全策を取ったという訳である。気を遣うのはマネージャーも同じ。気疲れしなければいいのだが。

もう一人の女性のもとにはケータイメールが入る。「わあ、千さんからだ」今日は言い過ぎちゃったかな、と些か恐縮しつつ、メッセージを読む。文末には「メーリングリストの件は、まずはお姉さんに確認中です」とある。「そっか、ちゃんとメールしてくれたんだ。それにしても櫻姉、部屋にこもったきり出て来ないけど、大丈夫かな？」

蝉は少々トーンを落とし、短くなってきた日脚を惜しむような鳴き方をしている。その声に応じるように溜息をつきながら、櫻はご自分のブログとにらめっこしていた。複合商業施設のレポートを皮切りに、自由研究デーの出来事、地域事情マッピングの可能性など、編集すれば情報誌になりそうなネタの他に、最近は日記風によしなし事を綴ることが増えていた。ブログとしては真っ当な話なのだが、書き綴ることで余計に想念が深まる、ということもあるようで、「橋から干潟を眺めていると、最初に訪れた日のことが鮮やかによみがえってきます」とか「クリーンアップの発起人さんには何かとお世話になってます」とか、誰かさんが見たら心動かされそうなことがすでに書いてあったりして、日に日にブログのサブタイトル通りの展開になっている。メールはもらったものの、お目にかからなかった分、想いは募る。この心理状態で返信すると、突拍子もないことになりそうなので、グッとブレーキをかけて、後日お返事することに決めた。まずはブログで心を鎮めよう、ということらしい。

かくして「八月病」と題した短文が「咲くラヴ〜」に掲載されるに至った。千歳はまだここ最近の櫻ブログは目にしていない。八広からの話を聞いて、見ずにはいられないというのが正直なところなのだが、怖いという気持ちも半分あった。「届けたい」櫻の想いとは裏腹に、まだ届いていない想いがブログには散らばっている。せっかく咲いても、それが人目に入らないうちに散ってしまっただけは儂いというもの。...

モノログからもリンクを張れば、古い言い方だが「相互リンク」になる。大して手間がかかる作業ではないのだが、どうやら先になりそうである。

【参考情報】 [2007.8.7の漂着ゴミ](#)

八月の巻（おまけ） 20. 想い重なる立秋の週

—— 八月六日 ——

送られてきたプラスチック粒の画像を眺めつつ、珍しく浮かない顔をしている女性がいる。立秋の前日にはとうとう二十代最後の年齢になる、というのが一因だが、誕生日にまた一人、というのがどうにも居たたまれず、今ひとつ元気がない。「出張パスってでも、行くんだっただなあ」

粒々を数えながら、ブツブツやっている。この際、メーリングリスト参加OKの返信と合わせて、直球をぶつけてみるか、と南実は思いを巡らすのであった。休み時間、職場からパタパタと返信する。その中にはこんな一文が紛れていた。「粒々の現物を引き取らせてください。八月七日、あの商業施設の近くに行く用事があります。夜って空いてますか？」

千歳が大いにあわてたのは想像に難くない。この時点では櫻からの返事はまだ。当然のことながら、最新の櫻ブログも未見である。「まあ、これをお渡しするだけなら．．．」 洗って乾燥させた粒やら小片を使用済み封筒に入れ直してサラサラ振っている。何ともお気楽な千さんであった。

—— 八月七日 ——

さすがに電動アシスト車を走らせる訳にも行かず、電車とバスを乗り継いでの上である。何とか約束の十八時に間に合った。七夕からちょうど一カ月が経った今、その七夕飾りはとうになく、イベント広場は閑散としていた。そこに、リボンの付いたプルオーバーと長めのタイトスカート女性が一人、落ち着かない様子で立っている。勝負服ともとれるが、あくまで通勤着の南実嬢なのであった。買い物客とはちょっと異なる装いなので、目立つことこの上ない。千歳はすぐに気付いたが、少々遅刻してしまった上、気後れも手伝って、遠巻きにしている。南実が時計を気にしているようなので、仕方なくトボトボとやって来て、自分で「スミマ千」と切り出す始末である。ヤレヤレ。

強肩の南実は直球に加え、速球も投げってくる。軽く会釈するや否や、開口一番、「隅田さん、この店、どうですか？ 私、おごりますから」と来た。広場に面したシーフードレストランが客を待ち受けている。「こんなはずじゃ．．．」 千歳は不承不承ではあったが、「ま、封筒だけ渡してお別れ、というのも無粋だし」と思い直したりして、とにかく葛藤を抱えたまま、席に着くことになった。

どう注文したのかはよく覚えていない。ただ、シーフードというだけあって、貝柱やら小粒なイクラやら細かく切ったイカやらが入ったパスタが首尾よく出てきた。今日持って来たプラスチックの粒々と重なって見えてくるから困ったものである。ご丁寧にシソを刻んだのが盛ってあって、今度は人工芝の切片の如く映る。生き物が誤食してしまう、というのが妙にリアルに実感され、言葉を失う千歳。一方の南実はただ嬉々として、フォークをクルクル回しては、桜エビなんかを散らした和風パスタを頬張っている。何を話すでもなかったのだが、粒々の話が高じて、漂着ゴミを巡る最近の社会的な動き、人が立ち入れない場所（特に離島）でのゴミの惨状、さら

には海洋法や関連法規の話題に至るまで、いつしか南実の独演場となっていた。インタビュアーに徹していた千歳は心得たもので、この調子のままお開きになればそれはそれで、と踏んでいた。だが、心と我に返る。外出直帰とは言え、南実がわざわざここに来て、こうした席を設けたからには何かあるのでは？と今更ながら感知したのである。南実は「講義しに来たんじゃないのにい」と同じく我を取り戻すと、化粧直しのためか、あわてて席を外した。テーブルには、当の商業施設系列の通販カタログが置かれている。待合せの間に手にしていたのだろうが、降って沸いたような一冊である。千歳は興味本位でパラパラと繰っていたが、晩夏ファッションの特集ページで手が止まった。「蒼葉さん?!」一昨日は不覚にも萌えモードになっていたが、今はちょっと違う。その見事な着こなしに目を奪われつつも、何かを訴えるような視線の方に釘付けになっていたのである。「そうだ、櫻さんと会う約束. . .」ファッションモデルの訴求力というのはただならぬものがある。

唇には淡い紅色。それだけでも、掃部(かもん)先生と一戦を交えたあのお嬢さんとは思えない変身ぶりである。南実が静々と戻って来た。着席すると咳払い一つ。お互い緊張が走る。

「あの、前からお聞きしたかったんですけど、千住さんとはおつきあいされてるんですか？」

「櫻さんはどう思っているかわかりませんが、僕はそのつもりです」

「そうなんだ. . .」

通販カタログのモデルさんが彼を後押ししたのは定かでないが、心の準備ができていたこともあって、自分でも驚くほどキッパリと言ったのけた千歳。ストレートをあっさり打ち返したような応答である。だが、手強さで定評のある南実はこれで引き下がったりはしない。

「ま、いいや。また干潟には顔出しますから。それとメーリングリスト、早く作ってくださいね」

こじつけのようだが、八月七日は「花の日」だとか。スーパーはまだ開いているが、専門店街にあるフラワーショップはそろそろ閉店時刻。前を通りがけると、その記念日にちなんでか、綺麗な赤い花のミニポットが特売扱いで残っていて、客の足を止める。

「あ、サルビア」

「今日ご馳走になっちゃったんで、ささやかですが、これでお返しさせてもらえますか？」

「それはお礼？ それともお詫び、ですか？」

「え、いや. . .」

「どっちにしても、ありがとうございます。この花は私にとって特別なんで」

祝ってもらおう立場でありながら自分で食事代を払うは、胸ときめく言葉どころかプチ失恋のような台詞を聞く羽目になるは. . . 誕生日にしては冴えない展開ではあったが、宵を一人で過ごさずに済んだこと、そして思いがけず誕生日花をプレゼントしてもらえたこと、この二つは大きかった。誕生日であることを申告すればまた違うストーリーになったかも知れないが、今日のところはこれでよしとしなければ。受け取った封筒の方はもともと口実のようなもの。下手するとその粒々が誕生日プレゼントになってしまうところを回避できたのだから万々歳である。期せずして千歳は、また違う場面でポイントを稼ぐことになった。が、それが面映かったか、「じゃ、僕はここで買い物してから帰るんで」といつものマイバッグを手に、そそくさと去って行く。南実は薄笑いを浮かべると一言、「今は隅田さんの片思いってことじゃん」まだチャンスはなくはない。それがわかると何となく火が付く南実嬢であった。サルビアの花言葉、それは「燃える想い」である。

静かな想いを温めつつ、されどなかなか返事もできず、逡巡するうちに立秋を迎えてしまった。今日からは残暑見舞いに切り替わる。情報誌の編集を進めている櫻だが、ネタがちゃんとある割には、普段よりもペースが遅い。まだ八月病が癒えないのか、否、八月十九日のことで頭がいっぱいなのである。今日も猛暑日になりそうな予感。チーフは見かねて「櫻さん、大丈夫？ 暑さのせい？」と声をかける。

「あ、すみません。打ち水のこと書いてたら、かえってポーッとしちゃって」

「打ち水が必要なのは櫻さんね。かけたげよっか？」

「私よりも、野菜畑の方を心配してあげてくださいよ」

「ハハ、こりゃ失敬」

蛇足ながら、八月八日はハゼの日だったりするが、ズバリ「ハハ」なので笑いの日でもあるような。そんなちょっと笑える昼下がりに、インターン生が現れ、さらなる笑いを誘う。

「こんにちはあ。もう溶けそう．．．」 いつもはチャキチャキしている弥生が言葉の通りフニャフニャになっている。スタッフ二名は笑いをこらえながら、声をそろえて「いらっしやい」。この調子だといつもの弥生節は不発になりそうだが、「そうだ、櫻さん、メーリングリストの件！」と相変わらず鋭い切り込みよう。

「まだ返事してないんだなあ」

「千さんきつと待ちくたびれてますよ。あ、今もピピって。千さんキターって感じ」

「弥生ちゃんにはかなわないワ」

ここでチーフが首を突っ込む。「メーリングリストって、隅田さんが呼びかけてる件？」

「え、文花さんも」

「あと、南実ちゃんもね」

「そうなんだ．．． メーリングリストですもんね」

誰が入る・入らないで参加の可否を決めるものでもないのだが、この話を聞いて、櫻は益々返事に悩むことになる。櫻を困らせないための発案だったのだが、どうもそうっていない。千歳の想いもうまく届かないものである。

「南実ちゃん思い出した。メールしなきゃ」

「どうかしたんですか？」 櫻にしては珍しく強い反応を示す。

「あの娘、昨日が誕生日だったのよ。お祝いメールしそこなっちゃったから」

いつものことながら、後輩思いの先輩なのであった。「あれで彼氏でもいれば、周りがいちいちお祝いメッセージを送る必要もないんでしょうけどね。きっと昨夕も一人よ」 自分のことはそっちのけ、まるで他人事である。

チーフが私用メールを打っている間、櫻もあれこれ思案する。「てことは、自宅宛に小松さんからのメールも届くようになる．．． 何かドキドキしちゃうなあ、でも」 先刻まではノラリクラリだったが、決然とした表情に一変する。弥生は再びピピと来たようだ。

「データの送信先もメーリングリスト宛でいいですよ？ 櫻さん」

「え、デート？」

「またまたあ、トボけちゃって。誰とですか？」

「フフ」 不敵な笑みがこぼれる。これまた蛇足ながら、二月二日はフフの日かと云うと、そうではない。櫻の浮き沈みは二月も八月も関係なし。日常茶飯事である。

早番だった櫻は、女性二人をセンターに残して帰途を急ぐ。おなじみのセミは立秋など素知ら

ぬ振りで賑やかに鳴く。「ちゃんと返事出しますよーだ。急かさないでよねっ」いつもの櫻が戻って来た。

「残念でした。今回は一人じゃなかったですよーだ」の一文の末尾には「あかんべー」の絵文字付き。小憎らしい後輩からのショートメールは夕刻になって届いた。「え、まさか」文花は思いがけない返信に些か狼狽するも、「何だかドラマみたいになってきたわねえ」と苦笑い。自分がその仕掛人であることがどうもわかっていない。やはり他人事のチーフであった。

こうなってくると、櫻からの返事が早く着いたに越したことはない。文花からは探りメール、南実からは次の一手メールが届いてしまう。千歳が余計な動揺をする前に、想いが届けばいいのだが。だが、櫻が意を決したのが伝わったか、彼も一念発起して櫻ブログを開いていたのである。「これが櫻さんの想い、だったのか．．．」八月病と題した記事の中には「発起人さんからお見舞いメールをいただきました。感謝感激、今日の天気は雨あられ？ 私は思わず涙雨(!_!)」

千歳も思わず目が潤んできた。そこへ図ったように櫻からのメールが到着。千歳からの助言でメールソフトを入れ替えたのが奏功したらしく、差出人名はきちんと「千住 櫻」と表示されている。些細なことのようにだが、彼にはそれがまた嬉しかった。タイトルは「残暑お見舞い申し上げます(^)v」本文を読む前にのぼせて来た。

案の定、八月病で返事が遅れた云々という弁明に始まるも、「お気遣いいただき、誠にありがとうございます。今はおかげ様で元気です」と丁寧な一節が添えられ、あとはメーリングリストの設定については弥生とも相談したこと、登録するアドレスは自宅用で構わないこと、などが淡々と綴ってある。そしてp.s.ながら実はこっちが本題の件については、「八月十九日、何が何でもお供します。時間と場所をご指示ください。By櫻姫」との返し。姫の写真を眺めながら、泣いたり笑ったりした千歳だったが、一日の終わりはやはり笑って締めたいもの。ハハの日とはよく言ったものである。

—— 八月十一日 ——

民営ではあるが、公設でもあるので、夏季休業を設けて悪い、ということもないだろう。環境情報センターが四日間の連続休館に入る前日の土曜日は、世間はすでにお盆休みということもあり、今のところ来訪者はゼロ。情報誌の発送手配はすでに終え、チーフはひと足早く休みに入っている。今日は一人ゆっくり、データのメンテナンスなどを行っている櫻である。窓は閉め切っているがセミの声が喧々(けんけん)と入ってくる午後のひととき、たまには機材の点検でもするか、と席を立った時のことである。思いがけない客人がやって来た。若いお二人さんである。「あら、いらっしゃいませ」

「あれ、櫻さんだけですか？」

「文花さんはこの暑さでバテちゃいました。何ちゃって」

「櫻さんはもう平気なんですか？」眼鏡の少年が、眼鏡の女性に尋ねる。

「え、ええ。あ、五日は行けなくて、ゴメンナサイね。ま、私がいなくても大丈夫だったと思うけど」

「千さん、何かアタフタしてた。『櫻さん、来ないかなあ』とか言ってたし」

「そ、そうだったんだ．．．」不意の来客であわてている上に、乗っけからこういう話を聞かされては動揺するのも無理はない。

六月の自由研究の方は千歳のフォローで無事まとまったことを聞き、ひと安心。となると、今日ここに二人して来たのはまた何故？

「そう言えば小梅さん、お姉さんと旅行して来たのよね」

「伊勢の親戚宅に行って来ました。青春18きっぷで」

「え、普通列車で？」

「自由研究の日、図書館でひと調べした後で、中の談話室で夏休みの予定について話してたんです。伊勢の話になったら、六月君が時刻表で調べてくれて、それで」

「東海道線では乗り継ぎが多くなるけど、名古屋には午後二時台に着けばいい。名古屋からは快速列車に乗れば速いけど、接続が良くない上に、途中から18きっぷが使えない線に入っちゃうのが落とし穴なんだ。名古屋から伊勢方面までJRの普通列車で行くとちょっと遠回りだけど、時間的には大丈夫なのがわかったから、18きっぷを使ってこの行程でどうぞってね」

「弥生ちゃんから話は聞いてたけど、さすがねえ」

「で、五回のうち四回分使ったんで、残った一回分を六月君に渡そうと思って」

「それでわざわざ？」

「あ、あと自由研究の御礼と思って。櫻さんにお土産です」

小梅は、伊勢の名物、某餅を持って来ていた。粉飾だ偽装だと喧(やかま)しい折りである。この一品も賞味期限ギリギリではあったが、この際、どうこうするのは止そう。

六月への御礼も兼ねているということなので、

「ありがとう。じゃ三人で食べますか。残ったら弥生ちゃんに、ね」

タイムリーなことに、ちょうどおやつの時間になっていた。

「明日からここお休みなんですよ。櫻さんはどこか行くんですか？」

「千さんとお出かけ？」

「え？ 六月君まで、そんなこと．．．」

お土産の餅ではないが、赤くなっている。「いいじゃないか」と餅の宣伝フレーズが聞こえてきそうだが、

「18きっぷ余ったらオイラ使うからさ」なんて、さらに余計なことを言うもんだから、「いいじゃ」到底済まない。赤面+膨れ面になってしまった。(これが本当の赤ふく状態？ 決して笑えない。)

「大人をからかうんじゃないのっ」前にここで弥生にも同じように冷やかされたことを思い出した。年は離れていてもやはりきょうだいである。ま、ここは弥生嬢に免じて許して進ぜよう。

「小梅さん、伊勢って言っても広いじゃない。志摩の方とか？(そういや、石島と伊勢志摩って似てるわね)」

「鳥羽の手前、二見浦ってところです。海の近く．．．」

「ああ夫婦(めおと)岩のある、あそこね」

「海水浴場の方なんですけど。漂着ゴミ、すごかったです」

太平洋から伊勢湾に回り込んで来る漂流物よりも、湾に注ぎ込む河川などからのゴミの漂着が甚だらしい。袋に破片に、とにかくプラスチック類が目付いた他、より大きめの発泡スチロール片、あとは黒の長細い筒なんかが結構散らばっていたそう。さらに川が増水すると上流からの流木が海に流され、湾内の海岸に打ち寄せるといふから一大事である。荒川の一(いち)干潟の比ではなさそう。

「それにしても、六月君。一回分とは言っても、18きっぷは高額品よ。何かお返ししないとねえ」 からかい半分で諭す櫻。すると、

「ちゃんと特命受けてますんで」 若い二人は顔を見合わせ、ニコニコしている。毎度、微笑ましい限りだが、羨ましくもある。「若いっていいわねえ」とか、内心呟いているが、これはほんのご冗談。十九日の予定はだいたい決まっていて、あとは当日を待つばかり。気持ちに余裕がある故の呟きだが、このお二人さんを見ていると、どうにもソワソワして来る。櫻にとっては、長く暑い夏季休業になりそうである。

【参考情報】 [海ゴミ—拡大する地球環境汚染](#) / [八月八日](#) / [伊勢鉄道は別料金](#)

21. 咲く・love

待ちに待った旧七夕の日がやって来た。夏は何々の季節と言うが、四週間ぶりの再会となつては、何々も某もあったものではない。ただこの久々感とでも言うべき感覚は重要で、ドラマ的な心理を否応なく盛り上げる。待ち合わせは、センター下の図書館談話室。図書館でドキドキするシーンというのは学園モノでは一般的だが、まさかこの年になってそのシーンの当事者になるとは、である。約束の十四時まではまだ時間がある。談話室で一人黙々としているのは、本来バツの悪いものだが、己との対話だって談話のうちである。何を話そうか思案しつつ、ドキドキを楽しむ櫻であった。

一刻も早く、という想いに押されて、千歳も定刻前に到着していた。ガラス張りのその一室に、目を閉じて深呼吸する一人の女性を見つけ、やはり胸高鳴るものを覚えるも、それが沈静するのを待つべく、何となくウロウロしているのであった。見方によっては不審者と思われても仕方ない。こういうシーンも学園モノにはありそうだが、彼の場合は退出させられる前に何とか次の行動に移ることができた。櫻は即座に席を立つ。

「千歳さん！」

さっきまで黙りこくっていた女性がいきなり声を上げたものだから、周囲の視線を集めることになる。千歳は「ハハ、参ったなあ」とか言いながら、櫻に近寄ると、「お久しぶりです。櫻姫」櫻は思わず飛びつきそうになったが、学園ドラマではないので、ブレーキをかける。今度は小声で「千歳、さん. . .」

「外はまだ暑いので、ここで涼んでから行きますかね」

櫻は放熱、いや放心状態。これが蒼葉の言っていた「ボー」なのか、と様子見しつつ、ゆったり構えることにした。ドキドキが収まるを確かめつつ、口を開く櫻。奥ゆかしい間合いである。

「何か蒼葉があることないこと喋っちゃったみたいで、かえってご心配おかけしまして」

「もう大丈夫ですよ。櫻ブログも絶好調のようだし」

「ハハ。せっかく作ってもらったんですもの。あふれる想い、届けたい. . . です」

その想いって？と聞き返したかったが、千歳もブレーキをかけてみる。蒼葉が見たらやきもきしそうなワンシーンである。

「じゃ、今日はモノログネタの調査同行、よろしくお願いします」

「てゆーか、デートでしょ。素直じゃないなあ、千さんも。フフ」

何とも返事のしようのない千歳はテレ笑い一つ、そそくさと先を急ぐ。春先に目撃し、その後も重点ゴミとして目を付けているバーベキュー関係の漂流ゴミの発生源を探るべく、橋よりも上流側にあるバーベキュー場を併設する公園へ、というのが今回のテーマ。五月に単身、調査しに行こうとしていたが、橋から掃部公を目撃して、干潟へ行ったりしたもんだから、その日は叶わず、以来ずっと棚上げになっていたのである。三カ月が経ち、今はシーズン真っ盛り。満を持しての現場偵察である。

前日はぐっと気温が下がり、これじゃバーベキュー客も減か、とちょっと気を揉んだが、この日は一転して再猛暑となった。櫻はいつものクリーンアップスタイルとは似て非なる、あの晩夏のアウトドアファッションである。デニムのハーフパンツに、シャーリングのカットソー。暑い

ということもあるが、普段は長丈で隠している腕と脚が少々露わになっているのがポイントである。

「今日の櫻さんのその衣装、もしかして『お上がり』とか」

「あら、よくご存じで。どう？ モデル並みでしょ」

ここで下手に蒼葉と比較するのもどうかと思い、とにかく頷いて拍手を送る。二人とも自転車を手にしたまでにはいいが、なかなか走り出そうとせず、この調子。これはこれで微笑ましい光景である。

小振りな麦藁帽を被り、多少なりとも日焼け対策を講じてはいるものの「まさかここまで晴れ上がるとはねえ」と絶句する櫻。十四時半、日射はピーク。バーベキューの方は、読み通り、撤収組がチラホラ出始めた頃合いである。ひととおりの飲食が済んでからは、リバーバレー(?)に興じるグループ、キャッチボールをする男女、駆け足を競う親子、縁台将棋にギターの弾き語り、はたまたジャグリングの練習に余念がない諸兄など、広場では実に様々な過ごし方が展開されている。その一方で、まだダラダラと飲み食い続けている若者グループも結構いて、そのラフな格好からして、半ば日光浴を楽しみながら、の様である。バーベキュー向けに用意されている囲いなども予め据え付けられているのだが、道具類は概ね自前で持ち込まれている。コンロや網も本格志向なら、テントやテーブルも立派なもの。レジャーシート組は少数で、デッキチェアでくつろぐスタイルが主流になっている。こうなると、バーベキューの方も気合いが入ったもので、焼肉・焼野菜のみならず、シーフード系のグリルあり、焼き鳥あり、さらには自家製ハムを燻しているところまである。どこかの屋台村に迷い込んだような趣である。当然のことながら、飲食に供される容器類、排出される袋類や生ゴミの量も並々ならぬこととなる。それらは傍らで数多(あまた)見受けられ、行く末が案じられて仕方ない。この人数にかかれれば、一部が散乱・漂流することになるのも大いに納得となる。

「最近のバーベキューって、何か凄まじいですね」

「勿論楽しんでやってるんですけど、いかに本格的にやるかって方にエネルギーが注がれてる感じもします」

調査なのかデートなのか、定かではないが、少なくともレジャーに来た訳ではないこの二人は、批評家然、かつ漫然と広場を散策するのであった。

幸い、今この時間に片付けている皆々は、その分別については怪しい面も散見されるものの、自分が出したものはきちんと持ち帰る、という一点において極めて真っ当である。犯人探しをするつもりはないが、何かしらの因果関係がここにありそうな以上、もうちょっと調べを進めたい。捨てられそうな場所に先回りすることにした。

この辺りには自然地も干潟もない。ただ傾斜のある護岸が川と陸を隔てるばかりである。その斜めの護岸にちょっとした間隙があると、ヨシならまだしも、セイタカアワダチソウなんかはヒョロヒョロと根を下ろし、草陰を作ったりする。さらにはアレチウリなる厄介な外来植物が陸地にちょっとでも蔓延(はびこ)ってたりすると、それも忽ち護岸に侵入してきて、セイタカと関係した日には、そりゃあもう。人目が届きにくい恰好の一隅を作り出してしまうのである。これは推論だが、不届き者は、そのセイタカを目印に、根元に袋入りのゴミなんかを放置する。高潮になれば、川の水が護岸を洗うなんてのは訳ないことなので、そのゴミ袋も容易(たやす)く流されていく。干潟に生ゴミ入りのレジ袋が漂着するのは、こういう図式によるのではないかと。事実、この日はそんな草陰において、飲食の不始末と思しき袋入りのゴミが見つかった。ペットボトルと使い捨てカップの詰め合わせである。初めてゴミ箱干潟を目にした時の衝撃を思い起こしながら、デジカメで記録する千歳。その脇で櫻は、露骨に積み棄ててあった炭の塊を発見し、

「自然に還るってことなのかも知れないけど、これじゃあんまりね。公然というか平然というか、私が捨てました、って開き直ってる感じ」

「スミに置けないって、こういうことを言うんですよ」

「隅田さんたら、やだワ」

どこまでが洒落なのかわからないお二人さんであった。そんなダジャレを冷やかすように、川面からパシャパシャ音がする。覗き込んでみるとハゼの群泳である。時折、体を跳ねつかせるものの、その魚影は黒く、何ハゼだかは識別できない。これもひとまず撮影し、別途、掃部先生に鑑定してもらうことにした。紙燈籠の件もあるし、どこかで先生とお目にかからないといけない。メーリングリストに先生も入れられればいいのだが。

護岸上にはさらに、花火の棒が散らかっていたり、カセット式コンロのガス缶が転がっていたり、漂着ではなく、明らかにその場に放置されたと思われるゴミが見つかった。これでまたプロセスの一端が把握できた、という点では喜ばしいものの、大いなる悲哀も感じてしまう千歳なのであった。ポイ捨ても積もり流されまた積もり、その結果があのだらぬのである。今日は櫻以上に憂い表情になっていることは自分でもわかっている。だが、しかし...

「あーあ、千さんがブルーになっちゃった。心はいつもサクラ色、じゃなかったの？」

「え、ああ、失礼しました。発生原因がこれで少しわかったんだけど、じゃどうすれば防げるかなあ、ってね」

「捨てるのも人、拾うのも人、って清さん言った。ひとまず拾える分だけでも拾いましょ」

さすがはリーダー、用意のいいことに大きめのレジ袋を持ち合わせていた。いっそアレチウリも引っこ抜いて帰りたいところだが、今日のところはこの護岸で目に付くゴミを片付けるのみである。広場の一角にある水場でひと休みしているカラスが居る。よく見ると、何かの食べ残しを嘴(くちばし)に挟んでいる。片付け係はここにもいるぞ、と言わんばかり。少女が一人その威張ったカラスに向かって「やい」とか「おい」とか、挑発しているから可笑しい。

「あの子、度胸あるわね」

「カラスも全く動じないねえ」

「小梅嬢はカラスが怖くて干潟に近寄れなかったって前に言ってたけど、それが普通よね。ああいう勇ましい子が増えると、カラス減るかしら？」

十五時になった。カラスにとってはおやつのもりだったんだろう。

調査はこれで終了なのだが、デートの方はどうなんだろう。集めたゴミは千歳が持って帰るのはいいとしても、そのまま彼の宅へ、という訳にはまだいかない。お目にかかりたいとか言って誘い出しておきながら、ちゃんとプランを考えていなかった千歳君。管理するものではないけれど、こういうのもプロセスのうち、である。ちゃんと練っておかないと不可(いけ)ない。櫻はその辺を見透かしたように機転を働かせ、「私、初音さんとこ見て来ます。一応、店の外で待ってますね」ということになった。

受験を控えていることもあり、初音は通常は十四時上がり。だが、この日は珍しく厨房設備を使ってパンケーキなどを作っていた。お客が少ないこともあるが、こういう店の使い方があっていい。言わば店員特権である。

「多く作り過ぎちゃったけど、ま、いっかあ」と何セットか手にして厨房から出てくると、外から中の様子を窺う女性が目に留まる。「あ、櫻さん？」 櫻も気が付いたようで、手を振っている。姉という立場では同じ二人の対面である。こちらも四週間ぶりのこと。

「初音さん、いないかなあって、見てたんだ。よかったよかった」

「今日はたまたま残ってたんすよ。もう帰ろかなって」

「あら残念。あ、この間は伊勢名物、ありがとうございました」

「いえいえ、本当はちゃんとお礼しないといけないのに、取って付けたみたいで。今日はお一人、ですか？」

「いや、ある人と一緒だったんだけど、へへへ」

ここで千歳が現れると、二人の関係がより公然となってしまうのだが、よく考えると、五月の回で初音にはしっかり認識されているのである。今更、どうこうでもあるまい。

「隅田さん、でしょ。あ、そうそう、よければこれどうぞ」 セットの一つを取り出して、手渡す。

「あら、パンケーキ。初音さん作ったの？」

「私こういうの苦手なんすけど、お店で働いてるのに、手に職がつかないのももったいないな、と思って。ま、自由研究品です。添加物なし」

「アツイうちにどうぞ！」とか言いながら、またしてもさっさと走って行ってしまった。袋くらいくれても良さそうだが、この店は原則、簡易包装である。「確かにホカホカね」

初音とは対照的に、ノロノロと千歳が戻って来た。

「どうしたんですか、その包み？」

「ついさっき、初音嬢からもらったんですよ。ここに来た甲斐がありました」

と言っても、これを持ち込んでお茶するのも気がひける。初音としてはここでどうぞ、ということだったのかも知れないが、作った本人がいないことにはちょっとねえ。

という訳で、店頭にあったフリーペーパーでもうひと包みして、センターに向かうことにした。カフェではなく、公的施設。やはりちょっと変わったデートである。

休館日でもこうして施設を使えるというのは職員の特権である。邪魔が入らないようにと、櫻は中から施錠する。どうやら千歳に対しては、不信も何もないようだ。むしろ「これで二人きり、フフ」てな具合である。小悪魔復活、か。

パンケーキを皿に載せ替え、冷蔵庫にキープしておいたアイスコーヒーを注ぐ。櫻にとってはちょっといい時間である。プラン不十分の千歳だったが、ここに来るのは想定内だったようで、ドギマギするでもなく、割と飄々としている。八広がお世話になっている情報コーナーを周回し、気になるCSRレポートをパラパラ繰ったり、勝手知ったる何とやら、である。櫻としては、センターを完全に私用で使うのもどうかと思い、打合せするような感じで、話を進めることを思いついた。光熱費に見合うだけの成果が得られればいい。

「それじゃチーフに倣って、議題を書き出すとしますか」 櫻は話したいことが多々あるところ、それらを整理するように、ホワイトボードに書き並べていく。

かくして、①これまでのクリーンアップデータの整理、②十月の定例クリーンアップに向けて、③メーリングリストの活用法、④その他．．． というのが挙がった。

「他にございますか？」

「あ、掃部先生との連絡のとり方、ってのをお願いします」

「まだありませんこと？」

「櫻さんに聞きたいことがあるんですが、ひととおり終わってから、ですね」

デート中の会話に議題も何もあったものではないのだが、これがこの二人の流儀。地域や環境に向ける視点が揃っている以上、こうした話題が何より楽しいようである。さて①の件だが、五月から八月まで、自由研究デーの分も含めると、これまでにすでに五回分のゴミデータが蓄積さ

れている。清書したデータカードもあるが、途中からメールでデータが届くようになったので、今は表計算のファイルに全データが収めてある。横に集計すればすぐにでもこれまでの累計と総合順位が出せるのだが、「そのうちクイズを兼ねてメーリングリストに流そうと思って」なんだそう。データカードに関しては発起人は櫻なので、ここはお任せ。楽しみに待つとしよう。

次に②である。七夕デートの際、少々話題には上ったが、検討するのは今日が初めて。荒川で一斉クリーンアップの要領に合わせつつも、干潟特有の注意事項もあるだろうから、それをまとめてみてメーリングリストで協議しよう、ということがまず決まる。あとは一般参加者を募るかどうかが、モノログの掲示板機能が有用である以上、それを使うのが妥当だろう、と相成った。逆を言うと、広く呼びかけることはしないが、モノログを見た人に限っては参加も可能、という募集形態に、ということである。なかなかの妙案である。「当日その場でボランティア保険の手続きしようとするとか何かと大変だから、参加希望者には予め最寄の社会福祉協議会とかで加入してもらうように呼びかけましょう」 そんな話も含めて、これもメーリングリストに付されることに。

③については、①と②で十分に活用されそうな気はするが、櫻の意図としては「お互いまだ知らないこともあるだろうから、自己紹介し合うのもいいし、あとは連絡網機能として、流域とかで何か異変があったら知らせ合うとか、ね」 コーディネートに長ける櫻ならではの発案である。パンケーキはなかなか美味だったようで、二人ともペロリと平らげていたが、食べ終えたことを失念するくらいテンポ良く話し合っている。「あれ、いつの間に食べちゃったんだろ？」 実際のデートシーンでもこういうことはありがちか。

「メーリングリスト参加者で、面識がない可能性があるのは、宝木氏と桑川さん・小松さんの組み合わせ、ですかね。彼はセンターには何度か顔出してるでしょうから、矢ノ倉さんとは面識ありますよね？」

「あの、意外かも知れないけど、蒼葉と小松さんもお互い面識ないですよ」

「さすがはリーダー。確かに自己紹介、必要ですね。そういや、業平も初対面の人いるかも知れない」

めでたく開設の運びとなったメーリングリスト (higata@~) は、参加者の名前を記した案内と簡単なルールをセットにしたものを千歳がまず流したのに続き、八広から早々にモノログネタとしてこういうのはどうだ、というのが軽く流れ、さらに櫻からはご挨拶方々、センターの夏休み入り前日の来客記録と同休業案内が出され、といったところ。出足としてはまあまあだったのだが、お盆休みを挟んだこともあり、その後は早くも小休止状態になっていた。メーリングリスト管理人として、ここはテコ入れが必要との認識は持っている。一つ業平に自己紹介を振って、再点火させるとするか。

「じゃ私は小松さんに水向けてみる」

彼女からのメーリングリスト第一報が発信されるのに先んじてのひと振り。先手を打てば、手強い文面が来るのを少しは予防できるのではないか、という読みである。櫻も十分手強い。

二人して、二杯目のアイスコーヒーを飲み終える。あとはその他の議題。ここまで来れば、フリーディスカッションでも良さそうな気がするが、「掃部先生、月に一度はここにいらっやいます。何か渡すものとかあれば、お預かりしますけど」と一応、追加議題に沿った話をしている。「メーリングリストを通じてチーフに聞いてみて、先生が来る日時がハッキリしたら、皆にも集まってもらいますか、ね」 higata@、なかなか使い勝手が良さそうである。

業務連絡を兼ねた打合せはここまで。時間にして一時間弱。メールのやりとりだけでは埋まら

ないものである。ここで千歳はいつものようにバッグをゴソゴソやり出すと、

「この場で演奏できないけど、お約束の自作曲、持って来ましたよ」

「エ？ メモリカードに」

「対応するプレーヤーとかメモリオーディオがないと聴けないですよ。じゃ」

円卓上のPCのスロットに挿し込んでみる。ここから聴けなくもないのだが、

「データをアップロードしとくんで、このURLを打ってダウンロードしてみてください。ご自宅でじっくり、ね」

とりあえず二曲分だそう。ギターでアウトラインを作ってから、PCでリズムやらベースやらを打ち込んで、そこに再度ギターをかぶせ、あとはおまけの音色をPC音源でもって加えていったんだとか。キーボードで作った曲もあるのだが、あえてギター曲にした。メロディーラインは櫻に託そう、ということらしい。鍵盤で電子的に採譜して、そのデータを業平に渡すと、また違った楽曲になるとも言う。

「で、タイトルは？」

「ボーカルを入れられるように作ってはありますが、詞がないことにはタイトルも付けられないし。櫻さんのいつもの鋭い感性で付けてください」

「了解です。ピアノで音を拾ううちに思いつく、かな」

休業中はピアノの練習に励んでいたこと、だがあまりの暑さに今度こそバテ気味だったこと、といった話、国際イルカ年だというのに、迷いイルカが助けられなかったのはどうしたことだ、とか、ペルセウス座という割には思いも寄らない場所に流星が出てくるので、ろくに願い事ができなかったとか、話題は尽きない。まだまだ日は長い。彼と彼女の時間はゆっくり流れて行く。

「千歳さん、聞きたいことがあるって、何ですか？」

「あの、『咲く・ラヴ』って、何か特別な意味があたりなんでしょうか？ ずっと気になってて」

ひと呼吸おいてから、櫻はニヤリ。よくぞ聞いてくれました、とでも言いたげな風である。

「そんな、わかってるくせにい。櫻さんて人がいて、誰かさんに想いを寄せてる訳ですよ。それをちょっとひねっただけ。原題はあくまで『さくらブログ』」

「モノログからもリンク張っていいですか？」

「だって、今日のバーベキュー場の件、千歳さん載せるでしょ。私もちょっと書こうかなって思ってるんで、ねえ．．．」と俯き加減。だが、すぐに顔を上げると、「リンク張って、見る人が見たら『あ、この二人』ってなっちゃいますよ。私は構いませんけどね。エヘヘ」とのこと。これで晴れて相互リンク、となりそうだ。

蒼葉には遠慮は要らない。だが、食事当番は守りたい。櫻の表情に憂いが浮かんできた。離れがたい旧七夕の織姫と彦星に容赦なく夕暮れが迫る。そして帰りを急かすように遠雷が響く。図書館はすでに閉館時間を過ぎ、暗くなっている。

櫻に交際相手がないことは先だっの蒼葉とのやりとりでわかっていた。だが、それを本人に聞いて確かめるほど野暮なことはない。千歳はドキドキしながらも、自転車を動かす。今日のところはここまで、か。

櫻が彼を引き止めたのは、その時である。

「ち、千歳さん、私も聞きたいことが、あります」

次の瞬間、剛速球を投げ込んできた。南実を凌ぐ勢いである。

「おつきあいしてる人っているんですか？」

ちょっと考えて、彼は答える。

「ええ、いますよ」

「エ、うそ？」

「ここに、ね」

櫻は俄かに信じられない様子だったが、

「もう、意地悪う。う、う．．．」

泣き顔になってしまった。眼鏡越しだが、目が潤んでいるのがわかる。千歳は再び蒼葉の言葉を思い出す。泣き出しちゃうかも、とはこのことだったのか。櫻は眼鏡を外しかけたが、すぐ手を止めた。

「今度はいつ逢えますか？」

「九月二日じゃ、また先になっちゃいますね」

「本気で泣いちゃいますよ」

「近々、紙燈籠持って来ますから、その時、また」

櫻はブレーキをかけるのを止めていた。日中の暑さは和らいでいたが、彼女は逆に熱くなっている。

「じゃ、明後日！ 千歳さん来るまで待ってます」

「わかりました。櫻姫」

姫はドキドキが収まらない。このままだと本当に彼に飛びつきそうだったが、意地悪な彼は自転車に跨り、走り出してしまった。

「ああ、ドキドキした。どうなるかと思った」

どうやら彼にも事情があったらしい。櫻のあふれる思いへの処し方がわからなくなっていたのである。

セミは鳴いているらしかったが、二人には届いていなかった。櫻も今頃になって気付く。

「あーあ、何か切ない。これで蝸(ひぐらし)だったら、もっと切なくなりそう」

櫻の方もノロノロと走り始める。こらえていた涙が線になって頬を伝う。心地良い涙である。七夕の日、ヨシに吊るしたもう一枚の短冊に込めた願い．．． 今夕、それが叶った、そんな気がした。佳(よ)き哉(かな)、である。

【参考情報】 [河川敷でのバーベキュー例](#) / [アレチウリの脅威](#) / [少女 vs カラス](#) / [ポランティア保険は事前に](#)

22. ある晩夏の日

千歳の呼びかけに応じて、業平からの自己紹介メールがhigata@に流れたのはその翌日。ちゃっかり自営ビジネスの宣伝つきである。よせばいいのに、アフィリエイト募集中なんてことまで出ている。こういうのが来ると、次は弥生が反応しそうだったが、その前に櫻からの先制メールが入って来た。「... 管理人と相談して、皆さんに自己紹介をお願いすることになりました。次は小松さん、いかがでしょう？（行き違いがあったら、ご容赦ください）」いつものことながら、簡潔かつ丁寧な一筆である。櫻としてはこれでひと安心のようだったが、燃える想いの南実には、この程度の水を向けられたくらいでは鎮静することはない。むしろ、逆に火が点いてしまったようだ。誕生日から二週間後、職場からhigata@に一本を投じる。ここしばらく仕事から離れていたこと、メーリングリストも今週からやっと見出したこと、大学院を出てからはずっと今の機関にいること、などが綴られ、ここまでは無難な感じ。だが、末尾に来てそれが転じる。導火線の如き一文が添えられていた。「隅田さま、八月七日はありがとうございました」一読する限りでは、単なる御礼なのだが、千歳と櫻のもどかしい関係性を知るメンバーが多いこのメーリングリストにおいて、この発信は並々ならぬインパクトを持っていた。その一文があまりに端的なので、憶測を呼ぶという点でも効果大。higata@上のルールには、二人の関係をどうこうしてはならぬ、なんてことは決めていない。だが、このように横槍を入れるのにメーリングリストが使われる、てのは想定外であった。小松南実、二十九歳。二十代最後の一年を迎えた女性というのはかくも手強いものなのか。

幸い、このメールは櫻の職場アドレスには届かないようになっている。だが、ドラマの仕掛人（演出家か）のあの女性のもとにはしっかり着いていた。

「櫻さん、八月七日の夜って何してた？」

「二週間前ですよ。部屋でボーとしてたら、妹に説教されたのを覚えてます。でも、その日がどうかしたんですか？」

「隅田さんとは一緒じゃなかったのね」

「ええ。あ、思い出した。千歳さん、今日来るんだった」

文花の問いかけが少し気になるころだったが、今はすっかり舞い上がっている。

「まあ、あの調子なんだから、私の出る幕じゃないわね」

焚き付けるのが本分の演出家としては、らしからぬご発言である。七日の夜は一人じゃなかったことを南実はその日のうちに自己申告している。そして、その時のお相手の名前が今回公表された。文花の予感は見事的中していたのである。こうなると誰かに言わずにはいられない。だが、いくら今そこにいるからと言って、櫻に告げていいものか。いいはずがない。二女も三女も一女にとっては大事な存在である。大事な二人を争わせる訳には、... かくして、クシャミを我慢している時と同じような、何とも不可思議な顔になっている。

「ああ、ウズウズする。叫びたいよ、私や」

センターの責任者たる人物、器量と度量が求められる。文花は一応兼備しているようである。

蒼葉はケータイで南実からのメールを受信。お騒がせの一文を見つけて、蒼白している最中だった。長文メールだと、ここまで来るのに時間を要する。ケータイメールだと読むのも何だし、

発信するにも手間がかかってしまう。もどかしさが募る。

「この小松さんて何者なんだろ。とにかく千さんに真相を確認しなきゃ。あと、PC用のメールアドレスもこの際だから作ってもらお」

蒼葉からhigata@宛に発信がされるのはしばらく先になりそう？ いやどうだろう。

櫻は今のところあまり浮き沈みなく、穏やかに過ごしている。ちょっぴりドキドキしてきたのは十八時になってからである。早番の文花は櫻を気遣ってか、定刻通りセンターを後にする。外に出ると、噂の人物がちょうど到着したところだった。この間のバーベキュー場偵察で、自身もバーベキュー状態になってしまった千歳君である。その日は気付かなかったが、日が経つにつれ、ヒリヒリしてきて自分でも痛々しい。

「あら、隅田さん、ひと月ぶりね。また灼けた？」

「どうも荒川は日光浴に適しているようで」

「ま、色男ってのはそういうもんよ」

「あの、櫻さんいらっしゃいますよね？」

「待ちくたびれて、机で伏せてるわ。早く行ってあげて」

千歳は約束通り、スチロール箱ごと紙燈籠を持って来ていた。すれ違いざま、チーフが呼び止める。

「その箱、何？ 残暑見舞い？」

「ええ、活きのいいヤツ（魚）を持って来ました。ご覧になりますか？」

「ヤダ、遠慮しとく。でも、今の言い種(ぐさ)、誰かに似てる。そう、櫻さんそっくり！」

「あ、矢ノ倉さんもそのうち自己紹介メール、お願いしますね。じゃ」

引き止めたついでである。この際だから、お節介しておこう。

「隅田さん、そのメールのことだけど、ちょっといい？」

「あ、はい」

「まだ見てないかも知れないけど、今日南実ちゃんから発信があってね。八月七日のこと、書いてあったんだけど．．．」

文面について軽く説明する文花。千歳はさほど驚くこともなく、フンフンと頷くばかり。

「そうですか。ま、あの日はレジンペレットを渡すだけ、と思ってお会いしたら、食事に誘われちゃって。正直、焦りました」

「まあ、そんなことだろうと思ったわ。櫻さんまだメール見てないみたいだから、先に事情を話しておいた方がいいかもね。こういうのって、後でわかるとショックだから」

文花の恋愛経験が如何ほどのものかは不明だが、人生において数年は先輩なので、こういう助言も出るのだろう。これはお節介ではなく、千歳にとって実に有意義な示唆となった。

「ありがとうございます。箱の中味は御礼代わりってことでご査収ください」

「はいはい」

文花はその場では受け流したが、ふと立ち止まる。「ご査収？ 魚を？」

千歳の足音が近づく。櫻のドキドキが高まってきた。カウンターの影に隠れてるんだから、なおさらである。

「あれ？ 櫻さん．．．」

誰もいないセンターだが、照明は点いているし、空調も稼働中。櫻は出るに出られなくなっている。

「接客担当の千住 櫻さん、いらっしゃいませんか？ ご不在なら帰りますよ」

「あー、ごめんなさい。ここです」

カウンターから静々と立ち上がってきた。

「いらっしゃいませ」

「かくれんぼですか？」

「いえ、眼鏡を落としちゃって。捜してたんです」

本当はビックリさせようと隠れていたのだが、ここは失敗。言い訳としてはもっともなような、そうでないような。ドキドキはまだ続いている。

「持って来ましたよ。お土産．．．ってほどでもないか」

フタを開けると、例の紙燈籠が寝そべっている。さらに劣化が進んだ感じである。

「はあ、こんな風に溶けちゃうんですか」

「拾った当初は、ちゃんと筒状になってたんですけどね。乾燥させなかったもんだから」

「ハハ、今の私みたい」

「へ？」

要するに緊張が解けたことと、誰かさんといるとこんな感じになってしまう、ということを書いたかったようだ。だが、センターにいる間はどうしても敬語会話になってしまう。これは緊張云々とは別の話。忠実に接客している証しなのである。

「いえ、何でもございません。じゃ、そのまま窓際に置いてください。明日から日光浴させます」

七夕の時に櫻が用意した水溶性短冊も、どうやら同じメーカーのものらしかった。

「あの感じだと、あまり環境に良くなさそう。溶けて水に流れちゃえばいい、てもんじゃないんですね」

「でも、どの程度の影響があるんでしょう？」

「パケットで調べてみましょうかね。文花さんにまた聞いてみます」

「短冊ならOKだと思いますけど、ね」

「雨に流れたか、風に溶けたか。川に迷惑がかからなかったのなら、いいですが。でも、私の願い、一つは叶いましたよ」

さっきから、カウンターで対面する形で語り合っている。センターでの接客スタイルとしてはこれでいいのかも知れないが、この二人、今は彼氏と彼女のご関係ではなかったか。

今度は千歳がドキドキする番が来た。

「あの、小松さんからのメールって、今日ご覧になりました？」

「いえ、まだ。自己紹介メール、ですよ」

「僕もまだ見てないんで何とも言えないんですけど、櫻さんに先に話をしておこうと思って」

八月七日は、南実と会っていたこと、すぐに帰るつもりだったが断り損ねて会食することになったこと．．． 文花に話したのと同じように事情を説明する。そして、

「意中の人は櫻さんだって、その時、キッパリ申し上げました」

「え？ 二週間前にそんな風に？」

「櫻さんがどう思ってるか、は別にして、とにかく正直なところを伝えたんです」

「つまり、小松さんを振っちゃったんですね。彼女、モテ系なのに、あーあ」

櫻はすまし顔で、我関せずのような口ぶり。千歳は思いがけないリアクションに焦りを募らす。そう言えば、櫻からちゃんと返事を聞いてなかったような．．．

「私が千さんを振っちゃったら、どうするの？」

「紙燈籠みたいになっちゃうでしょうね」

「ウソウソ。この間のお返しよ。フフフ」

千歳は本当にフニャフニャになっていた。極度に緊張していたところ、一気に解放されたのだから仕方ない。櫻は笑いをこらえつつも、真顔で続ける。

「正直に話してもらって、櫻はうれしうございます。私、千歳さんを信じます。でもちょっと悔しい」

千歳の腕はよく灼けていて、皮が一部剥がれかけていた。その皮をペリペリとやり出したのだから、彼が面食らったのは言うに及ばず。四月に初めて会った時の櫻さんの印象は「面白い人だなあ」だった。そんなことを今更ながら思い返してみる。

一応、櫻はまだ勤務中。千歳は帰り支度を始める。だが、彼女は彼をそう易々とは帰させない。

「八月七日って小松さんの誕生日だったんですってね。文花さん、お祝いがどうのって。今思い出しました」

「そう、だったんだ。．．」

千歳は少し心が動いた。南実の性格なら、自分の誕生日を堂々と明らかにしそうなものである。それをあえて伏せていた、というのが実に健気というか、意外な一面を見た気がしたのだ。

「あら、本人言ってなかったの。まあ、千さん善いことしたじゃない。一日一善、よね」

櫻はすっかり余裕の構え。千歳は引っかかるものがあつたが、気を取り直して、

「そう言えば、櫻さんの誕生日っていつですか？ 三月？」

「千歳さんと初めて会った日は、二十代最後の週の初日でした。その五日後が三十路最初の日」

「それはそれは。お祝いしそこなっちゃいましたね。失礼しました」

「いいえ。二十代のうちに出逢えてよかったです。それで十分」

改めて櫻への想いを認識する千歳。櫻と来れば「咲く」だが「萌え」も有り得る。境地としては蒼葉の時よりもピッタリ来るようだ。そんな彼の萌える想いを察してか、彼女ははぐらかすようにアナウンスを入れる。

「今日はちょっとトーンダウンしちゃったけど、プラス千点かな。ちなみに十万点になりますと、いいものを進呈します。お楽しみに」

櫻得意の「いいもの」は応用範囲が広い。楽しみではあるが、いったいいつの間にそんな査定が始まってたんだか。

「私の場合、一日一千(いちせん)なんです。四月から七月までは七回お会いしたんで、七千点。で、一昨日からは毎日千点ずつにしました。今日で一万点ですよ」

千歳はすっかり帰る気が失せている。見計らったように櫻はさらに一言。

「今日この後、引き続き当館をご利用いただくと、さらに千点、どう？」

「櫻さんには敵わないなあ。ま、女性一人残して帰ったら、大幅減点になりそうだから、ね」いざという時は非常ベルを鳴らせば、一階の図書館から職員が駆けつけてくれることになっているのだが、彼氏に傍にいてもらえるなら、それに越したことはない。

自己紹介メールをメーリングリストに流すのもいいが、この二人に限っては、お互いにちゃんと自己紹介しあった方がいいのではないか。それに気付いたご両人は、どちらからともなく、紹介を始め、気が付くと十九時を回っていた。

「いけない、仕事しなきゃ」

「じゃ、僕はPC借りて、作業してます」

このタイミングで良かったのかどうなのか。二人が配置に戻った時、階下から早い足音が近づいて来た。確かに女性一人じゃ心細い。

「櫻姉、いる？」

駆け込んできたのは姉想いの妹である。

「あら蒼葉、どしたの？」

「もう、千さんたらひどいじゃない。八月七日のこと、知ってた？」

「まあまあ。あちらにいらっしゃるから、お気が済むまでどーぞ！」

「エッ？ あ、千さん. . .」

千歳はちょうどwebメールをチェックしていたところで、蒼葉からの一件（詰問メール）を正に開くところだった。本人が来れば話は早いですが、メールのやりとりで済むなら、その方が心理的には楽とも言える。だが、この一件はそういう訳にはいかない。

「蒼葉さん、こんばんは。五日はお世話様でした」

櫻に続き、千歳も悠然としているので、かえって不審に思う蒼葉。今日の装いは、七日の南実によく似ている。それが彼を少しこわばらせるのだが、とにかく話を進めないといけない。今日はこれで三度目である。メーリングリストで何かあった時のフォローは、このように直截的な形でも行われる。管理人はツライ。

「なあんだ、そういうことだったの」

「蒼葉さんから話を聞いてたから、勇気を出して言い切ることができたんだ。感謝してます」（と言いながらも、内心はちょっと複雑）

「あ、ハハ。私、言い過ぎちゃったかな、って。でも、櫻姉、本当に元気になりました。逆八月病って感じ」

円卓での座談は、こうして丸く収まった。続いて、蒼葉からのご要請の件に移る。ここにPCが置いてあるというのは実に好都合であった。

「じゃ、aoba@でいいですか？」

「いえ、aoba1010@がいいです」

「はあ、千と十？」

「千住蒼葉ですから。1010。語呂合わせです」

「これ、エルオーエルオー（lolo）と間違えないようにしないと」

「私のこと知ってる人は間違えないと思うんで。迷惑メール対策にもなるし」

こうして、蒼葉のPC用アドレスは即日設定され、メーリングリストにもこのアドレスで登録し直し、となった。

「このwebメールを使えば、今すぐにでも送受信できますよ」

「へえ、さすがは千さん。姉さんの彼氏にしとくのもったいなかったりして」

「何か言ったあ？」

「いいえ。ちゃんと姉さんの長所と短所をお伝えしてるところですから」

「余計なこと喋ったら承知しないわよ！」

こんな具合で、晩夏の夜は更けていく。三人寄れば何とやら、か。

「良くも悪くも、あのノリが姉さんなんです」

櫻は彼と食事でも、と考えていたようだが、千歳の方はもともと早く帰るつもりだったから、案外素っ気ない。「もしかして、私、じゃましちゃった？」と蒼葉が気にかけるのももっともで

ある。

「あ、千歳さん、今度は曲のこと、相談させてくださいね」

「そうだった。忘れてた」

櫻は弁えたもので、今日は彼の想いなり生い立ちなり、いろいろと知ることができたので、これで十分と思い直していた。一昨日同様、自転車で反対側へ走り始める千歳。前回と違うのは、あわててその場から抜け出さずに済んでいることだろうか。これは櫻自身が想いを上手にコントロールできたことが大きいとも言える。妹の手前、というのもあったかも知れない。蒼葉はおじゃまどころか、実にさりげなく二人の想いを調整する役を担っているのであった。

「姉さん、曲って？」

「へへ、二人だけの秘密」

「まあ、お熱いこと。暑いのは残暑だけにしてほしいワ」

その一曲を口ずさむ櫻。サビのところは、「届けたい・・・」とか歌っている。はてさて？

23. 非日常

処暑も過ぎたし、さすがに猛暑日になることはなくなったが、まだまだ暑さが続く晩夏。大気もバランスをとらないとやってられなくなったか、空が暗くなるのに乗じて、黒々した雲がいつしか集い、空中打ち水大会が始まった。一般的には給料日の金曜夜、屋外で一杯やっている諸輩も多そうな時頃である。ビールの泡を消す程の勢いがありそうな驟雨。飛んだ冷や水になったに相違ない。荒川流域に暮らすhigata@の面々は、雨に降られることなく、それぞれの夜を過ごしていたが、断続的ながらも、時に激しさを増す雨に気もそぞろ。干潟最寄住民の千歳としては、その矢の如き雨粒を窓から眺め、「この調子で降り続くと、間違いなく水位は上がる。干潟もどうなることか．．．」と、プライベートビーチの心配が先に立つ。涼しくなって良さそうなものだが、この雨、ちょっと度が過ぎるきらいがある。強弱はあったものの、深夜にかけてなお止むことはなく、道路の一部が冠水するほどの降りようとなった。

翌、八月最後の土曜日の朝。千歳は、双眼鏡やらデジカメやらをバッグに放り込んで、あわただしく外に出る。堤防がぬかるんでいる可能性はあったが、とにかく自転車で走り出した。荒川本流が視野に入る。彼は目を疑い、そして言葉を失った。

向かって左方向、いつもの橋の脚に付されている水位を示す表示に対して、三から四の間を川が洗っている。いわゆる大潮の時でも二前後なので、明らかな増水である。そしてひと目でわかる濁流。曇りがちな空から時に太陽が顔を覗かす午前八時。橋の中央から流れを追ってみることにした。

「ああ、漂流ゴミが．．．」 昨夕の雨は、中流や上流にも降り注いだようで、様々な物体を運んでいる。枝葉や木片の塊が列を成しながら、蛇行しながら、流れる。それらに混じって、ペットボトル、空き缶、食品トレイ、発泡スチロール片といった定番ゴミの数々。よくよく見れば、サッカーボール、塗料缶、灯油を入れるポリタンク．．． 浮遊しやすいものが漂流するのはわかるが、重量がありそうな品々まで押し流されているから壮絶。一例としては、一升瓶、タイヤ、トタンの扉、といったところか。双眼鏡なしでも、こうした類は判別がつく。細々したものはさすがに肉眼では識別できないが、おそらく夥(おびただ)しい量が流れに乗っているものと思われる。「干潟でキャッチできればまだいい方、ということか」 デジカメは連写モード。ブックサやりながらも、撮りまくっている。そこへクリーンアップスタイル風の娘さんがやって来て、停車した。いつものRSB(リバーサイドバイク)だが、今朝は徐行運転である。

「隅田さん、だったり？」

「おや、石島さん。お早う」

「これって、ヤバくないですか。何かいろいろ流れちゃってるしい」

千歳がここにいるのがごく当たり前のように、初音は飄然と話を始める。アラウンドサーティー女性との接し方は何とかなってきた千歳だったが、ティーンのお嬢さんとはどう会話したらいいのやら。撮影は中断、プチ苦悩状態に陥る。

「てゆーか、どうしてここに？」 とりあえず、ティーン口調に合わせてみる。

「昨夜(ゆうべ)って、チョー雨降ってたじゃないですか。こりゃ、洪水になるぞいって」

橋には他にも濁流を見守る観衆がいたが、男女二人して、というのは彼等くらいである。この

橋では様々な男女が共に歩いたり、またはすれ違ったり、時には離れて行ったり、多様なシーンが繰り広げられている。今日の千歳は、橋でバッタリのパターンだが、隣にいるのは櫻ではなく、ひと回り違いのお嬢さん。だが、姉という点では同じである。櫻も昔はこんな感じだったんだろうか、と目の前の現実からちょっと離れてみたりする。

眼下では、畳と莫蔭が寄り添うように漂っている。有り得ないゴミのような気がするが、この流れを見てみると、不思議な気がしない。それがまた不思議である。非日常感覚に捉われている千歳なのだが、「今日の天気はどうなんだろう。また土砂降りとか？」 初音にとってはまたとない良好な質問が口を突いて出た。

「今日はこの後、雲は晴れ、気温も上がります。ちなみに今は. . .」

某お天気情報番組特製のデジタル温度計を取り出すと、「二十八度 マジ？」という塩梅。

「何かお天気キャスターみたいだね」

「ええ、ちっとは勉強してるんで」

太陽が少しは出ている分、初音の機嫌は悪くない。「雨だと不機嫌だったりして？」と千歳の勘が働く。そう、天候に気分が左右されるキャスターというのもアリなのである。

撮影を再開しようとデジカメを構えると、堤防下の道路をバイクが一台走り行くのが見えた。双眼鏡を使わないと判然(ハッキリ)とはわからないが、おそらく干潟は水没中だろう。とにかくその干潟がある場所に向かっているのは間違いない。

「あれきっと、掃部(かもん)さんだ。行ってみよう」

「あ、ハイ」

スローな千歳に対し、ここぞで速さが出る初音。自転車のタイプが違うとは言え、ちょっと差が開きすぎたか。

「隅田さん、遅いスよ」

「ハハ、三十代になるとダメだねえ」

もともと遅いのを誤魔化している。今は三十ちょうど、年甲斐のない千歳であった。

道路が冠水するくらいだから、グランドも同等かそれ以上である。水の捌(は)けはどうなんだろう。浸み通った水が崖地からチョロチョロ湧き出ているのは前回確認済みだが、この大水じゃ出口を塞がれたも同じ、捌けようがない。そんな水捌けを心配する人物がすでに先に到着していて、今は掃部公と問答している。

「石島さんよお、非番とは言え、ここが現場だろ。グランドの心配より、川の心配が先でねえの？」

「治水事業のおかげでこんなもんで済んでる訳ですよ。これでも一応、様子を見に来て、大丈夫そうだったから、グランドをチェックしてるんで」

「大丈夫とか言って、どうせ今だけだろ。そのうちこれじゃ危ねえとか言い出す目算さ。余計なことしたら承知しねえぞ」

水を撥ねながら、自転車が二台現われた。先に着いた初音は目を丸くして、一喝！

「何だ、親父い。家族ほったらかして、こんなところでチョロチョロと」

これには当の親父さんは勿論、千歳も清も吃驚(びっくり)である。

「あちゃー、石島の娘さんだったか。この前、小松のお嬢さんが言ってた通りだ」

「お前こそ、何でここに？ 勉強しなくていいのか」

「川が心配だから見に来たのさ。そっちはどうせ、試合ができるかどうか、とか、そんなことっしょ？」

「何だ、娘さんの方がよほど河川事務所向きじゃねえか」

千歳は再び非日常状態になっていて、三人のやりとりを黙って聞いているばかり。掃部先生が招き寄せてくれなければ、時と川の流れるまま、だったかも知れない。

「この青年は、ここのクリーンアップの発起人さんだ。石島、会ったことあんだろ？」

「隅田川の隅田、千歳空港の千歳、隅田千歳と言います。初めまして、ですかね？」

国土交通省関係者に対する挨拶だからと言う訳ではないが、川と空港を引用するあたり、さすがである。親父はそれが気に入ったらしく、

「やあ、何度か見かけてはいましたが、貴君が発起人とは。石島、湊です」と丁寧な対応ぶり。

「初音さんにはお店で、小梅さんにはこの干潟でお世話になってます。でも、干潟．．．」

干潟と言ってはみたものの、案の定、すっかり水没してしまって、示しようがない。

「ハハ、正にしがたねえ、だな。上流からの土砂が運良く堆積すりゃ、しろくなると思うけどな」

「え、白く？」

「だから、し、ひ．．．」

「広くなるんでしょ。先生」

父vs長女のバトルが続きそうな雲行きではあったが、今はひとまず「水入り」。親子水入らず、とは言うものの、そうはいかないのが石島親子。父は長女の意外な人脈に驚きを隠せない。「掃部さんと初音がつるんだら．．． ヤバそうだなこりゃ」川の心配が先でしょうに。

荒川本流は濁々としていて、ヨシの浄化作用も無力に映る。それでも、カニの巣穴の上部に群生しているヨシは、背伸びするように己の上半分を気丈に出して、存在を顕示するかのよう。ここのヨシ群は即ち、干潟の湾曲地形の一部も示すことになる。そのカーブが漂流ゴミをキャッチする構造になる訳だが、川面を見る限りでは目立ったゴミはかかっていない。ボード状の発泡スチロールが数枚、ペットボトルが数本、そのヨシ群にブロックされている程度である。すると、ここぞとばかりに、珍品が流れ着いてきた。

どこかの工事現場から浚(さら)われて来たような特殊な工具や緩衝材、そして、

「『不法投棄禁止 建設省』だとさ。手前がゴミになってんじゃ、世話ねえな」

薄ぺらな錆びた看板が引っかかった。やや遠くではあったが、それは清でもハッキリ読み取ることができたのである。

「余計な工事に、余計な看板てか」

「さすがにあそこじゃ回収できませんね。面目ない」

話によると、これだけの水位でも、四メートルよりは下なので「レベル1」どまり、水防団が待機する段階に当たるとのこと。掃部公にも娘にも頭が上がらない石島氏だったが、ここは現場担当者として面目を保ちたいところ。

「九十九年は、戦後三番目、六・三メートル（岩淵水門上）を記録。その時ほどじゃ、ありません」とは言っても、荒川畏るべし、には違いない。甘く見ては不可(いけ)ない。

多少水位は下がったようだが、それでもなお川の水の一部が上陸していて、とても大丈夫なようには見受けられない。さすがにグランド外野までは浸食していないが、特大ホームランが出れば、あっさり着水&川流れ、だろう。ともあれ、コンディションは最悪。娘の予報を信じて、お天道様に水分の蒸発を促してもらおうほかあるまい。

「ま、こういうのって日頃の行いだから。今日は諦めて、たまには家事とか家族サービスとかしたら？」

娘の説教が続く間、清は青年をつかまえて、

「隅田君さ、今度は九月二日だろ。俺はちょっと出て来れねえけど、ここがどんな具合になったか、あとで教えてくれねえかな」

「ええ、お易い御用です。でも、清さん、連絡のとりようが．．．」

「じゃ、例のセンターに寄るよ。あそこ夜も開いてるもんな。そうさな、九月最初の火曜とか」

「そうそう、八月の定例クリーンアップで、水溶性の紙燈籠てのを拾ったんですよ。その鑑定、お願いできますか？」

「ナヌ！ 灯籠？」

これで話はまとまった。チーフに照会しつつ、メーリングリストで呼びかければOKである。初音はメーリングリストに入っていないので、今、知らせる。九月二日についても尋ねると、「小梅と二人で来ます。あの子ども心配してたから」 もともと参加する意向だったようだ。そして、「あ、そうだ」 長女は再び父親に噛み付く。

千歳はさすがに恐々としてきて、「初音嬢くらいの娘は皆あんな調子なのか、それとも他に何か理由があるのか．．．」 昔の櫻はああじゃないよなあ、とかまた勝手に推測しながら、親子のやりとりを見守る。

「あのさ、ここからゴミが大量に出てきたら、事務所も何か手伝ってよ。そしたら少しは見直したげる」

「ほお、初音が奉仕活動とはね。分別してグラウンドの詰所の脇に置いといてくれりゃ、翌日引き取るさ」

「奉仕活動とは違うと思う。うまく言えないけど、社会勉強に近いな。じゃ、粗大ゴミ級もOK？」

「ケガしないように、な」

ちょっとイイ感じになったところで、先生がクレームを入れる。場の空気を読み損なったか。

「おう、さっきの話の続きだ。もし、ここの崖とかが崩れかけてたとしても、下手な工事はするんじゃねえぞ。自然が自力回復できなような場合に限って、天然・地場の材料とかを使って最低限のメンテをする、ってことだ」

「はいはい。そんなに予算も付かないから、心配無用ですよ」

「何言ってるんだ。必要な予算はちゃんと付けんだよ」

「そうだそうだ！」

石島としては、干潟の安全面がちょっと気になるころではあった。娘二人がここに入出していることを知ったとなれば、親心(?)からしても尚更である。この際しっかり調査して、安全面を確保しつつ、ついでに親水型の水辺としてうまく整備すれば、憩いの場にもなるだろう、などと踏んでいる。性悪な人物では決してないのだが、どうもこの辺が役人気質というか、掃部公が警句を発する所以である。

千歳はひととおりの撮影を終え、深呼吸。モノログ史上初となる、ひと月三本目のネタがこれで上がることになる。モノログを開設してからというもの、少しずつではあるがアクセス数は増え、記事の掲載責任というものも重くなってきている折り、載せるなら、より熟慮した上で、と思う。それには現場で、ある程度記事の構想を練るのがいいようだ。

お天気お姉さんの言った通り、雲が晴れてきた。九時を回り、温度計は早くも三十度を超す辺りを窺っている。河川事務所の課長さんは、しばらく付近を巡回すると言う。同じく掃部公も巡

回モードだが、むしろこの課長殿の動きを監視するのが目的のようだ。五カンのうちの一つ「監」の出番である。父親としては、娘の帰りが気がかりではあったが、千歳が途中まで一緒、というので喜々として送り出した。何かカン違いされている気がしなくもないが、まあいいか。

「そうそう、この間はパンケーキ、ありがとうございました。美味しかったよ」

「そりゃどうも。たまたまです」

「この後はお店？」

「そうすね。でもまだ早いから、お客さん来るまでは修行でもします」

父親との一見不仲な感じの理由などについて小インタビューしてみたい気持ちもあったが、さすがに躊躇われた。逆に初音が千歳に問う。

「隅田さんは？」

「対岸の図書館かな」

「その二階、っしょ？」

凶星なのであった。

さて、いつもの初音ならこの辺でまたダーッと去って行ってしまいそうだが、ちょっと違っていた。

「じゃ、櫻さんによろしくお伝えください」

と言い残し、ごく普通に手を振っているのではないか。ギャップが激しいというか、「妹さんが顔色窺うってのわかる気がする」と独り言。

ここは橋の手前、右に進んで川を越えれば櫻の職場。それは非日常から日常に戻ることを意味する。自分でもよくわからないが、心安らできたのがその証左。本流では相変わらず、漂流ゴミのオンパレードが続いていたが、むしろ小気味よく見える。足取りは軽く、気付いたら図書館に着いていた。が、しかし、

「いけね。センター開くの十時だった！」（開くの十時云々てどこかで聞いたような）

図書館には、上階の開館時間が近づくのをドキドキしながら待っている青年（いや三十男）がいた。彼も彼女もケータイを持っていないので、お互い連絡がとれない。つまり、こういう時は不意打ちのようになってしまうのである。何も知らない櫻は、弥生とともにセンターへ。

「で、次はいつお会いするんですか？」

「さあね。結構クールなのよね、千さんて。いついらっしゃるのやら？」

「クールでいそがしい人をクールビズって言うんですよ。きっと」

この時、階下でクシャミをする人物がいたかどうかは定かではない。

「何かまたピピって来るんですけど、気のせいかしら」

「ケータイってこういう時に使うのね。でもなあ」

十時を回った。階下からノロノロした足音が聞こえてきたと思ったら、

「あ、千さんだ！」

「エッ！」

「二人にはケータイ要りませんね。ホホ」

本日の来館者第一号が現われた。

「おは、いや、こんにちは。あ、桑川さん」

「いらっしゃいませ。今日はどうされました？」

「聞くまでもないでしょが。櫻さんは？」

「ああ、八月病が再発しちゃって、お休みですよ」

カウンターの影で笑いをこらえている女性が一人。今度こそビククリさせてやろう、と構えている。

「櫻さんてね、かくれんぼ好きなんだよ、ね？」

「あ．．．」

不意に現われただけでもシャクなのに、小作戦まで見破られてしまっては、憎さ倍増である。「何よ、さんざ待たせといて、さ」初音みたいな口調になっている。なかなか非日常から抜け出せない。

「昨晚の雨、そっちは大丈夫でしたか？」

「早番だったんで、何とか。チーフは大変だったでしょうけど、昨日はたまたまクルマだったから．．．」

「その矢ノ倉さん、今日は？」

「野菜畑がヤバイからシフトするって、連絡がありました。午後からじゃないスか？」

弥生はツッコミというか、冷やかしを入れたくてウズウズしていたが、「大人をからかうんじゃないありません」てのを思い出し、しばらく見守ることにした。

「八時頃、荒川を見て来たら、とんでもないことになってて、それでね」

デジカメからメモリを取り出すと、要領よくPCのスロットへ。PC画面は河川監視カメラのモニターに早変わり。スライドショー形式で流していくと、コマ送り映像を見ているかのようである。

「えー？ 信じらんない」

「台風の時も川の氾濫がどうこうって中継で映るけど、それに近いかも」

「あたし、行ってみる。千さん、自転車でしょ。貸して！」

弥生は二人のおじゃまにならないように、という訳ではなかったが、なかなか的を得た行動に出た。これも学部の勉強のうち、いや今日は仕事のうち、かも知れない。

「で、文花さんに何かご用？」

「干潟で掃部さんと会ったんだ。九月最初の火曜にまた情報交換しようってことになって、それならセンターで、って訳。ここのご都合とかどうでしょうか？」

「あ、そう。大丈夫だと思いますよ。チーフが来たら、伝えます。higata@に連絡してもらえばいいですよ」

どうもご機嫌斜めの櫻である。日常と非日常の区別が愈々(いよいよ)つかなくなってきた。千歳は取り繕い方を模索しながらなので、ぎこちない。

「ところで櫻さん、日焼けしちゃいましたか？」

「え、ヤダ。そんなに目立ちます？」

「いや、何かイイ感じだな、って思って」

ポロシャツにガウチョパンツというスタイル。肌が出ているので、目に付いてしまうのである。おめかしして来なかった櫻ではあるが、普段着でも十分通用するようだ。モデルの姉、というだけのことはある。

「まあ、どこ見てんだか。赤くなっちゃったのは、千歳さんが顔見せないから、ヤキモキして、それでよ」

「もしかして、減点になっちゃいました？」

「知ーらない」

三十どうしのご両人はやっぱり仲良しさんなのであった。

千歳はメモリを挿し込んだまま、早速モノログのアップを始める。データベース情報をweb仕様で掲載するための例のプログラムの一件もある。弥生が戻ってきたら、進捗状況など話し合おうとしよう。口実のような感じもあるが、好機を逃さないのが千歳流、プロセスマネジメントなのである。PCをパタパタやりながら待機する彼を見ながら、彼女は見透かしたように独り言一つ。「私に会いに来た、って何で言えないんだろう。フフ」

図書館は夏休みの宿題にサポートをかける子どもたちで賑わう。その賑わいの一部はセンターにも流れ込んできた。「フリースペースに案内しますか」 席を立つ櫻。「皆さん、いらっしゃい。こちらへどうぞ！」 接客はお手のものだが、最近では子どもの相手も馴れてきたようだ。小梅と六月の自発的環境教育にヒントを得て、こども向けの環境情報コーナーをそのスペースの一角に作ってみたところ、これがなかなか好評だとか。だが、単に情報を置いてあるだけよりは相談員がいた方が何かと心強い。「来週は小梅さんに臨時で手伝ってもらおっかな。弥生・初音ラインに頼もう」 いいもの、ならぬ「いいこと」を思いついたようである。千歳は賑わいとは離れた場所にいるが、時折フリースペースの方を見遣って、驚いたような、怪訝そうな、何とも不可解な顔をしている。ふとカウンターにいる櫻と目が合って、都度表情を正す。作業をしているのかと思ったら、そうではなかった。彼はこっそり彼女にメールを打っていたのである。その場で話をすれば良さそうなものだが、あくまで彼女が勤務中、ということに配慮してのことらしい。「18きっぷをキープしてあります。有効期間内でご都合つく日ありますか？」 詰まるどころ、会う約束を先に作っておけば櫻をやきもきさせずに済むだろう、そんな配慮もあるようだ。危うく「18きっぷが余ってまして．．．」と打つところだったが、彼は見事に書き換えた。進歩したものである。

そんな訳で、このお二人さんが再会するのは、次の定期クリーンアップ、九月二日ということになる。（まるまる一週間、顔を見せない彼ってやっぱりクール？）

【参考情報】 [増水時の漂流ゴミ](#)

[漂着モノログ 第二章 夏] 終わり → [\[漂着モノログ 第三章 秋\]](#) に続く

あらすじ

河原の桜を見に行った千歳だが、いつしか川辺にたどり着く。水際には干潟、そして多量のゴミ．．． その場で捨てられたものとは思えない。それらは漂流・漂着ゴミだった。そこで拾った一枚のキャッシュカードから、物語は動き始める。

四月一日、キャッシュカードの主、櫻が登場。千歳と櫻の二人は初対面ながら意気投合し、クリーンアップを開始。千歳はその時の記録を新設したブログに掲載。「漂着モノログ」はここから始まる。

五月六日、クリーンアップは二人から四人に。櫻はお約束の「いいもの」を持って現われる。調べ上げられたゴミの数々．．． 静かに何かを語りかけてくる。

六月三日、2回目の調査型クリーンアップ。五月の回の三人のもとに、女性研究員が現われ、より充実した実地見聞が展開される。六月は環境月間。折々のイベントは出会いの場となっていく。

七月一日、クリーンアップ参加者の年齢層は広がり、干潟は「場」としての力を増していく。集う人々が互いに触発されていく流れは、夏休みの自由研究へとつながり、そこからまた新たな出会いやドラマが生まれていく。千歳と櫻の想いが形になっていくのもこの月から。

八月五日、リーダー不在ながら、新メンバーの加勢もあり、何とかクリーンアップは終了。だが、櫻の不参加は波紋を呼び、それぞれの想いが動き出すことになる。川、干潟、ゴミへの想い、そして互いを想う気持ち。夏は長く、暑い．．．

隅田 千歳 (すみだ・ちとせ)

電機メーカーに勤めていたが、理由あって離職。webデザインの仕事を軸に独立。専ら市民系ニュース会社からの業務を請け負う。インタビュー記事など連載ネタも抱えるも、その内容はあくまで実直。ジャーナリスト志向はあるが、冒険はしない。(最近は足で稼ぐ部分はアシスタント任せ) 自分でドメインを持ち、メールの設定なども手馴れてはいるが、自作のwebサイトは仕事の記録程度。ブロガーデビューは「漂着モノログ」が最初。スローライフが信条なだけに鈍いところもあるが、PCに向かうとスピーディーになる。プロセス主義者(段取り屋)でもある。

ワンポイント：女性経験はなくはないようだが、交際は苦手。櫻との接し方も手探り状態。だが、少しずつ確実に変化が...

千住 櫻 (せんじゅ・さくら)

公務員だが、公設の環境情報センターに出向中。地域ネタが得意分野。直情型で一途なのがとりえだが、三十前後にして慎重に(?)。機転が利くのも長所だが、日常会話でもそれが頻発するため、相手は時についていけなくなることも。場を盛り立てるのが上手。理由あって、眼鏡を着用。

ワンポイント：浮き沈みはあるが、基本的にはお茶目。千歳に対しても、徐々に茶目っ気モードに。そして...

矢ノ倉 文花 (やのくら・ふみか)

研究機関の主任研究員だったが、思うところあって転職を決意。公募で環境情報センターに。センター運営団体のNPO法人化に向け、チーフとして切り盛りする。理系だが、事務・実務には強い。トークは不得手だったが、櫻と会話しているうちに上達していく。頼りになる情報源人物。地場野菜を育てるのが趣味。虫は平気だが、魚はダメ。

ワンポイント：さりげなくお節介、という評も。

千住 蒼葉 (せんじゅ・あおば)

櫻の妹。姉の浮き沈みなどに翻弄されるも、常に姉想い。フランス留学後、社会科学系の大学に。通販カタログのモデルの他、画業も。才色兼備。姉妹二人暮らし。

ワンポイント：基本的にはクールだが、時に日本人離れした大胆な行動に出ることも。

本多 業平 (ほんだ・ごうへい)

千歳とは同期入社の間柄。独立時期も同じ。会社を離れてからは音信不通だったが、「漂着モノログ」がきっかけで千歳との再会を果たす。お調子者だが、憎めない人物。ベンチャーの共同代表を務める。IT系よりも実機が専門分野。

ワンポイント：好奇心旺盛ゆえ、女性にも目がない？

桑川 弥生 (くわかわ・やよい)

専門学校でプログラミングを習得後、大学に中途編入。社会的にプログラミングを実践できる場

を探しつつ、学業に励む。蒼葉より年下だが、大学では同学年。才気煥発なのはいいが、勢い余って毒舌になるのがチャームポイント(?)。どこへ行ってもツッコミ担当。

ワンポイント：姓・名をそのままイニシャルにすると、K.Y.になる。アンテナは高いが、空気の読みは...？

掃部 清澄 (かもん・きよすみ)

本名は、掃部 清。清澄はペンネーム。荒川下流をフィールドとする市民学者。著述家でもある。河川行政の監視役を買って出て、日々巡回する。五つの「カン」と自然再生がテーマ。トーク(掃部節)には定評がある。

ワンポイント：「ひ」がうまく発音できないことから、周囲を惑わすも、お構いなし。

小松 南実 (こまつ・みなみ)

研究機関勤務。文花の後輩。専門は海洋環境関係。微細ゴミの発生源を探るべく、干潟に現われる。現場第一主義につき、駆け回るのに電動アシスト自転車が欠かせない。アスリートタイプ。強肩の持ち主。花言葉は「燃える想い」。

ワンポイント：一見淑やかだが、激情的な面も。孤高、かつ、どことなく翳があるのも魅力のうち？

須崎 辰巳 (すざき・たつみ)

地域振興関係部署の課長。櫻の元上司に当たる。櫻を気遣い、センターへの出向を勧めたのもこの人。清澄を師と仰ぐ。

ワンポイント：長身で紳士然としているが未婚。

宝木 八広 (たからぎ・やつひろ)

市民系ニュース会社で千歳と知り合う。アシスタント的に動いているが、実はちょっとした文筆家。フットワークの良さが持ち味。環境情報センターにも出没する。職業を聞かれればフリーターと答える。舞恵とは恋仲だが、小突かれること多し。

ワンポイント：あわてんぼうな一面も。風貌は中国人風だとか。

石島 小梅 (いしじま・こうめ)

自宅は環境情報センター側、週末に通う塾は橋を渡った先。塾の行き帰り、干潟に集う人々を橋から見かけたのがクリーンアップ参加のきっかけとなる。小学校高学年の頃から学校嫌いになり、中学に入ってから姉の顔色をうかがう日々。だが、勇気を出して干潟に足を運んだことが転機となり、本来の快活さを取り戻していく。生き物への慈しみは強く、それらを観察し、イラスト化するのが得意。達筆でもある。ようやく背が伸び始めた中学二年生。

ワンポイント：お姉さんお兄さん達からは期待のニューフェースとして厚遇を受ける。

石島 初音 (いしじま・はつね)

小梅の実姉。高校三年生、つまり受験生。主に週末にプチ商店街のカフェめし店でバイト勤務。自覚はないもののお天気屋。そのせいか、天候の読みはピカ一。雨天時は機嫌が悪く、店の客にも時にとぼちりが行く。

ワンポイント：本当は妹思いなのだが、感情表現がうまく行かず、伝わらない。

桑川 六月（くわかわ・むつき）

小学六年生。弥生は年の離れた姉。実姉はさておき、大人の女性への憧憬は尽きず、蒼葉お姉さんが大のお気に入り。記憶力が良く、特に駅・路線関係は強い。種別があるものを調べるのがお得意。

ワンポイント：物怖じしない物言いは、姉譲り。大人がハッとするようなことを軽々と言っただけのも変わり者ゆえか？

石島 湊（いしじま・みなと）

平日は河川事務所で課長職。週末は少年野球チームを率いる監督さん。野球第一、家族は二の次。試合のある日は、干潟近傍のグラウンドに現われるが、干潟には関心があるようないよな...

ワンポイント：掃部先生には頭が上がらない。長女にも手を焼いている。

奥宮 舞恵（おくみや・まへ）

某銀行行員。八広の一応彼女。彼氏という時はデレデレ、普段は無愛想でツンツン。週末はチャラチャラと装飾するのがお好き。叩いて音を出す系アーティストでもある。自称雨女。愛称はルフロン。

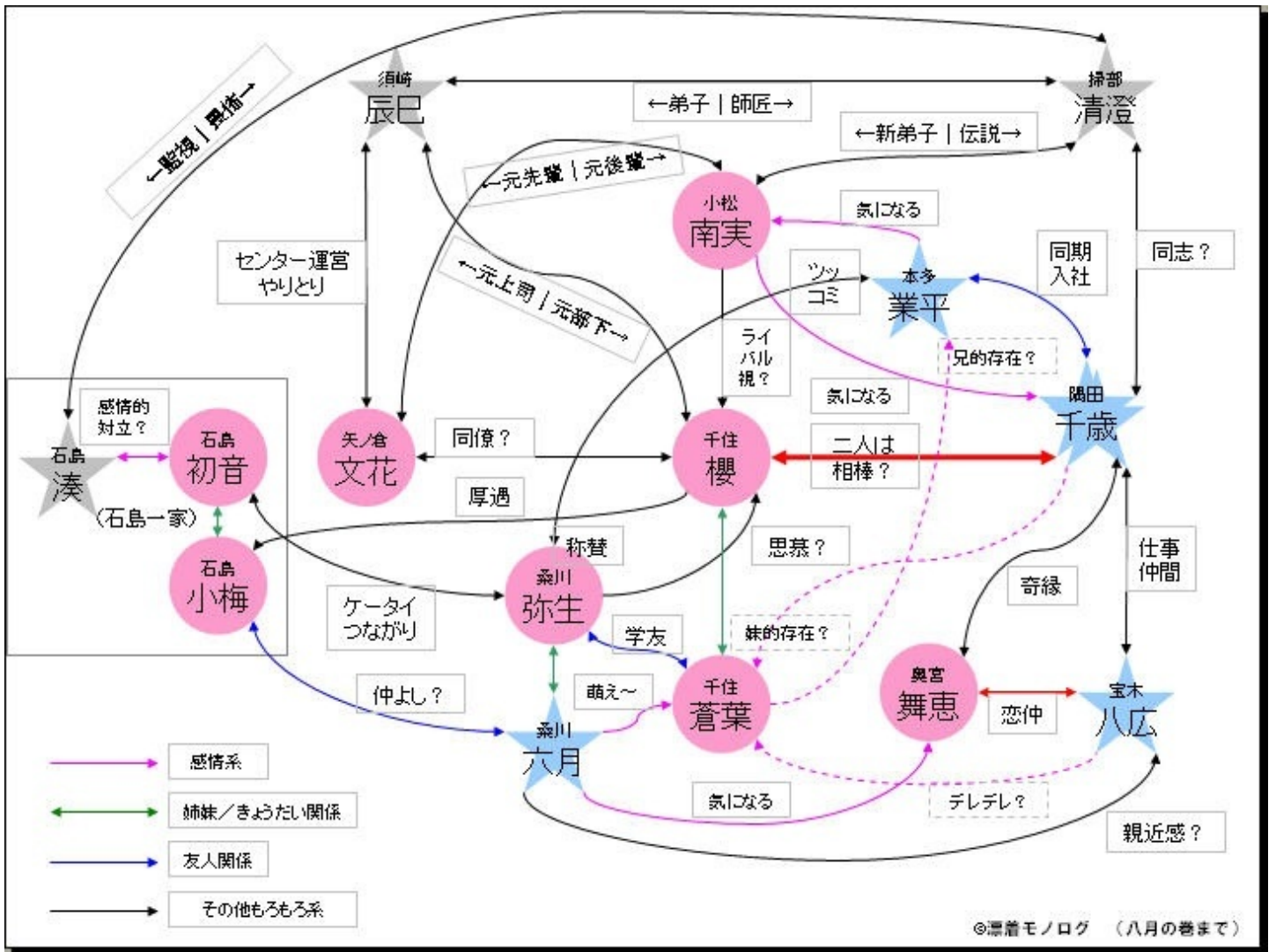
ワンポイント：とらえどころがないのが特徴。

その他の登場人物

「環境の日」講座終了後、掃部先生に質問する年配女性
商業施設の送迎バス乗車中、文花ら一行を見かける女性教諭

...

人物相関図



仮想干潟案内図

